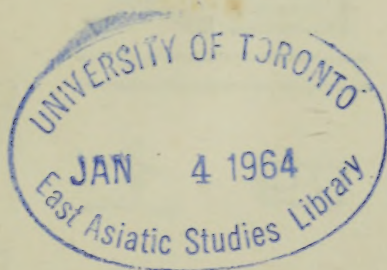
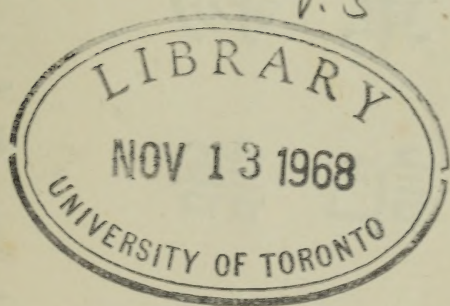
評議員
文學博士 萩野由之
文學博士 黑板勝美
文學博士 松本愛重
文學士 笹川臨風
文學士 菊池謙二郎
文學博士 三宅米吉
（イロハ順）

黑川真道編

國史叢書

土佐物語 二
四國軍記 全

國史研究會藏版

解題

土佐物語　二十卷（一卷より十五卷迄は之を前編に收め十六卷以下を後編として本編に收む）

本書解題は、前編に於て悉したりと雖も、猶補足する所左の如し。

土佐物語三十卷本は、內閣文庫御藏本にあり。之を比校するに、二十卷本を增補せしものなり。但其の增補せし所は、豐臣秀吉征韓の記事と、石田三成の關ヶ原合戰の記事とにありて、直接土佐國へ關係深き記事にあらず。勿論長曾我部氏は、豐臣太閤の寵遇を受けし事、後々迄も豐臣氏の招きに應じたる事あれば、關係なきにあらずと雖も、二十卷本にて事足りぬべく思考せらる。夫のみならず二十卷本は、元より原本なれば、其の方に重きを置かるゝなり。一言記して解題の追加となす。

四國軍記　十二巻

本書は、長曾我部氏の先祖より筆を起し、十七代後裔秦元勝、信濃國より土佐國へ移住し、追々勢力を獲て武威近國に震ひ、子孫も亦其志を繼ぎ基礎を固めしかば、四國に於ける名族とはなりにけり。元親の代に至りては、豊臣太閤の寵遇を享け、益家門繁昌せし由を記し、筆を擱かれたり。

此の書、本名「土佐軍記」といふ。然れども記する所自然土佐一國に止まらず、汎く隣國迄にも及びしかば、四國と改題せられたり。此の名穩當ならず。固より長曾我部氏の事蹟を記せれば、土佐軍記の名稱穩當なり。但改題は、書肆などが出版の際、私に改めしものと思考せらる。出版は奥付に寶永七年と見えたり。

本書作者詳ならず。元祿十三年洛下小畑邦器の序文を掲げたり。其文に云「四國軍記一書者、未レ知二何人之著述一也。不レ出レ戸而土阿之盛衰豫讃之治亂宛然有レ目云云」。「余頗有レ好レ古之癖、是以不レ顧二己才之謭拙一、薙二其繁蕪一改二其謬誤一、鏤レ梓以壽二于

世云々」と見えたれば、本書は是より先何人か編纂し置きしを、元祿に至り、小畑邦器といふ人が之に削訂を加へ、出版せしものと見えたり。按ずるに本書は、長曾我部氏を主として記せれば、同氏に關係ある家臣などの、主家の爲に記せしものにやあらむ。

本書「土佐物語」と併せたるは、彼是讀合せたらんには、長短相補ふを得て、土佐國歷史研究上便宜ならんと思考して、編者が物したるなり。看者之を諒せよ。序に「土佐軍記」と稱する本には、同名にして三冊本あれば、其の事をも記して、別本なる事をも知らしむべし。そは國書解題にいふ、

『土佐軍記　寫本三卷

長曾我部元親が、微賤より起りて土佐全國を領するに至りし事蹟より、元親の子盛親が、石田三成に與して大坂に籠城し、遂に戮に就く迄の事を記せり。全編片假字文なり』

と見えたる是なり。予亦本書を藏す。多少異同はあるべしと考へらる。本書も

作者詳ならず。「四國軍記」といひ此の「土佐軍記」といひ、皆斯るは、最も遺憾とする所なり。

大正三年九月

黑川眞道識

例言

一、本編には、土佐物語後編五卷並に四國軍記十二卷を採收す。

一、土佐物語原本二十卷中、十五卷迄を前編として採收し、本編には十六卷以下を收めて、其後編となせり。

一、土佐物語校訂上に就ては、前編既に詳載せる所の如し。但土佐物語附錄の內「室戸湊之記」は、寫本を以て傳へられしことゝて文字の誤り等あり、讀誦至難なりしを、漸く先輩につきて斯く迄は讀みたれども、猶不完全と思はるゝ所なきにあらず。幸善本あらば、比校の勞を惜むことなく、通知あらんことを切望す。

一、四國軍記は、原本片假名なるを、本編には悉く平假名に改めたり。

一、讀誦の平易を計るが爲め、假名を補うて語格を正したるもの頗る多し。原本中反讀の個所と讀下しの個所と錯落混交し、且多くは語尾を示さゞれば、假名を補ふか若しくは振假名を施すにあらざれば、到底素讀に堪ふべからず。今本編に

は此等の晦澁を一掃し得たりしと信ず。

一、土佐物語には長宗我部・福留隼人と記載し、四國軍記には長曾我部・福富隼人とあるが如く、文字の一定せざる憾ありと雖も、其書別々には一定したる記述を伺はるべきもあり。今兩書を通じての一定に焦慮するが爲め、却て原本の特色を誤るを恐れ、毫も此等を改竄する事なかりき。

目次

土佐物語 二

四國軍記　本名土佐軍記

目次終

土佐物語 巻第十六

世繼評議の事

去天正十四年の冬、彌三郎信親、忠死を遂げられしかば、且は名跡の爲、且は國家の爲なれば、世繼の定めあるべき事なるに、一周忌も過ぎ三年に及べども、其沙汰もなし。いかなる故ぞと尋ぬれば、久武內藏助親信が、佞奸のなす所とぞ聞えし。其故は、彌三郎失せ給ふ上は、香河五郎次郎殿か、津野孫次郎殿が家督たるべし。何れか宜しかるべきと、上下いひ合へりけり。內藏助是を聞きて、我れ常に吉良左京進と不和なり。五郎次郎・孫次郎は、左京進と親み深く、又我に隨ふ器にあらず。此人達の內、家督となるならば、我が爲め惡かるべし。千熊丸は未だ幼少といひ、器量も劣りて見ゆるなり。我取持ちて家督となすならば、我をば父の如く思はるべし。然る

時は萬我儘なるべしと案じ濟し、五郎次郎・孫次郎・左京進が事を、惡樣に事を巧みて讒を構へ、千熊丸を家督の器量御座候由、物語の端事の次に、其事となく呫きけり。凡人の習にて、數多の子あれども、中にも末子は寵厚きものなれば、元親、實にもと信服あることそうたてけれ。されども舍兄兩人迄閣き、末子を惣領に立てられん事、流石とや思しけん、宮内少輔も、兎角默止して月日を經給ふといへども、扨あるべき事ならねば、天正十六年九月下旬、一門幷家臣共を召集めて宣ひけるは、彌三郎戰死の上は、家の惣領は、五郎次郎か孫次郎たるべしといへども、彼等は素より他家を繼がしめぬ。況惣領の器に當らず。是に依つて千熊丸を家督として、彌三郎が娘を娶せしめんと思ふなり。扨いかゞあるべしと、各所存を問はる。何れも他に讓りて口を閉ぢ、或は己を顧みて言を出さゞる所に、久武內藏助進み出でて、御諚の趣、誠に餘儀なき御思慮に候。彌三郎殿の御息女は、御惣領筋に候へば、此御方へ御讓り、尤道の當然にて候。其上家督の器量ましますは千熊丸殿を、主君に仰ぎ奉らん事、御家門長久、國家安全の基に候と、謹んで祝しければ、吉良左京進親實申しけるは、香河

殿・津野殿を越えて、千熊殿を御惣領に立てられ、彌三郎殿の御息女御歸緣の事、恐れ乍ら能々御思案候べし。父の子を見る事、何ぞ私のあるべきにて候へども、異國の古き例に、孤竹の國主、長子伯夷が賢を知らざるにや、又は一時の愛に溺れけるにや。其國を末子叔齊に讓る。兄弟共に仁人たるに依つて、天理父命の重き事を恐れて、互に國を讓り、倶に遁れ去るといへり。二子を失ふ事、豈父の過にて候はずや。又近き例には、畠山尾張守將豐入道德本、其惣領尾張守政長を廢して、伊豫守義就を立てんとす。是に依つて天下の士二つに分れ、應仁より以來百有餘年、日本始めて戰國に入る。是又德本が科にて候はずや。長子不幸の時は、次男是に繼ぐ事、道の常にて候へば、五郎次郎殿、一度香河に移り給ふといへども、彼家斷絕の上は、今是を御惣領に立てられん事當然なり。殊更彌三郎殿御戰死の時、彼戰場の樣體、分明ならざりしかば、京都より上使を下され、縱ひ元親父子相果つるといへども、其國の事は、其方に宛行ふとの御朱印、五郎次郎殿御頂戴は、御存知の前に候へば、五郎次郎殿を御家督に立てられん事、公儀と申し定法といひ、何の御詮議か候べき。若重

き故ありて、五郎次郎殿を御退け候はゞ、孫次郎殿を御立ある事勿論なり。次に彌三郎殿の御息女を御妻せの事、退いて愚案を回らし候に、昔天武天皇・敏達天皇・孝德天皇、是皆姪女を后宮に立て給ふといへども、上代といひ帝王と申し、末世の凡夫に比し候べからず。古き詞に、甥猶子といへり。叔父は父に同じ。禮に不レ娶二同姓一爲三其近二禽獸一とこそ見えて候へ。况伯父と姪とをや。冠婚は禮の大なるもの、萬古不易の法なり。今是を亂し給はん事、勿體なくこそ候へ。又彌三郎殿の御息女御婚嫁の事、御惣領筋に御讓との由、久武殿祝し給ふ事、尤信じ難うこそ候へ。國主の、女姓に讓與ありし事、其例を承り候はず。是又御思惟候べしと、憚なくぞ申しける。比江山掃部助親興是を聞きて、左京進申さるゝ所、誠に其理至極に候。千熊殿を御惣領に立てられ、彌三郎殿の御息女を御妻せの事、去ながら御誤とこそ存じ候へ。御家門の盛衰世上の褒貶、只此一事に候所、其儀を顧みず、麁忽の御祝詞、天晴久武殿とも覺えぬものかなと、居長高になりて申しければ、内藏助は一言の返答に及ばず、頭を低れてぞ居たりける。宮内少輔宣ひけるは、左京進・掃部助申さるゝ所、其

謂あり。但兩人の諫言、耳に障る事多しといへども、元親曾て憤怒の心なし。抑家門の大儀、是に如く事なければ、是非得失を試みん爲に、旁意見を問ふ所に、何ぞや兩人、久武に對して面色す。當時の無禮尾籠の至なり。今日に限るべからず。重ねて內談すべしと、顏色不快に見えしかば、各眉を顰めて退出す。斯くて諫言の入り難き事を知りて、再び忠言を仕る者なかりけり。是偏に內藏助が、讒侫のする所なりといふ沙汰ありければ、是を惡しと思ふものにやありけん、大高坂の城下に高札を立てゝ、

梶原が二度のかけして今の世にまた久武と生れ來にけり

久武が侫奸を、昔の梶原に比し、一の谷の二度の駈を、再來に詠みなしたる、巧の程こそをかしけれ。久武聞きて、是は定めて大平・比江山が黨類の所爲なるべし。天晴安穩には置くまじきものをとぞ申しける。

親實・親興讒死の事

左京進・掃部助一所に打寄り、さるにても內藏助が辯佞にて、遂に末子を惣領にせんとす。西も東も知らぬ幼稚の息を立て不義を進め、己れが威を恣にせんが爲に、親し顏に諫むるを、元親程の人なれども、末子の愛に溺れ、悟り給はぬこそ悲しけれ。食レ杜蠧害射レ人含沙也。亡國之兆大敎之陵夷莫レ甚二於此一。いかにもして彼を退けばやとぞ謀りける。又內藏助は、一年贄殿川の遺恨を深く思ひ込みて、あはれ親實が身の上に事もあれかし、仇を報ひんと、目を付け耳を峙てゝ待つ所に、此度世繼評議の座に於て、大平・比江山が諫言を、是幸と悅び、潛に元親の前に出でて申しけるは、左京進・掃部助が、諫言申上ぐる底意を御存知候まじ。五郎次郎殿・孫次郎殿は、大將の器量に候はず、千熊殿は御幼少といへども、其器ましますを、兩人よく察し、千熊殿を退け、香河殿か津野殿かを惣領に立て、己れが威を恣にせんとの方便にて候ぞ。若し千熊殿を御惣領に立てられ候はゞ、兩人如何なる野心を挾むべきも計り難く候。彼等が內證を能く存せしもの、慥に告知らせ候が、兩人が所行、兎にこそ候ひつれ、角こそ候ひしがと、事を巧み證據を立てゝぞ讒しける。元親は素よりも、千熊丸を

惣領にと思込み給ひければ、實にさもあるべしと、任從あるこそうたてけれ。斯りし程に、讒者の實否を糺されず、兩人咎なうして、忽に討たるべきにぞ定まりける。頓て切腹せさせよとて、中島吉右衛門・宿毛甚左衛門を、左京進が檢使とし、桑名彌次兵衛・横山修理を、掃部助が檢使と定めらる。吉右衛門は、常に左京進と睦しければ、堅く辭するに依つて、吉右衛門・修理を、掃部助が館へぞ遣されける。此時しも元親、岡豐より大高坂の城へ移り給はんとて、城中普請半なり。掃部介居宅は、城中西郭權現の社の下南の方にて、是も普請の最中なり。十月四日卯の刻に、掃部助は小屋の前に出で、普請の下知して居ける所に、吉右衛門・修理行向ひ、御使に參りたりと申しければ、伴ひて内に入る。吉右衛門君命を述べけるは。今度代繼評定の座に於て、無禮過言、君臣の法を亂る。其罪輕からず。依つて切腹仰付けられ、我々共檢使に罷向ひ候と申しければ、掃部助申しけるは、親興小智短才の身として、微志を申上ぐる事、涯分を量らざるに似て候へ共、御紋を汚す身にて候へば、心底を殘すべきに候はず。但金言逆耳と、文宣王の格言今更存じ當り候。所詮速に腹を切つて、御

憤を散ずるより外に、忠義候はずとて、既に押肌脱ぐ所に、掃部助が郎等二人駈出で、檢使に向ひて申しけるは、是は正しく讒言の所爲と覺えて候。實否を糺され、其上にて兎も角も仰付けられ候へ。我々車裂に會ひ、骨を醢になし候とても、一往の御斷、などか申上げざるべきと、義心其氣色に顯はれ、血眼になりて申しければ、檢使哀れに覺えて、忍びに袖をぞ濕らしける。掃部助大きに怒りて申しけるは、君恩の重き事、蒼海却て淺し。我戰場に臨む毎に、死を專にして生を求めず。是併君恩を報ぜんと思ふにあり。然るに今日迄死を免れ、此害に遭ふ事、定業因果掲焉し。悔え恨むる所なし。構へて騷動すべからず。若し違背せば、二世迄の勘當なりといひも敢ず、腹一文字に掻切りしかば、介錯首を打落す。勇ましとも哀れとも、いふ計りなき事共なり。去程に左京進は、小高坂にて屋敷渡りければ、蓮池より立越え、普請の間、下村七左衛門が宅を旅宿として居給ひけるが、掃部助生害の由聞えければ、扨は我も遁れぬ所よと、思ひ定めてぞ御座しける。斯る所に桑名彌次兵衛・宿毛甚左衛門御使に參りたる由いひ入れたりければ、折節左京進碁を打ち居たりけるが、若

士を呼びて、浴室の用意せよと申付け、心靜に碁を打ち納めければ、兩使、元親の仰を述べしかば、左京進申されけるは、親實不肖に候へども、一家類葉の名を汚せり。君過ある時は、嚴顏を犯し、道を以て諫め諍ふは、良臣の節なり。阿順の徒側にあり、匡正の忠空しく、比干が罪に類せられん事、生涯の面目、死後の思出にて候。唯恨むらくは今より後、忠臣諫者彌身を退け、諂諛奸佞益國に蔓り、當家の衰弊近きにあるべく候。但斯く申すも、未練に似て候間、さらば最後を急ぐべしとて、沐浴して、明衣一重を着て出でられしが、下村七左衞門を呼びて、此程の懇志兎角詞に述べ難し。報謝の念深しといへども、只今に至つては其詮なし。せめて是を筐に參らするとて、太刀·刀·長刀を添へ給はり、頓て押肌脫ぎ、腹十文字に搔切り、臈搦んで繰出せば、羽山甚左衞門介錯す。親實行年廿六とぞ聞えし。惜いかな親實は、吉良左京進親貞の一子にて、元親の甥なり聟なり。常に厲尖の氣象ありといへども、文武共に精しく、才力世に高し。勇は童形の時より、北宮黝を異なりとせず。始め吉良の城主なりしが、蓮池の城を乘取りて在城せしかば、蓮池左京進と申す。蓮池は其先、大平氏

數代領せし跡なればとて、大平左京進とも號しけり。掃部助は覺世の舍弟長宗我部國康の二男、戸波右兵衞親武の弟なり。其性質厚實にして、假にも戲談妖妄の怪しき事をいはず、常に學窻に眼を曝せり。初め比江山の城主なるに依つて、比江山掃部と號し、中頃阿州岩倉に在城す。兩人共元親草業の始より、軍忠武功計ふるに遑あらず。武門の棟梁秦家の柱石たるべき人の、一朝の讒言に亡び失せぬ。古き諺に、高鳥盡良弓藏、狡兎死走狗烹、敵國破謀臣亡とは、今更思ひ合されたり。諫臣退いて佞奸進み、君に無道を進むれば、其國又亡ぶこと、古今其例些からず。されば此人々の、斯る不思儀に逢ふことは、偏に長宗我部の末になりたる先表なりと、心ある人は歎きけり。

親實黨類誅罰の事

元親家臣を召して、親實・親興が親友幷家類に至る迄、勇猛ならぬはなし。いかなる野心を挾むも計り難し。眞西黨・永吉飛驒守を始め、一々誅すべしとぞ宣ひける。

此眞西黨と申すは、親實種替りの舍兄にて、宗安寺の住持たり。數年洛陽妙心寺の學窻に眼を曝し、碩學秀才の譽高し。近年當國に下り、此寺に住す。兄弟の睦厚かりければ、西黨常に親實の宅にありて、經論法談ありしとかや。其身沙門といへども、武門の中に成長せしかば、外には忍辱禪衣を纒ひ、内には勇猛剛毅の心専なり。彼是閣き難しとて、檢使をぞ向けられける。西黨客殿に出で、今此期に及んで、萬端萬緒迷ぶるに益なしとて、料紙硯を取寄せ、辭世の頌を書き、之を閣き西に向ひ、腹一文字に搔切れば、介錯首を打落す。檢使彼頌を取つて歸り、元親へ差上げければども、披見もなく捨置き給へば、空しく塵に交はりて、見し人だにもなかりける。永吉飛驒守宗明は、一宮高加茂大明神の神職にて、此宮の境内に住居しけり。左京進に姻緣の由緒ありて、深く固ければ、大坪與兵衞・杉田善左衞門を討手にぞ向けられける。折節飛驒守庭前に出でて、樹木を詠め居たる所に、道行く人、扨も左京進殿・掃部助殿、今朝切腹し給ひぬ。さしも忠ありて咎なしと思ふ人々の、いかなる故にかあるらん。知れぬは人の身の上なりと、哀れげに語りてぞ通りける。飛驒守是を聞

きて、扨は我も遁れぬ所なり。いかさまにも其仔細を聞かばやと獨言して、下人をも具せず只一人、長刀取りて打かたげ、小高坂指してぞ急ぎける。菊野山の麓にて、横田・大坪に端なく行逢ひたり。兩使は謀りて討たんと、さらぬ體にて近付く所に、飛驒守大音にて、各は何方へ行き給ふぞと問へば、聊所用の事ありて、布師田へ參るなりと答ふ。永吉、何と左京進殿・掃部助殿生害ありと聞くは誠に候や。其儀は知らずと答へしかば、飛驒守から〳〵と打笑ひ、何條知らぬ事のあるべき。扨は旁は、宗明の討手ござんなれ。出抜かるゝ宗明にあらず。いふ所誠か僞か、請けて見給へと、長刀水車に廻して飛んで懸る。兩人も欺くべきやうなかりければ、仔細にや及ぶと、太刀拔合せ、火を散らしてぞ戰ひける。雙方手利の達者なれば、互に勝負見えざりしが、永吉つと入りて、横田が肩先切付け、引取らんとする時、運や盡きけん、田の畔を踏崩し、仰傾に倒れければ、大坪起しも立てず、疊みかけてぞ切つたりける。二人共に深手數多負ひけれども、終に首を取つてけり。彼宗明は、數代一宮の神主にて、從五位飛驒守に敍任し、數年在京して、神道の祕授を極め、卜部吉田家より、戴

許の證書を得たり。國親入道覺世草業の始より是に組して、四州所々の戰場に勇名を顯し、一度も不覺を取らず、忠功他に異なりしが、神慮にや違ひけん、先世の宿業にや寄りけん、不思議の害に逢ひて、討たれけるこそ無慙なれ。左京進の家長勝賀次郎兵衞、蓮池に居たりけるを、北代市右衞門・同四郎右衞門を討手に差向けらる。塚地の土肥周防と示し合せ討つべし。相構へて卒爾の擧動すべからずとぞ宣ひける。兩人領掌して、塚地へ行きて周防を尋ぬれば、折節所用ありて、蓮池の城へ行きたりといふ。兩人悦び城に入りて見れば、土肥周防・喜津賀の鹽見惣兵衞・戶波の野中源藏兵衞列座す。市右衞門・四郎右衞門色代して、次郎兵衞に向つて、左京進罪科に依つて、切腹仰付けられ畢んぬ。但葬送は、諸士心次第に執行ふべし。遺領の事は、追つて御下知あるべしとの御諚なりと申しければ、一座大きに驚き、目と目を見合せ、一言出す者もなし。市右衞門は折を伺ひ、周防と示し合せんと思ふ所に、四郎右衞門は、其頃廿歲餘りの若者、大逸りなる氣象なれば、市右衞門に先を越されじとや思ひけん、何となく其座を立ちて、庭の方へ行くかと見れば、御意ぞといふ詞と

共に、刀を拔いて、次郎兵衞が眞向を丁と切る。勝賀は、精參流の劍術の達人なれば、座に打居ゑられ乍ら、一尺一寸の刀を拔いて起上り、四郎右衞門を討取りぬ。鹽見惣兵衞、透さず馳寄り打合ひしが、敢なく討たれにけり。野中源藏兵衞、こは仕損じぬと走り掛り、拜み打にはたと切る。勝賀請け損じ、左の肩先を切られけれども、事ともせず、踏込み〳〵切結ぶ。源藏兵衞、目の上を切先外れに切られ、血流れて眼に掛り、泳ふ所を、次郎兵衞押下り、野中が高股切つて倒し、頓て廣庭に馳出でたり。土肥周防餘さじと打つて掛るを、勝賀捲り立て、既に危く見えしかば、市右衞門飛掛り、次郎兵衞を討留めけり。そも此次郎兵衞と申すは、元は幡多中村の民賤なりしが、親實に仕へて、甚だ聰明なりければ、田地點檢の役に定められ、蓮池・高岡・宇佐・浦の內・喜津賀・吉原・內の谷・東諸木・西諸木等、七百餘町の地を順見して、土地の厚薄物成の高下、二旬餘りに悉く是を記し、再び檢見に及ばず。每年の貢物收納政法正しかりしかば、次第に立身して、家長となりたり。吉田彥太夫・城內大守坊・勝賀又兵衞・日和田與三左衞門・小島甚四郎・喜多代大炊・田所・小林などいふ究竟の者共、所々

にてぞ討たれける。勇猛奮烈とり〴〵にして、討手の者反て討たれ、或は創を蒙り候者多しといへども、叶ふべきやうなく悉く討たれにけり。甲の浦城主吉田孫左衛門康俊は、左京進が從兄弟にて、常に親しかりければ、是も同意なるべしとて、既に誅戮に極りけるを、さま〴〵に陳じければ、誅伏をば赦されけり。されども猶疑や晴れざりけん、城をば召放され、蟄居してぞ居たりける。斯の如く數多の勇士、或は討たれ家領に放れ、其從類眷屬恩顧の輩、歎き悲しむ事限りなし。嫉女亂ㇾ家、讒臣破ㇾ國、今に初めずといひながら、淺猿しかりける事共なり。されば都も田舍も、人の口程さがなきものはなし。此頃世俗の諺に、惡く油斷して、久武が火煉に逢ふなといふ間、其故を問へば、ほくづとは火の細煉なり。火煉燃上りて家を亡し、久武が舌動きて人を亡す。彼舌は火煉なり。御用心々々々とぞ申しける。利ㇾ人者天必福ㇾ之、賊ㇾ人者天必禍ㇾ之、久武が行末いかゞあらんずらんと、爪彈きをせぬ人はなし。

千熊丸元服附五郎次郎病死の事

千熊丸元服

斯る中にも元親は、増田右衛門尉長盛と、兼て契約の旨ありしかば、京都へ人を上せて、千熊丸を彼烏帽子子になし、元服せさせて、右衛門太郎盛親とぞ名乘らせける。されども偕は此人家督に備はり給ひぬと、其方樣の人々は、喜び合へる事限なし。元親思惟やありけん、披露はなくて、五郎次郎此年月蟄居の體、さこそ萬不自由にあるらんとて、住居小野の邊を、知行にぞ行はれける。五郎次郎、こはいかに、彌三郎殿卒去の上は、我こそ惣領なるに、今知行を給はるは何事ぞや。常舜居士の一周忌も過ぎ、三年に及ぶまで、其沙汰もなければ、只不審く思ふ所に、左京進・掃部助が罪科は、千熊丸を家督と仰せられしを、兩人否みて諫めたる御咎なりと聞くといへども、いかでさる事あるべき。告ぐる者の誤ならんと、我曾て信せざりしに、今度千熊丸元服の樣體、疑もなき家督なれば、始めて其信なる事を知る。然れば我れ父に見劣され、弟にも越えられて、何の面目ありて、生きて再び人に面を合すべき。さあればとて自ら縊死せんは、且は不孝なり、且は不義なり。只閉居せんには如かじとて、一間なる所に閉籠りてぞ居給ひける。乳人の吉良五郎兵衞涙を流し、さま〴〵諫む

れども、いらへもせず。只一念に、此事をのみ思込みける程に、身心自然に衰へて、病の床に伏し給ふ。此由岡豐へ告げしかども、元親驚き給はず、療養は緩々なるを能しとす。構へて効を急ぐべからずとぞ宣ひける。今は必死の體に見え給ふ由、五郎兵衞頻に申しゝかば、元親駕を飛ばし行向ひて御覽あれば、はや前後も知らぬ野風なり。こは如何にと、手を上げて駭き給へば、五郎兵衞御病氣にて、此日頃兎こそ御座しまし候ひつれ、角こそ御座しまして候ひしが、惣じて岡豐よりは、御子とも思召さぬ御扱ひ、御情なき御事と、聲を上げて泣きければ、元親兎角の詞なく、五郎次郎の耳に口を當てゝ、心持はいかにあるぞ、家督は汝に定めたるぞと宣へども、返答にも及ばず、只鼾睡の如くにして、終に空しくなり給ふ。哀れといふも愚なり。痛はしや元親は、彌三郎に放れ、三年の月日もたつやたゝずして、又五郎次郎失せ給へば、こはいかにせんとぞ歎かれける。悲しみの至つて悲しきは、老いて子に後るゝより悲しきはなし。恨の至つて恨めしきは、若うして親に先立つより恨めしきはなしと、昔の人のいひけんを、思合せて哀れなり。扨あるべき事ならねば、坂折山の南

の方にぞ葬りける。

七人みさき附木塚明神の事

蓮池左京進親實は、小高坂にて果てられしかば、其片邊に送り置く。其墓の野風は、小石交りの赤土を些し搔上げ、篠垣結廻して淺ましげなれば、何某の標とも見えず。其方樣の人迄も、罪の疑をや怖れけん、參り弔ふ人もなければ、いつとなく草蓬々露しん〳〵たり。此人世にありし程は、元親の甥なり聟なり、智あり勇ありしかば、人皆恐れ敬ひしぞかし。今は牛馬の蹄に汚され給ふ事の哀れさよと、見る人淚をぞ流しける。斯る所に彼墓より、よな〳〵火燃出でたり。妄執深き人の墓には、必ず焰燃ゆると聞く。痛はしや此人、無實の議に失せしかば、恨あるも理なりと、袖を絞らぬ人はなし。或夕暮の事なるに、贄殿川の渡舟を、西の方より呼ぶ間、渡守急ぎ舟を漕寄せ、見れども人もなし。扨は此方の事にてはなかりけるよと思ふ所に、其形は見えず、人數多舟に乘る音して、急ぎ向へ渡せといふ。渡守大きに恐れて、東の岸へ漕

付けゝれば、其時皆舟より上る音しけるが、後なる人と覺えて、渡守、是は蓮池左京進殿にて御座すなり。不義の奴原に、目に物見せん爲に、眷屬を具せられ、大高坂へ御越あるぞ。今に不思議を聞くべし。又御歸りにも、此舟に召さるゝぞ。構へて汝恐るゝ事なかれといひて、後より追付きけるが、其後は音もせず。渡守は、肝魂も身に添はず、急ぎ家に歸り、斯る事ありしと語りければ、聞く者舌を震はし、身の毛よだちてぞ覺えたる。如何なる事か出で來んずらんと、耳を傾け聞く所に、久武内藏助が男子、五六歳計りなるが、庭に出でて遊ぶ所に、何所ともなく老女來りて、美しき若殿やといひて抱かんとせしが、小兒わつと叫んで絶入りたり。邊の男女大きに驚き、水よ藥よとひしめき、人心地出で來しかば、人々、扨も今の老女は、如何なる者ぞと尋ぬれども、再び見えず。是只事にあらずと、有驗の僧を請じて、祈禱加持する所に、小兒俄に狂ひ出で聲を擧げて、惡人をばいけて見んと喚きて、手足をしゞめ身を震はし、晝夜逼迫して、狂ひ死にぞ死にゝける。無慙なりし野風なり。內藏助身悶えして、歎き悲しむ事限りなし。其七日に當りける夜、久武が惣領の男子、一間な

る所に立籠りて、南無阿彌陀佛々々々々々と高聲に唱ひたり。家中の男女、怪しみ急ぎ行き見れば、腹一文字に掻切つて血にまみれたり。內藏助泣々何故に自害しけるぞと問へば、元親の御諚にて、檢使二人參りたれば、力なく候といひも敢ず息絕えたり。如何なる者か、眼には見えたりけん、不思議といふも愚なり。內藏助が妻女是を聞きて、其夜頓て自害して果てぬ。いふ計りなき事共なり。是を聞きける人毎に、偖は贄殿川の渡守がいひしも僞ならずと、身を震はしてぞ怖れける。久武が子八人ありしが、斯の如く或は自害し、或は亂心、又はさま〴〵の不思議共ありて悉く死し、末子只一人生殘り、慶長五年長宗我部沒落の後、九州の方へ立越えけるとぞ聞えし。爰に五月新三郎といふ內藏助が從兄弟あり。國澤より小高坂に所用ありて、夕暮に及びて、親實の墓の邊を通る所に、怪しき者に逢ひたる由沙汰しければ、何條さる事あるべき。古狸などの所爲なるべし。いざ行きて試みんと、或者二人連れて、小高坂に行く所に、向より大勢さゞめき渡りて來る。二人、誰なるらんと近付き見れば、左京進在世の姿にて、目と目を見合せたり。二人驚き、はつといひて絕入

りぬ。暫くありて人心地出で來て、見れども其行方はなかりけり。それよりして左京進の怨靈現はれぬといふ程こそあれ、種々の妖怪ありて、初の程は小高坂の墓の邊蓮池の城下のみ、斯の如くなりしが、後には在々所々、怨靈の至らぬ隈もなし。國人是を七人みさきと名付けて、怖れ恐るゝ事斜ならず。七人とは、宗安寺・眞西堂・永吉飛驒守・勝賀次郎兵衞・吉良彥太夫・城内大守坊・日和田與三左衞門・小島甚四郎是なり。左京進共には八人なれども、親實をば恐れて、數に入れざるとかや。此由元親へ申す者あれども、何條それは女童、天狗化者の沙汰を聞きて、針を棒にいひなせる者なり。取上げて評するに足らずとぞ、聞きも入れ給はねば、其後は怪異あれども、重ねて申す者はなかりけり。されども怨靈至らぬ隈もなければ、大高坂の城中にも不思議ありて、元親の目にも見え、耳にも入る事度々なりしかば、扨は人のいふも僞ならず、初めて信を取りて宣ひけるは、彼者共が恨をなすも理なり。一朝の怒に理を失ひ、多年の功を空しくしたる事、我ながら淺猿し。今更千悔すれども甲斐なし。法事をなして、怨靈を宥めばやと、國分寺に於て數十人の僧を請じ、さまぐ

の追善をなし給へども、更に其驗なければ、元親難儀し給ひ、いかにしてか怨靈を靜むべきと宣へば、老臣共申しけるは、昔菅丞相の御靈も、神に祀ひて靜まらせ給ふとこそ申傳へ候へ。蓮池殿をも、神に祭り給ふべしと申しければ、此儀實にもと甘心せられ、宮居をば何所にか定めんと、各詮議する所に、其傍に八九歲計なる童子ありけるが、俄に狂ひ出で、我は是蓮池左京進殿の御使なり。彼進を神に祀はんとの評議、上なく悅び給ふなり。木塚の山に祉を立て、祭をなさしめば、重ねて驗を見せ申さん。疑ふ事なかれといひて、走り出で倒れけるが、暫くありて何心なく立歸る。各奇異の思をなし、吾川郡木塚の山に宮床を定め、地形をならし土匠を集め、繩墨を督し斧斤を運し、日を重ね月を積みて土木の功なる。巍然として軒に煥き、儼焉として信に美なり。國中の貴賤皆拜趨せしかば、神靈威を增し、效驗まさに顯れぬ。今に木塚の明神とて、貴賤步みを運びける。

小田原陣の事

伊豆國に、北條左京大夫氏政といふ人あり。數ヶ國を押領し、小田原に在城して猛威を震ひ、朝恩を恐れず武命を重んぜず、諸侯の勤なかりしかば、秀吉公御退治あるべしとて、五畿・南海・山陰・山陽並江州・濃州・伊賀、其勢都合廿二萬餘騎、信雄公の領伊勢・尾張の勢一萬五千餘騎、家康卿の分國甲斐・信濃・駿河・三河・遠江の勢二萬五千餘騎、天正十八年三月朔日、先陣京都を立ち、同十九日殿下御出馬、廿八日三島に御着陣ありて、翌廿九日、山中の城に押寄せ、鬨の聲三度擧ぐる程こそあれ、我劣らじと攻懸る。中にも山内對馬守一豐、戰功群に勝れたり。其舍弟修理亮康豐も、勇を震ひて進みけるが、矢に當り、深手なれば引退く。家臣深尾與右衞門・林傳左衞門・五藤市左衞門・枝野文四郎・島兵藏・市川山城・小八木次太夫・竹山半左衞門手柄を顯はす。中にも枝野文四郎は、左の腕に深手負ひて、働き難かりければ、三島まで引返しけるが、麓に至りて鹽を取りて、疵の口へ押入れ、今こそ平癒したれとて、又馳寄りて、人に劣らず高名したり。城主松田兵衞太夫淸秀、小田原よりの加勢北條左衞門太夫氏勝・間宮豐前守好高・朝倉熊登守景澄等楯籠り、防ぎ戰ふといへども、叶はず。

松田・間宮は自害し、北條・朝倉は失奔す。小田原・宮木野口は、松田尾張守康秀・上田上野助政廣・原式部少輔胤成、安房・上總の勢一萬三千にて固めたり。湯本口は千葉新助弘胤、竹浦口には北條陸奥守氏照・成田下野守長氏・壬生上總助正純・皆川山城守廣輝、一萬にて堅む。去程に寄手の軍勢、四月二日より小田原の城を取圍み、其手其手役所々々を請取り、中にも四國の輩は船手にて、長宗我部宮內少輔元親・加藤左馬助嘉明は、佐川口の請取なり。城の海邊に一つの砦あり。秀吉公是を御覽ありて、此砦を攻めば、兵卒多く討たるゝのみにて、輙く拔く事難かるべし。是我腹心の病なりとぞ仰せける。宮內少輔是を聞きて、船頭池六右衞門に下知して、大船に鐵炮數十挺取入れ、彼砦に押寄せ、隙透間なく打立て、一方の塀石垣打崩す、城中是に驚き騷ぎ、上を下へと周章つる所を、得たりや賢しと加藤・長宗我部の士共、我れ劣らじと、塀を越え柵を破りて押入り、砦の大將を始め、士卒殘らず討取りたり。其外土佐勢、濱手の要害二ヶ所乘取り、御感にぞ預りける。

元親聚樂に於て茶の湯の事

去程に秀吉公、東國の賊徒殘らず御征伐あり。都へ還御ましく〳〵しかば、都鄙安全にして、貴賤干戈を忘れたり。或日聚樂の御城へ諸將を召され、御饗應あり。昔今の御物語になりて、殿下元親に向つて仰せけるは、何と宮内少輔は四國を望みたるか、天下に心懸けたるかと尋ね給へば、元親畏つて、何しに四國を望み候べき。天下に心を懸け候と申す。殿下、宮内少輔が器量にて、天下の望はいかで叶ふべきと仰せければ、惡き時代に生れ來りて、天下の主に成損じ候と申上げられしかば、殿下笑はせ給ひ、それはいかにと尋ね給へば、宮内少輔、天晴他人の天下に候はゞ、恐らくはと存じ奉り候へども、大度の君の世に生れ合ひ、望を失ひ候へば、惡き時代に生れ來るにて候とぞ申されける。殿下笑壺に入りて笑はせ給ひ、御酒宴酣にして施藥院を召して、宮内少輔に茶の湯を所望すべしと仰せられしかば、施藥院畏りて、宮内少輔も兼て御成を願ひ奉り候へども、麁尾を憚り罷在候と申上げられければ、殿下、いや

秀吉、元親の邸に臨む

いや麁尾は苦しからず。茶の湯は質朴なるを本意とす。外を飾りて華美をなすは、數寄の道にあらず。近日行くべしと仰せられしかば、元親悦び、千宗易に談じて、其用意をぞしたりける。斯くて御相伴には、富田將監・稻葉兵庫頭・施藥院なり。露路に茶屋を立て、若き女二人奇麗に出立ち、御通りの時、ちと御腰を掛けさせられよと申す。いや急ぐをと仰せられ通らせ給ふを、平にと御袖に取付き請じ奉れば、さあらばとて御腰を掛けさせられ、さまざま御戲れなど仰せられ、餅を取りて聞召す。御相伴の人々をも、手を取り止め、餅などを勸め、代物を乞ひしかば、殿下金銀を出し給ふ。其時三人立ちて逃げられけるを、女やるまじといひて追懸けたり。殿下、遁すなすなと大笑ひなされ、御數寄屋に入り給ひ、御茶過ぎて書院へ移らせらる。時に元親、金子卅枚・御小袖三十・猩々皮廿間進上す。其後殿下施藥院と圍碁を遊ばされ、終日の御遊興、御機嫌斜ならず。俵子千石、元親にぞ下されける。君臣合體の御樂み、目出たかりける次第なり。

鯨進上の事

天正十九年正月下旬、元親は浦戸の古城を改めて移り給ひ、上下千秋萬歳を祝ふ。折しも湊の內へ鯨入り來り、獵師共舟よ銛よと立騷ぐ。宮內少輔此由を聞き給ひ、元親此城に移りて祝ふ所に、大魚の入り來るこそ吉慶なれ。我未だ生きたる鯨を見ず。況突止むるをや。行きて見んとて、棧島の磯に至り給ふ。獵師共人より先にと爭ひ、玉島の邊より一番銛を突き、印を擧げ、段々に追詰め〳〵突く程に、泊灘・袂石の沖にて終に突止め。かゝすにかけて櫓拍子を踏んで、諷ひ連れて漕ぎ來る。元親船を寄せ見給ひ、魚の長はいか程あるぞと尋ね給へば、九尋計りの小鯨にて候と申す。宮內少輔元親、海邊に住むといへども、鯨を見るは是始めなり。まして都邊には見る事なきものなれば、關白殿へ進上申さんとて、檜曾を簾に編み包みて、漕船數十艘にて、千里を一時と漕ぐ程に、廿八日の卯の刻に、土佐の浦戸を出でて、翌廿九日の酉刻の終に、攝州大坂の川口へ着船す。其道旣に百餘里なり。卅日に、人夫七

百餘人して、御城へ舁入れたり。丸鯨を見る事珍しければ、聞傳へ〳〵、群集する事斜ならず。御庭に舁据ゑければ、秀吉公出御ありて御覽ぜられ、長束大藏大輔して仰出されけるは、鯨は大海ならでは住まぬ者の由聞召し及ばれたるに、湊の內にて突留めたると申す事、不審に思召すなり。湊の內へも度々入り來る事あるか、但此度始めて入りたるかと尋ね給へば、使者畏つて申しけるは、上意の如く鯨は大海に住みて、湊へ入り來るは稀有の事に候。去ながら彼浦戶と申すは、日本一の大湊にて、入海西北の方へ六七里、渡り卅町、或は五十町に及び、其深さ事量り候はず。されば爰に不思議なる事の候。浦戶より二里入りて、五臺山と申す。是は昔行基菩薩、天竺の五臺山を移され、文珠師利菩薩鎭座の御山、其山の西の方に、吸江庵とて、夢窻國師の開基にて、地藏薩埵を安置し、十鏡を定め置かれて候。斯る高き靈地にて候へば、空を翔ける翼、水に住む鱗までも感應ありてや、毎年節分の夜には、鯨必ず湊へ入り來り、五臺山の磯際にて夜を明し、湊を出で申候。湊の內にて候へば、網に懸れる如くにては候得共、獵師も是をば突止め申さず、餘所に見てこそ返し候へ。

其外には常に湊へ入り來る事例候はず。宮内少輔も、海邊には住み候得共、丸鯨見申すは是始に候へば、御慰の爲め差上候と申上ぐれば、殿下御機嫌甚しく、丸鯨ながら音物は、前代未聞なりと仰せられ、御朱印に俵子八百石添へて、獵師に遣すべしとて下されけり。

爲二音問一丸鯨到來未曾有の儀、初而備二上覽一喜思召候。增田右衛門尉可レ申也。

二月三日　御朱印

土佐侍從どのへ

土佐國檢知附籠宗全の事

或時宮内少輔、家老の面々其外近習の若士を召集め、南表に出で、海上を見渡して、湖水漫々として碧浪天を浸し、又類なき眺望なり。昔紀貫之、當國の住果て歸京の時、大湊に泊りて、月の面白きに此海を見渡して、

てる月の流るゝみれば天の河出づる湊は海にざりける

と詠みしとかや。今も替らぬ詠なりとて、盃を傾け御機嫌斜ならず。時に何某罷出で、昔天武天皇の御宇に諸國大地震、土佐國田畠五十餘萬頃沒して海となると、日本紀に見えて候。東寺の崎より、足摺の御崎とて、陸地は七十餘里、其間の海上彎々として入海の如し。沒して海となりたるは、此所にてぞ候らん。當國も、昔は廣大の國にて候ひしが、今は僅に九萬八千餘石と承り候。扨も惜き事にて候と、打笑ひて申しければ、又一人進み出で、當國九萬八千餘石と申傳へ候へ共、先づ一條殿一萬五千貫、御當家三千貫、吉良三千貫、大平四千貫、本山五千貫、安藝七千貫、淺野五千貫、山田三千貫、香宗我部三千貫、其外二千貫或は千貫以下の小給人、誰彼と指を折りて、其領せらるゝ所を算へ合せ候へば、九萬石を二つ合せ候ひても足らず候。昔の檢知は、事粗く精しからぬかと覺え候間、今新に棹を入れ、檢知を正され候はゞ、土地の廣狹諸士の分限、年貢收納の爲め、宜く候はんとぞ申しける。久武内藏助是を聞きて、さやうの大事は、若輩の旁が知る所にあらず。斯樣の時は、只御慰みを申上ぐるこそ本意なるに、不思議の事を勸め奉り、一座の興をさまさせ候事、麁忽なりと怒

りければ、彼者も、元親の御氣色いかにと、恐れ入りてぞ居たりける。宮内少輔打笑ひ、いや〳〵是は苦しからず。是併此者の胸臆より出づるにあらず、自然に元親を勸むる神の告と覺えたり。其仔細は、我れ諸士に、賞祿を心の儘に行ひ、妻子をも安穩に扶持させんと思ひ、四方に發向して、軍慮を廻らし、士卒を勞したる甲斐もなく、我さへ只一國の主となりぬれば、諸士に報謝する事も叶はねば、切て國中を檢知して鄕村を正し、收納を全くせんと年月思ふといへども、公私の物忩に依つて打過ぎぬ。頃日世上靜謐なれば、衆議に任せんと思立つ所に、斯る發言は、自然に天の示す所なり。此上は評するに及ばずとて、國中檢知あるべきにぞ極りける。斯くて點檢の役人を選び、郡より初めて在々所々殘る所なく、町反步勺を改め、四五年が程に、國中悉く檢地成就して、一鄕一村各帳面に記し、地檢帳とて、百有餘卷ありとかや。是より國中年貢收納、繩墨の正しきが如くなれば、士は貪らず民僞らず、廉直淸潔にして、國豐にぞ治りける。斯る所に籠宗全とて、算勘に通じ、檢知の功を得たる者あり、生所は知らず、弘岡の鄕に住しけるが、浦戶に來りて申しけるは、近年國中點檢

元親國中の檢地を行ふ

候ひしかども、甚麁昧にして、收納に損失の候。某に被仰付候へかし。國中悉く改め、一萬石の地より、千石は輙く打出し候べしとぞ申しける。家老共、是は民を虐ぐるの道なれば、憎き事を申す者かなと思へども、收納の爲なれば、制し止むべきにあらず、其意にぞ任せける。先づ己が住所の邊弘岡・伊野・畑を點檢しければ、千石の地より、八百石餘打出したり。近邊の鄕民是を聞きて、歎き悲しむ事甚し。慶長四年十二月卅日の夜、何者の爲業にやありけん、宗全が家に四方より火をかけたり。夜更け寢入りたる事なれば、宗全遁るゝ方なく、終に燒死にけり。因果歷然とぞ見えし。後に是を聞けば、近邊に住居の一兩具足の所爲なり。

岡豐の文字附學者罪せらるゝ事

國澤の片邊に何某とて、內典外典の學を極め、文章は杜子美・韓退之を恥ぢず、講談明かなる事は、富婁那を欺く計りなれば、是ぞ當世の大賢なりと、諸人擧げて尊み、學に志す程の輩は、彼が門に下らずといふ事なし。今度國中の地檢を改め、村鄕の境

を極め、在名を亂さゞるを聞きて、是待つ所の幸とや思ひけん、國中の在名の文字を正し、神社佛閣の來歷を始め、ある事なき事一つの卷物に記し、浦戸の城へ差上げて申しけるは、長岡郡岡豐の文字、舊は豐岡と書き候。是豐岡上矢神社御座すに依つてなり。いつの頃よりか岡豐と上下に誤り來り候。今此時御改め候て昔に返し、豐岡と書かせられ、然るべしとぞ申しける。元親此由聞き給ひ、此事いかにと詮議ある。されども異議區々にして一決せず。所詮古法に任せよとて、神社佛閣の記錄を始め、家々の傳記を集めて是を見るに、皆岡豐と書きて、豐岡と書きたるはなし。宮內少輔宣ひけるは、岡豐の文字、假名書なる事聞傳へたり。よし〳〵舊は豐岡と書きたるにもせよ、數代岡豐と書き來れり。今改めて何の益かある。況諸人疑ひ迷ふべし。惣じて此頃の學者と呼ばるゝ者を見るに、天道地理神道佛法を始め、習はぬ和歌の道技藝の上まで、私に道理を付けて、口に任せ說き廻る。前後始末詳ならざる事をも、書々の中より似通ひたる詞を取出し、是は此文字の通音なり。夫は是と韻語近し。又是は人のいひ誤りなりとて、私に木を竹の支證に引きて是を語る。今

岡豊・豊岡の文字是なり。古人の詞に、理窟は道理を迷はし、利口に賢きにまからへ、高智にあらざれば、辨へ知り難し。されば惡利口覆二邦家一といふは、古聖人の教なり。古の學者は人を導き、今の學者は人を迷はす。總じて清潔に見えて、破戒の出家、威嚴にして人を誑く。儒者同罪の曲者なり。今此者、問はざるに來りて教をなす。其心底を考ふるに、學を賣り名を求め利を貪る方便なり。是盗賊の棟梁なり。周禮にいへる造言之刑なり。又亂民之刑なり。國政の妨、是より大なるはなし。罪せずんばあるべからず。今時多き賣主の學者の見懲にせよとて、頓て引出し首を刎ね、獄門に梟けられける。病は口より入り、禍は口より出づと、朱文公の金言なるを、知らぬ學者ぞ淺ましき。

福留隼人酒樽を碎く事

宮内少輔申されけるは、凡酒の禍をなす事、今あらたに勝げていふべからず。今より後、我領内にて酒を飲みたる者あらば、忽罪科に處すべしと、堅く法をぞ出されけ

る。それよりして酒の賣買止まつて、顔色赤き者をば人疑ひければ、冠婚の悦ばしきにも盃を取らず、月雪花の折柄も、只茶を呑みてぞ樂みける。斯りしかば亂舞遊興は、思ひ絶えたる事共にて、忌はしかりし國政なり。爰に福留隼人、所用の事ありて、私宅を出でて行く所に、向より樽をかたげて來る者あり。隼人、其樽は何所より何方へ持行くぞと尋ねけれども、彼者、是は御城の御用にて參り候といひ捨てゝ行く所を、隼人、何條御城の御用といふ事やある。それ此方へと奪ひ取り、樽二つ三つに打碎き、諸人の鑑となる人の、其法を背き給はゞ、豈其道立たんや。形正しからざれば影曲る。民を苦しめて獨り樂み給ふ事、無道といふに餘りあり。是を諫めずんば、臣たるの道にあらず。若承引なく御咎めあらば、諸人の爲に一命を失はん事、素より望む所なりと、獨言して歸りければ、使の者肝を消し、城中へ走り行き、役人に向ひ、かやう〳〵に候と、大息繼ぎてぞ申しける。家老の面々是を聞きて大きに驚き、急ぎ元親の前に出でて、福留隼人狂亂致し、かやう〳〵に候と、謹んで申しければ、宮內少輔聞き給ひ、いや〳〵是狂氣にあらず。又彼れ非義の徒をなす者にあらず。

察するに是元親を強く諫むる所なり。天晴元親、大果報の者なり。長宗我部家運長久疑なし。元親、飲酒禁制の法令を出して、却て元親是を犯す。不義是より大なるはなし。最人の惡む所、國を亡し家を失ふの基なり。隼人、元親が爲に一命を抛つて諫むる事、傳へ聞く李比干に異ならず。最義あり忠あり、臣たるの手本武士の鑑なり。元親感賞せずんばあるべからず。今日より堅く守りて、盃を手に取るべからずと宣へば、出仕の面々一同に申しけるは、誠に有難き御諚に候。迚もの事に此御法令を差止められ候べし。夫れ酒は、人をして悅ばしむとこそ申し候へ。されば大聖孔子も、酒に量をなし給はず、學記にも、賓主百杯すといへり。其亂に及ぶを誡め候といへども、上古より是を禁斷せし事は候はず。月雪花の樂みも、只此酒に候へば、今是を禁斷し給ふは、人をして憂へしむるの法令なり。醉裏の狂言を厭ひ、是酒の科なりとて是を禁じ給ふ事、火の家を燒き、水の田畠を流すを見て、水火を惡むに同じう候。水火を捨て、天地の道立つ事候はんや。總じて萬物必ず取るといふものなく、必ず捨つるといふものなく、一概なるは道に候はず。夏願ふ所の風は冬惡まれ、

冬好む爐火は夏遠ざけらる。何れをか必ず取り、何れをか必ず捨て候はん。時に宜きを用ひ、時に合はざるを捨てんのみ。異國本朝共に、貴賤上下用ひ來りて、樂みの第一とする酒を禁ぜられ候はん事、勿體なう候。只口の快きに任せ、貪り飲みて狂氣に及ぶは、其者の業にて候へば、罪せられ候べし。然らば自ら亂酒を好む者候べからず。但是等は小事にして、國政を取る人の見る所に候はず。古人の詞に、國政に小事を行へば、苛うして民苦しみ、家法に大事を行へば、貧うして身を失ふ。巖石多き山は跪き易く、法度多き國は罪人絶えず。只國政は寛なるをよしとす。彼不義の學者と、大酒の醉狂とを考ふれば、醉狂の害は小にして、人よく是を知る。學者の害は大にして、人知り難うこそ候へ。夫酒宴遊興は、國家太平の徵にて候へば、早く酒禁制を止められ、諸人快樂の國政をなし給ふべしとて、一同に諫めければ、宮内少輔、旁が申す所至極せり。去ながら凡そ國の法令は、定まるを以て本とす。されば故なく法令を改むる時は、下、上を輕んじ、民疑ひて服せず。民服せざれば國治まらず。此頃酒禁制の令を出して、日ならずして又之を改め變へん事不可なり。然れども過

則勿憚改といへり。閣くべきにあらずとて、自ら筆を取りて、

今度酒を禁ずる事、法令の誤なり。依つて是を改め許すなり。但亂酒すべからず。

元親

と書きて、在々所々へ觸れられければ、諸人其眞實の御志をぞ感じける。

土佐物語卷第十六終

土佐物語 巻第十七

朝鮮陣の事附元親足輕皃を打つ事

元親朝鮮征伐の爲め發向

さる程に天正十九年辛卯十二月廿八日、秀吉公、關白職を、尾張中納言秀次公に讓り給ふ。是來年朝鮮御征伐に依つて、九州まで御下向あらんが爲の由、翌年壬辰文祿と改元あり。三月朔日、彼國へ諸軍勢を差遣さる。長宗我部宮内少輔元親は、三千餘騎にて、福島左衞門大夫正則の手に屬し、渡海なり。凡渡海の軍勢、廿萬五千五百七十人とぞ聞えし。さる程に四月十二日辰刻、惣軍勢西に向つて鐵炮をつるべ、鯨波三度上げ纜を解き、えいや聲を出し、湊を一度に押出し、雲の浪煙の波をば搔分けて、只一時にと乘る程に、翌朝壹岐國風本の湊へぞ着きにける。是より對馬へ渡らんとするに、風替り波荒く、渡るべきやうなかりければ、旬日餘り日和を待ちてぞ居た

りける。中にも福嶋左衛門大夫正則・戸田民部少輔氏繁・蜂須賀阿波守家政・長宗我部宮内少輔元親・生駒雅樂頭近世、一所に伴ひ海邊に立出で、渡海の詮議ある所に、沖の方に梟二つ飛廻る。左衛門大夫申されけるは、昔本間孫四郎は、遙に沖の梟を、敵船へ射落しけると申候。今此梟を射る者や候べきと申されければ、元親、近代は昔に替り、弓の射手少う候。但し鐵炮は、昔の射手に劣らぬ程の者はありと覺え候と申されければ、正則、内々土佐の士には、鐵炮の名人ありと聞傳へ候。何れにても召出され、此梟を打たせて御覧候へと申されければ、宮内少輔元親、家中に鐵炮打つ者は數多く候へ共、翔鳥打つべき者は覺えず候と申されければ、正則、いや縱ひ外れ候とても苦しからず。只慰に打たせ候へと、重ねて申されければ、元親左候はゞとて家臣を呼びて、此鳥打つべき者やあると尋ね候へば、家臣、あの鳥などを打つ程の者は、あまた御座候。さらば召出し候べしと、足輕の俵兵衛を呼出し、此鳥打つべき仁を召して來り候へと申しければ、俵兵衛畏りて、誰々と申す迄も候はず、某仕りて見候はんと申す。扨其覺あるか。いかにも常に翔鳥を打ち候に、大方は外し候はず。

あの鳥ならば必ず仕るべしと申しければ、宮内少輔へ此由を申す。元親打笑ひ、諸將の前を憚らぬをこの者、尤心地よし。たとひ打外したりとても、さのみ恥辱といふべからず。さらば打たせよとてぞ召されける。四人の大將を始め、以下の諸士群集して、目も放さず見物す。晴がましともいふ計なし。元親、若し外れたらんは、恥辱といふにあらねども、時に取つて無興ならんと、手に汗を拳つてぞ居給ひける。鳧は本の如く飛廻りけるを、俵兵衛立出で、追さまに狙ひ澄して打ちたりけり。目當少しも違はず、眞只中に當り、白毛ぱつと散りければ、鳧は沖なる岩の上にぞ落ちたりける。大將達を始め、群集したる輩一同に、あら打ちたりと感ずる聲、暫くは鳴も靜まらず。さらば間を打たせよとて、繩を張らせ見給へば、凡五十八間計ありけり。正則感に堪へ給はず、昔奈須與市にも劣るべからずとて、召されたる羽織を賜はりければ、殘る三人の大將達も、羽織をぞ下されける。宮内少輔悦に堪へ給はず、且は諸將達への返禮なればとて、卽時に士になし、太刀一腰を給はりければ、當家他家の面々、羨まざるはなかりけり。

諸軍朝鮮入の事

爰に小西攝津守は、宗對馬守に向つて、宗殿は此海の案内、御存知にて候べし。是程の風は、いかゞ候やらんと尋ねられければ、義智答へて、是程は順風には候へども、普通に少し過ぎて候と申さる。行長、扨は順風ござんなれ。普通に少し過ぎたればとて、渡さぬといふ事やある。明日曉天に渡海せんと、組の舟へ觸遣し、潛に用意して、未だ夜の明放れざる先に、數萬艘の中より、行長が一手の舟さゞめき渡りて押出す。殘る船には是を見て、扨は拔駈にこそあれ、誰か劣るべきと、苫を取り碇を上げ纜を解き、急ぎふためき支度して、其日の巳の刻に、十里計押出しける處に、俄に風替り、又本の湊へ漕戻す。其中に小西行長は、早く出船しける故、四十八里を二時計に走りて、對州豐崎の津にぞ着きにける。風惡しければ、兩日爰に逗留す。殘る舟は、二日過ぎ順風を得て、風本を出で對州に着岸すれば、行長は又四十八里を安々と、同廿八日酉の刻、朝鮮國釜山海に馳せ着き、早速城を乘取り、東萊をも追落し忠州を攻取

小西行長釜山上陸

加藤清正
熊川上陸

り、勢大に振ふ所に、斯くて日本の諸將、後より漸く押渡る。中にも加藤主計頭清正は、常に小西と不和なりしが、行長に先をせられし事を口惜く思ひ、對州へ舟を寄せず、釜山海を餘所に見て、熊川へ舟を着け、阿蘭川へ廻らんとす。爰に慶州の者共相集まりて、是を防ぎけるを、清正と福島加賀守直茂二手を以て追散らす。是より後は、はか〲しき敵もなく、番城二つ踏潰し、夫より大手と一所にならんと、忠州へぞ赴きける。此勢に恐れおのゝき、平安道・黄海道・忠清道・慶尙道・全羅道の城々も、大略落失せける由、朝鮮の都漢城へ聞えしかば、帝王大きに驚き給ひ、北方岐州へ落ちさせ給ふ。二人の王子后妃は引分れ、兀良哈を志して落ち給ふ。さる程に日本の諸將、忠州の乾の方五松原といふ曠野に集まり陣取りて、軍評定ある所に、加藤清正・小西行長兩人、先手を爭ひ口論に及ぶ。鍋島加賀守是を宥められ、清正先手に極まり、都へ兩道ある內、南大門へ向はる。行長は東大門へ向ひけるが、案内者を呼びて、南大門通りの大河の船共を悉く切流す。是に依りて渡りに遲々して捗取らず。小西は東大門へ押行くに、元より難所なく、道も少し近ければ、程なく朝鮮の都へ着

き、大門を堅め居たり。清正は翌日の晩景に漸く都へ入りしが、小西が先達て入りたるを聞き大に怒り、今は都に入りて詮なし。帝王は岐州とやらんへ落ち給ふといふなれば、何國までも追懸けよとて、慶尙道指して、案內も知らぬ道筋を、晝夜を分かず行く程に、六十八日と申すに、兀良哈境まで押詰め、王子二人后を生捕り、鏡城に籠置きて、其身は又ほいれへぞ立越えける。

繫の城々附大蛇の事

斯くて朝鮮の都には、諸將詮議あり、手分して、各諸方へぞ向はれける。遼東境まで押詰め、諸將城々を普請して、各請取り是を守る。凡城數十三ありて、大明よりの援兵を支へんとぞ構へたる。又長宗我部元親は、全羅道の手當にて、西南の方へ平押に、十四五日押行く所に、平々たる廣野に出でたり。村もなく里もなく又山もなし。大きなる川原あり、東西もわき兼ねたる所に、何とは知らず雷の如き音聞えたり。いかなる物にやあらんと、諸人怪み乍ら、川端に近付けば、音も次第に近くなる。元

親、誰かある、あれ見て來れと宣へば、若侍二人畏りて馳行き、三人後より續きたり。人音にや驚きけん、二抱計なる大木の、枝もなき松のやうなるもの、一丈計り立上る。見れば大蛇なり。兩の耳は、唐犬の耳の如く垂れ、眼は日の如く光り、口廣く耳の根まで裂け、紅のやうなる舌を閃してぞ立ちたりける。先なる男驚き、立留り見居たれば、跡なる三人も立留りける所に、土佐國韮生の住人小松左衞門、馬一騎に馳寄せ、鐵炮を以て狙ひ澄して打ちければ、咽笛にはつしと當る。大蛇も急所なれば、仰傾に倒れ川に入り、身悶して暫く流れけるが、後には沈みて見えず、川忽に紅にぞなりたりける。左衞門川端に馳寄せ見れば、大蛇の倒れる時、石にや當りけん、大きなる鱗落ちてありけるを取りて、元親へ參らせければ、是は日本には未だ見ず。古郷への土産にせよとて、左衞門にぞ給はりける。斯くてこふいの城に押寄せ、三日三夜、息をも繼がず攻落し、直になしうの城へ押詰めたり。城中には、爰を專と防ぎけるを、夜晝七日揃立て〳〵攻めける程に、終に城を乘取り、有合ふ者を撫切にして、討取る所六千六八なり。皆鼻を切り鹽押して、千一つ宛桶六つに入れ、朝鮮の都へ

ぞ遣しける。なしうの城下に瓦葺の藏あり。梁間六間に卅二間なり。三ヶ一は大豆にて、其餘は米なり。此館に十一日陣を据ゑらる。元親人數雜兵五千六百人・馬二百疋餘、又高麗にて死したる荷駄千疋餘・生捕三百餘人、彼是の兵糧、はしものに米・大豆を取遣ふ。是より船津へ三十日の兵糧を取出すべしとの觸なれば、馬あまたありければ、六七十日程の兵糧を取出したりつれども、藏の米は過半殘りたるを、燒草を入れて陣拂なし、六十二日にして、竹島に至る所に、城中より大勢出でて支へんとす。土佐勢是を事ともせず、鐵炮を打立て一度に咄と突掛りければ、怺へず城へ引入る所を、透さず押入り、當るを幸に打捨に、城を乘取りけり。頓て城の普請丈夫にして、元親則在城ありて、海邊をぞ守りける。

熊川船軍附虎の事

加藤嘉明船軍

朝鮮人大船數百艘、熊川に漕連ね控へたるを、加藤左馬介嘉明、手船廿艘計りに取乘り、敵の船へ押向ひ、勇を振ひて番船三艘乘取りけり。諸將是を見て、我先にと、番

船に押向ふ。朝鮮人は船軍には馴れたり、船は大船にて自由なり、半弓は上手なり、差詰め引詰め射ける間、日本勢手負死人其數を知らず。來島出雲守、眞先に進んで下知しけるが、矢に當つて失せにけり。脇坂中務少輔押續き攻入り、大船に取卷かれ、爰を專途と戰ひ、家人多く討たれければ、中務怒りて討死せんと進む處を、郎等押隔て、頓て船を漕退きたり。蜂須賀阿波守家政も、番船に押懸り攻戰ふ。家臣森志摩守村春群に抽んで、大船二艘乘取り生捕十八人して、比類なく働き、深手を負うて忽ち死す。村春が子森甚五兵衞村重も、焙烙火矢を敵船に投入れ、大船を燒沈む。長宗我部宮内少輔元親、是非なく敵船に押寄せ、熊手打鉤を以て船を引付け〳〵乘移り、突伏せ切伏せけり。敵も遁れぬ所とや思ひけん、火を散らして相戰ひ、桑名將監・東野平之丞・能津左兵衞・明神六郎左衞門・加久見左衞門を始め、究竟の兵十三人討死し、山内七郎兵衞信秋は、敵多數多討取り深手負ひ、四五日を經て終に死す。香宗我部左近親氏・吉田市左衞門政重・傍所十兵衞・同次郎兵衞・高野六郎兵衞・三宮又左衞門、衆に抽んで番船二艘乘取り、三艘に火をかけ燒捨てたり。斯く諸軍勢、思々

に分捕高名する程に、番船は殘少になりて、ちりぢりにぞ落行きける。斯くて諸大將、皆近邊の浦々に打出でて、宿陣ある中にも、元親は唐島に在陣ある所に、何處ともなく大きなる虎一つ駈來り、元親の軍兵あまた喰倒され、陣中騷動する事斜ならず。淺野孫次郎親忠の家臣下元勘助・同與次兵衞兄弟、隱れなき鐵炮の上手、不敵者なりければ、いで物みせんと駈出で、勘介狙ひ澄して打ちければ、弟與次兵衞も、續いて打ちたりけるが、虎は是を事ともせず、いよいよたけつて本陣へ近付きければ、大高坂七三郎、十五歲なりけるが、本陣へ入立てじと、小太刀を拔いて一文字に駈向ふを、虎飛懸り、七三が郎胴中を橫樣に咬へて、駈出でんとするを、吉田市左衞門政重、走り懸りて首の本を丁と切る。虎は七三郎を打捨て、市左衞門が首を只一口にと喰付きたりけれど、甲能ければ碎けず、市左衞門虎の咽笛に手を掛けて、七刀ぞ刺いたりける。さしもの虎も、急所を刺されぬ、鐵炮にては打たれぬ、立竦んでぞ死したりける。七三郎も扶かりければ、元親大きに悅び、市左衞門に、感狀に康光の太刀を添へて給はり、歸朝の後加恩ありしとかや。扨て其虎の爪を取りて、日本の土產にせよと宣

ひければ、畏り候と、虎の爪を切取りてぞ歸りける。子孫持傳へて、彼家に今にありとぞ聞えし。

晋州城歿落の事

小西三奉行皆一同に、和議を調ふといへども、赤國を攻取るべしとて、安藝の宰相秀元を大將として、二萬餘騎渡海して、釜山浦に着きしかば、加藤主計頭清正は、粉骨を盡して生捕りし朝鮮の王子を送り返しゝ事、併小西攝津が所爲なりと、安からず思はれければ、赤國を攻落し、和議を破らんとぞ進みける。文祿二年六月始め、加藤・小西を兩先手とし、一方は安藝宰相秀元を大將として、小早川左金吾隆景・黑田甲斐守長政・淺野彈正少弼・伊達陸奥守正宗、其外五百騎千騎の大將達、數を盡してぞ向けられける。一方は宇喜多宰相秀家を大將として、島津兵庫頭義弘・鍋島加賀守直茂・羽柴土佐侍從元親・蜂須賀阿波守家政・柳川侍從等、都合其勢六萬餘騎、晋州へぞ押寄せける。此晋州と申すは、前は大河三方は險岨にて、石垣矢倉丈夫に構へ、内には牧

晋州城を陥る

使判官を大將として、其勢二萬騎計り楯籠りければ、輙く攻近付くべきやうなかりけり。されども太閤御下知といひ、又先度の恥を雪がんと、諸大將我も〳〵と竹束・昇梯・熊手・持楯を用意し、西方は秀元、東の方は秀家、大手は加藤・小西・黑田・淺野と定め、城際迄ぞ押寄せたる。加藤主計頭は、殊に此城を攻落し、和議を破らんと思ひければ、數千疋の牛を殺し、生皮を剝ぎ龜の甲を大きに作り、二三十人も内にて働くやうに拵へ、其上を牛の生皮にて覆ひ、攻口の矢倉の下へ押寄せ、金掘を入れ、晝夜六日掘りしかば、櫓も塀も怺へず、崩れ落ちたりけり。時に淸正の家臣庄林隼人一番に乘入り、森本儀太夫・飯田覺兵衞、三番に黑田が家臣後藤又兵衞、其次に甲斐守、續いて長宗我部宮内少輔乘込み給ひける程に、數萬の寄手一同に込入りしかば、拒くべきやうぞなく、城兵散々に逃行くを、追詰め〳〵討取りけり。中にも土佐の住人久萬彌右衞門直政十五歲、逃るを追うて眞先に進む所に、敵三騎取つて返し、中に取籠め打つて懸る。彌右衞門ちつとも怯まず、二騎を切伏せ、一人の敵と渡り合ひ、暫し戰ひけるが、終に討たれぬ。是を始め士七人雜兵廿三人討死す。吉田孫左衞門・

江村孫左衞門・桑名彌次兵衞・中島與市兵衞・野中三郎左衞門等、群に拔んで高名す。爰に朴好仁とて、慶州の大將なり。此城の加勢に來り、大きに勇を振ひしかども、味方悉く討たれたるを見て、東の手を打破り落行くを、土佐勢急に追懸けしかば、好仁遁れぬ所とや思ひけん、馬引返す所を、吉田市左衞門政重、透さず駈寄せ押並べ、引組んで馬より下へどうと落つ。政重力や增りけん、好仁を押へて繩をかけ、生捕にぞしたりける。其外生捕七十三人、討取る所の首數一千三百餘なり。大將牧使、遁るべきやうやなかりけん、とある木陰に隱れ居たるを、宇喜田秀家の士岡本權之丞是を討取り、御感にぞ預りける。凡諸手へ討捕る所の首一萬五千三百、又岩の上より落ち、或は大河に溺死するもの、都合二萬五千餘とぞ聞えし。

中歸朝の事附名醫經東が事

兩國和議の爲、日本の兩使小西飛驒守如安・岡田將監、大明へ入りし後は、諸軍闇然として日を送る。爰に宮内少輔元親は、唐島に在城ありて徒然として居られけるが、

太閤の御機嫌伺の爲め、異國の珍奇なればとて、當所の樟木皮付・大竹、依岡源兵衞を使者として、船を仕立て大坂へ進上あり。御城の廣庭に積上げしかば、太閤御覽ありて、長陣退屈の折柄といひ遠境といひ、尤人の思ひ寄らざる所なり。元親眞實篤厚の心入、今に始めず。併田舍武士とは思はれず。此唐木漢竹を以て、高麗殿を建て、御饗應なさるべしと、御機嫌尤も甚し。時に細川幽齋、御前に候はれけるが、畏つて、宮内少輔元親、先年土佐國の名所を記し、古歌を集めて袖鏡と名付けて、近衞龍山公に捧げ、御感に預りたる、優しきをのこに御座候と申上げられければ、太閤御機嫌斜ならず、御朱印をぞ下されける。

從二異國一爲二音問一樟木皮付三百本大竹三百本到來、遠鏡芳志の至、喜思召候。猶增田右衞門尉可レ申也。

十月十五日

土佐侍從どのへ

使者依岡源兵衞には、御小袖御羽織をぞ下されける。兎角する程に其年も暮れて、

明くれば文祿三年小西飛驒守・岡田將監、沈惟敬と諸共に、釜山浦へ歸り來りて、和好調ひたる由演說しければ、兩國の上下、悅ぶ事斜ならず。卽ち名護屋へ注進したりければ、太閤も御感ありて、さらば三奉行は目付に代り、其外城々在番の外は、諸將皆歸朝すべしと仰遣さる。依つて浮田中納言を始め、諸將釜山浦を立ちて、歸帆にぞ赴きける。元親も歸朝し給ひけるが、生捕る所の朝鮮人八十餘人、土佐國へ連れ來り、不便にして町屋を立て置かれければ、唐人町とぞ申しける。豆腐といふものを調へ商ひ、一日の飱として、年月を送りける。其中に、吉田市左衞門が組んで生捕りし朴好仁は、名ある軍將なればとて、賓客の如く懇に饗應し置かれける、情の程ぞ有がたき。朴好仁が末葉共、いかなる故にか、秋月氏といふとかや。去程に歸朝の面々、異國物語して、うかりし事も、今は中々慰の種ともなりぬ。討死したる者の親子兄弟妻子などは、只今の事のやうに歎き叫ぶ、哀樂交へたる世中なり。爰に高岡郡久保川茂串の城主山内七郎兵衞信秋は、朝鮮熊川の船軍に、深手負ひ引退き、終に死す。子なかりければ、久保川の城をば、中島吉右衞門に給はり、元親より廿人の番子

を附置かれける。其住居の跡を、今に廿人留といふとかや。右の吉右衞門も程なく死去して、其甥中島與市兵衞重房相續す。彼中島と申すは、秦能俊より七代の孫、長宗我部兼光三男某、長岡郡中島を領してより、子孫皆中島を氏とす。吉右衞門までは十三代とぞ聞えし。爰に經東とて、其頃朝鮮に隱れなき名醫も捕はれて、土佐國へ來りけるが、始め一年程は病を治すれども、些も効なく、人を殺す事甚多し。國人共、異國にも斯る盲醫もありけるよと、上下男女笑ひければ、經東大きに恥ぢ且患ひて、暫く籠居して、明暮是を案じけるが、或時朝鮮・日本土地同じからず。人も又異なる事を悟りて、其後は一度も藥劑を誤る事なく、終に其名高くなりけるとぞ聞えし。伏見へも召上せられ、經驗の功を顯しければ、外に又醫功なきが如くなりしかば、其頃の大醫深く是を憤り、饗應を設け經東を請じ入れて、鴆毒を勸めたり。經東是を食して、其毒なる事を知りていひけるは、是程の毒をば、忽解する事はいと易し。されども今死せずんば、必刀刄の難遁るべからず。しかじ今死なんにはとて、懷中より四寸四方計りの一つの書籍を取出し、是萬民を救ふの書なりといへども、日本人

に傳ふるは遺恨なりとて、火の中へ投入れ燒捨てゝ、其身も程なく死したりけり。扨も彼經東が醫功の妙を、傳へ聞くこそ不思議なれ。中にも土佐國に、一人の婦人懷姙す。經東其脈を診して、此子は男子なり。生れて三歲の時、必厲疾を病むべし。今よりして藥を服せば、此患を免かるべし。然らずんば永く治すべからずと申しければ、其夫甚だ怒りて是を用ひず。經東聞きて、後に歎かん事の不便さよとぞ申しける。聞く人も、何事をかいふらんと笑ひ合へり。扨此子生れたるを取上げ見れば、玉のやうなる男子なり。父是程の子に、何ぞ生得の病あらんと、愈經東を嘲る。去程に其年も暮れ、明くる夏の頃、何となく此子色白く、死灰の如くなりしかば、いかなる事にやと怪しむ所に、三歲の春より、厲の形あらはれたり。父母大きに驚き歎き、急ぎ經東を招いて藥を求むれば、經東申しけるは、厲風は天刑の病、陰陽肅殺の氣のなす所なり。容易く治すべからず。然りと雖も胎中未病の先に於て、猶治すべし。今生下して病已になる。藥力の及ぶ所にあらずといひ捨てゝ去りぬ。其後此子幾程なく死せり。又ある人の娘五六歲の時、左の足の踵痒き事いふ計りなし。

爪を以てたゞ搔きける所に、皮膚より小さき白き石出でたり。父母驚き經東に見せければ、此石今一つ必ず出づべしといふ。案の如く日を經て又一つ出でたり。父母此由を經東に申しければ、此石內にありて肩を越したる時は、不治の病となる。此石出でたる事長命の相なり。九十迄は病あるまじきぞと申しけるが、果して一生の內無病にして、九十餘にて死したり。斯樣の不思議多し。經東常にいひけるは、當國によき人參ありとて、大きなる丸翕羽を着て、山野に出で叢に座して、翕羽の內にて是を取り、葉をば人の見ぬ所へ捨てたりしとかや。あはれ親炙して是を學ばは、いかに醫工を和朝に傳へ殘すべきものを、邪なる妬故、無法の死を與へて、天下の寶を失ひけるこそうたてけれ。

志和一族誅伐の事

去程に元親は、土佐國に歸國ありて、國政を取行はれける所に、當國高岡郡志和の領主志和勘助不義の事ありて、其一族を誅せらる。此志和と申すは、昔高岡郡仁井田の

庄に、西東志和・西原・久保川とて、五人の領主あり。是を五人衆といふ。四家は悉く絶えて、志和一家のみ殘りて繁昌せしが、此度讒者の爲に亡びけり。其根元を尋ぬれば、志和和泉守子二人あり。嫡子左京助、二は女子、西原藤兵衞重助に嫁す。左京助が嫡子刑部丞、二男美濃守、三は女子、松澤修理亮妻なり。刑部丞は一子なし。難波孫次郎を養子にして、志和の家を讓る。孫次郎、後に小平次と改め、法體して宗禎と號す。宗禎が長子難波權之佐・二男志和勘介・三男椿藏主、藥師寺の住持なり。隣海庵・隣江庵・藥師寺とて、志和三ヶ寺の其一なり。宗禎父子、何れも無雙の勇士なり。中にも勘介は、背高く色白く、辯舌たいはい人に越え、文學も又暗からず。取分け笛の上手にして、優にやさしき男なるが、事に臨んでは、太刀打・輕業・强弓の矢繼早、道を踏む事、一日に四十餘里は輙く駈通りけり。勘介常に申しけるは、當國は六十町を一里とす。我此道を四十餘里は行く。人よりは少し早道なりと自讃しける。一年元親、此勘介を使者として、阿州蜂須賀阿波守家政へ遣さる。家政見給ひ、骨柄といひ辯舌といひ、天晴器量の若者かな。哀れ高知與へて召仕はゞやと宣ふ。家臣承

り、彼は志和の城主にて、其先は一條殿幕下なりしが、一條家殁落の後は、元親に仕へ、隱れなき者にて候。某拵へて見候はんとて、勘介に對面し、家政斯くの如くの噂にて候。御邊は長宗我部御譜代の士と申す命あらず、只時に隨ひ給ふ計なり。士は渡り者、當家を望み給へ。某取持ち高知を行ひ候はんと申しければ、勘介有難き御噂に候。後日に對談致すべしと、色代してぞ歸りける。是は當座の挨拶までにて、其後は何の沙汰もなく打過ぎけるを、いかゞして洩れ聞えけん。勘介斯る許諾せし由、支へし者ありしかば、元親さもあるらんと實否の糺明もなく、志和一族、皆討たるべきにぞ極りける。權之佐をば豫州へ遣し、歸るさを討つべしと、檮原の住人船戸三郎左衛門・松原藏人に下知せらる。かくて三郎左衛門・藏人は、檮原の本村・南田に出で、酒宴してぞ居たりける。權之佐は思ひも寄らず、何心なく出來るを、兩人押止め、破籠やうの物を出して、わりなく饗應しければ、權之佐悦び、器を取りて合せんとする所を、三郎左衛門御意ぞといふより早く、拔打に切りけるが打損じ、器に切付けぬ。權之佐心得たりとて、刀を拔合せけるを、藏人飛懸り打止めけり。勘介を

元親、志和勘助を殺す

ば阿州へ遣し、安藝にて誅すべしとて、黑岩治部左衞門が嫡子玄蕃を召して、いかにもたばかりて討取るべし。構へて麁忽すべからず。但し思ふ仔細あれば、治部左衞門をば他所へ遣し、其留守にて、事を計るべしとぞ宣ひける。玄蕃畏りて安藝へ立歸り、父治部左衞門を樣々賺し、夜須の城主吉田左馬頭が方へぞ遣しける。其後玄蕃支度して、勘介を安藝の町屋に留め、亭主に内通して、風呂を燒せて饗應す。勘助風呂に入りたる時、玄蕃行きて、科の仔細を述べてぞ討取りける。治部左衞門此由を聞きて腹を立て、扨も玄蕃めは、我子程もなき不覺者かな。士に太刀刀をも持たせず、赤裸なるを討つは、死人の首を取りたるに同じ。武士の本意にあらずとて、三年勘當して對面せざりしとぞ聞えし。勘介が死骸をば、安藝の濱に葬りけるに、よなよな塚の内に、笛の音聞えけるこそ不思議なれ。扨も今度何故に治部左衞門を賺し出し、其子玄蕃に討手を申付けられけるぞと、其故を尋ぬれば、其先播磨國の牢人何某、當國へ來りて宮内少輔に仕へ居たりけるが、不義ありしかば、治部左衞門に仰せて討たせらる。其時元親宣ひけるは、彼が館へ行向ひ、いかにもたばかり、時節を

見合せ討取るべし。構へて敵を侮るべからずと、再三示し給ひけり。治部左衞門承り、畏りて候と、頓て馳行き彼者に向ひ、斯樣々々の次第にて、某討手に來りたり。然れども士は互の事、尋常に切腹いたされよ。介錯すべし。若又手向ひせんと存せられば、兎も角も御邊の心次第と申す。彼者も名を得たる强勇なりしかば、我をたばかり給はぬ事、士の道感じ入候。さらば尋常に腹を切り候べし。用意の間待ち給へとて、頓て内に入りければ、治部左衞門、其家の座敷に床を枕にして、高鼾かいてぞ伏したりける。良ありて彼者立出で、治部左衞門起られ候へと申しければ、其時起上りたり。扨彼者腹を切りければ、神妙なりとて、頓て介錯したりけり。斯る無法の男なれば、若し仕損ずる事もやあらんずらん、其子玄蕃は、父に替り眞實にして物を破らず、萬輕忽ならぬ若者、常に武義を嗜みしかば、聊爾の働はあるべからずと、玄蕃に申付けられけるとぞ聞えし。去程に志和の城へは、大勢向つて攻めしかば、宗禎叶はず自害す。椿藏主は落行きけるを、仁井田にて討取りけり。文祿四年四月十二日十三日十四日に、父子四人所々にて討たる。唯三日の内に、志和の家絶えに

けるこそ無慙なれ。宗禎が幼稺の末子ありしを、家士抱ひて出奔し、行方知れずとぞ聞えし。

唐船漂着の事

頃は文祿四年九月十八日早旦の事なるに、土佐國浦戸の海に、山の如くの大船寄せ來る。朝鮮の賊船怨を報いん爲に來るならんと、貴賤周章騒ぐ事限りなし。元親急ぎ見て來れとて、軍兵を遣し尋ねられしかば、大明より南蠻の延須蠻へ行く船なるが、逆風に檣折れ楫摧け水に溺し、船中の人數過半死し、殘る者五百餘人なりとぞ答へける。然らば湊へ舟を引入れよと、獵船數百艘出して漕がせたり。此湊の邊は、鯨常に往來して、底もなき海なるが、いかなる巖にや當りけん、此時船のかはら碎けて潮入りたり。胡椒・丁字・珊瑚珠、其外無量の品々、湊の内へ流れ入りて、入海三四里の間、一面に莚を敷連ねたる如く浮きしかば、白浪五色に染めなしたり。兎角して船を湊へ漕入れぬ。元親不便の事なりとて、頓て白米五十俵・酒肴十五荷給はり

ければ、船中の者共、悦ぶ事斜ならず。彼船の長さ卅五間横廿二間、楫の入りたる穴五疊敷計り、檣は風に折られて、殘りたる所、廻り三抱に餘れり。頓て流れ浮きたる品々を、勝浦濱・浦戸・種崎・永濱・潮江・五臺山の者共小舟に乘つれ、我先にと拾ひ取り、たま〳〵桂濱・種崎の磯へ寄りたる荷物をば、所の者共取隱す。久武内藏助申しけるは、斯る寶物の流れ來る事、誠に當國の吉慶なり。穩便の沙汰然るべからず。急ぎ上へ仰上げられ候べしと申しければ、元親實にもとて、早船を飛して申上げられけり。内藏介又申しけるは、御注進相達せば、必ず御代官を差下さるべし。然るに船中の荷物、紛失致し候に於ては、御家の瑕瑾なり。嚴しく法令を出し候べしとて、若荷物一品も取隱したる者あらば、忽に首を斬るべしとぞ觸れたりける。されども、濡れたる品々を、仁井田・種崎の濱に一面に乾並べ、目附を付けて守らせけれども、兎角して盗む者共多かりけり。其中に長野次郎左衞門が下人木綿百端入の簀卷二つ盗み取りて、己が家の内へ隱したり。目附是を見て、頓て捕へて首を切り、桂濱の汀に獄門に上げられ、主人次郎左衞門は、家人に法度を示す事、疎なる科なりとて、則

ち腹を切らせられ、長野は久武が近き親類なれば、他門の誡なりと、申請けて腹を切らせけり。斯る所に、案の如く增田右衛門尉檢使として、同國に下り、船中の荷物を改めらる。

一、緞子一萬五千百八十三端
一、かいき三萬千五百八十端
一、縮緬五千六十八端
一、木綿廿五萬五千七百十一端
一、氈莚六十四枚
一、壺大小五百五十四
一、石火矢三丁
一、劍三十
一、胡椒四十九丸大小但二人かき四人かき
一、かまけめん壺一つ
一、糸三萬二千百廿一斤
一、繻子一萬千七十二端
一、綸子錦十六箱
一、いんすびろうど廿箱
一、皿大小一萬五千二百二つ
一、陝烽十一張
一、鎗七本
一、丁子十五丸但二人かき
一、蜜壺一つ
一、のあひす壺一つ

一、蠟百三つ大小但四人かき六人かき

一、松脂十八かため

一、唐かさ廿本

一、棕梠綱一ほう長さ二百廿尋大さ廻り二尺一寸

一、銅六百十三大さ圓座程あり

一、鐵の鏁五十九

一、鐵いかり一つ六十人かき

斯の如く荷物の員數定まりしかば、さらば積上せよとて、當國の浦々は申すに及ばず、阿波・讃岐の島々まで觸遣し、八端帆より乃至十二三端の船百五十艘に積み、十月三日浦戸を一度に漕出し、同六日の暮方、大坂の川口へ押入りたり。元親の家臣山内三郎右衛門は、荷物の目錄を調へ、右衛門尉に附隨ひてぞ上りける。頓て元親も伏見へ上られ、登城せられしかば、早速の注進悅び思召の由、太閤仰ありて、白銀五千枚元親に給はり、家老共にも白銀をぞ下されける。右衛門尉も、黃金五百枚拜領ありしとかや。其後禁裏は申すに及ばず、天下の大名小名、京・奈良・伏見・大坂・堺の町人に至るまで、分遣はされけるとぞ聞えし。唐船は破損して、船具もなかりけるを、新に修補し、白米千石・ぶた二百疋・鷄二百・酒大樽百・種々の肴五十荷・饂飩粉五百

石、其外劒鋒衣類等に至る迄夥しく下され、船中に山をなしゝかば、悅び歸帆したりけり。

秀吉、元親の館に臨む

元親館へ御成の事

元親は、兼て秀吉公の御成を願ひ、二三ヶ年其用意頻なり。金銀珠玉を費し、普請の結構いふ計りなし。既に普請成就して、御成の日限も極りける所に、いかゞして誤りけん、御門の寸法低くして、御車の出入なるべからずと、各申合されければ、元親大きに怒られけれども、是を改め立替らるべき程の餘日もなかりければ、俄に白木にて御門をぞ立てられける。始の門は毀ち置かれけるが、元親卒去の後、土州吾川郡長濱に菩提寺を立てられたる時、此門を彼寺に立てられて、今にあるとぞ聞えし。去程に秀吉公、慶長元年四月廿七日、元親が伏見の館へ出御ある。御供の公卿には、久我・勸修寺・中山・烏丸・日野大納言・藤宰相、武家には江戸大納言・筑前中納言・加賀中納言・安藝宰相・大野宰相・越中宰相・結城少將・若狹侍從・郡山侍從・伊賀侍從・吉川侍

徒・出羽侍從・大崎侍從・安房侍從、書院にて御相伴は、江戸大納言殿・施藥院なり。時に宮内少輔を召出され、米一萬石拜領す。其後元親より長光御太刀一腰・同御劍國光御刀一腰・栗毛御馬一疋鞍置・御小袖唐織・綾薄白三十・中緒紫紅梅單物色無白五十・銀千枚、若君へ河原毛御馬一疋・壽命御鑓二本・梨子地製引付刀大小廿腰進上す。元親子息右衞門太郎盛親、雲次御太刀一腰・御馬代黄金十枚、是を差上げて御目見す。次に家臣共御太刀馬代三百疋・御小袖一つ宛を以て御禮申上る。右衞門太郎を召され、御腰物を頂戴す。其後元親、又御夜物唐織二つ・御蒲團綸子紅梅紫二つ進上す。進物披露役丹波少將・大津少將・松任侍從、御折臺物役金山侍從・龜山侍從、御簾并舞臺被物以下役福島左衞門大夫・安威攝津守・稻葉兵庫頭・齋村左兵衞・脇坂中務大輔、御能支配役新庄駿河守、御能五番あり。高砂・八島・東北・三井寺・老松四座の太夫に、小袖一重づつ、猿樂に小袖一つ・錢三百貫是を下さる。夕陽に及びて還御なり。御道筋辻固の人數千六百人、悉く請じ入れ、酒肴數を盡して馳走す。翌日祝儀の能あり、諸大名を招請し、珍美を盡し饗應あり。芝居の人數は、踊相撲の場の如く込合ひ

たるを、役人を付けて、折行器やうの物、さまぐ\の菓子肴、其数を知らず、酒を盛る事淵の如し。三日には家中の上下、其外出入の町人を召寄せ料理給はり、一昨日御成の時、金銀にたびたる百膳の、見せ給ひ膳を始め、盃臺・重箱・菓子盆・提子・盃に至る迄、望み次第に取らせければ、町人共飲み醉ひ、給はりたる品々をかづきつれ、謳ひつれて歸りけり。

土佐國千部經の事附朝鮮へ再び渡海の事

慶長元年朝鮮國の和議破れて、翌年二月より諸將再び渡海す。爰に長宗我部宮内少輔元親は、家臣を召して申されけるは、今度朝鮮へ再び渡海す。遙々の境を越え軍の陣に赴けば、生きて再び來らん事は、不思議の中の不思議なり。夫に付けても數年戰場に忠死の輩を始め、一門の面々滅後追善の爲、毎年諸宗の寺々に於て、二夜三日の法事をなす所に、豐後陣より初め内外の物怠に依つて、此事止みぬ。其後又國分寺・瑞應寺にて、千部經供養する所に、朝鮮征伐に紛れて、是又心ならず怠慢す。

然るに兩國の和議調ひ歸朝せしかば、心の如く作善をなさんと思ふ所に、再び渡海するなれば、心意に任せず。元親たとひ異國にて死すといふとも、汝等自他の爲なれば、十月初旬、法華經千部眞讀の供養をなすべし。永く定例とする事なれば、宜しく評議して法式を極むべしと、懇にぞ申置かれける。其後朝鮮に至りても、日本へ軍注進の便に、土佐へ人を下して、此事疎略すべからずとぞ宣ひける。去程に家臣評議して、國分寺に於て、毎年十月六日より同十二日迄を、眞讀の日として、國中出僧の法を定む。

毎年千部經出僧御人數の事

寺院都合百四十坊　繁多故筆者略之。

右合百四十九人

一人　吉田殿　一人　江村殿　二人　久禮田殿　一人　上村殿

一人　野中殿　一人　横山九郎兵衞殿　一人　十市殿　一人　下田殿

三人　香宗我部殿　一人　一宮執行　一人　森殿　一人　吉松殿

一人　大黑殿　一人　久武殿　一人　三宮殿　一人　尾川殿

一人　戸波殿　五人　津野殿　一人　西和田殿

合廿六人

惣合百七十五人

右毎年無二懈怠一可レ有二集會一候。若不參之方於レ有レ之者、施物奉行中江可レ被二相渡一候。勿論構二自由一不參名代之族者、尋二捜其由緒一可レ處二科役一者也。仍取定如レ件。

慶長二年丁酉十月吉日

奉行衆之分

奈半利　正覺寺

安喜　高臺寺

和食　永橋寺

本山　山之坊

戸波　正光院

大峰先達　秦　寺　山
安喜　惣　持　院
朝倉　東　之　坊
松本　向　之　坊
片岡　横　倉　寺
安喜　吉　祥　院

斯くて千部讀經修行せられしかば、是より恒例となりて、毎年怠慢ある事なし。其後慶長五年、長宗我部家歿落して、此事止みけるに、同六年山内對馬守一豐入國ありて、此事を聞き給ひ、我は行方も知らぬ秦家の亡者を弔ふべき謂なし。今より改めて一宮高鴨大明神の宮中に於て、國家安全萬民快樂、武運長久家門繁昌の祈禱に致すべしとて、同年十月六日より同十二日迄、千部經執行せられ、貴賤男女群集する事、今に絶えずと承る。

元親再び朝鮮に渡海

去程に元親は、再び朝鮮に渡海あり、七月十四日釜山海の船軍の時、藤堂佐渡守に押續いて、番船三艘乘取り、太閤の御感に預り給ふ。其後南原の

城攻にも、浮田・蜂須賀・藤堂・生駒等と一所に武功あり。 斯くて慶長三年八月十八日、太閤他界ありければ、諸將と同じく十二月初に、博多名島に到着して、石田・淺野に對面し、頓て伏見へ上り、其後下國し給ひけり。

異本に曰、慶長元年十月中旬頃より、島津番手の城そせんといふ城普請、毛利壹岐守・中川修理亮・池田伊豫守・元親、此四頭請取なり。御横目は垣見和泉守なり。次に此普請の間に、ちやはんといふ城元へ諸將集りて談合あり。 其意趣は、小西攝津守取出の城、つま出過ぎ候間、川より此地へ引退け候て可レ然候はんとの評定なり。元親は、少しにても取出し候はんとの談合は可レ然候。 引退け候はんとの儀はいかゞとて、作病して出合ひ給はず。 兎角皆々の談合極りて、太閤へ言上の書狀認め連判の時、元親へも頻に迎を越し候へども、子息の右衞門太郎を名代に出して、連判はせられず。 案の如く此注進御意に入らず、以の外御立腹あり。 其節仰に、元親は此連判に入らずと見えたり。 新座の用捨無用とはいひ難し。 必ず作病して、右衞門太郎を名代に出し、補ふらんと思召候。 寔に一分の弓矢を以て、武略の

功を積みたる者は、左樣にあるべきとの御感なり。此談合に用心なき故、和泉守ども連々中惡くなり、其後そせんの城普請の時、門脇の塀狹間を上げて切らんといふ。元親、斯樣の所の狹間は、人の胸の邊より腰の邊を當てゝ切りたるが能く候と申さる。又和泉守、下げて切るは、敵、城の内を見入りて惡かりなん、只上げんといふ。又元親、此門脇へ敵心安く付きて、城の中を見る程に、城内弱りては、城は持たれまじとから〳〵と笑ひて、其方好みの如く上げて切りては、敵の首より上を打つべしとて、元親杖を以て鐵炮の構をして、和泉守に見せられ、惣別斯樣の事は、我次第に召されよと、荒らかに宣ひければ、和泉守兎角の返答に及ばず。常常元親は律義第一の人にて、上使横目衆とあらば、頭を地に付け慇懃仕られ候が、此時は以の外なる存分にてありしなり。其より彌挨拶惡く成行きける。其後番手に殘られ候衆、瀨戶の城にて鬮取あり。元親・加藤左馬介などは二番にて、歸朝の衆なり。元親は國へも寄り給はず、直に大坂へ登られ候時、加藤左馬介・有馬玄蕃・元親父子と、四人一度に御目見え、此時攝津守取出の城の事仰出され、御感あ

り。來年高麗御番代に、元親渡海御免なされ候間、右衛門太郎可ニ相勤一候。其首途を御祝ひ候とありて、盛親に具足拜領ありしなり。

千部經の事、天正の頃、元親阿州へ出勢を思立ち給ふといへども、其頃凶年打續き、耕作不熟に候。依つて兵糧不如意にして、暫く内談に日を送らる。爰に富崎の祖母とて、長岡郡富崎といふ所に、一人の寡の老尼あり。四國一の大福長者と、鄕人共いひ觸らせども、何事をかいふらんと思ふ所に、彼老尼岡豐へ參りて申しけるは、阿州御出勢兵糧の不足に付きて、御延引の由承及び候。事實に於ては、此老尼金銀米錢貯へ持ちて候間、是我果報とは申し乍ら、偏に領主の御恩澤に據りし事にて候へば、御軍用達しさせ奉り度候と申しければ、元親大きに悅び給ひ、頓て阿州へ打入り、程なく四國手に入りけり。老尼は一兩年過ぎて、十月十二日病死す。元親宣ひけるは、四國を相治む事、併老尼が合力の功によれり。されば彼が跡を弔はずんばあるべからずとぞ宣ひける。此千部經は、戰死の跡を弔ひ給ふといへども、第一は、老尼が菩提を心に當て、彼命日を、結願の日に定められけると

かや。

土佐物語卷第十七終

土佐物語　巻第十八

元親卒去附雪蹊寺の事

慶長四年の春、長宗我部宮内少輔元親、正四位少將土佐守にぞなられける。家の面目何事か是に如かんと、悦び給ふ事限りなし。頓て御禮の出仕祝儀の作法、かたの如く執行はるゝ所に、樂み悲しみ行交ふ習、些し心地例ならずと聞えしが、日を逐うて身心苦痛し、名醫の良藥も効なく、貴僧の懇祈も叶はず、同年五月十九日、春秋六十一にして卒去し給ひけり。雪蹊恕三と謚す。在世に授かり給ふ道號法名なり。嗟呼此人、先祖より僅に三千貫を領する事數代なりしが、天運循還して、一度四國を掌に握り、太閤秀吉公に屬して、諸方に發向し、朝鮮の役に與かり、城を拔き壘を挫く事、其數を知らず。勇名を漢家本朝に施し、武門の棟梁なりしかども、無常の敵は

防ぐに方便なく、德を戴き恩を慕ふ者、其數を知らずといへども、伴ふ者一人もなく、遂に黃泉に赴き給ふ。哀なりし事共なり。御遺言に任せ、洛陽天龍寺にて火葬す。導師は策彥和尙なり。遺骨をば土佐國へ下して、吾川郡長濱高福山慶雲寺を造營して、御骨を納め、木像を安置し位牌を立て、山號は本の如く、寺號を改めて雪蹊寺と號す。寺の額は近衞三藐院信尹公の御筆なり。贊は城州南禪寺惟杏和尙に請うて書せらる。

土州太守羽林次將正四位雪蹊恕三大禪定門慈容贊

雪蹊大禪定門者天姿秀挾明德必隣階庭蘭玉和氣藹々一門桃李喜色津々其平日也匿笑慧遠法師願往生於西方遠瀬獨尅難々易々莫多季也追慕息畊老豁長兒孫東海蘭舍高攀謚々周々可尙哉可惜哉孝子寫慈容請贊於予不獲止謾訂愛君愛國智過人武勇名高奉土濱天亦捧花獻遺像熱時梅蘂十分春

今茲慶長四稔己亥六月如意珠日

前住東福後住南禪惟杏叟永哲謹贊

抑此高福慶雲寺は、弘法大師の開基なり。當國に七ヶ所邊路とて、大師定め置き給ひし七ヶ寺の其一、四國巡禮の札所なり。いつの頃よりか、高福寺と唱へ來れり。昔は長濱の七福寺とて、福の字附けたる伽藍七ヶ寺あり、高福寺も其一なり。或説に、實は高福山なれども、六福寺ある故に、野人村老誤りて、寺號に唱へけるともいへり。萬福寺・圓福寺の跡は、高福寺の東にあり。其餘の四ヶ寺は、跡地も知る人なし。慶雲寺は、雲慶・湛慶兩作の藥師如來を安置したる故に、寺號とす。此寺、本は眞言の流派なりしが、日峯和尚を開山として、雪蹊恕三の菩提寺とせしより、臨濟派の禪宗となされけり。かばかりの靈地なれば、四國邊路今に札を納め禮拜をなす。彌三郎信親の菩提寺、浦戸山の大甫寺をば毀ち、高福山に移し、御靈屋等造營あるべしとて、其役々を定め、大工小工を集め、事始ありける所に、盛親、石田三成が反逆に與し、土佐國殁收せられしかば、彼造營の沙汰もなくなりぬ。天甫寺は、先に毀ちしかども、常舜居士の御靈屋は、未だ移されずして其儘ありけるを、程經て巡行の邊路、彼御靈屋に宿り、煙草の火を誤りて燒失す。礎殘りて今にあり。天甫寺御靈屋の五

倫石は、雪蹊寺の住寺取りて、當寺の山に納めけるとぞ聞えし。去程に右衛門太郎盛親家督を請けて、土佐守と改め、四位侍從に敍爵して、武運永く家門の繁昌とぞ見えにける。

盛親、石田に與する事

去程に家康公は、會津景勝を攻められん爲、關東へ下向あり、其隙を伺ひて、石田治部少輔三成反逆を企て、秀頼公の仰と稱し、家康退治せらるべきの條、不日に馳參るべき由、奉書を諸國へぞ下しける。依つて中國・西國の大名馳上る中にも、長宗我部土佐守盛親、逆徒に與せしと傳へ聞くこそ不運なれ。其頃盛親は、在國して居たりし所に、彼奉書到來しければ、盛親家老の面々を集め、披見ありて申されけるは、此奉書かたぐは何とか思ふ。盛親は曾て信用せず。其故は、秀頼公今年僅に八歳になり給ふ。何の辨ありて、內府を亡せと仰せられ候べき。案ずるに奉行中、私の宿意を遂げん爲、秀頼公の命と稱する所疑なし。さあればとて、又捨置くべきにあら

ず。何とか計ふべきと、各意見を問はる。一座異議區々にして一定ならざりしを、盛親暫く思案して申されけるは、亡父草創の始より、內府と御入魂あり。先づ尾州小牧山合戰の時も、內府の味方として、大坂を攻傾けんとの內通ありし事も、面々知る所なり。斯樣の好あれば、內府に屬せんと宣ひしかば、郎從皆御尤至極、一途に思召し極め給ふべしとぞ申しける。さあらば先づ使者を關東へ參らせ、此心緒を述ぶべしとて、十市新右衞門・町三郎左衞門を使者として、一通の檄書を關東へ遣し給ふ。彼兩使、夜を日に繼ぎて急ぐ所に、長束大藏大輔、江州水口に關を据ゑて、堅く人を通さねば、兩使詮方なく空しく歸り上りける。去程に盛親の志、いつしか徒になりて、關東へ達せざるは、家運の極といひながら、本意なかりける事共なり。是をば知らず、盛親は內府に與力せんと、國許を立ちて大坂に至る所に、兩使歸りければ、此上は力及ばず、只運に任せよとて、石田にぞ與せられける。

盛親石田に與す

市川石見關所を通る事附山內一豐妻女の事

爰に山内對馬守一豐は、今度關東へ赴かれけるが、上方何となく物急の由聞えしかば、家臣市川石見を呼びて、汝は大坂の館へ立越え、若し不意の事あらば、北の方を守護せよとて、鞠子の宿より大坂へ遣し給ふ。石見畏りて急ぐ所に、水口に關をすゑて、人を通さぬと聞きて、頓て熱田の禰宜の姿に樣を變へ、烏帽子を着し幣を持ちて、既に關所に至りければ、番の士一人、兼て見知りたりと覺えて、是は禰宜にはあらず、若狹の市川にて隱れなき强弓精兵、山内對馬守の家人なり。それ餘すな、召取れ搦めよといふ程こそあれ、大勢立寄り取卷きたり。石見少しも騷がず、是は思ひも寄らぬ事を承り候ものかな。但某、彼市川に能く似たる所とや、熱田八劔の御神罰を蒙り候べし。全く禰宜に疑なしとぞ陳じける。時に一人進み出で、然らば問答迄もなし。石見ならば、能く見知りたる者あり。其者召せとて呼出す。彼者急ぎ立出で、互に目と目を見合せたれば、昔膝を組み枕を交して、日夜語りたる舊友なり。彼者二目とも見ず、横手を丁と打つて、扨も〳〵、世には能く似たる者もあるものかな。疑もなき石見なり。但し石見には、額に太刀疵の跡あり。是石見が支證なりと

いひければ、番人立寄り是を見るに、疵の跡はなかりけり。扨は石見にてはなしとぞ申しける。石見は本より疵の跡なかりけるを、常時卽妙の返答して、舊友の危難を救ひけるぞ優しけれ。番人共、猶疑や晴れざりけん、誠の禰宜ならば、祝を讀めと申しければ、石見家に傳へし鳴呟の文を、高らかに讀上げたりしかば、關守ども此文をや知らざりけん、信服してぞ通しける。一朝の謀にて、鰐の口を遁れける、智慧の程こそゆゝしけれ。此外一豐、家の士を追々に差遣し給ふに、方便をなし巧を變へ、山を越え川を渡りて、皆難なく關を過ぎ、大坂へぞ着きたりける。是のみにあらず、大坂方にありて、志を關東に通はし、人を下す輩多しといへども、關所を通り得ぬは一人もなき中に、彼十市・町兩人が不覺にて、關に怖れて歸りしかば、盛親の志關東へ達せず、徒になりにける、家運の末こそうたてけれ。去程に大坂には、今度關東下向の面々の人質を取りて、本丸に籠置き、並伏見の城を攻取り、上方一等丈夫にして、關東へ攻下るべしと評議を極め、七月十九日、細川越中守忠興の北の方、大坂の屋敷に坐しけるを、城内へ入れんとしければ、北の方、人質とならん事を恥ぢて、公達

を刺殺し、其身も自害して果て給ひぬ。山内對馬守一豐の北の方、此由を聞き給ひ、一豐より附置かれし服部喜左衞門・岡文左衞門、其外市川石見を始め、士共を召集め、對馬守殿も越中守殿も、一味同心の御事なれば、自らも今は遁れぬ所なり。敵寄せ來らば潔く自害せんずるぞ、其用意せよと宣へば、いづれも畏り候と物具差固め、寄せ來る敵を待ち居たり。されども忠興の北の方の自害に懲りてやありけん、人質入城をば、止められけるとぞ聞えし。

伏見城合戰の事

伏見へは、備前中納言を大將として、七月廿日大坂を立ちて、大手搦手一同に押上る。長宗我部盛親も、北の攻口を承りて、諸將と同じく馳向はる。城の大將鳥居彦右衞門・松平五左衞門・松平主殿介等、能く守りて防ぎ戰ふ處に、內通の者ありて、城に火をかけ、松の丸より寄手を引入れしかば、城中大に騷動す。此勢に、寄手大手の門を打破りて、我劣らじと押入りけり。中にも盛親は眞先に進み、二の丸隱筑地まで押

盛親伏見城を攻む

入る所を、松平主殿介家忠、手の者前後に隨へ懸向ひ、火を散らして相戰ふ。盛親家人木塚源八・蚊居田新六・神通寺太郎左衞門・吉田左馬允・久禮田八郎兵衞・國澤藤左衞門を始め、究竟の士廿三人討死す。家忠深手負うて自害す。鳥居元忠は大に働きて、鈴木孫市に出合ひ、終に討死してけり。其外松平五左衞門を始として、城中の兵士、一騎も殘らず討死す。宇治の茶師上林竹庵も、折節居合ひたりしが、勇を振ひて戰死す。首をば鈴木喜八郎討取りけり、斯くて寄手の大勢一度に亂れ入り、八月朔日未の刻、終に城を乘取りけり。

鳥井元忠戰死

小山へ注進の事

去程に家康公、七月六日江戸へ御着座、軍御評定ありて、同廿一日御出馬、下野國小山に着御ましまく／＼ける所に、誰いふともなく、石田治部少輔反逆して、御後より押寄するといひ出し、實否慥ならず、上下ひそめく所に、山内對馬守一豐の北の方より飛脚來りて、一通の文箱を捧げ、大坂の樣體を告げられたり。其故を尋ね聞けば、石田

三成が諸國の軍勢催促の廻文、對馬守大坂の館に到來す。一豐の北の方、彼廻文に一通の文を添へて文箱に入れ、田中孫作といふ者を飛脚にして、關東へぞ遣しける。彼孫作、甲斐々々しき者なれば、夜を日に繼ぎて急ぐ所に、伊吹山にて、盗賊に、衣裳刀脇指まで剝取られたり。されども大事の使なれば動かず、文箱を取持ち、赤裸にて逃延び行く所に、一人の老人に行逢ひたり。是天の與と取て押へ、衣裳刀脇指剝取り着して、小山へぞ着きにける。一豐は、諸川の町屋に宿せられたりしを、夜半過に門を叩きて、彼文箱を差出し、大坂の有增を申しければ、一豐、野々村右衞門九郎丑政を使として、彼文箱を、封の儘にて小山へ捧げ、上方騒動に就いて、大坂妻女方より文箱差越し候。頃日の世上に候へば、嫌疑を憚り、私の披見を遂げず、封の儘差上候とぞ申されける。則右衞門九郎を御前に召し、直に仰出されけるは、上方騒動の事、沙汰計りにて、實否未だ慥ならざる所に、早速注進、殊更婦人の文、いかなる密事かあらん、其儀を顧みず、封の儘差出したる心底、信實篤厚の忠義、傳へ聞く貪泉を百飲すとも、心を變ずべからず、天晴武士の手本なりと、大きに御感賞あり、則文箱

を開かせ御覽あれば、彼廻文に、女の文を添へたり。老中奉行達、俄に反逆を企て、人數催促の廻文來り候程に、田中孫作に持たせ差下し候。常々の御志に候へば、申す迄はなく候へ共、上様へよく〱御忠節遊され候へ。構へて〱我身事、御心苦しく思召候まじ。叶はぬせんには、自害を遂げ、人手にはかゝり候まじなど、一紙の内に、千萬の心緒を述べてぞ書かれける。夫といひ女といひ、相叶ひたる心入、諺にいふ、鬼の妻には鬼女なりとは、斯様の事をいふべきと、後迄も御沙汰ありけるとぞ聞えし。此注進を始として、諸方より早馬を打つて急を告ぐ。依つて仰出されけるは、何れも妻女大坂にあり。尤捨難き事なり。急ぎ歸り上らるべし。些も遺恨に思召されずと仰出さる。一座の人々目と目を見合せ、兎角詞を出さゞる所に、對馬守進み出で、今此期に及んで、妻女の爲に義を捨て道に背きて、逆徒に與する者は一人も候べからず。扨景勝へは押への勢を差置かれ、急ぎ御上洛候べし。但上方道筋御心元なく思召さるべく候へば、先づ一豊が居城掛川を明け、御譜代衆へ相渡し、人質を差上し候べしと申されければ、滿座此議に同じ、全く別心を存すべからずと、各連

判起請文を、本多佐渡守して差上げられけり。斯くて海道筋の城々、段々明渡さる。掛川の城へは、內藤三左衞門、番手として入城なり。扨諸將人質を出され、對馬守は、舍弟吉兵衞良豐を出さる。人質悉く小田原の城に差置かれけるが、後に皆在江戶なりしとぞ聞えし。

阿野津城合戰の事

上方勢、伊勢路へ向ふと聞えしかば、要害に在つて是を支へよとて、御下知を承り、小山より本國へ歸る人々多し。中にも富田信濃守信高・分部左京亮政喜は、三州吉田より、小船數千艘に取乘り、阿野津城に入る。分部は、我館上野は、要害惡く抱へ難しとて、阿野津城に加はり、東の門をぞ堅めける。去程に伊勢口へ向ひたる西國勢、八月廿三日、阿野津城攻とぞ定められける。爰に長宗我部盛親、家の子若黨召集めて申されけるは、此度は、國々の軍勢馳合ひたる晴軍なれば、皆我れ劣らじと先を爭ひ勇を勵まし、手柄を專に心掛くべし。然れば只大方に心得ては、却て不覺を取る

盛親阿野津城を攻む

べし。凡軍に臨む者、活きて再び家に歸らんと思ふ者はなけれども、殊更此度は、討死と一筋に思ひ定め、心を一致にして、群に抽んで譽を顯し、天下の稱歎に備ふべし。然れば打込の軍しては、士卒の剛臆知れ難し。他の勢を交へず、一働きすべきと思ふなり。さらば諸軍に先立ち押寄せよとて、手勢七千餘騎を引率し、廿二日の夜、まだ子の刻計りに陣を立ち、城の大手に向ひ、鬨の聲三度上げ、長宗我部土佐守盛親罷向ひたり。此御門をば、誰人の御固め候や。速に開けて勝負あれと、口々に呼ばはりければ、城中には是を聞き、西國に隱れなき長宗我部打込の軍を嫌ひ、拔駈したりと覺えたり。いかに剛なる者共なりとも、所の案內は知らず、殊に夜はまだ深し。いざさらば爰彼の難所に追詰め討取らんと、城兵門押開き打つて出で、敵味方入亂れ、追ひつ返しつ戰ひしが、城兵終に打負けて、門より內へ引入るを、桑名彌次兵衞・南岡四郎兵衞・吉田市左衞門・大岐左兵衞・江口藤內・中島藏人・久萬惣左衞門・桑名甚五兵衞・森本右馬允・井上六郎兵衞・吉田彌右衞門・同三郎左衞門・中島與市兵衞・山內右京兵衞・國澤民部・近藤長兵衞・野中三郎左衞門・宿毛甚左衞門・竹內兵庫・立石介兵衞・吉

田平右衞門・同孫三郎・大黑左衞門太郎・長崎磯之介・德井佐龜之介・池田又兵衞・野村孫右衞門・下元十兵衞・近藤五兵衞・横山新兵衞・宮崎善右衞門・宮地團介・横山九郎兵衞・吉川善介・福良介兵衞・歲岡彥兵衞を始め是非なく込入りしかば、大手の門を押破られ、三の丸に逃籠るを、寄手透さず押入り、面も振らず、互に打合ひ切合ひ、何れ隙ありとは見えざりけり。中にも桑名內藏允、敵七騎の中に取籠められ、終に討死す。立石民部は、首一つ取りて立出づる所を、城の兵上澤掃部、弓取りて番ひやゆうと射る。民部が胴中を、後より前へ、矢先六七寸射拔きしかば、一言に及ばず、俯して倒れたり。掃部が弟式部、其首を取らんと駈寄る所を、近藤兵藏駈向ひ、死首を望み給ふは卑怯なり。某が活首を參らせんと走り懸りて打合ひしが、引組むとぞ見えし兵藏、式部を取て押へ首搔切り、是こそ誠の活首よとて立上る。兄の掃部是を見て、こは無念なりと、弓と矢を投捨て切つて懸る。久禮田左京是にありとて駈向ひ、終に掃部を討取りけり。其外目の前に、切て落さるゝ者其數を知らず。斯くて盛親の手へ討取る首數百六十三、味方の討死桑名內藏允・黑岩隼人を始め、究竟の士十三人、

雜兵九十八人なり。寄手の諸軍勢此由を聞きて、こは遲れたりと、大手搦手一同に、稻麻の如く相圍み、息をも繼がず攻入りける程に、富田終に打負け、和を乞ひて城を出で、落髮して高野山へぞ入りにける。内府天下御平均の後召出され、豫州宇和島を給はりけるとぞ聞えし。

新加納合戰の事

斯くて關東の諸將、尾州清洲に滯留して、内府の御出馬を相待つ處に、江戸より村越茂介を御使として、上方と手切の一戰あるべき旨、急度仰遣されしかば、諸將驚きて信服し、先づ岐阜の城を攻落すべしと評議一決し、搦手は福島左衞門大夫正則先手として、都合一萬六千餘騎、木曾川の下の瀨へ向はる。大手上の瀨は、池田三左衞門輝政先陣として、山内對馬守を初め、一萬八千二百五十餘騎、八月廿一日のまだ宵より、黑田村の西の堤下に詰寄せて、相圖の煙を待たれけり。爰に山内對馬守、家老野村右衞門九郎を呼びて申されけるは、明日は敵必ず出張すべし。然らば一豊、一番

山内一豊岐阜城を攻む

に川を渡すべしと思ふなり。案内知らで渡し損じなば、末代迄の恥辱なり、汝潜に瀬踏をして歸れと申されければ、野村畏り候と、則其夜瀬踏し、案内を見てぞ歸りける。岐阜の城には、木造左衛門興康・百々越前・佐藤才次郎等を大將として、馬武者六百餘騎・足輕雜兵六千餘人、新加納に出張し、大將黄門秀信卿は、川手村閻魔堂に陣を据ゑらる、明くれば廿二日卯の刻より、岐阜勢川端に臨み鐵炮を放し、敵爰を渡せとぞ招きける。三左衛門は、搦手の煙を待つといへども、未だ見えず。然るに此方へは、敵出でて味方を欺くなれば、速に川を渡して、勝負を決すべしと申されければ、然るべう候といひも敢ず、對馬守一豐、川の案内は兼て知りたり、一番に馬を乘入れらる。家臣野々村右衛門九郎・山内掃部・岩越甚左衛門・枝野文四郎・五藤牛右衛門・山縣彌平治等打入りければ、是を見て總軍勢、一度にざつと渡す程に、木曾川の浪岸に餘り、淵は却て瀬となりぬ。敵は爰を專途と、弓鐵炮を放しけれども、寄手事ともせず、向の岸に打上り、勇み進んで攻懸る。百々越前を始め、城兵挑み戰ふといへども、終に打負けて、閻魔堂指して引退く。去程に搦手の大軍も、段々寄せ來り、岐阜

城攻詰め、本丸を百重千重取卷きければ、黄門力及ばず、降參を乞ひ給ひ、城を明渡し、高野山へ上らせ給ふとぞ聞えし。

關ヶ原合戰の事附盛親働の事

去程に家康公、關東御出馬、岡山へ御着陣なられしかば、石田治部少輔是を聞き、軍評定して手配を定め、九月十四日夜、諸軍關ヶ原へ押出す。此由岡山の御陣所へ注進ありしかば、家康公聞召され、早速御出陣、諸將何れも備を設け、九月十五日辰刻より軍初まり、兩軍入亂れ、火を散らし相戰ふ處に、筑前中納言秀秋、兼て關東へ内通して、裏切をせられしかば、大谷刑部が陣忽に崩れて、吉繼自害しければ、此手一番に破れて、終に大坂方敗軍に及ぶ。長宗我部土佐守盛親は、長束大藏・安國寺等と一所に三萬八千餘騎、南宮山の麓に備を立て、關ヶ原の合戰に横矢を射んと待構へたり。中にも盛親家臣吉田孫左衛門康俊とて、去天正十六年、吉良左京進・比江山掃部介已下誅伐の時、罪の疑に依つて領知に離れ、逼塞して居たりけるを、此度赦免

ありて、弓同心を預けて連れけるを召して、軍のやうを見て來れと宣へば、孫左衞門畏りて、馬を駈出して行く所に、早味方打負け崩れ懸るを見て、急ぎ引返す所に、流れ矢來りて、馬の太腹に立ちけるを、下立ち矢を拔き、小橋を渡り立歸り、味方敗軍に候。敵今に押懸け來り申すべしといひもあへぬに、當手の押に向ひたる池田・淺野・生駒・蜂須賀等の人々、眞蕩に打つて懸る。長束・毛利・長宗我部・安國寺、軍兵を進め相懸りに懸つて、爰を專途と戰ひけれ共、終に打負け、散々にぞ落行きける。

盛親敗軍

盛親は隨分勇を勵まし、挑み戰ふといへども叶はず、家人西和田備前家遠・大高坂太郎左衞門親勝・久萬惣左衞門俊長・幷河兵庫・假屋我野新太夫・猪佐古三郎左衞門・丹治川民部・鹿持兵衞次郎・奥宮左衞門を始め、究竟の兵百十三騎討死し、雜兵も若干討たれ、或は敵に隔てられ、又は落失せける程に、殘る勢僅に五百騎計り、桑名彌次兵衞・南岡四郎兵衞・吉田孫左衞門・同又左衞門・同平左衞門・立石助兵衞・町三郎右衞門・横山新兵衞・十市新右衞門・安並三郎左衞門・町野又五郎・安田三河・同又左衞門・中島市兵衞・竹内兵庫・吉田彌右衞門・同平右衞門・同孫三郎・江村彌左衞門・五百藏左馬進・佐

竹藏人・横山九郎兵衛・谷忠兵衛・豊永惣右衛門・吉田猪兵衛・黑岩治部左衛門・同玄蕃・南部太郎左衛門・本山次郎右衛門・執行太郎兵衛・中內惣右衛門・野中三郎左衛門・北村太郎左衛門・同太郎兵衛・近藤長兵衛・奧宮仁右衛門・明神忠右衛門・松田與左衛門・大黑左衛門太郎・野津源兵衛・和食惣右衛門等、大勢の敵を打破り追拂ひける間、五ヶ所三ヶ所疵を蒙りながら、大將の前後を守護し、多羅尾山へぞ分入りける。

盛親歸國の事附家臣評議の事

斯くて盛親は、伊勢路に懸り、伊賀路を經て、泉州貝津に至る所に、小出播磨守、人數を出して遮らんとす。土佐勢物々しやと轡を並べ、一文字に駈破り、難なく其所を打通り、大坂の味方と一つにならんと、上下勇み悅ぶ所に、はや輝元、大坂の城をも明渡され、內府入城なされ、石田三成も生捕られぬと聞きて、大きに驚き力を落しけるが、兎に角本國へ歸りてこそ、有無の是非をも定むべけれとて、大坂の下屋敷にて艤し、立石助兵衛・横山新兵衛を使として、井伊兵部少輔直政へ遣し、內府の御前、宜し

盛親土佐に歸る

く御取成頼み入る由御詫言の旨趣、委細に申含め、其身は土佐へ下られける。立石・横山兩人は、兵部少輔へ參り、委しく申入れしかば、兵部少輔申されけるは、直政、盛親と年來深き因なれば、聊疎略すべからず。然れども住國にありての斷は、申上げ難し。急ぎ上り給ふべし。公儀は隨分執し候べしと、彼兩使に梶原源右衞門・川手内記を添へて土州へ下さる。盛親、兩使を三日留め饗應し、豐永惣右衞門・立石助兵衞を兩使に添へて、又大坂へ遣し、委細承届候。近日罷登り候べしとぞ申されける。其後盛親家臣を召集め、井伊殿の指圖に任せ、大坂へ上るべきか、又籠城すべきかと、各所存を問はる。大事の詮議なれば、暫く兎角申す者なかりし所に、大黑主計進み出でて申しけるは、井伊殿御取持に相違はあるべからずと雖も、公儀計り難く候。俄忽に御上りありて、敵の擒となり給はゞ、臍を噬むとも甲斐候まじ。元より御敵に組し給ふこそは不運なれ。模陵の評議を差置かれ、運を天に任せて、籠城の御覺悟候へと存ず。面々いかゞ思召すと申しければ、又武内内藏助親信是を聞き、大黑殿申さるゝ所實にも理なり。扨て籠城の方便は、如何心得給ふやと問へば、

主計又申しけるは、當城は、出入駈引自由には候へども、大軍を請くるには宜しからず。國中に山林險阻要害の地多く候へば、衆議次第に取籠り、妻子共を隱し置き、心安く合戰致し候べし。古より土佐の地へ、他國勢押入りたる例候はず。昔平家の大將門脇の宰相經盛、矢島の戰場より落ちて、當國柳瀨に忍びて、一生終り給ふ。此故に經盛の討死は、記錄にも詳ならぬとなり。子息敦盛の腹卷を、熊谷次郎が送りたるを、形見に持たせられたりとて、彼末葉門脇の何某持傳へて、今に柳瀨にあり。諸人の知る所なり。其外平家の落人、當國山中に住居したる所とて、平家が森と號する所あまた候。源氏一統の世となり候ても、當國へは手指す事もならず、平氏の徒類、數代安樂に住したりと申傳へ候。惣じて當國へは、案內知らぬ他國より伺ふ事は、思ひも寄らず候へば、五年も十年も籠城して、惱す程にて候はゞ、寄手も退屈して、扱になる事必定なり。其時こそ心の儘に、安堵すべく候とぞ申しける。戶波右兵衞親武、默然として聞き居たりけるが、主計殿の申す所、一理ありといへども、近年世上靜謐に治り候處、此度不慮の軍出來す。是天下わけめの軍にて、今は野の

末山の奧までも、隨はずといふ事なく、靡かずと申す處なし。今籠城するに及んでは、天下を敵に請け候なり。然れば山林險阻に楯籠りたりとも、大勢に切所なし。唯一戰の勝負にて候べし。縱へば百萬の勢にて籠りたりとも、天下の勢を請け候ては、大方限りあるべし。況小勢をや。源平の昔を、今の世に引較べ給ふ事も、黑白の相違には候べし。其頃は諸國一和せず、互に往來も稀なり。就中當國は、四州の內にも山重りて平地少く、人里も稀なれば、鬼界が島に異ならず。他國よりの通路なかりしかば、平家の落人も恐るゝ事なく、數代住せしとかや。今は天下一統して、山々の奧までも、人住まぬ所なく、往來せぬ里もなし。岩陰の間に妻子を隱し置きたりとも、天下の大勢、野も山も一面に押し來り、山林險阻海邊の岩陰まで、至らぬ限なく、疑はしき所には、火をかけて捜す程にて候はゞ、妻子共は、城兵より先に生捕られ、楯の面に曝されん事疑なし。さしたる事も仕出さぬ物故に、爰彼落行き、長宗我部某こそ、賊徒に組して逃廻りたりなんど、天下の人口に入らん事こそ口惜しけれ。迚も死せんずる命を、武義の爲に捨てたらんは、なからん跡迄も尸を淸むべ

し。只此城を墓所と思ひ定め、北は種崎・仁井田の濱、西は長濱・日出野、敵の向ふ方へ打つて出で、潔く討死し、武名を末代に殘すべしと、憚りなく申しゝかば、滿座此議に同じけるを、內藏助、右兵衞殿の仰至極せり。さり乍ら退いて愚案を廻らし候に、御當家は、家康公と年來御入魂の所に、此度不慮の仕合にて、止む事を得ず石田殿に組せられ候ひぬ。然れば井伊殿の御內意に任せられ、大坂へ御越ありて、眞實を御歎きあらば、家康公も舊好を思召し、本領御安堵の事は相違候べからず。只御上りあるが肝要に候と申しければ、一座又此議にぞ同じける。斯くて三日詮議ありけるが、久武が權勢にや阿りけん、又愚案にや落ちけん、上らるべきにぞ極りける。

津野孫次郎生害の事

其後盛親家臣を集め、兎角大坂へ上るべきに極めぬる上は、片時も急ぐべし。供の人數大勢は惡かるべし。士十一人、雜兵百八十餘人、日限は十月朔日と定められ、何れも退出せんとする所に、久武內藏助進み出でて申しけるは、此度大坂へ御上り候

はゞ、津野殿をば、御切害候べし。其仔細は、津野殿は、藤堂和泉守殿と御入魂に候へば、此度叛逆に與し給ふを幸にして、半國は津野殿へ宛行はれ給ふやうに、取持たるゝ事疑なし。其時は、御後悔候とも甲斐候まじ。急ぎ孫次郎殿をたばかり寄せ、詰腹切らせ給ふべしと申しければ、土佐守は顏色替りて、是は內藏助とも覺えぬものかな。盛親庶子なれども、彌三郞殿は討死あり、五郞次郞殿は、不幸にして早死せられぬ。孫次郞殿は、他家を繼ぎ給ふによりて、盛親家嫡となる。是併實は亡父の慈愛深きに依つてなり。然るに此度謀叛に與する上は、天下の御赦免計り難し。殊更に腹を切らせては、重科遁るべからず。此事たとひ披露なしとも、兄を殺して身を立てん事勿體なしと、苦々しく申されければ、久武も、兎角の言葉なく退出す。諸人憎まずといふ者なし。內藏助は、我家に歸り思案しけるは、此事淺野殿へ聞えなば、深く我を恨み給ふべし。然る時は、如何なる所存あるべきも計り難し。所詮たばかりて討取るべし。盛親公、今こそ斯樣に仰せらるゝ共、所領を分行はれ給はゞ、いか計後悔あるべし。但し我一人にては叶はじと、津野藤藏は、所緣の由緒ありて

常に親しければ、急ぎ呼寄せ、偸に右の所存をぞ談じける。似るを友とするとかや。藤藏打うなづき、事延々にて叶ふまじと、直に使を仕立て、土佐守よりの仰と稱し、津野孫次郎親忠の許へ遣し、此度の儀に付、談ずべき事あり。赤岡にて相待ち候。急ぎ御越し候へとぞいひ遣しけり。　痛はしや親忠は、斯る企ありとは夢にも知らず、家の安否此時なりと、取る物も取敢ず、手勢少々引具し、赤岡指して急がるゝ所に、內藏助人を遣して、先づ岩村の吉祥寺に請じ入れて、暫く休息ある所を、久武藤藏數百騎にて押寄せ、土佐守殿仰なり、急ぎ御腹召さるべし。御介錯の爲に、兩人罷向ひ候と申しければ、孫次郎少も騷がず、何の科に依つて親忠をたばかり寄せ、討手を差向けたるや、同胞の兄を切害し、己れ安穩なるべきや。天罰忽來りて、今に思ひ知るべしと、既に自害せんとし給へば、郎等押留め、こは口惜しき御振廻かな。何の科に、おめ〳〵と御腹召され候べき。寄手の奴原追散らし候べしと、打つて出でんとしければ、孫次郎、志は神妙なれども、迚も遁れぬ身なり。親忠自害すべし。汝等は何方へも立退き、妻子を扶持し候へといひも敢ず、腹十文字に掻切り給へば、郎

等久松源藏介結して、其太刀を取直し、己が咽笛に突立て、死骸に重なつてぞ死したりける。親忠行年廿九、敎山寺雪庭宗笋と諡す。津野元祖越中守經高法名常明院願西・次郎太郎重高淨西・彌三郎國高定西・彌次郎高行定心・孫二郎高續行讃・孫次郎賴高善保・孫次郎繁高道泰・次郎太郎淨高常春・孫次郎元高茂林寺常榮・孫次郎春高祥林寺芳春・孫次郎光高永林寺・孫次郎元藤長林寺紹高・刑部少輔元實元亨院健翁勇公・孫二郎國泰常雲・孫二郎基高聽松院正朔・孫次郎定勝長林寺現西定雲・孫太郎勝興瑞臻・今孫次郎親忠まで十八代にして、津野の正統斷絕す。此久武内藏助が父肥後守則義・兄内藏助親直は、性質柔和にして、信厚く忠義を專にし、主君の不義を諫め、佞奸を退けしかば、人皆敬ひけるに、今の內藏助親信は、親にも似ず兄にも替り、辯佞にして邪智深く、人を亡し身を立てんとす。斯る惡人威を振へば、いかなる事か出で來んと、心ある人は歎きけるに合せて、蓮池・比江山を始め、武功の輩を讒言し、今又斯る惡事をなして、秦家を亡しけるぞ淺ましき。

觀音奇瑞附盛親御改易の事

成親、大坂へ上らるべきに議定しければ、常に信じ給ふ柏尾觀音へ、行末の事をも祈らんが爲に參られけり。旣に十四五町に至る所に、觀音堂より、白き布廿丈計高く立上りたり。盛親を始め供の面々不思議に思ひ、目も放たず守りつゝ、近付くままに是を見れば、布にはあらで白雲たなびきたり。漸々として簿くなる中に、觀音の尊像顯はれ、行方知らず失せ給ふ。上下奇異の思をなす所に、觀音堂より、猛火黑煙を卷きて燃上りたり。諸人驚き騷いで、息を限りに駈付けゝれども、はや一時に灰燼となりて、焦土計りぞ殘りける。是直事にあらず、臣下の惡人主人に歸して、觀世音見放し給ふと覺えたり。行末頼もしからずと、思はぬ人はなかりけり。盛親は祈願も空しく呆れ果て、只すご〳〵とぞ歸られける。さてこそ心に障りて思はれけれども、今更飜すべき事ならねば、頓て出船し給ひけり。抑柏尾の觀音と申すは、聖武天皇の御宇行基菩薩、自ら彫刻し給ひし長二尺六寸の立像なり。山の頂上に寺を建て、觀正寺と號す。又彌陀如來の尊像を刻み、山の半腹に安置して、其靈德普く隱れなかりしかば、終に天聽に達し、詔命を降して、求聞持院といふ敕額をぞ給はりけ

り。上一人信をこらしめ給へば、下萬民首を傾けずといふ事なし。されば伽藍甍を並べ、僧坊軒を連ねしが、星霜年古りて堂舍朽損し、供本の僧侶もなくなりて、彌陀の像は、野人村老集まりて、內谷池田へ移し安置して、一宇を草創す。今の池田寺是なり。觀音は猶本の所に御座ありけるを、長宗我部元親靈夢を蒙り、柏尾山の麓に移し、莊嚴を飾り、堂坊も昔に返し、觀正寺と號して、深く信じ給ひけるが、文祿の頃、浦戶の城下へ改め迎へて、尊敬いよ〳〵深かりけり。されども佛意にや叶はざりけん、樣々の怪異共多かりければ、子息盛親、又本の如く柏尾山の麓へ返し入れ奉り、月參して尊崇せられぬ。此度家の興廢存亡の境なれば、祈願の爲に參られし上、尊體忽に飛去り給ひ、寺堂も回祿して、家の敗亡を示し給ふ。あらたなりける奇瑞なり。斯りし後は再興する人もなく、觀正寺は名のみ殘りて、其路には草茂り露深く、樵牧の外には行交ふ者もなかりし所に、後の國主山內對馬守一豐の子息松平土佐守忠義、正保四年の秋、此山に遊獵し給ひ、志賀喜兵衛勝政供に隨ひ、山林を分行く所に、とある大木の巖窟の內に、觀音の尊像立ち給へり。長さ二尺六寸、昔より語り

傳ふる柏尾の尊容に違ふ事なし。扨は昔此所へ飛去り給ふ事疑なし。前代未聞の奇特なればとて、忠義、同山櫻谷に移し、不日に佛閣を草創し、昔に返し、觀正寺と號し給ふとかや。去程に盛親は、浦戸を出船して、攝州大坂天滿學授の寺へ入り給ふ所に、本多中務大輔・榊原式部大輔を大將にて、討手向ふと聞えしかば、大きに騷動して、我先にと逃失せて、殘り留まる者とては、吉田孫左衞門・江村孫左衞門・黑岩掃部・立石助兵衞・中内惣右衞門・豐永惣右衞門・横山新兵衞只七八人なり。盛親は少しも騷がず最期を極めて待たるゝ所に、其沙汰もなく、井伊兵部少輔より使來りて、大坂御自分の下屋敷へ入り給ふべき由申越されければ、盛親悅び、下屋敷へ移られけり。後に是を聞けば、家康公、諸將を召され、今度逆徒に與せし輩の詮議ある所に、井伊兵部少輔罷出でて申されけるは、長宗我部土佐守が、御敵に與し候事、全く心底より發りたるには候はず、石田三成、秀頼公の命と稱して、諸將を欺き驅催す。宮内少輔、太閤の御厚恩を蒙り、其身も亡父の遺領相違なく安堵仕るに付、其報謝のため、上意に應じ發向致し、軍場に臨むの後、三成私の宿意の由承及び候へ共、其期に及んでは

力に及ばず、所存の外御敵に罷成候。一旦住國へ立歸り候へども、近日御理に罷上り申由、先達使を、直政迄差越し候と、委細に陳謝せられ、殊の外首尾宜しく候處に、舍兄津野孫次郎に詰腹切らせし事、内府公の御耳に達せしかば、元親が子にも、左樣の不義の者ありけるよな。急ぎ誅せよと、本多・榊原に既に仰合はされけるを、兵部少輔いろ〳〵陳じ申され、死罪をば赦されけるとかや。されども住國をば召放され、京都の町人に預けられ、柳が圖子といふ所に差置かれ、土佐國をば、井伊直政に預けらる。

盛親領地没收せらる

土佐物語巻第十八終

土佐物語卷第十九

山内一豐土佐國拜領幷浦戶一揆の事

石田三成以下の賊徒御誅伐あり、諸將軍功に隨つて恩賞を給はる。中にも遠州掛川の領主山內對馬守一豐は、土佐國をぞ賜はりける。井伊兵部少輔直政に仰付けられ、長宗我部盛親が居城浦戶の城を、對馬守に引渡すべしとの上意に依つて、直政家臣鈴木平兵衞重好幷松井武太夫を土佐國へぞ下し給ふ。盛親も力及ばず、異議なく城を渡すべしと、自筆の判形を、立石助兵衞正賀に渡して、國許の家老共へぞ遣さる。兩使の人數、船八艘に取乘り、助兵衞も同船にて、十月十七日大坂を漕出す。一豐の舍弟修理亮康豐は、城を請取の爲に人數を引具し、同時に是も出船す。土佐國の士共、大小上下打集り、盛親の下向を待つ所に、沖より船の見え來れば、扨は安堵を給

はり、御下向御座すと勇み悦ぶ內に、此船の體、不審なりと怪しむ者もありし所に、立石案內の爲め、先達て小船に乘り陸に上り、家老共に對面し、事の由を述べて、盛親の判形を渡しければ、上下色を失ひ、呆れ果てたる計なり。去にても我々、さしも御上りを留めしものを、やみ〳〵と敵の擒になり給ひけるよと、後悔すれども甲斐ぞなき。中にも一領具足共一所に集り、抑主君を擒にせられ、城をさへやみ〳〵と渡すといふ事やある。其上使といふは何者ぞ。一人も殘さず打殺せと罵る程こそあれ、我先にと磯際へ駈出で、鐵炮千挺計立並べ、船に向ひて打かけたり。船中には思ひも寄らず、汀近く漕寄せしかば、手負死人は數知らず、平兵衞下知して、急ぎ船を漕退き、舳艫に火を立て、御下知の上趣を申聞かすべし。船を一艘づつ寄せよと呼ばらせければ、船三百艘計り、戌の刻より翌日巳の刻まで、面々にぞ申聞かせける。雪蹊寺の住僧月峯和尙、上意の趣承り、諸軍に向つて申されけるは、右訴訟あらば、先づ御使を陸へ上げ、委細に申上げられよと、理を盡していひ宥め、案內者をこして、雪蹊寺へぞ上らせける。其夜より一揆共、鐵炮九十挺餘り弓鎗を揃へ、寺

を取巻きてぞ居たりける。一揆の物頭竹内惣左衞門を始め訴へけるは、盛親、御敵に組致し候科に依つて、住國を召放され候事力及ばず。さあらば半國宛行はれ候へ。若此議叶はざらんに於ては、全く城を渡し候まじと、一同に申しければ、平兵衞是を聞きて、其は思ひも寄らず、重好御使の身として、いかで所存に任すべき。重ねて御内意を問うてこそ見めと申しければ、然らば能き様に賴み奉ると詫ぶる者もあり、いや〳〵只今有無の返答承らんと、强氣を吐く者もありて、さま〴〵詮議に日數を經る程に、平兵衞此由を、岡七平・田中源左衞門を大坂へ上せ注進す。兵部少輔聞き給ひ、兩使を差下す事、直政が一分の所存にもあらず。他家より城を請取る時は、土佐の士共承引せず、猥藉に及ぶ事あるべし。然る時は盛親の爲め宜しからず。直政年來因深きに由つて、盛親と內談を遂げ、公儀を申乞うて、兩使を差遣す所に、案に相違の家運の末、力及ばずとぞ申されける。其後土佐の一揆共、御諚を承引せざる由、注進段々に及びしかば、御誅伐あるべしとて、藤堂佐渡守・加藤左馬助、其外伊豫・讃岐・阿波の住人共、大手搦手の手配あり、今一應土佐より注進次第に、彼國

へ向ふべしとぞ下知し給ひける。去程に長宗我部の家老物頭の面々は、國に留り城を守り居たりしが、一所に打寄り、桑名彌次兵衛いひけるは、事新らしき申事にて候へども、我々斯く一味する上は、理非得失を一途に極め、死生存亡を共にすべし。然れば上意に隨はんか、一揆に與せんか、所存を殘さず申し給へといひければ、吉田次郎左衞門入道進み出で、此期に及びて、誰か心底を殘すべき。宗性老體の役に先づ申して見べし。一領具足共一揆をなす事、忠に似て忠にあらず、義に似て義にあらず。其仔細は、井伊殿の御使は、實は上意なり。殊更盛親の御內意なり。旁違背すべからず。是一つ。盛親逆徒に與し給ふのみならず、津野殿に生害させらるゝ事、其罪輕からず。任國を召放さるゝは、所謂自業自得果なり。天下に對し、恨を存ずべからず。是二つ。籠城の諫ありといへども、衆議一同せず御降參に極り、御上りありて擒となり給へば、今更悔ゆる所にあらず。是三つ。一領具足共强訴を企て、御使に向つて狼藉に及ぶ事、上を恐れざるの科輕からず。然れば上樣、たとひ盛親を不便に思召候とも、御寬宥の御沙汰あるべから

ず。せめて家老物頭の者共一揆に與せず、御下知に隨ひ奉らば、狼藉の罪は、一領具足に歸して、盛親を御哀憐の御沙汰に及び給ふこともあるべきか。是四つ。彼といひ是といひ、御諚を背くの道あるべからずと存ずるは、扨各の御思慮いかゞ、承らんと申しければ、一座尤至極なりとぞ同じける。此上は再び論をなすべからずと、桑名彌次兵衞・南岡四郎兵衞・宿毛甚左衞門・福留善之助・町野又五郎・竹内兵庫・立石助兵衞・吉田次郎左衞門入道宗性・同平右衞門・同孫三郎・依岡左傳次・國吉小三郎・吉村九兵衞・十市新右衞門・大岡左衞門太郎・林左太郎・津野源兵衞以上十七八、上意に隨ひ奉らんと、平兵衞にぞ屬しける。一領具足の大將吉川善介・德井佐龜之助・池田又兵衞・野村孫右衞門・福良助兵衞・藏岡彥兵衞・下元十兵衞・近藤五兵衞是を聞き、家老物頭の面々が腰を拔かし、城を渡す覺悟と見えたり。主君の敵を外になし、一々に踏潰さん。但今一應御使の意趣を聞き、猶落着せずんば、鈴木に腹を切らせ、其勢に家老以下を討取らんと、衆議一同して、明日を有無の二つにぞ極りける。斯る所に一揆の內より回忠して、偸に事の由を、家老共へぞ告げたりける。家老共、さらば時を

移さず、不意を討つべしと、十一月晦日の夜、大勢急に押寄せたり。一領具足は思ひも寄らず、人數をば雪溪寺に附置き、八人の大將は、常の役所に集まり居て、内議評定する所へ、一度に吐と亂れ入る。されども八人の兵、元より勇氣の者共なれば、少も臆せず立向ひ、前後にかけり左右を拂ひ、一足も退かず引組みては刺違へ〳〵、枕をならべて臥したりけり。いかめしかりし振舞なり。雪溪寺の寄手是を聞きて、大きに驚き騒ぐ所を、前後より引包み、洩らさじとこそ揉んだりけれ。竹内惣左衛門を始、究意の兵共、何の爲に惜むべき命ぞと、駈出で〳〵一所にて皆討たれけり。一揆の人數、都合一萬七千とぞ聞えし。討取る所の首二百七十三、大將八人の首も此内なり。十二月朔日、船二艘にて大坂へ差上せ、同五日午刻、平兵衛は、十七人の家老共を伴ひ、浦戸の城を改め、山内修理亮康豊にぞ渡しける。斯くて平兵衛は、翌年二月十一日浦戸出船して、大坂へ歸り上りければ、一揆を討取り、城を異議なく渡しけるを、内府公御感に思召す由、本多佐渡守より、平兵衛に、御奉書を成下されけるとぞ聞えし。抑彼一領具足と申すは、僅の田地を領して、常に守護へ勤仕もなく役

もなく、唯己が領地に引籠り、自ら耕し耘り、諸士の交りもせざれば、禮儀もなく作法もなく、明暮武勇のみ事として、田に出づるにも、鎗の柄に草鞋兵糧を括り付け、田の畔に立置き、すはといへば鎌鍬を投捨て走り行き、鎧一領にて差替の領もなく、馬一疋にて乘替もなく、自身走り廻りければ、一領具足と名付けたり。弓鐵炮太刀打に調練して、死生知らずの野武士なり。されば天子も將軍も知らばこそ、王より外に恐しき事はなきと思ふ者共なれば、御下知を憚らざるも理なり。此一揆の大將八人幷物頭等は、彼類にはあらず、高知を領せし者共なり。主君の爲に一揆を起す志はやさしけれども、思へば拙き事共なり。去程に國替り主改まりければ、國中の上下男女怖恐れて、父母妻子を連れ、資財雜具を持運び、山林に逃隱れ、或は伊豫・讃岐・阿波の方へ立退くも多かりけり。此由康豊聞き給ひ、當國の政法、古來の掟に相違なし。在々逃散の者共、早々還住せしむべしと、嚴重に觸れられしかば、中郡・東郡は、皆々還住しけれども、西郡・幡多・高岡の者は安座せず、中にも津野の士共豫州へ立退き、松山の菅生山・宇和島・奈羅・谷山・龍澤寺に入りて法體し、或は中國・九州へ

志す由聞えければ、翌年正月上旬、一豐入國ありて、重ねて竹島傳次正俊を西郡へ差遣し、殘らず還住すべき由懇に仰遣されしかば、上下安堵なし、本の住家に立歸りけるとぞ聞えし。

一豐軍忠の事

山内對馬守一豐、土佐國の守護に備はり給ふに付きて、其軍忠を尋ね聞けば、今度逆徒御追罰ありて、諸將武功の高下を定め給ふに、山内對馬守が功は木の根なり。諸將の功は、木の枝葉なりと仰せられけるとぞ聞えし。其後一豐卒去ありて、子息土佐守忠義家督相續の時も、同じ上意とぞ承る。抑一豐、今度軍功ありといへども、さのみ諸將に異なる事なし。然るに其功を木の根に比せらるゝ事は、一豐小山にて、諸將を進めて連判し、人質を出し居城を明渡して、一番に御宿陣を定めらる。是れ家を作るの基本、山を築く一簣なれば、深く稱美し給ふならんか。一豐土佐へ入部ありて後、御禮に江戸へ出仕せられしかば、土佐國の廣狹を問はせらる。一豐委細

に申されければ、內府公御手を打たせられ、長宗我部が、天下を望みたる國なれば、大國なるべしと思召したるに、推量の外小國なり。重ねて闕國あらば、御加增あるべしと上意なりしとかや。其の後は闕國もなく、一豐も程なく卒去ありて、御加恩の沙汰もなかりけり。富貴在レ天死生有レ命とは、今更思ひ合はせたり。扨も彼對馬守一豐は、大職冠鎌足の後胤、田原藤太秀郷の嫡流たり。父は山內但馬守盛豐とて、尾州黑田の城主なり。弘治三年夜討の爲に、嫡子十郎と共に、大きに勇を振うて戰死を遂げしが、一豐其頃は鹿之助とて、未だ幼穉なりしかば、家臣五藤三郞左衞門淨基介錯し、希有にして遁れ出で、四方を經廻して漸く成長し、十二三の頃より、豐臣秀吉公に仕へて、山內猪右衞門と申しき。數度の軍功算ふるに遑あらず。中にも元龜元年の夏、織田信長公越前國朝倉義景を攻めらる。金が崎の城兵向うて防ぎ戰ひ、終に討負け敗北す。爰に三須崎勘右衞門とて、隱れなき精兵、殿して敵近付けば討倒し、味方を打圍みて引退く。旣に首坂に至る所に、秀吉公の大勢、間近く追掛る中に、猪右衞門眞先に進む。勘右衞門坂中に立ちて、弓引固めて待懸けたり。猪右衞

門少しも擬議せず、鎗提げて駈寄るを、小谷三間計り隔てゝ兵と放つ。其矢誤たず、一豐の左の眸より、右の奥齒に射込みたり。されども猪右衞門ちつとも怯まず、谷を飛越え勘右衞門と引組み、上になり下になり、廿間計りまろぶ所に、勘右衞門が弟駈來りて、一豐を切る事六ヶ所、既に危く見えし所に、味方の大勢駈來りければ、兄を捨てゝ是と戰ふ。其內に一豐は、坂の下小溝へ組落ち、終に勘右衞門を刺殺しけるが、大矢にて射られ、其上深手ならずといへども、六ヶ所疵を蒙りければ、大きに勞れて息繼ぎ居たり。大鹽金右衞門正貞來りて此由を見て、勘右衞門が首を切つて參らせ、其身は逃ぐる敵をぞ追行きける。斯る所に一豐の家臣五藤吉兵衞爲淨走り來る。一豐此矢拔けと宣ふ。矢柄は組んで轉びたる時、碎けて根計り殘りて、少し見えけるを、拔けども拔けず。一豐足にてふまへて拔けと宣へば、吉兵衞畏りて、草鞋を拔かんとす。只其儘にてとありしが、山の岨に寄り懸らせ、草鞋を履き乍ら、顔をふまへてぞ拔きたりける。則爲淨背中に負ひて退く所に、月毛の馬を牽きて行く者あり。善兵衞、其馬は誰殿の馬なるぞ。何がしの馬にて候といふ。扨は汝が主は、

只今討死しけるぞ。其馬此方へとて奪ひ取り、一豐を乘參らせてぞ歸りける。頓て爲淨をして、彼首を秀吉公へ捧ぐる所に、直に御實檢に備へよと仰せらるゝに依つて、信長公へぞ差上げける。宮部肥前守、御前に侯はれけるが、此首を見て、是は義景が親族三須崎勘右衞門とて、越前に隱れなき强弓精兵にて候。兄弟常に睦しく候へば、兄が首を得給ふ上は、弟の首も必ず來り候べしと申上げらるゝ所に、弟の首も出で來る。信長公御感あつて、猪右衞門に創を療すべしとて、手づから御藥を兵吉衞にぞ下されける。彼矢の根は、五藤が家に今にあり。其時の草鞋も、主の面を踏みたればとて、矢の根に添へて、家の寶にして持傳へけるとぞ聞えし。其後數度の高名を極め、土佐の國主になり給ふ。

飛鳥井五藤祖父江武功の事

又一豐軍中にて取得給ひて、祕藏せらるゝ持鎗あり。其謂を尋ね聞けば、一とせ秀吉公備中御發向の時、一豐相隨ひ、群に拔んでて戰ふ所に、敵一人鎗提げ、大勢を突

退けては、向ふ者なかりし所に、一豐鎗取つて打向ひ、人交もせず相戰ひ、敵の鎗先、一豐の內甲に入る所を、其白刃を取つて、一捻捻ぢ給へば、目貫中より折れたるを打捨て、敵を鐙付け給ふ。家臣五藤吉兵衞爲淨、其首に彼鐙を取添へ歸りにけり。其鎗、表には不動の梵字文珠大士、裏には源の來國俊と銘あざやかにて、其刃玉散る計なれば、一豐無價の重寶なりとて、則鳥毛にして持たせらる。遠のけて是を見れば、黑き鳥の飛行するに異ならず。されば飛鳥と號して持鐙にして、彼家にありとぞ承る。又彼五藤吉兵衞爲淨は、一豐譜代相傳の家臣なり。每度一豐に隨ひ武功を顯はし、天正十一年、瀧川左近將監一益が居城伊勢國龜山の城を、秀吉公攻め給ひし時、一豐大きに軍功あり、吉兵衞眞先に進み、勇を振つて討死す。時に卅二歲なり。爰に祖父江新右衞門とて、是も一豐の家臣にて、吉兵衞が親友あり。吉兵衞討死の後、人に語りけるは、我と吉兵衞と尤睦ましき事、親族に越えたり。常に怒る事なく隱す事なく、戰場に臨んでも、共に勵みしかども、我は吉兵衞に每度劣り侍りし。今度龜山城攻の前の夜、我陣へ吉兵衞來りて、夜もすがら過ぎし軍物語に、今迄の手柄を

算へたるに、自身敵の首を取る事、吉兵衛は廿六、我は廿四、生捕、吉兵衛は十五人、我は十一人。城乘は互に六度。組討、吉兵衛は七度、我は九度なり。吉兵衛申しけるは、組討は御邊に負けたりといひければ、いや今一つあり。我年五つ勝ちたりと笑ひて、其夜は互に酒呑物語して別れしが、是を暇乞にて、翌日吉兵衛は討死したり。我れ比翼の友を失ひぬれば、戰場に臨みても勇む事なく、酒宴の席にて樂しむ事なしと、涙を流してぞ語りける。

本山一揆井浦戸相撲の事

一豐は土佐國へ入部ありて、諸士に恩賞を宛行はる。中にも山内刑部は本山を給はり、古城を改めて入城す。爰に高石左馬助・吉之助といふ者あり。彼は長宗我部が屬士にて、此所の領主なりしが、盛親歿落の後は、兄弟幽なる體にて、舊領の傍下野に忍び居て、僅の田地を耕して、一日の命をぞ繫ぎける。今年は旱魃打續き、田野に青草なかりければ、高石も年貢收納の便なく、明日の飢をぞ悲しみける。刑部が

役人使を遣して、貢物收納せよといふ。左馬助さま〴〵詫ぶれども、入部初めての納所なれば、後來の爲め忽にすべからずとて、頻に是をぞ責めにける。左馬助詮方なく使に向ひ、此凶年は世の知る所、我れ收納すべき貢物なし。萬物不熟は天の業、我力の及ぶ所にあらずと返事して居たりける。使歸りて此由を申しければ、役人共腹を立て、さやうの奴原、其儘閣く程ならば、狼藉絶ゆべからず。此者を召捕り、獄屋に入置き、諸人の見懲にせんと評議して、誠に收納せぬか、直に仔細を聞かん。早く此方へ來れと使を立てしかば、左馬助聞きて、心得たりと立出づる。其時吉之助、某も相共に參らんといふ。左馬助、いや〳〵汝は無用なり。定めて我を擒にせん巧なるべし。何程の事あるべき。汝は舊好の者共を駈催し、瀧山に取籠る用意せよ。我は城下へ行き、思ふさまいひ散らし、近付く奴原あらば、五十も七十も踏倒し、頓て歸らんとて、事もなげに城下を指して行くまゝに、役人共集りたる所へ、少も臆せずつゝと入り、頭人の膝本近く畏り、抑某を召さるゝは何事に候や。頭人、收納はいかがするやと問へば、左馬助から〳〵と打笑ひ、扨々道理を辨へぬ人々かな。納むべ

き年貢はなきぞと、幾度もいひつるが、扨は使の申さぬかといひければ、天晴惡き言分かなと、兩方より立寄るを、心得たりと左右へ突倒し、やあ留めんと思はゞ留めて見よと、刀の柄に手をかけ、邊を睨んで立つたる勢、敢て遮るべき氣色ならねば、ひしめになりてぞ居たりける。左馬助、何と申さるゝ事はなきか。さらば暇申さんと、閑々と歸りけり。吉之助待請け、いかゞと問ひければ、左馬助、別の事もなし。去ながら油斷すべきにあらずとて、同意の者共三百計駈催し、近鄕の在家を亂妨して、瀧山に取籠る。刑部此由を聞きて大きに驚き、手勢卅騎計り召具し、出でて事の樣を見れば、一揆共二手に分れ、一手は寺家の川原の者共、川を隔てゝ、爰を渡せと欺きて、鐵炮嚴しく打掛けたり。郎等共、先づ御歸ありて、大勢にて攻めらるべしと諫むれば。刑部城に歸り人數を集め、翌日早旦に中島へぞ押寄せける。一揆共出でて防ぎ戰ひしが、大勢に追立てられ、樺山の要害へ逃入るを、それ餘すなと、刑部、坂本まで追懸る所に、賊徒一人木陰に隱れ居て、鐵炮にて打ちけるが、周章てやありけん、打損じて、刑部が馬の鞍の前輪を、横樣に打當てたり。郎等共是を見て、遁さじと追掛

けれども、難所なれば逃延びたり。此由浦戸へ注進しければ、一豐自餘の見せしめに、一人も餘さず討取れと、山内内記一政・山内掃部豐成を大將として、軍勢を差向けらる。此一政と申すは、初め野々村右衞門九郎とて、織田城之介信忠卿御生害の時、殉死を遂げし野々村三十郎が嫡子なり。一豐に仕へ、諸方の軍に武功を顯はし、岐阜合戰の時、木曾川瀨踏をし、其外高名擧げて算へ難かりしかば、一豐當國へ入部の後、其軍忠を感じて、山内の稱を賜はり、內記と號す。其後國政を司りて、又野々村因幡と改めけるなり。一揆共、討手大勢向ふ由をや聞きたりけん、謀に、鄕人共が軍に恐れて逃出でたる明家數多ありけるに取入り、本人の立歸りたる風情にて、食物を調へて、高鼾してぞ居たりける。城中には思ひも寄らず、兵皆町口に出で、浦戸勢を待つて悅ぶ所を見澄し、家に火を掛け、一度に吐と打つて掛る。城兵是はと周章るを、無二無三に追廻し追詰め、其數あまた討取り、勝鬨を擧げてぞ引取りける。刑部聞きて、遁すまじと蒐出でしが、火の手城に近ければ、是を防ぐ其隙に、賊徒は要害に入りにけり。去程に浦戸勢、瀧山の麓に押寄する。一揆の奴原は、元來

山河を家として、鹿猿に馴れて、弓鐵炮の上手なれば、岩陰の嫌なく、平地の如く駈廻り、見すましては打ち、狙ひ澄してははたと射る。あだ矢は一つもなかりけり。寄手若干討たれて引退く。斯る所に手負と覺しくて、一人岩の陰より手を出したり。吉田孫左衛門是を見て、岩の陰に手負あり。是を捨置かんは不便なり。且は味方の不覺なり。誰ぞ我と共に行く人あらば彼を扶けん。鐵炮嚴しく敵間近し。一人しては退け難しといへば、野中傳右衛門、さらば某行かんとて、孫左衛門が跡に付きて行く。傳右衛門は若く達者なれば、負うて退くべしとて、孫左衛門手負を抱き、傳右衛門に負はせ、三人重なりてぞ歸りける。一豐、孫左衛門には褒美を給はりけるが、いかなる故かありけん、傳右衛門には其沙汰なかりければ、傳右衛門怒りて國を立退き、肥前國唐津へ行き、寺澤志摩守に仕へけるとぞ聞えし。彼等は長宗我部の士なりしが、此度一豐當國入部に依つて召出され、討手には參りたり。此外國中の浪人此軍を悦び、天晴高名して、國主へ奉公に備へんと、我も〳〵と、寄手にぞ加はりける。中にも濱田勘助とて、隱れなき強力の大男あり。大身鎗の長さ三尺五寸

幅三寸あるを、樫の木の廻り八九寸計なるを三間柄にして、敵を突伏せ打伏せ薙倒しければ、濱田が大鎗とて、國中に隱れなく、度々の軍に名を顯しければ、其身の武勇に高慢して、傍若無人なり。今度内記手に屬して、本山に向ひけるが、一軍して味方の眠を覺させんと進みしかども、敵堅く守りて出でざれば、人並にては口惜し。要害に駈入り、奴原を追出さんと、岩角木の根に取付き、道もなき所を、えい〳〵聲を出し行きけるが、木の根にけし飛んで、眞逆に倒れける。下は嶮しき谷川にて、足もたまらぬ所なれば、鎗を捨てゝ、枯木に取付き、やう〳〵として起上り、鎗を見れば、數百丈谷底の、矢を射る如く早き瀬に、浮きぬ沈みぬ流れけり。よしや鎗は兎も角も、腰の刀のあるものをと獨言して行く所に、敵も爰をや守りけん、鐵炮嚴しく打掛け、三ヶ所疵を蒙り、力及ばず引退く。軍散じて後、何者が捨ひけん、彼鎗を持出しければ、常の荒言をや憎みけん、勘介こそ男振高慢して、手にあはぬ鎗は待ちたれども、本山の戰に鐵炮に驚き、鎗を捨てゝ逃歸りたりと、ぱつと沙汰して笑ひければ、勘介此由を傳へ聞きて、こは口惜き事かな。侍冥加盡果てたり。我れ數度の高名も

徒になりぬ。二度人に面を向けんやうなしとて、太刀刀を人に取らせ、籠居して居たりと聞えし。竹崎太郎右衛門は、勘介が忍び行くを見て、跡に附いて行きけるが、いかゞ思ひけん道を變へて行く所に、とある尾崎に、一揆原七八人並居たり。其中に一人、岩の上に突立ちて、遠見して居たる所を、木陰より狙ひ寄り、鐵炮にて胸板をつと打通しければ、眞逆にぞ倒れける。殘る者共肝を消し立騒ぐを見て、太郎右衛門大音上げ、一揆の奴原討留めたるぞ。續け者共と呼ばはりければ、大勢とや思ひけん、皆散々に逃げたりけり。頓て立寄り首打落し、しづ〳〵とぞ歸りける。爰に伊勢太夫、毎年當國に來りて、祓太麻を國中に賦りけるが、此折節本山に至り、刑部が前に出でて申しけるは、高石左馬助は、代々某が旦那にて、常に心易く申交し候。此度不慮の一揆を企て候事、今は却て後悔仕候らん。某彼陣へ行き對談せしめ、降參させさせ候べし。國主の御前後、宜しく賴み奉るといひて、烏帽子狩衣を着し、祓を大竹の先につけ、眞先に差立てさせ、攻口へ向ふ所を、一揆の者共、何の問答にも及ばず、鐵炮にて太夫が眞直中を打倒す。寄手の大將是を見て、此上は一人も餘さじ

と、瀧山の東の高山へ人數を上げ、大筒小筒取揃へ、晝夜の堺なく打入りければ、手負死人其數を知らず。高石兄弟は、兵糧矢玉盡きければ、行方も知らず落行きけり。郷人共も、爰彼へぞ逃行きける。其頃豐永五郎右衞門とて、豐永の領主あり。先祖小笠原越後守、初めて此所を領し、夫より四代の孫中務大輔、本姓を改めて豐永と號すとかや。五郎右衞門、長宗我部が徒士なれば、本領に放れて居たりけるが、時世に隨ふ習なれば、一豐に仕へんと思案して、本山に行き掃部に對面し、一揆の大將高石兄弟出奔せしめ候へば、郷民共をば御寛宥あらば、某悉く還往仕らせ候べしと申しければ、掃部仔細あらじ、急ぎ其沙汰致されよと許しければ、五郎右衞門、頓て此由觸れしかば、皆安堵の思をなし、本の住家にぞ歸りける。一豐神妙なりとて、五郎右衞門に本領豐永を給はり、他國の堺なればとて、關守にぞなされける。斯りしかども一揆の餘黨、在々に隱れ居る由聞えければ、一豐の謀に、浦戶にて相撲を取らせ一見すべし。上下に依らず、望み次第に罷出でよと、國中をぞ觸れられける。男だてする程の者は、我も〱と馳集まる。見物の貴賤群集して見物す。相撲初り、上下

目を澄し與をなす所に、兼てより目付をつけ捕手を定め、一揆の殘黨共七十餘人搦捕りて、種崎の濱にて磔にぞ梟けられける。岡豐の城下八幡村の名主、是も一揆に組せしかば、相撲の場へも來らず、用心の體にて取籠り居たりけるを、若侍を遣し生捕りて、同罪に行はる。是より惡黨共見懲して、在々所々山の奧まで、豐にぞ治まりける。

大坂陣附盛親兄弟最後の事

去程に長宗我部盛親は、京都柳が圖子といふ所に、微なる居宅を構へ、法體して遊夢と號し、江村孫左衞門・明神源八其外主從、其所の町人に預けられ、放し囚人にてぞおはしける。北の方も土佐より上られけるが、幾程なく病付きて、墓なくなり給ひければ、歎きに恨みを重ねて昔を忍び、十餘年の春秋を送られけるこそ久しけれ。頃は慶長十九年、秀頼公籠城の聞え頻なれば、家康公御追討あるべしと、諸國へ御教書をぞ下されける。遊夢是を聞きて、京都所司代板倉伊賀守勝重宅へ行きて申されけ

るは、將軍大坂へ御出馬の由粗承及び候。事實に於ては、兼て賴み奉る如く、盛親の身の上宜しく御取成下され候へと申されければ、伊賀守、兩將軍御出馬必定に候。貴殿の事は、内々上意も惡う候はず、隨分取成申すべしと、懇に申されける。遊夢悅び宿所に歸られ、所の町人、常に立入りける者共を、殘らず呼集めて、伊賀守殿斯の如く宣ふなり。盛親大慶之に過ぎず。日頃旁の芳志、詞に盡し難ければ、先づ祝ひ申さんと、種々の善味を盡し、一日一夜酒盛し、皆飯醉うてぞ歸りける。斯くて遊夢は、兼て用意やありけん、其夜の巳の刻計に宿所を忍び出で、高瀨舟に取乘り、伏見の京橋に至り給へば、何處とも知らず侍一人・中間二人馬を牽きて、御迎に參りたりとて出で來る。淀枚方の邊よりして、爰彼より二騎三騎打連れ〳〵來りて、大坂の城へ入り給ふ時は、上下百人にぞ及びける。兼てより諸方へ相圖ありけるやらん、常に附き居たる從者も、曾て知らざりけるとかや。過ぎし關原陣の節は、盛親關東へ志ありといへども、止む事を得ずして逆徒に組せしが、今又關東を背きて大坂へは、いかにして組せしぞと尋ね聞けば、本領土佐國を返し給はらんと、秀賴公の御同

盛親大坂城に籠る

意ありし故とぞ聞えし。盛親城中へ入りしかば、秀頼御感ありて、宮内少輔と改め、一方の大將に補せらる。去程に慶長十九年十一月、兩將軍江戸駿府御動座あり、河州・攝州諸所に於て合戰度々にして、關東勢既に大坂へ押詰むる所、俄に御扱になりて、十二月下旬、兩將軍御歸陣なされしが、翌年の春御和談破れて、四月上旬兩將軍再び御出馬、諸國の兵馳せ向ふ。元和元年五月六日、道明寺・譽田・矢尾・若江に於て、敵味方入り亂れ、相戰ふ中にも、盛親は矢尾表に打つて出で、藤堂和泉守高虎と攻戰ふ。藤堂仁右衞門高刑・同新七吉勝・桑名彌次兵衞一孝・渡邊掃部・古田內藏介以下、究竟の士百廿一人・雜兵四百五十三人討取り、大きに利を得て、今は斯うと勇む所に、木村長門守は、井伊兵部少輔直孝と戰ひて討死せしかば、直孝が大勢橫合に懸りけるに、盛親終に打負け、大坂へぞ引取りける。翌七日、盛親京橋口を防ぎけるが、味方大きに敗れ、城中にも火の手擧りければ、今は防ぐとも叶ふまじとて、旗馬印を納めて、秀頼公の御行方を聞かんと志す所に、敵東西より亂れ入り、手の者共討たれ、或は敵に隔てられ、行方知らずなりければ、一先づ何方へも立忍び見んとて、八幡を

盛親捕はる

指して落ちらるゝ。相隨ふ者とては、中內惣右衞門・羽山左八郎唯二人ぞ隨ひける。斯る所に蜂須賀阿波守家政入道蓬庵は、兩將軍の御機嫌伺の爲に、長坂三郎左衞門を使者に遣しけるに、橋本の茶屋に至りて、三郎左衞門暫く休息して、若此邊に、落人と思しき人や坐すと尋ねけるに、主の老尼、さればとよ、不審なる者こそ候へ。いかさま忍ぶ人と覺えて、よな〳〵來り候て、竹流しの金子にて、食物を調へ歸り候。覺束なく存じて、跡を慕ひ見候へば、葭原の中へ行き候とぞ語りける。三郎左衞門悅び、店屋の主に案內させさせ、分入り搜ね求めける程に、盛親と惣右衞門主從二人、勞れ伏したるを尋出し、二人共に搦めける。左八郎は八幡の山上に、所緣の坊のありけるを尋ねて行く所に、所々の沙汰ありければ、道より立歸り、長坂に向ひて、自分繩をぞ懸りける。三郎左衞門伏見の御城に至り、本多佐渡守正信に屬して言上しければ、秀忠公御感ありて、黃金百兩、三郎左衞門に下し給はる。四人をば京都へ遣されければ、二條の御城に於て、板倉伊賀守して盛親に仰出されけるは、此度東國勢の內、何れか軍功勝れたるといはん。又大坂の敗績は、孰を先とせんと仰せられし

盛親討たる

かば、盛親申しけるは、東國には、井伊掃部頭を專一とせん。大坂の落城は、盛親に初まる。其仔細は、關東の先手は、藤堂和泉守・井伊掃部頭、大坂の先陣は、木村長門守と此盛親なり。長門守は掃部頭に向ひ、盛親は和泉守と屯す。天晴高虎を討つて、忠勤に備へんと思込みたる所に、長門守不意に討死して、掃部頭が軍兵、横合に懸りたるに、味方終に討負けぬ。一陣破れて、殘黨全き事なければ、大坂の敗軍は、此盛親第一なりと申しければ、大きに御感ありしとかや。扨五月十五日、四條河原にて誅せらる。行年四十一、法名蓮國一榮と號す。中內惣右衞門・羽山左八郎は死罪を赦され、二人共に法體して、惣右衞門は惣入、左八郎は休世と號す。盛親の弟右近は、加藤主計頭清正、父元親の親友たるに依つて、是を賴みて肥後國に居たりけるが、兄の科に依つて召捕られてぞ上りける。譜代の郞等小宮崎久兵衞といふ者只一人、召隨ひけるが、是も供して上りけり。伏見に着きしかば、頓て藤堂和泉を檢使として、切腹仰付けらる。久兵衞一所に切腹仕らんと望みけるを、高虎、いや〳〵御邊事は、上よりも仰なし。全く叶ふべからずと申されければ、久兵衞畏りて、右近は未だ人

の腹切りたるを見申されたる事候はねば、切腹のやうを存ぜられ候はず。其手本を見せ候べしといひもあへず、押肌脫ぎ腹十文字に搔破り、右近に向つて、かく切らせ給へと申しければ、右近打笑ひ、心得たりと、潔く腹をぞ切られける。嗚呼悲しきかな、秦能俊、土佐國長岡郡長宗我部を領して、長宗我部と稱してより、今盛親まで廿二代連續して、家門繁昌せしかば、武運長久にして、猶窮りなかるべきに、よしなき謀叛に再び與し、家を亡し身を失ひけるこそ悲しけれ。

長宗我部亡ぶ

盛親古き士の事

盛親先年、沈落の後は、新參外樣はいふに及ばず、譜代恩顧の者共と、或は四方を經廻して、主人を求むる者もあり、或は二君に仕へじとて、古江の片邊阿波・淡路・和泉・河內に立忍び、一日の飡を求むるもあり、緣に賴り便に隨ひ、心々になりにけり。桑名彌次兵衞・中島與市兵衞・吉田孫太夫・松田與左衞門は、藤堂和泉守高虎に仕へて、伊勢に居たり。吉田彌右衞門・其子三郎左衞門は、生駒讃岐守正俊に仕へ、讃州に住す。

豐永惣右衞門・吉田猪兵衞は、福島左衞門大夫に仕へて藝州にあり。斯る所に盛親、籠城の聞えありしかば、皆主君に暇を乞ひて、大坂へぞ參りける。中にも吉田猪兵衞は、折節在江戶にて居たりければ、直に大坂へ行きしかども、合戰の最中にて、城へ入るべき便なく、彼方此方としけるが、桑名彌次兵衞一孝が陣所へ立寄り、互に土佐國退散の後は、音問もなかりし事を語り、倶に淚をぞ流しける。猪兵衞申しけるは、我は左衞門大夫殿に奉公申して候へども、舊主と一所にて、いかにもならばやと存じ、暇を乞うて來り候へども、寄手堅うして城へ入り得ずと語りければ、彌次兵衞、足下籠城の志誠に至極に候。いかにもして城に入り、隨分忠勤致されよ。一孝も伴ひ度候へども、和泉守殿厚恩を蒙り候へば、只今籠城する上は、主君に弓を引く罪人なり。當主に忠を盡す時は、譜代相傳の主君に敵をなす。八逆罪の無道人なり。されば進退爰に極りて候。詮ずる所大勢の中へ駈入り、手を下さず討死して、當主に不忠をなさず、舊主に不義をなすべからず。思ひ定めて候ぞや。御邊達の手に掛け給はれ。今はの暇乞なりとて、互に盃差交し、淚乍らに別れけり。翌年矢尾の合戰に、

彌次兵衞眞先に進み奉る。盛親見給ひ、譜代の主に向つて弓を引く曲者、誰にてもあれ、彌次兵衞を討ちたらん者をば、一の高名にせんずるぞと宣へば、吉田中務・和食の輩は、桑名が一族なれば、他人の手には掛けさせじと駈向ふ。彌次兵衞只一文字に馳入るを、追取卷きて鎗玉にぞ上げたりける。彌次兵衞は鎗を直さず、脇目も遣はず討たれにけり。近藤長兵衞立寄り、桑名が首を取りて、盛親の一覽に備へけるに、忍びの紐を眞結びにして、其端を切つて捨てたり。吉田猪兵衞盛親の前に出でて、一孝が對面の時の事共申しければ、扨は討死と思ひ極めたるよな。不便の事なりと宣ひて、涙をぞ流されける。されば武士は、思出の詞をば、つがひ置くべき事ぞかし。中島與市兵衞も、高虎に仕へて居たりしが、大病に侵され、彌次兵衞と一所に出陣も叶はず、又暇を乞うて籠城もならず、軍散じて後病氣平癒しければ、口惜しき事に思ひ、暇を乞うて立退き。伯耆國に居たりしを、土佐國主忠義聞き給ひ、召出し知行給はりしが、幾程なく病死したりけるとかや。久萬豐後俊朝、是も高虎に仕へけるが、盛親籠城を聞きて、勢州を立去り大坂へ赴きける處に、重病に犯され日を經

る内に、大坂落城せしかば、口惜しき事に思ひ、自害してけり。行年十七歳とぞ聞えし。是は元親に仕へて軍功ありし久萬兵庫俊政が孫なり。吉田孫左衞門は、盛親歿落の後も、土佐國に居たりしを、山内一豐へ召出されし所に、去る浦戸一揆の大將なりと讒言ありて、既に誅せらるべきを、さまぐ〵陳じて死を遁れ、國を立退き大和國に居たりしが、舊主籠城を聞きて、急ぎ大坂へ立越えけり。童名右近といひしが、此度又右近とぞ名乘りける。黑岩治部左衞門・其子玄蕃・南部太郎左衞門・本山次郎左衞門も、一豐呼出し領知賜はり、家老山内備後が與力になし置かれけるが、四人とも偸に國を忍び出で、大坂へ上り籠城す。五百藏左馬進は、桑名太郎左衞門が二男藤次といひしを、豐後國にて討死したる左馬進が養子にして、娘を娶せ跡を繼がせて、左馬進とぞ名乘りける。盛親歿落の後は、紀州へ立退き、淺野紀伊守が家臣、淺野左衞門佐を賴みて居たりけるが、妻子をば田邊に捨置き、大坂へぞ籠りける。佐竹藏人・橫山九郎兵衞・細川源左衞門・執行太郎兵衞・十市新右衞門・中内源兵衞・吉田又左衞門・其子平左衞門・本山太郎右衞門・町三郎右衞門・山内三郎右衞門・和食惣右衞門・

吉田太郎右衞門・同治部・同權七・安田三河・同又左衞門・野中三郎左衞門・近藤七兵衞・北村太郎左衞門・同太郎左衞門・奧宮仁右衞門・明神忠右衞門・久萬六兵衞、是等は皆二君に仕へじとて、土佐・阿波・和泉・紀伊國の片端に住居しければ、皆大坂の城へぞ籠りける。爰に哀れなりしは、安田又左衞門が妻女なり。昔は安藝郡安田の城主なりしが、今は引替へて、奈半利の山陰に忍びてぞ居たりける。夫は大坂にて籠城しぬと聞えければ、一所に兎にも角にもならばやと、四歳になる男子の手を引き、二歳になる女子を抱き、大坂へぞ上りける。折節風惡くて、阿州椿泊に船懸りして、數日を經る所に、早船來りて、大坂落城、秀賴公を初め城中の士、一人も殘らず討死せる由聞えけるを、彼女房聞きて船底に倒れ伏し、悶え焦れ歎きけるが、守刀にて二人の子を刺殺し、我も自害して失せにけり。奈半利の住人近藤三休も、籠城の聞えありしかば、國人彼妻子を捕へて禁獄す。幡多郡伊與野の庄屋右京介一族を引具し、船に取乘り忍び行くを、所の者共見咎めて搦捕りぬ。其外土佐の住人共、舟にて大坂へ行くもあり、山林嶮岨を淩いで行くもあり、父母妻子を捨て、義を守りける者共

なれば、大坂にての働に、不覺を取るはなかりけり。中にも松田與左衞門は、藤堂仁右衞門を討取り、近藤長兵衞は、桑名彌次兵衞が首を取り、吉田三郎右衞門は、古田内藏助を討つ。其外首六つ取りけるが、翌日三郎右衞門討死す。明神忠右衞門は、山田三郎右衞門を討取り、吉田又左衞門は、矢尾にて首七つ、翌日京橋口にて、首五つ取りけるが、深手負うて陣中に臥しけるを、一族共助けて、阿州へ下りけるとかや。佐竹藏人・横山九郎兵衞・本山太郎右衞門・安田三河・同又左衞門・北村太郎右衞門・同太郎兵衞・五百藏左馬進・吉田彌右衞門・其子三郎左衞門、勇を振ひ枕を並べて討死す。此外高名戰死の輩、一々記すに遑なし。彼盛親は、國政をも心に懸け、智勇もありしが、一日の命を捨兼ね死地を遁れ、賤しき奴原の手に渡り、縲目の恥に及びける事、此人常の行跡と、矢尾合戰の働を聞く時は、夫程の不覺人とも見えず、いか樣にも因果のなす所にやあるならんと、思ふに付けて案ずれば、久武內藏助といふ大惡人、盛親を立て、己が威を恣にせんが爲に、蓮池左京進・比江山掃部助以下を讒言し、津野孫次郎に詰腹切らせぬ。是盛親の思慮所爲にあらずといへども、皆是盛親を立

てんが爲にする所なれば、積惡の餘殃身に積り、其罪一人に歸して武運薄く、生き乍ら捕はれ、白晝に誅せられ給ひけん、痛はしかりし事共なり。

高智山の事

山内對馬守一豐は、慶長五年の冬、土佐國を拜領して入部の爲め、大坂出船、紀州由良にて越年あり。翌年正月二日、土佐國甲浦へ着岸し、夫より陸路を經て、同八日に、浦戶の城に入り給ふが、いかなる遠慮や坐しけん、大高坂山の古城を改めて移らるべしとて、同年の秋より普請初まり、同八年の秋成就して、浦戶より移徙あり。雪蹊寺の月峯和尙、大高坂を改めて、河中山と號す。東西南北皆大河なれば、四方に堤防をなし、淵を埋め地をいやして、平々浩々たる城地となる。民家軒を並べ、昔のかこが淵・太郎が淵・鱸岩はいつちなるらん、今は名をだに知る人なし。浦戶より二里の入海にて、船の往來自由なり。元より山林海岸近ければ、魚鳥菜果は充滿し、竹木米穀豐饒にて、上下萬歲をぞ唱へける。其さき長宗我部の家臣吉田備中入道周孝は、

井口の城主なりしが、大高坂山の南の麓に營を構へ、老後の隱居所として、常に爰に住居す。周孝が嫡子次郎左衛門常に申しけるは、此山必ず國主の居城となり、一國の府として繁昌すべしといひけるが、果して元親も、一度岡豊より此地に移り、一兩年ありて浦戸へ移り給ひしが、今又一豊居城とし給ひ、國府となるこそ不思議なれ。彼次郎左衛門は、天文に長じ能書にして、博才の者なり。大高坂より十七八町東に、國澤の土居あり。是を黠じて要法寺を建てられ、先祖代々の御願を備へ、每月の祭奠怠慢なし。去程に民家次第に繁昌して、上下九年の蓄をなす。然るに一つの難儀あり、洪水度々出でて四方の堤を崩し、城下の町へ押入る。貴賤是をぞ悲しみける。是直事にあらず、併河中といひ、名によるものならん。其上河中の河の字、濁りて唱も惡ければとて、五臺山竹林寺の住持空鏡上人に仰せて、河中山を改めて、高智山とぞ號しける。高智とは、大聖文珠の淨土を申すとかや。抑城地を、何故佛土に比しけるぞと、其意を尋ぬれば、此城より一里計り東に山あり。五臺山金色院竹林寺と號す。文珠大士應現の靈區、行基菩薩草創の勝壤なり。昔聖武皇帝御夢に、大唐の

五臺山に至り、文珠菩薩を拜し、三解脱の法門を受くと御覽ぜられ、叡感斜ならず、行基菩薩に御夢の事を告げて、本朝に於て、震旦の五臺山に似たる靈地あらば、彼山に準へ、伽藍を建立すべしと詔し給ふ。時に行基奏して曰、臣僧遍く諸州を行化し候に、土州長岡郡に、奇異の靈島あり、其形震旦の五臺山に異ならず、五峰高く聳えて、文珠の頂に、五髻あるに似たり。三池深く湛へて、三解院の法門を示すが如し。古老傳へて、金輪際より一夜に涌出せり。故に此土地震動搖せずといへり。しかのみならず奇光靈瑞勝げて計り難し。誠に文珠大聖の淨土なるべしと奏し給へば、天皇叡聞あり、頓て行基に勅して、神龜元年甲子に、伽藍を營興せしめ給ふ。行基赤栴檀の御衣木を以て、自ら千珠の尊像を作らんと誓ひて、先づ修法持念する事一七日、既に滿ずる時に至り、明星壇上に降り、化僧忽然と來りて力を戮せ、相共に坐像一軀を彫刻して、先に降る所の明星の、像内に納め畢りて、化僧忽に光を放ち、天に昇り立ちぬ。彼像則開帳ありて、千年に一度開帳すべしと誓ひ給へば、再び尊像を拜する者なし。又行基、像木の餘材を以て、本堂の中庭に梓し、誓つて曰、若し此山佛法興

隆せば、宜しく枝葉を生ずべしとあり。果して一株の櫻と化し、春毎に根より花開く。此故に呼びて根櫻といふ。其後弘法大師當山に至り、五峯を五鈷に配し、三池を三鈷に擬し、又獨鈷杵を抛ちては、岩裂け水涌き出でたり。名付けて獨鈷水といふ。大師暫く爰に住し給ふ故に、中興の祖と崇むるなり。爾來四國巡禮の禮所となり、六十六部の納經所として、道俗歩みを運ぶなり。されば此城地も、文珠擁護の地と稱して、高智山と名付けたり。其故にや、國富み民豐にして、山内の家運長久にして、子孫繁昌窮りなく、松平の御姓を給はり、萬歳の緑絶えず、千秋の色とこしなへにして、盡きせぬ國とぞなりにける。

土佐物語卷第十九終

土佐物語巻第二十

長宗我部先祖の事異説

長宗我部氏先祖

土佐國長宗我部宮內少輔元親といふ人、武勇智謀世に類なうして、纔なる家より起りて四國を伐取り、天下に武名を顯す。其大底を記す。其先祖を尋ぬるに、天智天皇の御宇、百濟國昌成皇三使を以て、種々の寶を日本へ渡す。百濟國、日本屬國なり。彼三使の內長宗我部といふ人日本に留りて、鎌足大臣へ仕へ奉る。信州にて領地を給はり、代々長宗我部を氏とし、公家に勤仕して、秦といふ姓を給はる。應永の頃、長宗我部元勝といふ人、武者修行を心にかけ、故鄉を立出づる。久武・中內といふ士二人・下人四五人連れて、西國を志して上り、勢州桑名に着きて一夜の宿をかる。亭主出でて、旅人は何れの國より、何處へ御通あるぞと問ふ。元勝、我は信州の者なり。

武者修行となりければ、何れの國へと志す所もなしとありければ、亭主、夫こそ望む所なれ。我等も御供申すべし。これに一兩日逗留して給はれといふ。元勝聞召し、是は思ひも寄らぬ事かな。家居もよく、此所に有付く人なれば羨まし。我は世に住詫びて修行に出で、何れの國にも能き事あらば、有付くべき爲なり。其方修行といふ事勿體なしとありければ、亭主の曰、我等も先祖は武士なり。桑名に在宅、曾て本望にあらず。いかなる緣もあらば、修行せんと年頃の心懸なり。殿の體見所あり。是非御供と申す。久武・中内も、我等は此殿の普代の者なれば是非なきぞ。其方御供望ならば、來年西國より文を進らせん、其時下り給ふべく候。只今は無用と留むれども、亭主聞入れず、親類朋友方へ人を遣し呼寄せ、此殿の御供して出づるぞ。若し何れの國にも有付かば、文を上すべし。討死せば、先世の約束ならんといひて、酒肴取出し暇乞をする。親類朋友、生きて別れとなると歎き悲しむ。元勝、此亭主、召さるゝ事を迷惑に思召せども、亭主心強く、親類朋友振捨てゝ、澁紙包肩にかけ、長宗我部の供して桑名を立出づる。桑名の先祖是なり。京に暫く逗留して、寺々社々參

長宗我部元勝岡豐に居城

詣し西國へ出づ。其頃紀州亂世と聞きて、紀州の軍を見べしとて下り、年中逗留して、和歌の浦より船に乘り、土佐の國へ渡る。其頃土佐の國は、細川守護なれども、其威輕く下知に隨はず。國士に吉良・大平・本山といふ人あれども、領內の外は用ひず。是により長岡郡廿枝江村鄕の庄司此人を見て、此所の守護に仰ぎ奉るべし。是非逗留あれとて留め、岡豐の古城を拵へ、長宗我部宮內少輔元勝といふ。久武・中內・桑名三人の家老は、修行の供にて下りし人なり。此元勝より元親迄、十九代土佐に住す。又百濟國より渡りし先祖元親迄卅六代と語り傳はる。又一說に、百濟國より三使の內、長といふ人此國に留まり、公家に奉公の人たり。其臣下久武といふは、元弘の時、一の宮の臣下奏武文・久武とて、二人の臣下たりしが、一の宮、越前金が崎の城にて自害の後、浪人して長の臣下となり、中內は根本土州の者なり。是も浪人して長の臣下となる。此中內、案內者として土佐へ下り、宗我部といふ所に居住して、長宗我部と氏を改め、其身武勇の人たるにより、岡豐の古城へ入城して、廿枝江村の鄕を領すといへり。此家の系圖失却して見えざる故、古老の口說を記すのみ。

土佐國守護の事幷傳記

土佐七郡

長宗我部四家老一條殿衆

守護七人

國士

土佐七郡と申すは、幡多・高岡・吾川・土佐・長岡・香々美・安喜七郡なり。是に御所一人・守護七人あり。御所一人と申すは、一條殿をいふ。系圖左に記す。幡多郡一萬六千貫の主にて、中村に在城なり。此御一門といふは、東小路・西小路・入江・飛鳥井・白河なり。家老に土居・羽生・爲松・安並の四人なり。時に大岐・加久見・立石・江口・橋本・山路・上山・和田・鷄冠木・三上・米津・梅青軒・都築・快辯・蜷川・大和田・平田・伊與木・奈良・荒川・森澤・國見・入野・竹田・秋田・蕨岡・波毛・佐賀・宿毛・下野・加江・依岡・小島・若藤・敷地・入田・栗本・長崎・佐田・本井・津の川・下山・勝間・鵜野江・高瀬・蓼の川・鹽塚・盥川・惡瀬・楠村、以上五十三人は、一條殿衆なり。守護七人といふは、本山・安喜・大平・山本・津野・吉良・長宗我部是七人なり。皆三千貫の主なり。又森・國澤・千屋・改田此四人、守護に續き二千貫の主なり。國士に香宗我部・片岡・中村・尾川・枝川・三の宮・能津・大高坂・津野・吉松・大黑・野中谷・姫倉・横山・稻毛・久萬・小野・國吉・馬場・五百藏・萩野・甫喜山・伊尾喜・山

仁井田五人衆

川・安田・北の川・室津・在井・和食・奈半利・北村・賀江・佐竹・秦泉寺・十市・地下田・廣井・執行・西和田・上村・野田・豊永。又仁井田五人衆といふは、志和・西原・窪川・東西なり。以上廿人なり。

土佐一條系圖

土佐一條殿系圖

房家　權大納言正二位妙花寺關白教房公の二男。天文八年六十六歲薨す。藤林寺殿東于居士と號。

房冬　中納言左大將正二位。天文十四年薨。歲十四。法名圓明院殿明叟圓公大居士と號。又說、新三品内大臣なり。

房基　左中將阿波守。又說、正三位中將。天文十八年薨、歲廿八。法名前光壽寺殿香齋桃花大禪と號。

兼定（後改二康政一）　中納言從四品。天正元年出家、歲廿一。是を家門と號。此時長宗我部元親出で家老と談じて土佐國を追出す。若君内政を元親聟にして、大津の城に置き、大津の御所と號。法名自得宗性といふ。

内政　左中將父兼定を追出して、此人を御所へ取立つる。男子一人あり。元親女の腹なり。其後内政なも土佐を追出し、伊豫へ牢人して此程逝去あり。毒を參らせたるといふ。法名天叟院殿守有居士と號。

若君（號二右衛門佐親政一）　母は元親女なり。内政追出して此子を取立つべきと、久禮田定祐に預け守護す。是御所二代の憤を存じ、久禮田の御所と稱し、土佐沒落の時大和國へ退き給ひ、京の一條殿を賴み御座あるとぞ。

抑光明峯寺道家公と申すは、九條殿にてあり。道家公二男實經公より分れて一條家といふ。實經より十代、妙花寺殿敎房公の二男房家公、土佐國へ下向ありて、土佐一

條殿と申し、國司に備はれり。土佐國士は、此御所の下知に附く。此房家の嫡男房通と號す。京の一條殿冬良薨じて男子なし。故に房通を養子として、京の一條殿家を繼ぐ。

文明二年庚寅十二月廿七日仙洞崩御なりて、御土御門院と申す。此時の關白、一條左大臣敎房公なり。此頃世上大亂といひ、又天下諒闇なるにより、奈良の故郷へ下向あり。嫡子依爲と申すは、兵庫へ御下向ありて、常の御裝束直衣狩衣して、優に艶しき御姿なるを、情も知らぬ田舍人赤松下野守が兵、鑓にて突き、少しも御身を働かさず。極樂世界阿彌陀佛を唱へ給ひて、朝の露と消え給ふ。太閤奈良にて聞召して、御悲中々文章をなすとも、鳳凰の毛も及び難く、鸚鵡の舌も宣べ難かるべし。餘りの悲しさに、

迚も死す命をいかで武士の家に生れぬ事ぞくやしき

其御弟房家は、土佐の幡多へ下向あり、左遷遠流などとこそ聞きも及ぶ事なるに、自ら住みうかれさせ給ひて、御心ならずも御下向、さこそと思ひ申されて哀なり。公

卿殿上人嚴子陵が釣臺も、脚を伸ぶるに水冷し。鄭太尉が幽棲も、薪を擔ふに山嶮し。一業所感の時節に生れ來て、憂目に逢ふと、歎かぬ人もなし。天下の亂靜まり、其後將軍義政へ御訴訟ありて、土佐の國司を望み給へば、頓て叡聞に達し、土佐の國司の宣下を下され、土佐の國士へ、將軍御敎書をなされければ、國士七人の守護是を見て、一條殿を主君と崇め奉り、幡多郡中村といふ所に、古城を取立て移し奉る。守護國士在中村して、一條殿へ仕へ奉る。家老土居・羽生・爲松・安並の四人、國士を崇め其身謙退し、禮を厚くすれば、國自ら治まり、國中の士の元服には、一條殿御前にて仕る。今兼定公迄、其禮法嚴重なりしが、天正元年御隱居ありて、土佐一條斷絕しぬ。

土佐國七人守護傳記大略

●山田治部少輔大中臣元義

香美郡山田郡三千貫を領して、楠目の城に居す。先祖不詳。天文十二年の秋長宗我部國親と戰つて利を失ひ、城を落ちて、南岡左衞門大夫に所緣ありて是を賴み、降參助命す。後年亂氣して程なく死し家斷絕す。元義元祖を下總

守元道と號すと云々。

●大平山城守

高岡郡四千貫を領して蓮池城に居す。先祖不詳。弘治二年四月一條兼定卿と戰つて打負け、城を明けて落失す。

●吉良駿河守源

吾川郡弘岡鄕吉良の城に住す。源賴朝の弟希義、土佐へ流されて吉良に住し、吉良の冠者と稱す。其一子八郎終に吉良の城主となり、五千貫を領す。夫より子孫相續して駿河守まで十五代と申傳ふ。天文年中本山茂辰が爲に討たれて家斷絕す。

●安藝備後守蘇我國虎　安藝郡安藝の城主、三千貫を領。

蘇我赤兄の末裔、安藝太郎が後胤なり。一條兼定卿の娘と嫁。永祿二年元親に攻落され、淨土寺に入りて自害。

─千壽丸

國虎歿落の節、城を出でて阿州へ走り、三好長治家臣天野備後を賴みて居住す。後年備後養子聟となる。矢野又六郞と號す。

女子

家臣黑岩越前、中村へ送屆、一條殿へ渡す。

●津野刑部在原元實　高岡郡津野五千貫を領して須崎の城に住す。

阿保親王の曾孫越中守在原經高、土佐國に來りて住居す。五代の孫彌四郞高行、津野庄一圓に領す。高行より元實まで十三代なり。同郡岩戶村の城主福井玄蕃頭と戰つて討死。

國泰　孫次郞

父元實討死の時僅に二歲なり。家臣抱きて葉山の城に入る。其後一條殿より津野本領返し給はつて還住す。

基高　孫次郞　―　定勝　孫次郞　―　勝興　孫太郞

長宗我部元親の三男親忠を養子聟として家を讓る

● 本山左近大夫源茂宗 本名八木

淸和源氏の庶流たり。先祖不詳。土佐·吾川兩郡を攻取り威を振ふ。後年法體して梅慶と號し、土佐郡朝倉重松の古城に住す。

茂辰 式部少輔 長宗我部國親の娘と嫁

弘岡の吉良駿河守を討ちて吉良の城に住す。吉良式部少輔と名乘る。本山の城には叔父佐渡守を入置く。後年朝倉の城に於て元親と戰つて大に破れ城を開く。本山に籠ると雖不叶、終に阿州へ出奔して三吉長治を賴みて住居する所に、家臣の爲に毒害にあひて死す。

親茂 將監

天正十四年十二月豐後國戸次川合戰に討死

茂兼 內記

吉良左京進に預けらる

茂直 又四郎

西和田越後聟として名跡を續ぎ、西和田勝兵衛と號す。

右三人は元親姊の腹に出生して甥なり。母に隨つて岡豐に來り、後に三人

共長宗我部家臣となる。

●秦能俊（秦川勝廿五世孫也）

初め土佐國長岡郡三千貫を領す。宗我部村岡豊山に城を築きて長宗我部と名乘り、子孫代々爰に住す。

俊宗―忠俊―重氏―氏幸―滿幸

兼光―重俊―重高―重家―信能

兼能―兼綱―能重―元親（備前守）―文兼（兵部丞）

元門―雄親（實は元門弟）―兼序（將監）

永正六年本山・大平・山田・吉良等が爲に岡豊の城を攻落され自害。謚覺學常通。

國親（千翁丸　信濃守）

父自害の時僅に六歳なり。家臣近藤某懷いて中村に走り一條敎房公へ

奉る。爰にて成長して、十三歳の時、敎房公の拔計により再び本領安堵し、永正十三年岡豊の城に還住す。後年薙髪して覺世と號す。永祿三年六月十五日卒行年五十七。鎌序寺に葬る。謚瑞應覺世居士。

女子

母懷きて大忍の庄池の某所へ落ちて隱れ住む。後に吉田備後守周孝妻となりて男子二人生。

國康

父自害の時母の體内にあり、月を經て大忍の庄にて生る。

親武

長宗我部右兵衞、後に戸波右兵衞と號す。

親興

比江山掃頭と號す。天正十六年十月四日久武内藏介親信が讒言に依つて切腹す。

－元親　彌三郎　宮內少輔　土佐守　從四位侍從　正四位少將

十八歲にて父の家督を續ぎ、四國を平呑して武名世に鳴る。齋藤豐後守吉政が娘に嫁す。居城を土佐郡浦戶に移す。後年太閤秀吉公へ降參し、阿讚豫の三國を差上げ土佐一國を給ふ。慶長四年五月十九日於二京都一卒行年六十一。葬二大龍寺一謚雪蹊恕三。

－親貞　長宗我部左京進

永祿六年吉良式部少輔茂辰殁落の後、吉良の城主となりて、吉良左京進と稱す。

－親泰　內記

香美郡香宗の城主香宗我部出羽守源秀義養子聟となりて三千貫を領す。香宗我部左近大夫と名乘る。其後安藝國虎敗亡の時、安藝の城に移りて香宗我部安藝守と稱す。

－某　島彌九郎

數年多病なり。療養の爲に京都へ赴く所に、阿州奈佐の湊にて、海部越前守が爲に討たる。

┣女子　本山式部少輔茂辰妻。是は元親姉なり。

┣女子　波川城主波川玄蕃妻、男子四人あり。

┗女子　栗山城主池市正頼定妻。

┣眞西堂宗安寺の住持妾腹なり。

天正十六年親實一同に切腹。

┣親實

元親の娘と嫁す。高岡郡蓮池の城に住す。蓮池左京進と號す。又此所大平氏代々の城地なればとて、大平左京進とも稱す。天正十六年十月久武内藏介親信が讒言に依つて切腹、行年廿九。其靈魂怨をなすにより神に祭り、木塚明神といふ。

┗某吉良播磨守

―女子　天正十四年十二月十二日豐後國戶次川合戰に討死。柄杉田の城主大黑主計妻。

―女子　一條內政卿室。

―信親　彌三郞　織田信長公より信の一字を賜ふ。天正十四年十二月十二日豐後國戶次川に於て島津義久と戰ひ、勇を振つて討死。行年廿二。謚天甫常舜。

―女子　吉良左京進親實妻。

―親和　讃岐國天霧城主香河民部少輔養子聟として、香合五郞次郞と名乘り、後年太閤秀吉公より、民部少輔改易ありしにより、土州へ歸住。小野といふ所に閉居して卒す。

―親忠　津野孫太郞養子聟として、津野孫次郞と號す。慶長五年久武親信が爲に、岩村の吉祥寺にて詰腹を切らせらる。行年廿九。謚毅山寺雪庭宗箏。

├女　子　佐竹藏人妻。

├盛　親　千熊丸、增田右衞門烏帽子にして、右衞門太郎と號す。

父の家嫡となりて、土佐守任四位侍從。慶長五年石田三成が反逆に與し

關ヶ原の一戰に打負け、土佐國召放され、浪人して名を遊夢と付け、法體

して京都に居住す。同十九年秀賴公に隨ひ大坂に籠城して宮内少輔と

名乘り、翌年五月一日の合戰に、矢尾表にて利を失ひ、八幡に落行き搦捕

られ、五月十五日に四條河原にて誅せらる。行年四十一。

├女　子　吉松十右衞門妻。

是まで八人は、齋藤吉政が娘の腹なり。

├某　右近大夫。母は小少將といふ。

兄盛親改易の時、加藤主計頭淸正を賴みて肥後國に居たりしが、盛親討

罰の時召捕られ、伏見に於て切腹。

├女　子　小宰相と號す。右近大夫と一腹なり。

一女子　盛親妻。後年京都に上つて死す。

長宗我部家臣諸大名へ被レ抱候面々の有増（あらまし）　次第不同

細川肥後守家中

千五百石　立石助兵衞　六百石　同子二人　三百石　久武權助

三百石　町　市之丞　四百石　町熊之助　百　石　町　太助

百五十石　山内三太夫

立花左近家中　松平丹後守家中

三百石　上野平太夫　三百石　十市惣右衞門

松平長門守家中　松平安藝守家中

三百石　吉松伊兵衞　三百卅石　豐永四郎左衞門

紀伊大納言殿　保科肥後守家中

二千石　十市縫殿助　二百五十石　吉田次郎左衞門

水野日向守家中

百五十石　山地與助

松平下總守家中

百五十石　吉田庄助

藤堂大學頭家中

二千石　桑名彌次兵衞

三百石　桑名源兵衞

百五十石　依岡三平

百五十石　淺木兵太夫

百五十石　吉田三郎兵衞

六百石　齋藤茂左衞門

二百石　安並忠兵衞

百五十石　中尾安左衞門

稻葉美濃守家中

五百石　橋山又助

三百石　桑名茂兵衞

三百石　桑名又右衞門

百五十石　桑名七郎左衞門

二百石　淺木三郎左衞門

百五十石　中內彌左衞門

百五十石　戶波又兵衞

百五十石　入交助兵衞

二百石　山內又左衞門

二千石　吉田式部

二百石　入交宗右衛門　　七百石　押川玄蕃
千五百石　宿毛甚左衛門
堀田上野守家中
二千石　香宗我部左近　　八百石　豐永藤兵衛
五百石　町源右衛門　　五百石　國吉五左衛門
百五十石　國吉十太夫　　三百石　堀部五郎太夫
三百石　三宮十助　　二百石　奧宮太左衛門
二百石　吉田彌右衛門　　五百石　北代助兵衛
二百石　福原茂左衛門　　三百石　本山新右衛門
百五十石　本山五郎太夫　　二百石　黑岩安太夫
二百石　石川彌兵衛
松平陸奥守家中
三千石　柴田忠次郎　　四千石　草野藏人

森內記家中

千五百石　近藤長兵衛　　三百石　近藤三郎次郎

松平出羽守家中

百五十石　近藤權左衛門　　千石　柿八兵衛

小出大和守家中

三百石　片岡權左衛門　　三百石　八木彌五左衛門

千二百石　松下內匠助　　四百石　中內惣右衛門

五百石　山川五郎左衛門

松平相模守家中　　松平隱岐守家中

二百石　近澤將監　　三百石　野田源兵衛

山田豐前守家中

二百石　津野九郎左衛門　　百石　本山伊兵衛

內田久太郎家中

三百五十石　中西八兵衛

御旗本

三千石　齋藤與惣右衛門　　五千石　齋藤攝津守

千　石　蜷川木工左衛門

松平對馬守家中

二百石　石川彦右衛門　　三百石　金子傳十郎

二百廿石　町市左衛門　　三百石　町　孫兵衛

四百石　高島孫右衛門　　三百石　中山覺之丞

二百四十石西山七郎右衛門　　百　石　森下七右衛門

百　石　安養寺　久兵衛　　二百石　志和久之丞

二百石　横田助右衛門　　百　石　横田平太夫

百　石　黑野茂左衛門

山内修理亮家中

百卅石　井石源左衞門
二百石　近澤仁兵衞
百　石　尾崎傳兵衞
百五十石　横田市之丞
四百石　前野彌五兵衞

松平對馬守家老
深尾出羽家來

二百石　近澤十右衞門
百五十石　野部又兵衞
三百卅石　野田太兵衞

同
山川下總家來

百廿石　本山新右衞門

同
山内伊賀家來

二百石　田中忠兵衞
百卅石　片山五郎左衞門
百五十石　苅谷五郎兵衞
三百石　尾崎釆女
二百石　千尾新之丞

百　石　岩神平左衞門
百　石　片岡長右衞門

同
深尾主水家來

百卅石　佐藤甚左衞門

同
野中主計家來

百　石　辻　新之丞　　百　石　千頭市左衛門

都合百三人

長宗我部家古き物語共

一、幡多郡一條殿落去の事、一説に、兼定公、天正元年八月、御歳卅一にて法體あり。豐後大友方へ所緣に付きて、送り奉る。其仔細を尋ぬるに、土佐七郡を、六郡は元親切取り、幡多郡計なれば、一條殿家に、色々樣々雜説ありて、諸士心々になる。されど共家老土居宗三〔算カ〕とて、武勇智謀人に勝れし者あり。此人存生の内は、元親幡多郡手指す事もなるまじと人々思ふ。元親も宗三を殺さん謀を廻され、宗三方へ數通の文を遣し音物を送り、親しき朋友と人の思ふやうに見せ、或時宗三と元親言合せ、謀叛用意の文を落し給ふ。一條殿是を御覽じ、御運の末にや、誠と心得られ、宗三を召寄せ手討にし給ふ。依て家中は勿論、國士城持人を疑ひ、虚病を構へ出仕を止むる人多し。家中騷動せり。元親是を聞き給ひて、手を汚さず幡多

郡を取りたりと悦びて、一條殿の家老幷國士卅六人の城持へ申さるゝは、一條殿は我等の先祖御取立の筋なれば、主君と存ずる處に、當代となり、某安喜と取合の時、人數御加勢ありて某迷惑に及ぶ。其後津野との取合にも、又加勢をなされ候へども、兩度共に某天運に叶ひて勝利を得候。斯樣に某を御惡みあれども、一條の御家は、忽に不ㇾ存候間、家老中國士の分別により、若君の御後見を仕られよと申遣されける。依つて一條殿を御隱居せさせ豐後へ送り、若君內政を、元親の後見にて取立て申さるゝに付きて、幡多郡始めて元親の支配になりて治まる。一年過ぎて家老共と國士出入出來、合戰に及ぶ。此節元親より、幡多郡の士中へ申渡され、其郡亂れたる所に、若君御座候儀然るべからず。大津の城へ移し、元親婿にし奉るべしとありて、若君を長岡郡大津の城へ入れ奉り、元親の息女輿入なり。一條殿御居城へ、平人恐なりとて、吉良左京を計り登城せらる。

一、信長公へ、元親申通ぜらるゝの儀は、明智日向守家來齋藤內藏介は、元親爲には小舅なり。明智取合せを以て、嫡子彌三郎實名の御契約を致し、信親と申す。此

由緒を以て、四國の儀は、元親手柄次第切取り候へと、御朱印を下さる。然る所其後元親儀を、或人申入れらるゝは、元親は四國に並なき弓取と申候。今の分に切取り申すに於ては、連々天下の仇にも罷成るべく候。阿州・讃州手に入り候て、淡州へも手遣仕るべき事程は、御座あるまじき抔と申上ぐ。信長實にもとや思召しけん、其後御朱印の面違却ありて、豫州・讃州迄表申、阿波南郡半國に相添へ遣さるべしと仰出さる。元親四國の儀は、某手柄を以て切取り申すに付、更に信長卿の御恩義たるべからず。存の外なる仰、驚入候とて、一圓御請無之。又重ねて明智より齋藤内藏介・兄石谷兵部少輔を使者に越され、是にも返事申切らるゝなり。夫に就き四國への手遣火急に御沙汰あり、信長卿御息三七殿、四國大將として泉州岸和田迄出陣ある所に、齋藤内藏介は、四國の事を氣遣に存ずるに依つて、明智謀叛の事彌差急ぎ、既に六月二日信長卿御切腹なり。依つて四國別儀なし。

一、天正十三年五月、太閤秀吉公より元親へ仰下さるゝ趣、阿波・土佐を知行し、讃岐・伊豫を差上げらるべきの旨御使なり。元親は、伊豫一國差上ぐべしとの返事な

り。秀吉公聞召し、其儀ならば退治せよとて、四國陣發ると云々。

一、元親、秀吉公へ降參し、初めて上洛御目見の時、勝手にて笑聲高し。禮式相濟みて退出の後、秀吉公、御近習の士を召して、先程元親禮の刻、勝手にて高笑あり。如何樣の儀と御尋あり。答へて申上ぐるは、元親は天下に望ある者なりと申候が、先刻御禮申上ぐる時、さして頭をも下げず、御前を暫く見申候。武篇は兎もあれ、御禮の作法可笑しき儀なり。流石田舍侍かなと、何れも笑ひ候由申上ぐ。秀吉聞召され、皆共の存分と元親が志、雲泥遙に相違せり。いかにといふ、某が面體を能く見覺え、自然の時見違ふまじきと存じ、某を眼も引かず、つく〴〵と暫く守り居たり。思寄は、元親は恐しき志のある者なりと、仰せられしとかや。

一、豐後國戸次川合戰に、長宗我部彌三郎討死あり。其御褒美に、秀吉公より、大隅國を元親に給ふ由御朱印を下さるゝ處、其後石田治部少輔を以て、大隅國差上ぐる由言上す。秀吉公、土佐より海上隔たる故か。さあらば餘國を下さるべしとの御内意あり。元親涙を流し、有難き儀なれども、歲も寄り、國の制法なり難きなり。

他國の望毛頭なし。大隅差上げたしと申されければ、石田此由を言上す。秀吉公御感あり、天正十六年聚樂行幸の時、日本諸大名昇進あり。此節元親も少將に任ぜられ、羽柴の氏を賜ふ由。

一元親、土佐國幡多郡巡見の節、入野村私曰、有井川村カにて、所の老人を召出し、一宮の舊跡尋ね問ひ給ふ。老人答へて、あれに見ゆる高き松の下に、有井の庄司が墓所とて、五倫御座候。宮の御所は、是より北一里半計り、奥山に米原村と申す在所の、谷間の少し小高なる所にて候。此所古獵師計りにて、都人を見たる事なければ、恐れて參る者もなし。一の宮御心細く思召し、此邊に武士はなきかと御尋あれば、是より二里計南に大平といふ守護の住み給ふと申す。此武士を賴まんと御歌を下さる。

　　土佐の海身は浮草の流れきて寄邊なき身をあはれともとへ

大平返し、

　　哀れともいかで仰がむ及びなき土佐の入江の藻隱れに居て

斯様に詠返し給ふと承る。又宮の御所跡に、大なる松二本あり。此方を御門の由

申傳へ候。今も恐れて、土民上る事候はず。此先に待王坂と申す所は、一宮此所へ御着船の時、有井庄司が相待坂と申候。今はまつを坂と唱へ候など、委しく申上げしかば、大に感じ給ひけるとぞ。

知行千貫の辨

中古地方の知行を計るに、百貫千貫といふ數目あり。今も仙臺には、其數名ありといふ。此數、西國にては明に知る人なし。武家系圖、相模入道平高時の下に曰、領知廿八萬七千貫、當代知行百四十三萬五千石、是田五段を一貫としたるものなり。又或人、奥の人に聞きたるとて語りけるは、永樂錢十文に、古へ米四合八勺を賣る。故に百文は四升八合、一貫は四斗八升、百貫は四十八石に當る。然れば知行百貫といふは、今の知行百石と同じ。後世家によりて、知行を藏米にして遣すに、四つ八分の免ならしとて、米四十八石と名づけて遣すは、此古法なり。今按ずるに、土州は然らず。我友人、古證を以て之を決して曰、土佐國幡多郡中村郷不破村八幡宮寶藏に、一

條家の古文書あり。曰く、

於本鄕中村
八幡江新御寄進田之事

中ノ前田
一所壹貫　有間之内 光任小作 彌五郎

ハシラ松
一ヽ壹貫分　目黑之内 泉（蠹損）

大ホトケ
一ヽ七百五十分　藏橋分

ミゾノ下
一ヽ貳百五十分　立石分

合參貫分宛

永祿二年己未三月吉日　康政㊞

右の文書を以て、今八幡の地領の土地を、改めて考ふるに、田一步を一文とし、百步を百文、千步を一貫としたるものなり。是錢千文を一貫とするが如し。然れば一貫は三段三畝十步なり。百貫は十萬步。今の法にして卅三町三段三畝十步、知行三百

卅三石三斗三升三合とすべし。（但し一反を以て一石とす。）恐らくは關東の法も此の如くならんか。一條殿を、幡多郡一萬六千貫の主といひ傳ふ。是を右の法にして見る時、五萬三千三百石餘なり。今幡多一郡の高、元親以後の改出と、開發新田等を加へて七萬石餘あり。然れば往古幡多郡一萬六千貫といふも、大概此法に相違なき歟。

室戸堀湊の記

土州安藝郡津呂崎は、往古より難海にして、船の煩多し。國主松平土佐守忠義、是を愁へ給ひ、老臣田中傳右衛門に命じて是を計らしめ、寛文元年室戸に湊を掘りて、廻船の便とす。家臣安積次郎作・野村甚兵衛・衣斐金左衛門等是を奉行す。功成りて後、山崎安齋をして其事を記せしめ給ふ。

室戸湊之記

坎者、地中容天氣之象、而天一之謂也。天運不已故水流不窮。包絡天地之間、無物不有。人不能一日因之不生而或嬰害。昔聖人取象於渙以來、茫焉際天地則

舟之、浩然赴壑則梁之、隨其宜不嬰其害矣。然土州安藝郡、室戸也者、海南之絕際、而突出杳溟之中。崖嶽崒嵂、磧巖磊磊、波瀾常騰湧。潮汐之迅激、亦有如巫峽。若乃倏然風怒浪駭、盤渦谷轉、淩濤山頹。當是時往來舟船、決帆摧檣、無由進退。矧西去浦戸湊十八里、北去甲浦湊十二里。其間無可泊之湊。而或駕其湍急、投於南極外。或遇其怒濤、葬於魚腹中。故恐其嚴險、名此地謂御崎。惟雖舟楫之利濟不通、而無湊湊、則不免覆沒之害。人民欝懑大息。殆如過鬼門關。粤我本州賢君四品拾遺藤原忠義公、惻然哀愍之念、成湊以救嬰害者蓋有年矣。及慶安中、令相此地形勢。而此濱北山連東南過正午、西自水涯而南去九十步許。崇岩分列、而波水亦稍穩靜也。岩間疊石以塡補之、可以禦西風。幸有釣舟出入之澳。尤宜爲湊之處也。考其功程、石地嶮巖、而無寸土。無細沙。所以勞費大專功難。雖然慮至、或功行成就、以海底無細沙、礒涯無泥土、却後日無壅塞之患。乃試功決成、而爲圖書、以請諸　東朝、既得免。令安積幸良、衣斐勝光、野村成正任責。因奉命督井上康重、工者江口延光、相與圖之。漁父告曰、可爲湊口之處、有三峻岩。鰺岩、

長十二歩半、横七歩高七尺、斧岩、長五歩、横二歩半、高八尺、鬼牙岩、長四歩、横三歩、高七尺餘、大概、似以破舟名之。從前舟航摧敗之害、專在於此。假令湊湊成就、此三碆不除、則後日之害、猶不減乎前日。然三碆距水涯、百二十歩餘。而無隄塞可支撑之岩石。又恐洪濤急、忽壞之、而未能決。乃按、於張扇有樞要、而衆勢歸之焉。以爲其兩端支水涯、而衆勢歸之焉。可以堪洪濤。遂議而巨木細木縱横交叉、如張扇爲外樴。巨松數萬如立櫛列四行、以土俵七萬有餘塡行內。其中間實以土拒潮水、以役夫往來相逼、作間架於堰上、爲複道百二十歩。別築防堤阻湊中。役夫數千人。手持瓶交運于堤內。湊中水淺而以大鐵推乃大鑿穿石地磊砢、造藏泊舟船之灣。湊湊中已卑量可放容。堤外積水、使待潮退時而少拂外埠土木而次決湊中堤放積潮於內、其聲如雷。瞬隙間恰如平野三碆。悉見吏民驩噪。持鐵推・大鑿・番鋪雲聚、暫時工役成。却入地下三尺。湊中潮退時、深八尺餘。更開溝澮、以爲他日暴雨行潦、壅塞湊中之備。東西、長三百歩、廣二歩、深一歩。總用工役三十六萬五千有餘、費黃金一千百九十兩。始事於寛文辛丑正月十有六日、成吉於三月十有八日矣。向非選人材深事幾應人心、未能得速功如此也。於

是人民歡抃。晝夜雜遝聲相聞。且嘉其湊出入之宜、作里謠。又賀賢君之仁愛、祝曰使永受祿於天、萬壽無疆、無盡子孫繩々不絕。此役也、非啻除國民之害、南海往來之客船、永得免害矣。嗟夫自陰陽動靜天地已闢、有此海未有此湊也。自今而推諸大古、有舟楫之始、而覆溺于此者、不知其幾人矣。自今而引諸天地大徹之後、而免覆溺之害者、亦不知其幾何人矣。甚矣賢君之所以勞其民、所以免其民、皆得其道也。昔人有言、天地之雷電・草木、人不能爲之。人之陶冶・舟車、天地亦不能爲之。於此見人事功用、有可以補助化工之不及者。湊湊之利、視陶冶舟車、尤爲不動。而及物一成、而永賴亘萬世、而上有助於聖人、起舟楫之利也。若夫疏國内處々新大澮、灌山原郊野、而開墾田疇三十邑（俗之三萬石餘）以興廢、民間之士繼古家之絕矣。如鑑野山田之大澮、其中之大者也。又鑿高岡弘岡中村之大澮、而爲衆民之助。決中野日出野之二川、而爲運漕之便。其間散財物勞人工、或劈山嶽摧巖石、其施爲豈細故哉。抑興廢繼絕與盡力乎溝洫者、近世之所未聞焉。因幷書其略、而明賢君之政事不局於此也。是歲秋七月望日謹記。

土佐國朝倉宮再興記

土佐國土佐郡朝倉鄕、朝倉神社者、見於日本書紀、載於延喜神名帳、則其鎭座之久昭々焉。然星霜推移、雲霞既古。而世人未詳其爲何神。故廟宇漸傾、門牆半朽。方今前國主、從四位拾遺兼土州大守藤原忠義。有繼絕興廢之志。明曆三年丁酉、孟春十六日、聚工匠、督繩墨、斧斤以經始之、及其年仲秋土木功成、巍然新煥、儼焉信美、可謂盛擧也。乃考舊式、以行祭奠。國中良賤、悉皆拜趨。於是神靈增威、效驗彌顯。原夫當社者、古老傳稱高賀茂大明神。則味鉏高彥根之命之靈也。此神者、素盞嗚尊之孫、而大己貴命之子也。或上天降地、爲天稚彥全朋友之義。與下照姬、通兄妹之志。其容色之美、煥於丘谷之間。忿怒之勢、落喪屋之山。事詳在神代紀中。嘗聞、大和之國高鴨社者、此神之垂跡也。然則移祭彼於此乎。鴨與賀茂、振古倭訓相通。則古老之所傳、不可誣乎。或云、下野國宇都宮神、亦是崇祀味鉏高彥根神。然則其來格不可度思。共是神明之舍、所謂如水在地中。誰不畏敬乎、誰不尊崇乎。

人王三十八代。齊明女主登極之日。天智天皇爲皇太子攝政之時。其六年、新羅國・百濟國交惡。新羅借大唐之兵、以攻百濟、擒其王、以送諸大唐。百濟國相福信堅守不降。先是百濟王子豐璋、質於　本朝。於是福信獻使來欵、請迎豐璋復其國。齊明・天智許之。既而皇駕出倭京、行幸攝州難波、議軍事。造戰艦聚兵器。難波者、今之大坂也。明年正月、御船發自難波。海陸郡國兵馬競集。其年五月、駐龍駕於土佐國朝倉山、居橋廣庭宮。此行也、淨見原皇子亦從焉。乃是天武天皇也。時斬朝倉山之木假作皇居。不遑斲刻之、皆用圓黑木。故號木丸殿。且新設關門於刈萱之地、斥候警衞、夙夜不懈焉。從軍百官、過關參殿者、各不唱其姓名、則不能透焉。天智詠歌以述其事。曰、

朝倉也木丸殿爾和我於禮波名能利於志津々由久者誰子曾

倭歌家者流說云。朝倉木丸殿者在筑紫。然藤原兼良公、以日本紀延喜式爲之證。而在土佐國爲是。可謂正說也。

其年七月、齊明天皇有貴恙。彌留大漸崩於朝倉行宮。天智天皇雖在喪廬、以國家大

事、故不廢軍容。冊命豐璋、以爲百濟國王、賜兵器軍糧若干、而遣大將阿曇比羅夫・河邊百枝。率數萬人、乘蒙衝（艨艟カ）百七十艘、護送豐璋復入其國。而天皇歸倭京。豐璋既到國。福信等率國人歡迎。與日本援兵共破大唐新羅軍。而豐璋入其國都。大唐再舉攻百濟。日本亦遣援兵。我先鋒朴市田來津忽逢大敵。奮發力戰殺傷甚多。遂死之。其勇名永傳於　本朝、遠播於異邦。其後勝敗互變。然百濟一亡、而幸再復者。天智威風之餘、朝倉神力之助也。

恭惟味鉏高彥根命者、鴻荒草昧之靈神。天智天皇者　本朝中興之英主也。此宮之本緣、談何容易哉。然試論之、則大己貴神之幸魂奇魂、升託於雲州・和州。應神天皇之英靈光風、肅然於宇佐石淸水。則　本朝諸神、垂跡於諸州者、皆是可一理也。由是觀之則味鉏高彥根命。雖登天上、留遺蹤於和州及當州。天智天皇雖陟於江州滋賀、葬於城州山科。神遊自在之尊靈、何忘木丸殿之行宮乎。在此乎、在彼乎、不可測也。不可不祭焉。

今所營建之廟社。北有山林、南有田畝、西有舊壘、東有江沱。岑蔚幽邃之境。想像神

偲之所可棲也。坤方有田、號棒振田。古來每年八月十八日、此社恆例祭儀。神人氏子聚、振棒從神輿、以勤其役。以此田爲其給料、故名焉。其隣並有稱七作倍處。世傳古戰場也。築七塚以葬死於軍中者。今猶在焉。雖未詳其爲何時、蓋或百濟之役、死事者亦在其中乎。又社南少許西有山、是刈萱舊蹤也。中葉有鵜來巢彈正者、國中之豪士也。築壘於此、因號鵜來巢山。故唯有知今不知古者也。此社本在山上、未知何世移崇於此也。每歲祭時、神輿先遊彼山、以准旅處。然則朝倉・刈萱同地傳名與舊記合者、可以證之。其餘社邊村里、不可枚擧也。往歲寬永年中前大君幕下　忝降鈞命。編輯士林諸家系譜。余亦預其事。故得聞忠義之出自藤原秀鄕之苗裔。須藤俊通稱山內氏。保元・平治之戰、屬源義朝顯武名。子孫聯綿、以至忠義之先考一豐。慶長庚子濃州關原之役有軍功、故賜土佐國。忠義襲封賜松平氏。奉仕幕府、四葉孫子繁榮。其齡漸高。頃年致仕歸國。讓事務於令嗣四品拾遺忠豐、而老安退休之時、再造此廟、大耀神光。則家門以長以久。與靈験同高而垂於無窮。

明暦四年戊戌五月吉辰　　法眼春齋林恕謹記

土佐國廿一社の記

土佐國式社考

延喜式神名帳土佐國廿一座（大一座 小廿座）

安藝郡三座（並小）

室津神社

室津村室津殿古城北有二天津社一、蓋此也歟。此社初在二高野內一、近世遷二於此一云。

按續日本紀稱德天皇神護景雲元年有二土左國安藝郡少領凡直伊賀麻呂一。日本紀曰、天津彥根命凡川內直之祖也。古者郡領以二譜第一任レ之。故郡中齋二祖神一者多矣。豈凡直凡川內直同姓而祀二天津彥根命一以稱二天津社一歟。中古惟宗姓宗子號二安藝大領一居二安藝城一。庶流號二室津別府一居二室津城一、別府卽少領也。伊賀麻呂既爲二少領一、其祀二祖神於此一也揭焉。（寬永三年金剛頂寺公文賢覺所レ記當寺領知實檢帳、作二雨津社一。天正年中土左侍從秦元親地檢帳作二天神一、皆此社也。）

多氣神社

在奈半利村。按安藝國安藝郡有多氣神社、正與此同神也。國造本紀安藝國皆作阿岐國、順和名鈔當郡有奈半鄕。姓氏錄曰、阿支奈臣武內宿禰男、葛城曾豆比古命之後也。蓋安藝郡奈半鄕多氣社以訓通之、豈得非阿支奈姓祖神武內宿禰乎。今俗稱嶽社、亦依通訓也。

坂本神社

姓氏錄曰、坂本臣建內宿禰男、紀角宿禰男、白城宿禰三世孫、建日臣因居賜姓坂本臣。又曰、布師臣坂本朝臣同祖建內宿禰男、葛城襲津彥命之後也。和名鈔曰、安藝郡布師重遠謂、坂本不詳古在何地、今併坐多氣社中、蓋多氣坂本共一姓神而當郡著姓之遠祖也。其坐於同社、恐非偶然矣、今土佐郡有布師田村、此地未聞布師之緣、蓋逸之耳。

香美郡四座 並小

天忍穗別神社

舊事紀曰、天照太神太子天忍穗別尊、娶高皇産靈尊女栲幡千千姫、誕生饒速日尊。饒速日尊乘天磐船而翔行於大虛空、天降而虛空見日本國矣。姓氏錄曰、物部姓神饒速日命六世孫、伊賀我色雄命之後也。類聚國史曰、平城天皇大同五年正月、土左國香美郡人物部文連全敷女授少初位上。全敷女同郡物部鏡連家主之妻也。重遠按、天忍穗別尊爲物部姓之本源。物部爲當郡之大姓。當郡齋忍穗別尊理當然矣。大忍里庄山川村有石舟明神。古老傳爲乘石舟天降焉。山川物部姓世傳領地也。正和四年乙卯當社棟札曰、願主物部末近元亨元年政所下知淸遠名主光弘曰、土佐國大忍里庄東河末延石船大明神、限永代令寄進。四至之境東限淸名境、（淸下恐脫遠字）南限野武多於、西限高比、北限國弘名境、以爲物部末正大夫本領。又有四年政所下知物部禰宜神事式目。天正六年戊寅棟札曰、檀那末延萬介物部其祀物部祖神饒速日命也明矣。其神體玉石一枚靈鏡一面皆古代物也。其有兩座者、蓋併鎭父神天忍穗別尊歟。夫式內社湮蝕埋沒蓋非一日。其偶顯者亦俗稱不合舊式者多矣。畿甸尙然、況邊鄙乎。若本郡天忍穗別神社、案檢部內

未レ得ニ的名一。今以ニ舊記及姓系一推レ之知ニ石舟社近一レ之矣。且其廳下文鄭重如レ此。恐非ニ式社一不レ易レ當也。謹錄以俟ニ後人訂正一焉。山川舊領主末延氏家藏ニ文曆以來公武文書數十通一、今擧ニ其姓名分明者一二一。元亨元年有ニ末延名主末正一、正平十六年有ニ右兵衛尉信末一、寶德二年有ニ太郞右衛門一。文明十五年有ニ左衛門次郞一有ニ太郞左衛門尉道眞一、明應八年有ニ太郞三郞一有ニ新三郞一。永正六年有ニ親久一。十四年有ニ神右衛門尉一。此皆爲ニ物部姓末延氏一。古城見在ニ當村一、其爲ニ石船禰宜職一而傳ニ領末延名一證文明也。又按同庄彼山鄕村鹽峰有ニ工士方明神一、鹽訓近ニ忍穗一、然以ニ神名一考レ之、蓋爲ニ大神君祖奇日方命一、恐非ニ式社一也。

小松神社

在ニ大忍里庄彼山別役村一、此鄕小松氏多、蓋其祖也。度會延經神主曰、姓氏錄云、太秦公宿禰、秦始皇帝三世孝武王之後也。男功滿王仲哀八年來朝。男融通王應神十四年來朝。又云大里史、太秦公宿禰同祖秦始皇五世孫融通王之後也。三代實錄云、清和天皇貞觀七年、秦宿禰永厚等賜ニ姓惟宗朝臣一。永厚等自言秦始皇十二世孫功滿王子融通王之苗裔也。蓋小松功滿也。猶ニ融通作ニ弓月一也。秦大里惟宗三姓之祖神也。陸奥國子松遠江國敬滿恐皆同神耳。

深淵神社

古事記曰、速須佐之男命生ニ八島士奴美神一。八島神生ニ布波能母遲久奴須奴神一。布

波神生深淵之水夜禮花神。度會氏曰、此與大己貴命異名同神也。重遠按、此社今在野市、里人呼爲十禪師。舊祠嘗在深淵村、地廣樹老尤可凝信。寛永中前國宰大璺辟鏡野、灌漑之利被數千町、於是河水失古道、數流合併爲一。一旦洪水壞襄、社地所潰決。巨木恠巖今猶在河底。見在小社四十年前里民徙造之云。

大川上美良布神社

在韮生野。舊事紀素盞烏尊八世孫有健飯賀田須命。此命鴨部美良姫爲妻生一男大田田禰古命。續日本後紀曰、仁明天皇承和八年八月辛丑、以土左國美良布神預官社。三代實錄曰、淸和天皇貞觀八年八月己卯、授土佐國從五位下大川上美良布神從五位上。度會氏曰、布助語也。筑前國麻氐良布神社在麻氐良山。

長岡郡五座 並小

豐岡上天神社

在豐岡長宗我部古城西尾、祭日九月十八日。度會氏曰、上訓倍與姬通。大殿祭祝詞云、屋船豐宇氣姬命、是稻靈也。俗詞宇賀能美多麻。古事記云、和久産巢日神

子謂二豐宇賀能賣神一。蓋豐岡豐宇賀語通、疑此神也。重遠按、拾遺和歌集神樂歌云、天ニ坐豐岡姫。梁塵愚按抄以爲天照太神也。更詳レ之。蓮女寺村有二天神小社一。蓋菅廟而非二式社一也。何以言レ之。此地蜷川道標舊宅。道標者秦守時爲二連歌宗匠一。故齋二祭菅家一乎、一也。祭日二月廿四日、二也。此地里人稱二御北一。蓋略二御此野一乎、三也。向來諸人不レ求レ得二豐岡天神一、以二此社一擬レ之、可レ謂レ誤矣。

朝峯神社

在二介良村一。三代實錄曰、貞觀八年六月癸巳授二土佐國從五位下朝峯神從五位上一。度會氏曰、朝峯淺間語通。駿河國淺間社、今云祭二木花之開耶姫一。蓋朝葺也、美稱反賣也。豈與二鹿葺津姫一有二通訓一乎。

殖田神社

在二殖田村一。里人所レ傳及舊刻牛王皆號二高鴨一。秦守地檢帳稱二賀茂社一、蓋與二一宮一同神。或曰殖田即味鉏之義也。三代實錄曰、貞觀八年五月乙丑授二土佐國從五位下殖田神從五位上一。度會氏曰、姓氏錄云、賀茂朝臣大國主神之後也。大田田禰古命孫大賀茂都美命奉レ齋二賀茂神社一。重遠按、舊事紀大鴨積命磯城瑞籬朝御世賜二賀茂君姓一。續日本紀云、神護景雲二年從五位下賀茂朝臣田守賜二姓高賀茂朝臣一。蓋殖田大田語相近。舊來號二高鴨及賀茂、

比郡有美良布神社。疑大田田禰古命歟。重遠又按、殖田神社後山舊有若宮社。社今亡而址見存。三代實錄所謂殖田上神者蓋此歟。

小野神社

在小野村。里人號豐岡大明神。姓氏錄曰、小野朝臣天足彥國押人命之後也。重遠按、饒速日命三世孫、大忍男命娶葛木姓祖劔根命女賀奈知姬、生世襲足姬命。孝照天皇立之爲皇后、生小野祖天足彥國押人命及孝安天皇。當社鄰村有葛木社。劔雄社、比郡賀奈知村亦有社、意亦有由緒乎。

石土神社

在十市里池端。日本紀曰、伊弉諾尊入水吹生磐土命。續日本後紀曰、承知八年八月辛丑以土左國石土神預官社。

土佐郡五座大一座 小四座

都佐坐神社大

此當國一宮所謂高賀茂大明神也。八頭花鏡爲神體。土左國風土記曰、土佐郡有土左高賀茂大社、其神名爲一言主尊。重遠按舊事紀素盞烏尊子也。一說曰、大穴六道尊子味鉏高

彥根尊。續日本紀曰、高野天皇天平寶字八年、法臣圓興其弟中衞將監從二位下賀茂朝臣田守等言。昔大泊瀨天皇獵二于葛木山一、時有二老夫一每與二天皇一相逐爭レ獲。天皇怒レ之流二其人於土佐國一。先祖所レ主之神化成二老夫一、爰被二放逐一。此高鴨神也。重遠謂風土記錄二當社本緣一極詳、且發二明道要一尤爲二警切一。本國當時有レ人可レ知矣。以二文多一不レ能二具載一。

葛木男神社

布師田有二高結社一、蓋此歟。三代實錄貞觀十八年、有二近江國天高結神一、蓋同神也。度會氏曰、姓氏錄云、葛木直高魂命五世孫。劒根命之後也。蓋高結卽高魂也。鎭魂祭伯結二木綿一取二此義一、魂字訓二牟須比一。三代實錄所謂結二御魂緒一是也。當社至レ今不レ失二此神名一。二脗合於姓氏錄一、豈不レ信哉。

葛木咩神社

高結社南田中有二葛木社一、蓋此也。如據二上說一則此社其高魂命之妃乎。

郡頭神社

郡頭當作鴨部、蓋鴨字左甲誤作君、右鳥草書以混邑草、遂變郡字。部字左音誤作豆、右邑草書以混頁草、遂變頭字耳。此社在鴨部村。續日本紀曰、神護景雲二年十一月戊子、土左國土佐郡人神依田公名代等四十一人賜姓賀茂。姓氏錄曰、鴨部祝賀茂朝臣同祖大國主神之後也。

朝倉神社

在朝倉村。土左國風土記曰、土左郡有朝倉鄕。鄕中有社、神名天津羽羽神。天石帆別命、今天石門別神子也。度會氏曰、天石帆別命五字、當爲注文。天石門別神吾川郡坐安國玉主天神也。此言天津羽羽神卽天石帆別命、而玉主天神子也。石帆別姓氏錄作石穗押別。日本紀云、磐排別吉野國樔部始祖也。大和國吉野郡波寶神社、波寶音與羽羽訓通。國樔吉野大姓、此祀其祖神也。遠江國佐野郡已等乃麻知神社、阿波波神社。阿波波蓋天津羽羽也。已等乃麻知媛亦玉主命女、佐野郡並祭玉主命二子也。朝倉與神谷父子坐於鄰村、而大和國高市郡有氣吹雷響雷吉野大國栖御魂神社。又有天津石門別神社。此亦並祭父子。兩國鎮坐如合

㆑符矣。日本紀及續日本紀有㆓朝倉姓㆒、此蓋其氏神歟。

度會氏又曰、鷲峯學士集明曆三年當社再興記云、當社者古老傳㆓稱高賀茂大明神㆒。則味鉏高彥根命也。夫風土記既載㆓神名㆒如㆑此、則當時所㆓傳稱㆒不㆑足㆑爲㆑證。

吾川郡 一座小

天石門別安國玉主天神社

度會氏曰、姓氏錄云、神魂命兒、天石都倭居命、蓋朝倉神之父也。櫛磐間戶命、亦名天石門別命。是太玉命子、高魂命孫也。雖㆓同名㆒恐非㆓此神㆒。大系圖載本系帳云、天兒屋命父神與登魂命娶㆓玉主命女許登能麻遲媛命㆒所㆑生也。萬葉集玉主訓㆓多麻毛利㆒、與㆓多麻留㆒語通。神祇官西院坐玉積產日神。古語拾遺作㆓魂留產靈㆒。姓氏錄又云、神牟須比命兒安牟須比命、蓋魂靈皆訓㆓牟須比㆒、而與㆓玉主㆒義相通。合而考㆑之、天石都倭居命・玉主命・玉積產日神・安牟須比命四名一神、而天兒屋命外祖父神也。故神祇官八神以㆓此神㆒爲㆓其一㆒乎。重遠謂、此社在㆓神谷坤隅山上㆒。舊山麓巨巖下有㆓叢祠㆒、不㆑知㆓何社㆒。元祿壬申波川神主偶得㆓棟札於巖穴㆒、驚而申㆑府。明年

新徙于此地、邇日國宰寄附水田若干、祭祀加敬。此社之顯豈人力之云哉。其札云、天野岩戸分安國玉之天神社。天文九年庚子霜月八日勝賀瀨越後造立之。

幡多郡三座並小

伊豆多神社

在伊豆多坂西鳴川谷高知山、以玉石二枚爲神體。里人傳、當社舊在坂本川高知山。不知何代徙于此。重遠謂、高知字姑從里人之語、與河內相近、未知正說。度會氏曰、伊豆國伊豆奈比咩命神社、出雲國飯石神社、出雲國風土記云、飯石鄉伊毘志都幣命天降坐。蓋稻靈大御食都姬命、萬物之始人之所天也。

高知坐神社

在枚田鄉戸內村。本神體青黑玉石盛以圓筥、重貯以箱。攝神體青石藏於杉箱共二座。近里攝社多。俗作高持者、音之訛也。度會氏曰、舊事紀云、都味齒八重事代主神坐和國高市郡高市社、蓋高知坐神事代主命歟。高知高市相通、譬如攝津筑前住吉同神駿河甲斐淺間同神之類。舊事紀又云、事代主神化爲八尋熊鰐、通

三島溝杭女活玉依姫。國造本紀云、都佐國造志賀高穴穗朝御代長阿比古同祖三島溝杭命九世孫小立足尼定賜國造。續日本後紀云、攝津國人長我孫葛城事代主命八世孫忌寸宿禰苗裔也。神名帳云、大和國高市郡波多神社、亦與此同神歟。

賀茂神社

在入野松原。與八幡同宇。南賀茂北八幡也。舊兩社各在本村、不知何時徙併于此。舊事紀曰、事代主神孫鴨王。又曰大鴨積命磯城瑞籬朝御世賜賀茂君姓。姓氏錄云、大賀茂都美命奉齋賀茂神社。重遠謂、當社本緣當與殖田神社條下並考。

記土左國式社考後

古昔國宰祀山川之靈、祈年穀之豐登、臣連百姓各祀其姓之所出而子孫宗之。以神道化天下、其旨深矣。中古異教興隆、人專敬天竺之神、而寖忘我國神與祖先、不有識者誰能振頽風。若當國諸社其爲山川之靈各姓之祖、固各可見、而後世記之

者蓋鮮矣。可レ不レ哀乎。延喜式所レ載、日本國中神祇三千一百餘座。古者每歳二月國司長官以下共會二國廳一、奉レ幣祈レ年。大社絲三兩綿三兩、小社絲二兩綿二兩。用二正稅一、司自齋戒呼二祠官一頒レ之。其儀儼然。今也神道式微、雖二祀典不一レ擧、而世々　天皇大嘗會親拜レ之、則於二各國一其可レ忽諸。本國式社二十有一、而舊跡蕪廢社地尙或莫二之認一。況神名乎。重遠早歳嘗游歷、粗有レ所レ考、竊筆記以訂二諸度會延經神主一。神主博學精覈其言足レ可レ徵。因併二錄所レ聞爲二一冊一矣。今玆復欽二我邦君命一再加二鉤索一、乃傳二其可レ傳、疑二其可一レ疑、謹第錄如レ上。其他式外社見二乎六史一者猶多。顧未レ暇二論著一也。嗟乎終古渺遠孰知二厥初一。不レ如每社藏二此本一以俟二久延彥於千載一。

寶永二年乙酉冬至日　　大神重遠謹識

跋二土左國式社考一

右社考一卷者、當國大守藤拾遺豐房朝臣令二家士考註一焉。神之所レ別、社之所レ傳、昭然如レ視二舊事一。非二好レ古博洽之人一誰得レ爲レ之乎。感喜之餘聊加二一語一了。

寳永丙戌仲夏日　神祇管領從二位侍從卜部朝臣兼敬

土佐物語卷第二十終

四國軍記 本名土佐軍記

序

四國軍記一書者、未レ知二何人之著述一也。不レ出レ戸而土阿之盛衰豫讃之治亂、宛然在レ目。應永年中有二秦元勝者一、發二信州一入二土州一、改二氏長曾我部一、乘二國政之衰弊一、起二兵於土陽一、武威雷震士卒雲集。至二于玄孫元親一形勢寖張皇而氣呑二南海一威加二中國一。此書者識二其五世之事實一不レ有二少遺漏一。余頗有二好レ古之癖一、是以不レ顧二己才之謭拙一、薙二其繁蕪一改二其謬誤一、鏤レ梓以壽二于世一。深恥二其文之卑陋一也。然於二其事實一則人其舍諸。

元祿庚辰之殷春

洛下晩進　小畑邦器書

四國軍記卷第一

三韓爲日本屬國事附長曾我部の先祖の事

抑人王第十五代氣長足姫尊と申し奉るは、神功皇后の御事、卽ち應神天皇の御母后にて御坐します。寶國を求めんと欲す御心ありて、筑紫肥前國に至り、松浦縣小河の側に着かせ給ひ、勾針爲鈎、取粒爲餌、御裳の糸筋を抽取つて緡とし給ひ、河上の石上に登つて、鈎を投げて祈之曰、朕西の方財國を求めんと欲す。若有成事、河の魚飲鈎。因て以て竿を擧げ給へば、乃細鱗魚を獲給ふ。是を以て其國の女人、毎當四月上旬、以鈎投河中捕年魚事、於今不絕となん。此祥瑞を得給ひて、彌賴もしく思召し、和珥の津より發ち給へば、飛廉風を起し、陽侯浪をあげ、海中の大魚悉に浮んで船を挾み、平地を行くが如く、便ち新羅に至り給ふ。其時新羅の國中へ大濤

打つて、一國海とならんとす。人咸戰々栗々厝身無所。船師海に滿ちて旌旗日に耀き、鼓吹聲起つて山川悉くに振ふ。新羅王遙に望んで以爲く、非常の兵、將ㇾ滅ニ己國ㇾ。驚て失ㇾ志ひて曰、吾聞く東に神國あり、日本といふ。亦有ニ聖王ㇾ謂ニ天皇ㇾ。必其國の神兵ならん。豈擧ㇾ兵可ㇾ距といひて、卽素旆を上げて自服ひぬ。素組して面縛、圖籍を封固めて王船の前に降る。因て叩ㇾ頭曰、從ㇾ今以後乾坤と共に伏ひて飼部となり、年毎に男女の調貢らん。於ㇾ是高麗・百濟二國の王、新羅の圖籍を收めて、日本國へ降ると聞きて、密に其軍勢を伺はしむるに、則勝つまじき事を知つて、自ら營外に來り叩ㇾ頭歎じて曰、今より以後永く西蕃と稱して、調貢奉る事を絶えじ。因て內官家と定む。是所謂三韓なり。其後人王卅八代齊明天皇の御宇、天智天皇未だ皇太子として攝政し給ふ時に當つて、百濟國の豐璋太子、吾朝に質たり。其頃新羅より大唐の兵を以て百濟を攻め、其王を擒にして大唐に送る。百濟國の宰相福信といふ者、堅く守つて敵に降らず。卽ち吾朝に使を獻じ、豐璋太子を國に返さん事を歎く。齊明天皇國家の大義を叡慮あつて、浪速の浦に臨幸なり軍法を議り、戰艦數千艘に兵器

若干を集め、明年の春正月縗を脫いて、龍駕を土佐國朝倉山に駐む。其年七月齊明天皇貴恙盛にして、朝倉の行宮に崩じ給ふ。天智天皇倚廬に御座すと雖、國家の大事たる故、豐璋太子に、阿黨比良夫・河邊百枝を大將として、數萬の湜兵を相添へ、百濟に復入せしむ。福信悅び、日本の援兵と共に大に大唐の軍を擊破る。高宗彌慍り憤りて、再び勇猛の大將に、數十萬の大軍を發せしかば、日本又援兵を遣さる。先鋒田來津・枝市、奮發力戰して大軍を破ると雖、大敵凌ぐに難うして、是が爲に殺傷す。其勇名、本朝に傳はり異域に震ふ。其後勝敗互に變ずと雖も、百濟一度亡びて、幸に再復するは、是天智の威風なればとて、三使を以て本朝へ、種々玉帛珍寶を送る。彼三使の內一人、我朝に投化し、鎌足大臣に近侍し、信州に於て采地を賜はり、並に姓を秦にぞなし給ふ。然るに應永の頃、彼に十七代の後胤秦の元勝といふ者あり。先祖より箕裘の采地をも、彼方此方に押領せられ、家門も次第に衰へけるが、天性濶達大度にして、常に鴻鵠の志ありて、熟と思ひけるは、我數代此地に住むと雖も、あるかなきかの有樣にて、區々として一生を朽果てん事の無念さよ。夫れ古より武者修

行をして、家を起し志を達せし事のあれば、所詮國々を徘徊し、當時武士の剛膽をも試みんとて、領國信州を發足しけるに、譜代舊功の士なればとて、久武源藏・中内八郎といふ二人の長臣に、郎等少々召連れて、先づ西國の方へぞ赴きける。此久武源藏といふ者は、元弘の古、一の宮の帶力に、秦武文・久武某とて武勇の者あり。武文は一宮土佐國へ遠流へ給ふ時、御息所を御迎の爲め京に上り、御息所の御供申し、攝津國大物の浦まで下着せし處に、松浦五郎が爲に御息所を奪はる。武文粉骨を碎くと雖も甲斐なく、腹搔切つて、死後に寃恨を報せしとかや。久武は一宮越州金崎にて御自害の後、事の由あつて流落せし者の嫡孫なり。中内八郎は、生國土佐の者にて、元勝土佐へ入國の案内先鋒として、忠戰を勵みしなり。去程に元勝は、住馴れし宿の梢を後に見て、東嶺に響く鐘の聲、明行く雲に橫はり、征馬に鞭を加ふれば、行々重ねて行々たり。漸日數積りて、勢州桑名に着き、とある驛邸に休はれける。亭主出合ひて、茅店を灑掃し、誠に侘しき賤の栖居に、斯る折ならでは御宿由す事も候はじ。旅宿の御徒然、御伽申慰め奉らんと、四方山の物語につけて由す樣、貴客は何れ

の國より何國へ御通り候ぞや。元勝答へて曰、我は信州の者なるが、聊所存のある故に、行先何國と定なく、浪に搖らるゝ沖津舟、雲水の修行者なりとぞ申しける。亭主承り、辭々御宿召されしより、凡人ならず思ひ參らせしに、又唯今の御言葉の末、我年來の本望をも、達しなん時こそ來りたれと存候。願はくは御供に召加へられよかし。今一兩日は見苦しく候ふとも、我亭に御滯留あつて給はり候へ。行旅の支度仕らんと申せば、元勝聞いて、思も寄らぬ事かな。斯る家居に住居し、何に不足の事ありて、行末定めぬ我々に屬從ひ給ふべきや。又我々は、迚も憂世の中に住佗びて、一身寄邊なき儘に修行と號し、何國にても賴むべき方あらば、仕官せんと思ふなり。御邊の同道は、必ず思ひ留まり給へ。亭主頭を振つて、さは仰せ候ひそ。我此年月、斯る處に住侍る事、全く本意に非ず。其古は長劍をも橫へし身なりしが、去事ありて落魄の身となり、時移り事去つて、今此有樣、露命を繼がん其爲め、馴れぬ生計に身を窶し、心の外に暮せしなり。今日如何なる年月ぞや。思も寄らぬ君に見えて、盲者の杖を得たるが如く、年來の蟄懷開けなんとす。何爲ぞ不義にして富み榮えん事を

思ひ、顔を拭うて一生を忍ぶる事をせんや。時を愆つて逃れ難き命を遁れ、義を舍てゝ富と貴とに操を移せしも、誰か後世に其餘慶を流へ、孰れか定住不退の門に榮えん。露よりも化に、幻よりも尙墓なき人間の境界なり。況や當道を嗜む者に於てをや。是非御供申し、先祖の美名をも達し候はんと申せば、久武・中內申す樣、我々は此君譜代の者なれば、如何なる辛苦艱難をしても、御側を離るべき者ならず。貴方是非御供と思召さば、姑く左右を待ち給ふべし。明年西國より必ず書を參らせん。其時下り給へと制しけれ共、亭主中々聞も入れず其座を去り、一族朋友を呼集め、今の世は、君たる人、臣を擇むに非ず、臣更に君を擇むといへり。我れ此君の御供申し、廻國修行して、武功を顯さんと思ふなり。若天運至らずして、命を草露に同うし、骸を路徑に曝すとも、前生の約束ならんと思召せと、名殘の袖を振切つて、年來住みし古鄕を、霞の餘所に見捨てつゝ、終に元勝に從つてぞ上りける。後に桑名彌次兵衞といふは是なり。偖元勝は、京都に暫く逗留して、洛陽の寺社順禮し、夫より西國へと下りけるが、其頃紀州亂國なりと聞きて、さらば立寄り、軍の樣子諸士の剛臆を

元勝土佐に入る

も見聞せんと、紀州路を指して赴きけり。程なく其年も暮過ぎて、新玉の年立返れば、和歌の浦より艤し、順風に楫を廻らせば、曲浦微渺として、海烟蹤を埋み、浪路遙に日を重ね、土佐國にぞ着きにける。此時國守細川の某、其威輕くして諸士下知に隨はず。其外吉良・大平・本山なんどいへる領主ありけれども、其頃は兵革打續いて、政道も妄なりしかば、國人敢て之を信ぜず。是に由つて長岡郡廿枝江村郷の莊司、今度元親の着岸ある由を聞いて大に悦び、此所守護なうして、近鄕の亂妨狼藉甚し。爰に留り給へ。守護に仰ぎ奉るべしとて、江村鄕の領主江村備後守が養子として、長岡郡曾我部に城を築きて入置き、則在名に由つて、氏を曾我部と改めけり。然るに同國香美郡にも、曾我部といふ所あつて、領主をも曾我部某と申しければ、各郡名の上の一字を添へて、長曾我部・香曾我部とぞ申しける。從來元勝才幹人に勝れければ、程なく武威遠近に振ひ、人皆其下風に立たんことを願ふ。勇々しかりける勢なり。

元勝、姓を長曾我部と改む

土佐國守護職の事

長祿二年の秋、將軍の知家事伊勢守貞親といふ者あり。從來短才にして、官祿人よりも勝れん事を望み、表裏を以て人を戰はしめ、褒貶時々替つて、信ある事なし。當時管領に屬しては、入道宗全が萬づ心の儘なる働をいひ、山名に對しては、吹毛の疵を揚げて、管領の噂を誹謗す。誠に佞人國を亂るの基となつて、兩家の間、日を逐つて不快し、遂には婿舅の好を廢て、黨を結び權を爭ふ事、隙なかりしかども、將軍は徒遊燕の御樂に耽り、人の諫をも容れ給はねば、是より處々の賊兵蜂起して、兵革連年止む時なし。其上飢饉疾疫大風洪水打續き、四海手足を措くに處なし。尤頃年天變怪異の事共現はれ、王法も亂れ、君臣上下の綱常も、なきが如きの世となりぬれば、上一人よりぞ萬民に至る迄、向末何になるべき世の果ぞやと、心を摧き思を傷ましむる處に、文明二年庚寅の冬十二月六日の夜より、內侍所頻に鳴動し給ふ。如何なる事か出で來らんと、諸人眉を顰むる時節、仙洞玉體惱ませ給ひ、典藥寮樣々治術を盡

すと雖も、三折十全の功もなし。さらばとて諸寺諸山の貴僧高僧に仰せて、大法祕法修せられけれども、萬乘の御身だも、定業は遁れさせ給はぬ習、終に崩御ならせ給ふ。御謚を土御門院と申し奉る。此時彌騷動して、奸邪間を窺ひ、數朝廷を侵せり。所緣もなく所領もなき公家諸廷の人々は、住馴れし金殿玉樓を、盡く兵火の爲に燒亡され、少時も立休らふべき蔭なければ、或は小原・靜原・芹生の里、或は吉野・十津川。志賀の古鄕、其外浦山里の片邊に立忍んで、日來は見馴れぬ賤山賤に身を寄せて、飢寒の資を土民商賈の手に待ちて、桃源の昔を尋ね、或は東國・西國に佮傍ひて、そこ とも知らぬ海島萬里の船に棹し、仲連が跡を踏む人もあり、思ひ〳〵に身の隱家を覓めて、散々になりし姿風は、哀れなりける事共なり。中にも一條太閤兼良公は、年比都の御栖居も懶く思召されければ、今は大厦高墻の中に身を安んじ、輕羅褥茵の上に、再び娛むべき期にも非ず。幸ひ日來の素意も時至りぬと、密に忍びて南都の都の舊にし跡に御身を埋め、幽閉閑疎の御住居、其昔には引替へて、申すも中々愚なり。加旃御父子皆引別れ給ひて、前の殿下敎房公は、西海の逆浪に漂泊し、兵庫の浦に逆

一條房家土佐へ渡る

旅ひ給ふ。御子房家朝臣は船に召され、土佐國に渡らせ給ひ、長岡郡岡豊の城主秦元勝十六代の末流、長曾我部兵部丞文兼を御賴あつて御座しけるが、翌年同國幡多郡中村の故壘を點じて遷らせ給ふ。夫れ敕勘の身となりて、左遷配流などこそ聞きも及びし事なるに、御身一つの置處なく、御父子離居の御悲、喩へていはん方もなし。さしも古は、台階槐門に冊れて、瓊臺瑤室の中に成長せ給ひ、詩酒の花の下には、春の風を紫闥の袂に匂はし、仙宮の秋の月には、絲竹の御遊にのみ陪し給ひて、更に他の業もなかりしに、今は鄙の御栖居、斯彼に零落れ給ふ。嚴子陵が釣臺も、脚を伸ぶるに水冷へ、鄭太尉が幽棲も、薪を擔ふに山嶮し。一業所感の世に生れ、斯る憂き目に合はせ給ふ。うたてかりし世中なり。待つとはなしに明暮れて、同じき四年の三月に、山名入道宗全病死し、同年五月に、細川右京大夫勝元も、重病に侵され卒去せしより、京都暫く靜謐しければ、房家公より、大樹義政公へ御願ありて、土佐國司を御所望ありければ、幕下卽ち叡聞に達し、天氣を窺ひ給ふに、早速敕許あり、幡多郡に於て、一萬六千貫の領主として、中村に御在城を構へ給ふ。大樹より七郡の守護へ、

一條房家土佐國司となる

御教書を下されければ、各其旨を領掌し、一條殿を主君と崇め、中村の御城へ出仕す。抑土佐七郡と申すは、幡多・吾河・土佐・香々美・安喜・長岡・高岡なり。偖七郡の守護に、本山・安喜・大平・山田・津野・吉良・長曾我部とて、各三千貫の領主なり。森・國澤・千屋・蚊井田此四人は、二千貫の領主にて、其邊を領す。房家公御譜代の舊臣土居・羽生・爲松・安並四人は、執事として、民を撫育し士を敬ひて、其身謙遜を専とし、禮儀甚だ恭し。偖又外様近習の諸士には、大岐・加久見・立石・江口・橋本・山路・上田・和田・鷄冠木・三上・米津・梅青軒・都筑・設樂・蜷川・太田和・平田・伊與木・奈良・荒川・森澤・國見・入野・竹田・秋田・蕨岡・佐賀・宿毛・賀江・依岡・小島・若藤・敷地・入田・栗本・長崎・佐田・本井・阿津・下山・勝間・高瀨・水寥川・鹽塚・興川・安瀨・楠村・一宮の神主飛驒守等を初として、以上五十四人なり。

本山攻二長曾我部一事附千王丸落二岡豊城一事

細川右京大夫政元は、京都の對陣に、事故なく敵を追落し、心中の憤を解散しぬる心

本山等長曾我部元秀を攻む

地して、喜悅の眉を開き、勢付かば近國に發向して、殘徒を攻夷ぐべしと議せられけれども、未だ降參の勢もなく、催促に隨ふ者も稀なれば、心計は急がれて、大軍を興すに力なく、兎角默されける處に、永正四年六月廿四日に、三好と一戰の節、勢ひ盡きて京都に於て切腹ある。其子高國、報讎の心切なりと雖も、譜代の故老舊臣は、方々にて戰死し、相從ふ者もなければ、運を天道に任せて、暫く時節を待ち居たり。其頃土佐七郡の守護の內、本山の某此事を聞付け大に悅び、同寮吉良・山田・大平を呼集め申しけるは、日來長曾我部元秀に押窄められ、無念の月日を送りしも、管領元秀に御睦等閑ならざるによれり。然るに管領、去年京都に於て生害ありて、今は恐るべき人なし。侶此時に元秀を攻滅し、年來の欝憤を散せんと思ふは如何にと申しける。尤や木、林に秀でぬれば風之を破り、行、衆よりも高ければ、人之を猜む習、吉良・山田・大平聞いて一應の思惟もなく、仰の如く元秀累年管領の威を藉つて、人も無なる振舞、酷だ以て奇怪なり。早々思立ち給へ。我々共に與力して、一臂の助となり申さんと、旁牒じ合せ、永正五年五月、都合其勢三千餘騎、元秀が居城江村郷岡豊へ發

向す。元秀先達つて此事を聞き、惛き奴原が振廻かな。當家數代、武威を國中に震ひ乍ら、坐に敵に推寄せられんは、武門の瑕瑾、天下の嘲哢たるべし。且は又兵略の足らざる詘に墮つべきも口惜しとて、譜代恩顧の輩久武・桑名・中内を始として、手勢僅に五百餘騎、城下を一里出張して、要害に陣を取る。時を移さず敵の勢三手に分れて推し來り、箙胡籙を叩いて鬨を嚏と上げ、互に矢一つ二つ射違ふる程こそあれ、抜連れて切つて懸る。元秀は、兼て武勇才幹衆に越え、大敵を見ては欺き、小敵をも輕んぜざる、孫呉が妙術を得たる者なれば、五百餘騎を一手になし、馬の鼻を雁行に立雙べ、本山が七百餘騎にて控へたる眞中へ突いて入る。敵是を小勢と思ひ侮つて、中に取込め討たんとすれば、元秀左右に激し、馬手を捲り弓手を拂つて、縱横自在に蒐回る。其勢奮然として堅を破れば、暫時の間に、一陣の敵卒七十餘騎、蹄の下に討たれて、殘る勢四角八方へ散亂す。元秀軍の首途吉と悦んで、敵は大勢味方は小勢なり。一旦の勝利を得るとも、本より寡は衆に敵すべからず。此勢に城中へ引入れと下知しける處に、廻の外に磬へたる大平・吉良・山田は、先陣の敗北に、倶に追

立てられんとせしが、元秀城へ引入るを見て、二千餘騎を二手に分け、左右を下知して、激水の迅（とき）、其源を制するに如かずと、横合に切つて懸り、會釋もなく戰ひける。元秀少も動かず、前後の敵に心を配り引返し、一卷りに戰ひければ、敵もさまで追はざりけり。元秀事故なく人數を城へ引取り、四邊の堀湟を深うし、切處々に搔楯をかゝせ、鹿垣逆茂木結廻し、要害をぞ堅めける。本山は、手合の軍仕損じけれども、敵は流石小勢なれば、城の山下を十重廿重に取卷き、晝夜廿餘日、息をも繼がず揉うだりける。城中も爰を專途と蒐出で〳〵防ぎ戰ひしかば、左右なう攻落さるべくも見えざりけれども、寄手は倍する大軍、新手を入替へ〳〵攻めけるに、城兵猛しと雖も、入代る勢もなく、其身金鐵ならねば、五百餘騎の兵大半討死して、殘り少なになりにける。其上俄の籠城なりければ、內には兵糧盡きて人馬飢に望み、外には援兵の救もなく、敵軍は透間もなく打圍みて、甬道を絕つたれば、糧を入るべき方便もなし。斯くては此城、一日も持怺へん事なり難し。翌けなば九死一生の戰をして、命を天道に任すべしと思ひ定め、元秀譜代の侍に、近藤の何某とてありけるを呼出し、

此間の戰に、聊味方勝に乘ると雖も、士卒過半討たれ、兵糧も盡果てぬ。賴み甲斐なき籠城して、徒に餓死せんより、明けなば雌雄を一時に決せん。さなきだに弱り果てたる味方なれば、千に一つも勝利あるべからず。よしや骼を軍門に曝すとも、名を後代に揚げんこそ武士の本意なれ。汝は譜代相傳の者にて、其身甲斐々々しき者なれば、後事を以て託す。千王丸を懷き、如何にもして重圍を出で、一條殿へ參り、元秀武運盡きて、此度討死仕候。最後に申置き、此子を君へ參らせ候と申せ。何の仔細もなく御憐愍あるべきなり。是ぞ我爲め第一の忠勤ならめと、繰返しいひければ、近藤畏つて、此年月恩澤に浴し、今御運盡きさせ給ひて、一筋に討死と思召つめられれば、身不肖なれども、誰にか劣り申すべき。是非御最後の御供をこそと願ひ候へ共、生を全うし命を待つは遠うして難く、死を輕んじ節を守るは近うして易しといへり。斯く取卷きたる圍を脫出で、未だ六歲になり給ふ千王丸殿を、國司へ奉り養育せん事は、遠うして難き事なれども、此る仰を蒙る上は、爭か亂謝ひ奉るべき。縱令肝腦地に塗るとも、千王丸殿を救ひ出し、我も命を全うして、主君の報恩に謝せ

んと、義を金石に比して忠志面に顯はれ、涙をはら〳〵と流しければ、元秀大に悦びて、頼母しき詞の末、今は思置く事なし。九泉の下に、快く眼を瞑んとて、一子千王丸を呼出し、汝幼少なりとも、父が言を能く聞け。夫名鳥は、卵の内にあつて聲衆鳥に勝るとかや。勇健に成長つて、廢れたる家を起し、我讐敵を亡して得させよと、涙と共に搔口說き、近藤に渡しけり。されども城外敵の圍嚴くして、洩れて出づべき樣もなし。近藤熟謀を案じ出し、古き皮籠に幼君を入れ參らせ、怠氣を窺ひ、敵陣の雜兵に打紛れ、其夜の四更に岡豐の城を忍び出で、兎角辛苦して、四日路ありし幡多郡の、一條殿へと急ぎけり。

岡豐落城附長曾我部元秀生害の事

斯くて長曾我部元秀は、一子をば近藤に渡しつ、其外故老譜代の者共の妻子をも、密に忍び出し、今は心に懸る事もなし。翌けなば敵軍大勢にて攻め來るべし。いざや手分を定めんと、討殘されたる兵共を招き寄せ、我今度の籠城、糧盡き兵疲れて、運

命旦夕に究りたり。五事七計の籌略施すに力なし。何を便に守り居て、徒に飢を待たんより、敵寄せなば華々しき軍して、武名を永く後世に流へんと思ふなり。面々粉骨を擢るべしと、城門を押開き旗を伏せ、金鼓を覆ひ鐵炮を連べ、弓推張り一整に備を配り、百騎に足らざる兵共一場に並居て、寄せ來る敵をぞ待かけたり。さる程に東雲漸く棚引いて、五更の天も明けゝれば、本山、城の體を能々向上、あれ見給へや數日の籠城に、糧盡き勢窮つて、人ありとも見えず。いざや一當當てゝ試みんと士卒を下知し、太鼓を打ち鐘を鳴らし、九折なる山路を、鬼聲上げて攻上る。吉良・山田・大平も、續いて後陣に押して行く。斯りけれども城中は、伺近々と引寄せよとて、鳴を潜めて待ちけるに、本山、曾て方便あるとは知らざりけるが、鞭を指して士卒を勇め、敵早落ちたりと覺ゆるぞ。誰にても一番に城門へ乘込みたるを、高名にせんと呼ばはれば、我れ劣らじと塀際迄攻寄せ、一息に揉破らんと爭ひ進む。すはや此城、目前に落ちなんと見る處に、待構へたる鐵炮、流星の如く、射出す矢、雨よりも繁く、霰よりも猶激し。稻麻竹葦の如く打圍みたる敵兵、打つ度射る度に、あだ矢

一つもなかりければ、寄手案に相違して、城中備ありけるものをと、引退かんとしける所を、元秀六七十騎の兵を先に進ませ、驀地暗に突出しける。元來一死夫の向ふ所、萬卒も制するに難き習なれば、本山・吉良が兵二千餘騎、此勢に捲り立てられ、一支も支へず、堀岸ともいはず崩れ落ちて、人馬上が上に重なり、死人纍々として谷を埋む。城兵機に乘つて、逃ぐるを追つて下りければ、元秀手綱を控へ、左右を屹と振顧て、天晴兵共かな。一人當千とは、汝等が事をいふべきぞ。所詮長追しては惡かりなん。幾度も引寄せて打散さんものをと、城中へ引取らんとする處に、山田・大平入替つて攻上る。元より城兵、死を塵芥よりも輕くして、名を惜む者共なれば、去來何れなりとも、大將を一人討取つて本懷に達せんと、鏃を並べて、此を驅破り彼に打通つて戰ひしかば、何事かは以て敵すべき。八面に斬立てられ、立足もなく敗走す此間に元秀は、城中へ引取りける。誠に勝敗は兵家の常なれども、正しく小勢を以て、大敵を兩度迄追崩しけること、偏に元秀が勇略によれりと、皆人之を感じける。去程に四人の大將は、帷幕の内に會合し、如何に攻れども、城强うして即功成難く、

軍慮區々にして衆口一ならざる處に、吉良進み出でて申すやう、數日の間、味方方便を替へて攻むれば、城中も工を變へて防ぐ故に、味方只徒に勢氣のみ疲れて、多くは退屈す。我れ計り見るに、城の後は嶮を頼んで、さまで用心の番兵もあるまじ。某一軍を率して相圖を定め、後門より攻入るべし。各は二手に分れて、短兵急に攻め給へと、衆議一決せしかば、吉良千餘騎の兵を率して、後の門へぞ廻りける。斯くて今日の日も西に歿して、漸く相圖の頃にもなりしかば、本山一陣に駒を出し、逆茂木を引除け〳〵攻登る。城の間近くなりければ、勝傲つたる城兵、噇と喚いて突いて出で、風雷の激する如く、本山が先鋒を、眞逆に追下す。大平・山田千餘騎にて入替り、胄の錏を傾け、乘越え〳〵切つて入る。城卒是を事ともせず、凌雲の機を含み、一擧に死を決せんと、思切つたる事なれば、肯て聊の猶豫もなく、同音に太鼓を鳴らし、雄関羽鏃一度發する程こそあれ、鋒先を並べて驅合せ、一足も引くな〳〵と恥しめて、此に揉み彼に當り、一時計りに十餘度迄戰ひければ、其勢次第に討たれて、僅に五十騎にぞなりにける。寄手にも、本山が弟勘解由左衞門を始め究竟の兵、數多

討死しければ、攻口を少し引退く。元秀勇士の志を達へじと思ふが故に、斯迄は戰ひけれども、氣既に疲れければ、今は是迄ぞ。さのみ勢力を盡して、敵に虜られては口惜しかるべし。いざ〳〵一所に腹切らんと、城中へ取つて返しけるに、後の門より、吉良が勢亂れ入り、三ヶ所の櫓に火を懸け、所々に馳散つて、鯨波をぞ上げたりける。元秀是を拒がんとするに、烟焰四方に滿ちて、敵はや役所に入替り、旌印を立てければ、郎等に防矢射させ、元秀は密室に走り入り、腹十文字に搔切つて、煙と共に名を後代に揚げにける。討殘されたる城兵、今は誰が爲にか戰はん。大將の御供せよやとて、思ひ〳〵に刺違へ、五十餘人の兵、枕を雙べて死んだりける。

千王丸復び岡豐城に歸る事

近藤の何某は、一身の才覺を以て、十死の中に一生を得て、千王丸を伴ひ、漸と岡豐の城を忍び出で、行程日を重ねて幡多郡國司の屋形に着き、先づ側に千王丸を卸し置き、案内乞うて姓名を通じ、家老土居の某に對面して申しけるは、主人元秀不慮の

千王丸、一條房家に養はる

軍により、大敵の圍を受け、士卒數多討たせ、兵糧盡果て、空城守るに力なく、運を天道に任せて討死と覺悟仕候。一子千王丸、未だ幼稚に候へども、殿の御憐愍を以て成長致させ、亡父の遺跡をも繼がせ度存ずる間、御所樣へ進じ候樣にと申付候故、是迄供して參り候。此旨宜しく御披露あつて給はり候へと、慇懃に申上ぐる。土居熟聞いて、近頃神妙なる御事かな。急ぎ台聽に達すべし。暫く是に待ち給へと、式代してぞ入りにける。土居頓て御前に罷出で、元秀敗軍により、一子千王丸を家臣近藤是迄伴ひ來りたる由、具に申上げければ、房家公聞召され、兩人を召出し、御對面ありて淚を流させ給ひ、元秀が事は力なし。千非萬悔、返らざる水の如し。幸に恙なく千王丸を具し來ること、汝が忠貞、古の程嬰・杵臼にも過ぎたり。窮鳥懷に入れば、獵師も是を放つとかや。心易く存ずべし。我れ養育して成長ば、亡父が讎をも報せさせ、本領安堵相違あるまじ。思へば元秀は、能く人を知るの明あつて、汝が如き忠臣を扶助す。汝又義を守つて、幼君を世に立てんとの心底、誠に主從共に亦あるまじき者共かなとて、甚だ感賞し給へば、近藤敬んで承り、誠に有難き御諚かな。

身不肖に候へども、譜代の列に交り、元秀の大恩を蒙りし身の、此度主の專途をも見果て申さず、おめ／＼と存命仕候事、全く本意に非ず候へども、元秀の遺言辭するに言なく、誠に勇は命を惜まず、忠は私を顧ずとかや。甲斐なき命を永らへ、大敵の圍を出で、只今御前に伺候仕候事、返々も面目なう奉存候。千王丸儀は、元秀と思召し、御憐を奉願候。某暇申受け、腹掻切つて、先立ちたらん故主の供を志し、冥途黄泉の下にて追付き候はんと、涙に咽び申しければ、國司重ねて仰出さるゝは、申す處至極せり。去ながら汝、小節を守つて只今切腹せば、一つには元秀が遺命に背き、二つには千王丸幼稚にして、如何計り心細く思ふらん。此上は隨分命を全うして、千王丸を傅立つべしと、再往理義明白に御諫ありしかば、近藤至極の道理に服し、兎も角も此上は、御諚を背き申すまじと、御返事申上げければ、則千王丸をば御側に置かせられ、朝夕痛はり思召し、近藤は御家人に召加へらる。其後元秀が修善の爲とて、闕翁寺常秀居士と法名を贈り、城下の明榮寺にて法華供養ある。是を見聞く國中の貴賤諸士、賴母しき國司の御意かな。此殿の御爲ならば、一命を奉らんと、彌忠勤をぞ

勵みける。斯くて千王丸は、國司の御憐愍により、御傍を離れず侍りけるに、元秀が事など思召出され、此子が生質凡ならず、眼差の賢さ、廢れし父が跡をも興復しなんと、行末賴もしく思召し、等閑ならぬ御寵愛の中に、程なく其年も呉竹の、一夜に替る春の氣色、間關たる鶯の聲に誘引れて、花の下に霞杯を廻らせしも、昨日の空に別れ來て、山時鳥に人を戀ひ、菖蒲の蔓にかけし白露は、五月の秋の涼しさも、いつしかあら金の、土さへ裂けて照す日に、避暑の輿を催さんと、國司近臣を御引具しあり、例の樓閣に御登りまし〳〵て。水陸の珍肴を陳ね、獻酬度々に及び、杯盤頗る狼藉たり。斯くして夏日の長きも、歡樂の餘りに、短う覺えさせ給ひ、南面の御簾高く捲げさせ、彼文帝の「薰風自南來、殿閣生微涼」と吟ぜしをも思召出させられ、御當座の詩歌共ありて、悠々と四方の風景を御覽ある。千王丸も御膝近くありけるに、國司輿に乘せさせ給ひ、如何に千王丸、此杆の上より庭上に飛下りなば、父が名跡を取返して與へんと御戲ありければ、稚心にも如何計嬉しかりけん、する〳〵と走り寄り、一丈餘り高き樓閣の欄杆より、庭上へ飛下りて、莞爾と笑ひ立返る。國司御覽じ、掌を

元國岡豐城に入る

抵つて御悅びまし〳〵、未だ幼き身として、恐るべき所を能くも飛びたり。流石に元秀が子なりけるよな。誠に將門出將と、古人のいひ置きしも虛語ならずとて、則其名を宮内少輔と改め下され、尙行末成長を待つて、所領をも取返し取らせんと仰出され、彌數刻の御酒宴時移り、半夜の玉漏聲頻なれば、房家公樓を下り給ひ、諸士も各退散す。去程に歲月流るゝが如く、暑往き寒來つて、宮内少輔行年十五歲にもなりしかば、國司より本山・山田・大平・吉良へ御下知ありけるは、先年元秀を討ちし事、兩方意趣あるに於ては、倶に訟へて裁斷を待つべきの所に、汝等我意に任せて元秀を討つ事、甚だ以て謂なし。其節急度糺明を遂ぐべかりし所に、寛仁を以て免許せしなり。然れば所詮長曾我部が本領二十枝江村鄕を、宮内少輔に返し與ふべしと宣ひて、頓て岡豐の城を修補し、入部仰付けられければ、方々へ分散せし譜代の諸士、此彼より駈集り、涸魚の水を得て大津の浪に躍り、春雷一度震うて、蟄虫啓くが如く、二度家業を相續す。其後宮内少輔に男子四人女子二人出生す。長子は女子、（本山式部少輔の妻）嫡子元親、天文八年己亥五月に誕生す。二男親貞・三男親泰・四男島彌九郎、末は女

子汝川玄蕃の妻にてぞありける。元親が時に至つて、武威次第に張大になりて、土州は申に及ばず、阿讃豫の三州も、多くは下風に禮を執る程にぞなりにける。

元國女嫁二本山式部少輔一事

去程に宮内少輔元國は、岡豊の城に再住して、先祖の箕裘を繼ぎ、武光漸く盛に、郡民德に從ひ、士卒尤も勇壯なりしかば、父の讎を討つて鬱憤を散せんと思ひ、明昏肺肝を苦しめ、國司へ度々此旨を願ひしかども、卒爾に許し給はねば、空しく年月を送りける。爰に本山・吉良・山田・大平は、一旦の憤により、元秀を討亡し、領地を配分せしかども、其頃千王丸は幼少なり、誰あつて其仇を報いんとする者もなかりし故、心の儘に行ひけるに、千王丸成長し、國司の御下知として所領をも取返され、宮内少輔に與へ給ひ、其勢廣大になれば、先亡の讎を報いんことを恐れ、各薄氷を蹊む思をなせり。實や傷を蒙る鳥は、高く飛んで羽を敲くと雖も、必ず地に墮る害あり、鈎を含む魚は、深淵に入つて尾を搖ると雖も、遂に陸に裹る患あり。中にも本山某は、張本

たるに由つて、何卒後難を遁れん爲め、或時國司の御所へ參り、家老土居・羽生を以て言上しけるは、先年某等、元秀と鬪諍に及びし事は、元來取結びたる意趣あるに非ず。元秀管領の威を藉つて、郡主諸士をも蔑如にせし故、一旦の威を損ぜん爲め、馬を向けし處に、慮らざりき元秀戰死仕候段、軍散じて後甚だ後悔、是非に及ばず候。幸ひ宮内少輔女子多ければ、一人申受け、某が一子式部少輔に妻せ、一家の好を結びなば、某元秀に遺恨なき心底も顯れ、宮内少輔も心解け、國中靜謐の基ならんと存候。恐ながら此旨御披露あつて給はり候へと、餘議なく申入れければ、國司此由聞召し、余も日來は此事を思ひしなり。本山は、宮内少輔爲に親の讎なれば、終には一戰に及ぶべし。さあらば國中の騷動なるべきに、今本山式部少輔へ女を送り、一家の好を結ばゞ、舊年の憤なく、一國安堵の思をなすべきなりとて、宮内少輔を召され、此事を仰せ談ぜられければ、元國承り、某幼少にて父を討たせ、立寄る蔭もなき處に、殿の御憐愍により、斯樣に成長仕り、剩へ亡父遺跡恙なく仰付けらるゝ事、再造の鴻恩身に餘れり。兼々本山はさす敵なれば申すに及ばず、自餘の徒黨の輩をも盡く打

亡し、亡親が寃魂に報ぜんと存ぜしかども、殿の御機嫌を恐れ奉り、時節を窺ひ今日迄默し候ひき。夫父の讎には、共に不戴天とこそ申すに、況や彼と婚姻の睦をなさば、武名の瑕瑾、千歳の嘲哢なるべし。本山元來某が宿意あらんことを恐れて、假に好を求む。去乍ら餳飴を以て小兒の啼を留め、石牛を勸めて、蜀侯が弊に乘ぜんとする忻は、某愚蒙なりと雖も、苟も執らざる所に候。此儀に於ては、全く御免を蒙るべしと、言葉を放つて申上げけれども、國司再三當然の理を盡し、御教訓ありしかば、力及ばず吉日を擇み、嫁娶の儀式結構し、本山が館へ、惣領の女をぞ送りける。國中の諸士民屋の者迄も、宮内少輔成長ありしより、弔合戰あるべしと安き心もなかりしに、兩家好を結ばれし上は、弓箭の騷もなかるべし。此夜より枕を安んじて臥さんことと、偏に國司の御賢慮より出でたりと、皆悅び合へりけり。

長岡合戰附山田監物戰死の事

是に長岡の郡主山田丹波守は、先年本山が催促に應じて、元秀を討ちし者なるが、其

行狀放埒无道にして、常に舞妓美童の謡歌を弄び、一向武道の沙汰もなく、月に酔ひ花に狂じ、綾羅を褥とし錦綉を帳とす。夫のみならず上方より艶女を數多召寄せ、樣々の婬樂、酒池肉林の奢、是を見聞く人毎に、眉を顰めぬはなかりけり。家老山田監物是を嘆き、時々に諌言を勸めけれども、丹波守曾て聞も入れず、奢侈日に長じ、遊興止む時なかりしかば、同氣相求め同聲相應ずるの習、讒諂面諛の佞人共傍に徘徊し、却て監物を惡ざまに讒言しける間、監物此體を見て大に歎き、此上は力なし。當家の滅亡遠きにあらずと、世を無端に思ひ取り、出仕を止め蟄居してこそ居たりけれ。去程に元國は、常々怨讎の憤切なりしかば、所々に間者を出し、山田が行跡無道にして、士怨み民困める由を聞きて大に喜び、時已に至りたり、山田を討取らん事掌握の中にありと、弓を打せ矢を矯せて、軍のならし速なり。近年世上靜謐にして、上下干戈の愁を忘れし時なれば、民是を只事ならずと、彼にひそめき是に囁く。監物是を聞付け、重ねて丹波守を諌めけるは、頃岡豊の城には、若干の兵器を拵へ、軍の用意頻なる由傳へ承りて候。當城は隣鄕といひ、第一元秀戰死の時も與力せし事な

れば、旁以て油斷すべきに非ず。備なきを攻められ、不意に押寄せられなば、防ぐに方便なかるべし。豫め用意あるべしと、辭を盡して諫言す。丹波守聞きて、何とて左樣に慮の拙き事を申すぞや。父の敵を討つならば、本山こそ正しき張本なれども、夫をさへ婿舅の好をなす。況や其餘の者に於てをや。且又武士の兵具を集むるは珍しからず。世上の風聞詭ならんと、曾て驚かざりければ、監物再び申しけるは、本山と緣を結びし事、是宮內少輔が一心より發りたるに非ず。國司の仰止む事を得ざればなり。後は必ず本山をも討亡すべし。其上武具を用意する事、尋常に超えたり。殊に宮內少輔は、兵法の達人と聞く。近く敵を襲はんと欲せば、必ず示すに遠去の形を以てし、遠く敵を襲はんと欲せば、必ず示すに近進の形を以てす。御油斷不可有と、樣々に諫めけれども、山田一切用ふる氣色なく、終日亂酒遊舞に日を昏し、悠々たる風情は、偏に家運の末とはいひ乍ら、うたてかりし事共なり。然るに宮內少輔は、山田を不日に討亡さんと、用意一整に備ひしが、山田が家老監物は、當世の英傑にして、張良・陳平が謀を隱し、黥布・彭越が勇ありと聞及びし者なれば、

元國、山田丹波守を攻む

如何なる奇謀を廻らしやせん。卒爾して不覺を取るべからず、衆の好んずる所をも之を察し、衆の惡む所をも之を察す。毀譽共に察せずんばあるべからず。いざや合戰の勝負、國人の强弱をも試みんとて、城下に相撲を初め、日々に取らせければ、近郷に此沙汰ありて、腕立する程の若者共、毎日に引きも切らず集まりける。山田郡は、城下より纔に卅八町を隔てたれば、諸士鄕民をば擇ばず、大半相撲に出でにける。かくて山田衆・岡豐衆と分れて勝負を合せけるに、毎日岡豐衆勝になりければ、宮内少輔大に悅び、軍の先兆明かなり。速に兵を向くべしと、用意の兵犇々と備を配り、軍令嚴しく言渡し、天文廿年の秋、其勢合せて五百餘騎、山田が居城長岡郡に發向す。山田の城には此事を聞きて、丹波守を始とし、諸士步卒に至る迄、周章騷ぐ事斜ならず、弓よ鎗よと犇けども、日頃遊興をのみ事とせし上、夜前の宿酒未だ醒めず、宇呂絕廻つて、墓々しく武具を帶する者もなし。浩る處に山田監物、兼て期したる事なれは、手勢纔に百五十騎、花奢に物具堅め、一番に馬を乘出し、抑是は當今に仕へ奉る臣下なりと、高らかに謠ひ、丹波守に對して申す樣、日來諫言せし事を、今ぞ能く思

召合せ給はん。中樂遊宴の、此時御用に立つやらんと、齒噛をして罵りければ、丹波守も面目なくやありけん、遙に監物が後に引下つて打出で、町外れの少し小高き所に陣を張る。透もあらせず、寄手の勢一時に押し來り、丁楯の陰より、差詰め引詰め矢種を惜まず射たりければ、山田が兵、楯の陰に隱れんと色めく處を、拔連れて短兵急に驅破る。元より宮内少輔が先勢、日來調練せし士卒、敵に逢うては、迅箭の天を過ぎ、衝風の草を刈るより速なれば、山田が弱兵堪り得ず、十方に散亂す。丹波守は、未だ軍の前よりも、早落支度のみして、旗打絞り、懸に遠見して居たりけるが、味方の弱氣なるを見て色を變じ、落方に目を懸け、更に一度も扶け合せんともせざりければ、監物見るに堪へずやありけん、丹波守が前に馬を雙べ、眼を濶と見出し、殿は何とて斯程迄わろびれ給ふぞ。よし〳〵監物が老後の思出に一戰して、敵味方の眠を覺させん。今生の名殘是迄とて、百五十騎を一隊にし、敵の村立ちたる中へ突いて入り、猛虎の、千羊の陣に入るが如く、八面に切つて廻る。寄手是を鶴翼に開き合せ、中に取圍まんとすれば、魚鱗に轡を雙べて、左右に相付け背いて打つ。呂尙が祕

山田監物戰死

せし鳥雲の陣、奇正の兩道、互に存知の術なれば、陽に開き陰に閉ぢ、是に廻り彼に戰ひ、須臾に變じて、死を一圖に決し戰ひしかば、赤旗白旄目を驚かし、雷鼓群箭心を惑す計りなり。寄手も是に辟易し、進み兼ねてぞ見えにける。監物元より討死と期したる事なれば、大音上げて、今日の寄手の先陣を、江村小備後と見るは僻目か。監物が老年の力をも見、尋常に勝負せよと罵りければ、備後守、何かは少しも猶豫すべき。三尺餘の太刀を振つて、陣面に馬を躍す。監物も長刀を取直し、受けつ開いつ、伎能を顯し戰ひしが、後には太刀長刀を打棄てゝ、馬を馳寄せ無手と組む。監物不當の大將なれども、老年の悲しさ、力増りの備後に組伏せられ、些とも働かさず、鞍の前輪に押伏せて、首弗と搔落す。山田是を見て、肝魂も天外に飛んで、一散に馬を返し、城中指して逃げて行く。寄手是を退さじと、先陣後陣一手に合せ、積水の地を決し、堤頭の壞るゝ如く、追掛け〳〵討取りしかば、暫時の間に山田が勢、殘少なに討なされ、城中へ逃入り、門を閉ぢんとせし處に、寄手透間もなく突いて入り、卽時に二の丸迄乘取りけり。丹波守は城中へ入らんとせしが、餘に手痛く追詰められ、城の山

山田丹波守捕はる

下を筋違に、六七騎にて落ちて行く。元國が家臣久武内藏助、遂くも敵に後を見せ給ふものかなと追詰め、高手小手に縛め、鞍坪に縛付け、追立て〱味方の陣へ歸りける。斯くて元國は、降人共を許し本領を與へ、山田が城にも守護を入置き、岡豐城へ凱陣す。丹波守は惰弱にして、無用の人なりしかば、其儘置くとも何事か仕出さんとて、命を助け、邊鄕に少地を與へて置きにけり。元國が思慮の程、天晴知なり仁なり勇なりと、末賴もしくぞ覺えける。

四國軍記卷第一終

四國軍記卷第二

永濱城夜討附元國病死の事

長岡郡の內、永濱といふ處に城あり。其地の要害、南北は谷深くして、石壁雲に聳え、東西は途羊腸を經て、上る事數十町なり。若一夫怒つて關に臨む時は、萬侶も之が爲に過ぐる事得難く、誠に金城湯池の要害なればとて、本山玄蕃頭之を領す。本城朝倉より行程八里、岡豐よりは三里の入海を經て、小舟ならでは往來を通じ難かりけり。或時本山、此城に門を建つべしとて、工匠を選みけるに、岡豐の城下に一人の大工ありて、技能尤精しく、恰も魯般が妙を得たれば、彼を雇ひて此門を建てさすべしと、岡豐へ使者を以て、しかぐの由をぞ申遣しける。されば宮內少輔は、山田丹波守を傍にして、長岡の城を手に入れしより、本山は敵の張本なれば、此次に攻亡し

たく思ひしかども、國司の仰を背き難く、兎角延引しけるに、本山が使者の趣を聞き、是究竟の方便なりと悅び、先づ永濱の城を攻取らば、本山怒りて推寄すべし。彼に軍を起させて、快く勝負を決せんと、臆心に謀を廻らし、工匠を呼寄せ密に申しける は、汝永濱に行きて門を建つるならば、外より大勢を以て推す時は、貫木迦るゝ樣に拵ゆべし。此事仕負せなば、過分の褒美を取らすべし。構へて人に悟らるゝなと、能能言含めければ、工匠仔細候はじと領掌し、永濱へ立越え、材木を選み新を初め、不日に門を建てゝ、貫木外より推す時は、放るゝ樣にぞ拵へける。斯くて宮內少輔には、翌年春家老共を呼集め、我れ父の敵を目前に置き乍ら、國司の御免れなきとて、惘然と明し昏す事、世間の嘲哢免れ難し。欲する所存もある間、永濱の城を卽時に乘取るべし。さもあらば本山怒つて攻め來らん。夫こそ望む處なれば、十死一生の軍して、父の敵を滅すべし。夫兵法にも、戰日をば知らしむべからず、戰地をば占ふべからずとこそ見えたれ、密に用意せよやとて、究竟の精兵五百餘騎、艜舟三百餘艘に取乘りて、弘治二年六月初、永濱の城へと押渡る。程なく船岸に着けば、混々と下り立

元國、永濱城を陷る

ちて、城戸際迄馳上り、城門を押しければ、貫木は地に落ちて、扉は左右へ開けゝる。元より不意に出でし計事なれば、城中曾て知る者なし。思の儘に込入り、手々に松明振立て〳〵、連々と立雙べたる役所々々に、一時に火をぞ懸けたりける。折節海岸風烈しく、餘烟東西に覆ひて、鬨の聲千雷の震ふが如く、八方へ切つて入りしかば、城中是に驚いて、上を下へと周章騒ぎ、鎗よ長刀よと引合ふ中に、立所に切つて落さるゝ者數を知らず。人なき處を行くが如く、寄手已に本丸迄亂れ入り、當るを幸に薙いで廻る。城主玄蕃頭も、亂軍の内にして討たれ、其餘の者共も、深手薄手負はぬ者なく、或は堀障(はりがけ)ともいはず、落重なつて手足を碎き疵を蒙り、纔に命を助かりて、皆散々に逃行きけり。斯くて宮内少輔は、一時に城を乘取り、士卒に向つていふ様は、我れ不思議の謀を以て、此城を攻め落せり。今は本山定めて攻め來るべし。幸當城は、要害堅固にして、究竟の地の利を得たれば、爰にて敵を待つべしと、俄に四壁に掻楯かき屛を塗り、切所々々に柵をふり逆茂木を引き、細作を出し斥候を上げ、密く手分を堅めける。然る處に宮内少輔、翌日より病に冒され、心地例ならざりしか

ば、子息元親に永濱の城を守らせ、我身は岡豐の城に歸りける。さればにや生老病死の世の習、宮内少輔元國、病氣逐日重りしかば、元親を呼寄せ、我れ存生の内、父の敵を討亡し、其種類を絕たんと思ひ、寢食を忘れて謀を設け、先年已に山田を攻取り、今年又永濱の城を乘取る。斯らば定めて本山馬を向けん。是を討たん事最安かるべしと、如此方便を廻らせしに、思はざるに重病を受け、我命草露に齊し。我死して後、汝家業を相續して、譜代の家臣郎等を撫循し、郡民を懷けよ。汝が爲には祖父の敵、我爲には父の敵なれば、盡く討滅し、我孝養に手向けよ。いかなる佛事供養をなすとも、是に過ぎたる作善はあらじぞ。凡そ敵を亡し國を治むる法、其備なうして叶ふべからず。備といふは、第一士卒の心を得るにあり。將士の心一致なれば、戰場に臨む每に、變化應戰自在にして、百戰利あらずといふ事なし。汝能く心に記して忘るゝことと勿れと、つゞまやかに庭訓を遺し、又家老諸士に向つて申しけるは、我れ平生の宿念未だ果さず、不幸にして中道に卒す。尤哉人の將に死なんとする時は、其いへる事善しと聞く。汝等元親を輔佐して、返すぐ〵も怠るゝ事勿れ。我れ死せ

ば、本山定めて寄せ來るべし。軍の圖を放さず、兼て備を設け、忠戰を勵むべしと、懇に遺言し、元親を始め家老の面々迄、悉く訣別して、早々返られよとありければ、元親紅涙袖ひぢて、離れ難く見えけるを、人々漸々と諫め拵へて、永濱へぞ歸りける。其翌日、元國年壽五十四歳にて死去の由、永濱の城へ聞えければ、城中左右の手を失ふが如く、悲み嘆きしかども、元親今年既に十八歳になりければ、人々是に安堵をなしてぞ補佐しける。或時元親、秦泉寺豐後を召して申しけるは、父宮内少輔卒去せられし事は、歎きても又餘りあり。然れども邪氣虛に乘ずる習なれば、本山定めて近き內に押寄すべし。我れ若年より父に隨つて、戎馬の間を奔走すと雖も、大將の心持、兵法の奧義を、未だ精しく諳んぜず。汝は數度の戰に、武功の譽ある者なり。逐一我に敎へよとありしかば、豐後守は承り、夫れ兵を學ぶの道は、務擥英雄之心、賞祿有功、通志於衆、治國安家得人也。されば心性を悟り、諸民を親愛するを上とし、計謀に依つて學ぶを中とし、戰術を貪り習ふを下とす。故に古の善く兵を治る者は、德義已に備はり、才智萬人に秀で、勇能千人に先立つ。是を以て能く士民德

に懐き、諸兵心を一にし、謀神に通じ、戰術奇妙を盡す。是を將の三德と號く。其上軍を出すに、天の時を明にし、地の利を察し、人の和を第一として、彼を知り己をば知る。百戰ひて百勝つ。是兵の本なり。其外法をいへば、魚鱗・鶴翼・堅甲・破軍・進戰・控罄・退鬪・利變之術・摧レ堅挫レ鋭。奇正・突衝・六花・八陣・五位の兼備・四十八個、七十二種、三百八十四個の兵略、不レ可二擧言一。第一國を治むる者、聖賢の道を以てせざれば、萬代不易の基をなし難し。能々御工夫あるべしと申せば、元親甘心胸に徹し、日夜に孫吳・呂尙が書に眼を曝し、淮陰・諸葛が術に意を用ひ、武略日に長ぜしかば、士卒水魚の思をなし、末頼もしくぞ見えにける。

本山永濱の城に寄する事

去程に本山の何某は、舊寇の憤を散ぜんが爲め、元國が女を娶りて、兩家婿舅の好を結び、今は諸事心解けてありける處に、不意に永濱の城を夜討にせられ、玄蕃頭も討たれしかば、大に怒つて不日に馬を出し、一人も殘さず討取らんと怒りしか共、兎角

事調はずして、暫く猶豫せし處に、宮内少輔重病にて死去し、其子元親永濱に在城すと聞いて、天の與ふる處なり、何ぞ元親如きの小兒の爲に、鬱々として日を送らんや。卽時に踏潰し、永濱の城を取返さんと、軍勢を催促し、都合其勢二千餘騎、元親が籠りたる永濱の城へと進發す。元親此由を聞きて、夫れ蟋蟀は秋を待つて吟じ、蜉蝣は陰を以て出づ。尊父新に死して改替の節なれば、本山推來らん事は、兼て思設けし處なり。寄手は定めて目に餘る大勢なるべし。麁忽の振廻あるべからず。殊に本山は、正しく祖父元秀の敵、宮内少輔死去の折柄も、くれぐ\／此事をこそ申し置かれしなり。凡そ師(いくさ)には、輕重の節、畏侮の權あり。屈伸擧幾変閲の間なるをや。旁以て今度の軍仕損じなば、亡父への不孝といひ、且は我初めての軍立なれば、國中の物笑となるべし。諸軍心を一にして、蒐くるとも引くとも、法を亂ることあるべからず。小敵の堅きは、却て大敵に擒にせらるといへる事はあれども、柔剛は時の變によるべし。此度の手合に於ては、譬味方は引くとも、此元親は一足も退かず、死を善道に守りて、有無の勝負を決せん。虎穴に入りてこそ虎をも得べけれと、諸勢を

勵まし、江村備後守を先鋒として、手勢纔に五百餘騎、永濱の城を十八町出張して、鹽堤を本陣とし、旗旌の陰に馬を躍らせ、敵今やと待ち居たり。斯くて本山は、二千餘騎を二手に分けて攻め來る。待設けたる味方の勢、敵の急途に勞れ、旌の色も調はざるに、逸を以て勞を討て、敵に足をためさすなと、江村備後守鎗提げ、一番に馬を乘出し、兎角の問答にも及ばゝこそ、式部少輔が千餘騎にて控へし中へ、會釋もなく駈入り、十文字巴の字に破立て、大勢を活と追卷る。後陣の兵入替つて、江村を中に押取籠め、火出づる迄と戰うたり。元親が先魁猛しと雖も、敵の園重なれば、所々に蒐隔てられて、兵多く討たれけり。元親馬の鞍に突立ちて麾を振上げ、旗本の勢を繰出し、江村が軍を助けんとする處に、敵二騎元親を目懸け、一文字に駈來り、前後より切つて懸る。元親心早き若武者なれば、勇を振つて、前なる敵を一鎗に突止める。後なる敵、元親が弱腰に掴み付くを、さしつたりと引寄せんとしけれども、敵もさすが剛兵にて、少つとも動かざれば、鎗の石突を取延べ、後樣に突きけるに、敵是を事ともせず、腰刀を拔かんとしける内に、元親が郎等落合ひて、終に首を討つた

元親、本山勢を破る

りける。元親が旗本の勢は、迫の外に拒み戰ひしが、大將自ら敵に當り給ふぞとい
ふ程こそあれ、久武・桑名・中內・國吉・野中・秦泉寺・江村・下田等に至る迄、我先にと引
返す。寄手は是を敗北すと見てければ、餘すな洩らすな討取れと、喚と喚んで、我も
我もと、備を亂して追うて行く。元親態と弱々と敵を受け、濱際指して退きしかば、
敵愈機に乘つて、十方に分れ追ひ來る。元親飽迄敵を勞らかし、海岸に旌を備へ、味
方の兵を勇めて曰く、後はさしもの大海なり。一足も退く時は、潮に溺れて犬死せ
ん。進んで敵を追散らせと、大音上げて下知すれば、一度に嚏と返し合せ、電光の激
する如く、東西より相掛りに、颯と亂れて南北へ、追つつ卷つつ戰ひしかば、本山がさ
しもの大勢追立てられ、凝雲の山の岫を出づるが如く、引行く勢は自ら、押止むべき
やうぞなき。元親が活卒須臾に變じて、白刄は日に耀き、紅波さながら楯を流す。
本山も是を限りと士卒を恥しめ、蓬くも逃ぐる者かな。敵は小勢ぞ。此にて返せ、
其にて止まれと下知すれども、大勢の靡き立ちたる曲なれば、主從親子の討たるゝ
をも助けず、我先にと、朝倉を指して敗走す。元親追討に敵の首三百餘級討取り、勝

鬨を噇と上げ、鬨々と城中へ引取りける。宮内少輔死去の後は、一國共に、元親は性質懦弱にして、長曾我部の家も衰微なりと、嘲く者も多かりしに、今度の合戰其圖を放さず、智謀勇氣兼備して、尤も大將の才なりと、一條家の人々を始め、郡主國人に至る迄、舌を卷きて稱嘆せり。

元親元服并秦泉寺合戰の事

元親は、永濱の合戰に十分の勝利を得て、岡豊の城へ凱旋し、頓て故宮内少輔元國の遺言に任せ、北谷に一場の伽藍を建立す。其莊嚴善盡し美盡し、珠を磨き金を鏤めたる有樣は、誠に邊鄙には、曾て見ざりし美麗なり。斯くて智德兼備の禪僧を請じ庄園を寄附し、百人の僧徒を聚め、一千部の法華經を讀誦せしめ、瑞應覺世居士と法名を贈り、忌日々々の佛事作善は、さぞ亡魂尊靈も、成佛得脫し給ひなん。其後は國中暫く穩にて、上下兵馬の勞を忘れ、田夫村老も、時に頌ひ衢に抃つ思をなせり。扨元親は、國司の御前に於て、吉例の如く元服仰付けられ、宮内少輔に任ぜしめ、御機

元親、秦泉寺と戰ふ

嫌他に殊なりしかば、時の面目世の聞え、勢權日々に盛なり。されば順逆の境は、索へる繩の如くにて、其年の秋、江村備後守、老病治術盡きて世を去りし由告げ來れば、元親甚だ愁歎し、あゝ當家奕葉の功臣、智勇共に兼備へ、萬事に付けて頼もしく思ひしに、我功未だ成らず、半途にして羽翼を失へり。惜いかな江村、痛ましいかな備後守と、悲涙聲を呑む計なれば、聞く人君臣の恩情を思遣り、袂を沾らさずといふ事なし。則備後守が嫡子江村孫左衛門、家督相違なく相續す。其性質人に越え、程なく國柄を執つて、元親を輔佐しける。誠に此父あれば此子ありといへる事、今ぞ思ひ合せたる。其比同郡の主秦泉寺大和守死去して、其子掃部助遺跡を繼ぎけるに、彼城下の百姓と、元親領内の百姓と、割境の論ありしが、田夫野人の癖として、纔の事を言募り、後は掃部助と元親兩人の確執となつて、圖らざる一戰に及ぶ。其故は、秦泉寺大和守迄は、元親に屬して、萬づ支配に從ひしが、掃部助其身の武勇に誇り、萬事我意に任せしに依つて、手下の郎等士卒迄も、元親に畔きけり。元親大に怒つて、掃部何者なれば、一己の私意を擅にして、我が下知に應ぜず。祇今（たゞいま）某に向つて楯を擁（つ）

かん事、是自業自得果を招く者なり。一時に踏潰して、世間の見激にせんと、三百餘騎の兵を引率し、江村郷の長堤に出張して、小河を隔てゝ陣を取り、敵渉さば、一卷に河中にて擊止めんと、旌旗隊伍整々焉として控へたり。秦泉寺之を聞きて、元親猥に威を震うて軍を起す。手次は兼て知つたりしものを。要害に陣を構へ、寄するを待つて戰ふべし。幸ひ江村の長堤は、前に小河流れて、敵の爲め馬の足立惡く、味方には便あり。敵を一方に受けて、變に應じ機に臨み、打出で〳〵戰ふ程ならば、如何に敵大勢なりとも、終には追崩すべきぞや。早打立てや急げやとて、百五十騎の兵を引連れて打出で、互に夫ぞと見るより旌の手を進め、雄鬨三度合せて、鳥銃を發しかけ、矢陣に時節を窺ひける處に、小勢とや見侮りけん、敵兵の先魁久武・桑名・中內、一番に馬を乘出せば、雄男の兵百騎計り、鎗衾を作り突出す。掃部助は、元よりしたゝかなる者なりしかば、究竟の精兵を勝つて一所に屯し、一聲わつと喚き叫んで、淸嵐霞を撥つて、朝日の野邊に向ふが如く、命を塵芥に比し、面も振らず戰ひける程に、元親が兵、案に相違して、只一卷に驅散らされ、立足もなく敗北す。其變態、輪實

の山を摧き、盤石の卵を壓すに異ならず。桑名・久武大音あげ、元來戰場に臨んでは、存命て歸るを恥辱とこそ聞きしに、まさなくも逃ぐる者共かな。返せ〳〵と蹈上り〳〵、二三度迄はしけれども、敵早大將の旗本迄切込みしかば、救はんとするも叶はずして、近所なる敵を四角八方へ追散らし、閑々とこそ引きにけれ。此時元親が陣に、名ある兵卅八人討死して、芝居を踏留めんとする者もなく、馬物具を打捨て、一陣二陣我先にと、這々岡豐指して逃歸る。元親初度の陣を仕損じ、無念甚だ止まざりければ、重ねて士卒を向けしかども、城下迄も至り得ず、半途より伏兵の爲に追歸され、辛き命を助かりて、今は戰はんといふ者一人もなかりけり。斯くて秦泉寺は、兩度の軍に勝誇り、元親が軍立恐るゝに足らず、事の次手に岡豐をも追落さんこと安かるべしと打慢り、此程の骨折に、若者共に酒飲せんと、酒宴を設け、上下さざめき樂みける。

秦泉寺掃部助討死の事

去程に元親は、兩度の合戰に利を失ひ、剩へ若干の人數を損じ、無念日を逐つて重なりしかば、何とぞ方便を廻らし、此鬱懷を晴らさんと、晝夜寢食を忘れ、思慮工夫の外は他事なかりし處に、兼て忍びに入置きし細作歸りて曰、掃部、兩度の戰に勝利を得、元親國中に威を震ふと雖、我が術中に落ちて敗走せし士卒なれば、一人も戰ふ心あるまじ。彌軍士を催して、押寄すべしなんどいひて勢を弛べ、日夜に酒宴遊興に長じ、傍若無人なる由告げたりける。元親幸の事と打頷き、夫れ兵法に、察敵人機擊其不意といへるは、今此時なり。先に兩度の軍は、味方大勢を賴みて、卻て勝利を失ふ事、偏に敵を慢るにあり。今度は面々の命を某に賜はり候へ。有無の軍して、自他の嘲哢を雪むべしとありければ、滿座の者共申すやう、數代其家の祿を喰んで、主の爲に命を惜むべきに非ず。御諚にや及ぶ、如何樣とも御下知に隨ひ候べしと、衆口一同に申しゝかば、元親大に悅びて、先づ瑞應寺に詣でて、亡父の廟前に跪き、我れ不肖なりといひ乍ら、父祖の箕裘を繼ぐ身の、如何なれば先日の軍に、兩度迄敗軍しつらん。若し今度の軍利なくんば、士卒より先に腹搔切り候べし。生涯の御暇

元親再び秦泉寺と戰ふ

乞に參じて候なりと、鞠躬興拜し、夫より方丈に入り長老に對面し、一句の偈をぞ請ひにける。長老示して曰、寶劍在レ手、殺活可レ臨レ時。元親曰、矢已離レ弦、無ニ返廻勢一。長老曰、更無ニ吹毛一劍用得ニ麼。元親曰、空劒截ニ空八一。長老曰、正好ニ出陣一。元親悅び拜して席を起ち、扨軍勢に打向ひ、今度の師(いくさ)、勝つべき事掌握の中にあり、軍の圖を放さず一擧し、凱歌を唱ふべし。勇めや者共と三百餘騎、堂々として押寄せたり。

秦泉寺は兩度の軍に打勝ちて、將驕り士怠り、敵寄するとも何程の事かあらんと。此度は元親を、擇擊(えらみうち)にせんものをと罵つて、百五十騎の兵を前後に備へ、閑々と打出でたり。元親三百餘騎を二手に押分け、一手は川中を眞一文字に推渡つて、冑の鐵を傾け、鬨聲を嚾と上げ、入り亂れて攻め戰ふ。一手は元親百五十騎、上の瀨を渡して、敵味方の入り亂れたる橫合に割つて入り、自ら蒐出で〳〵戰ひしかば、野草變じて、血は紅葉の秋をなし、路逕に宍を橫へて、乍ら屠處の如くなり。掃部が兵過半討たれ、所々に驅隔てられ、一處に更に恢り得ず。秦泉寺是を見て、爰を一足も退かば、一人も生殘る者あるまじと思ひ、四五十騎の選兵を左右に立て、久武・桑名・中内が

控へたる眞中に割つて入り、南北に追靡け、東西に蒐立て〳〵切つて廻る。元親も擇り勝りたる兵を率ゐ、入替つて左右を包み、須臾に變じて、火水になれと揉合ひけり。掃部も自ら鎗を提げ、彼に挑み是に戰ひ、二時計りの競合に、數ヶ所の痛手を負ひ、其上度々の進退に、馬疲れて働かず、乘替に乘移らんと、少し隙ある其處を、濱田善右衞門透間もなく驅寄せ、只一鎗に突落して、敢なく首をぞ取つたりける。是を見て、掃部が左右にありし十三騎、今は何をか期すべきと、引返しては組んで落ち、分入りては刺違へ、思ひ〳〵に、死んだりければ、纔に殘る兵も、皆散々に逃失せぬ。此時池・十市・下田・廣田井・執行・西加田の何某共は、互の雌雄を見聞して、何れに敵味方すとも見えざりしが、元親打勝ちて、秦泉寺討死せしより、いつしか樣々に媚を求め、元親にこそ阿りけれ。

秦泉寺討たる

本山和睦附大平逃亡の事

斯くて元親は、秦泉寺を打滅し、岡豐城に歸りしかば、勇氣前に十倍し、兵招かざる

に馳集つて、軍門に絡繹たり。さらば事次に、先年永濱の合戰に打負け、朝倉へ引込みし本山が方へ取かけ、根を切つて葉を枯らさんと、降參の兵を合せて一千餘騎、永祿五年卯月中旬、朝倉の城へ押寄せたり。本山は、長濱の軍利なかりしより、重ねて催促に應ずる兵もなかりければ、暫く割境を守つて本城に引籠り、要害を固めてありけるが、元親、掃部助を討取つて、其勢に、直に當郡へ攻め來るなりとて、諸民の恐怖斜ならず。されども城中に楯籠る兵七百騎、何れも譜代相傳の者共なれば、少しも騷がず志を一致にして、鎗調べ弓押張り、敵寄せば一戰に雌雄を決せんと、手ぐすみしてぞ控へたる。本山櫓に上り、寄手の陣を見渡すに、元親は卯の花緘の鎧に、鍬形打つたる冑の緒を縮め、紅栗毛の太く逞しき馬に、螺鈿の鞍置かせ、其樣優然と打乘り、陣面に躍らせ大音上げて、如何に本山、先年永濱の合戰に、式部少輔が命、掌握の中にありと雖も、一旦の好を思ひ默せしなり。汝は是れ祖父の敵なれば、年來の遺恨散ぜんこと今日にあり。早打出でて勝負せよやと訇り、采幣を振立て味方に下知しければ、元親が左右に控へたる久武・桑名・中內、唯と答へて一陣に蒐出し、一手

の兵五百餘騎相續いで、亂杭逆茂木を引除け〳〵、堀際迄攻寄せたり。待設けたる城兵三ヶ所の櫓より、差詰め引結め矢種を惜まず、聚雨篠を突く如く、散々に射たりければ、さしも勢かゝりたる寄手なれ共、射白まかされて、竹束搔楯の陰に身を側め、少し猶豫ふを見て、本山も城門を活と押開き、究竟の兵三百餘騎、魚鱗に備へて蒐出し、只一卷りに追立てんとす。寄手の先魁是を見て、右左へ颯と分れ、敵を中に取圍めんとすれば、城兵一處に鋒を雙べ、弓手に相附け馬手に進む。汗馬縱橫に走回つて、黑烟虛空に蹴き、田野開けて、忽ち江壍を埋むかとぞ見えにける。年來知偶の者共、孰れも面も名も、知り知られたる親戚朋友の間なれば、家の恥をや思ひけん、一足も後へと、退く者こそはなかりけれ。元親後軍の荒手を勵まし、入替へ〳〵短兵急に進みければ、本山も新手を出して救はんとすれ共、堀際の寄手に支へられて進み得ず。あれや〳〵といふ程こそあれ、三百餘騎の城兵共、一騎も殘らず討死す。寄手彌機に乘つて、一擧に揉破らんと勇みけるに、夏の日漸く山の端に隱れ、新月林を耀しければ、元親は前なる山に陣を移し、諸軍の勞を休めける。やゝあつて元親、

執行加賀を呼びて申しけるは、夫以レ德勝レ人者は昌え、以レ力勝レ人者は亡ぶとかや。此城の形勢(ありさま)、一戰の內に攻落さんは、掌の中なりと雖も、多くの者を塵にせんは、良將の取らざる處なれば、汝城中に入つて本山に對面し申すべき樣は、連年軍を起し、郡民の騷動、是偏に御邊、祖父の敵たるに依つてなり。先年永濱の蒐合に、手に入りし式部少輔を兇し、今度の城攻にも、卽時に踏潰し、滿城を血になさんと思ひしかども、式部少輔は現在の姉婿なり。殊に數度の戰場に、若干の人を殺さん事、不仁の至なれば、暫差置く處なり。所詮御邊我麾下に降り、此城を式部少輔に渡さるべし。さあらば元の如く姉を以て、式部少輔に妻合せ、舊き怨を遺すまじき旨、委細に申演べて我に降參させよ。一つは姉君、日頃の御歎を慰せん爲ぞとありければ、加賀守承り、斯る大事の御使に、選ばれ申すこそ本意なれ。御心易く思召せ。隨分調へ申さんと、五六騎を打連れ、城下に至り大音上げ、是は元親より聊申入るべき仔細あつて、執行加賀守を差越被レ申候。門を開いて入れられよと呼ばはりしかば、本山何事やらんと、急ぎ請じて對面す。加賀守件の旨趣を相演べ、元親心底餘議なき由を申

しければ、本山聞いて思ひけるは、當時數度の戰に、一度も味方勝利を得ず。剰へ今度當城の勢、累卵よりも危く、士卒も拔々に落失せ、多くは元親に屬し、殘兵とても賴なし。元親若將と雖も、其氣象萬人に秀でたれば、遂には大業をなすべし。慣₂其弊邑₁而不₂レ親₁上郡₂者、未レ知₂英雄之所₁レ纒也とかや。式部少輔が行末とても賴ありと、子を思ふ親心、一筋に思ひ取り、早速返答申されけるは、御使者の趣承屆候。此時に至つて和睦せんずるは、本山が命を惜むに似候へば、只打死と存じ明めて候へ共、初の如く姉君を、世悴式部少輔に妻合せ給はんに於ては、某は剃髮染衣の姿となり、當郡を式部に渡すべし。向後當家の浮沈は、元親に任せ參らするなりとありければ、加賀守仕濟ましたりと悅び、急ぎ本陣に馳返り、返答の趣をぞ申しける。元親聞いて、さらば諸方の備を引取れと、卽時に重圍を甘げしかば、敵味方諸共に、皆萬歲を唱へつゝ、親子兄弟打交り、死したる人の今爰に、蘇生したる心地して、悅び合ふは限なし。中にも元親の姉君は、永濱の合戰に、式部少輔打負けしより、飽かぬ別れの衣々に、おやしさくれば東路や、佐野の船橋中絶えて、敵といふも偕老の夫なり、味

元親、大平を攻む

方は現在の弟なれば、勝つも負くるも身一つを、千々に摧きし懶思に、女心の遣瀬なく、佛神へ御祈ありしに、思の儘に和睦調ひ、二度朝倉へ歸り入り給ふ。此程の物うき事も引替へて、御祝の目出さ。申すも中々愚なり。其後本山は、式部少輔に城を渡し、落髮して宗玄と戒名し、片邊に閑居をぞせられける。斯くて元親岡豊に在りて士卒を撫育し、降人を扶けて本領を與へければ、岐川・三宮・能津なんどいへる人人も、風を望みて來り降る處に、同郡の大平、未だ麾下に屬せざるは、虎狼の心疑あるべからず。事の實否を糺明せんと、二千餘騎を引率し、岐川・執行を先鋒とし、鋒鋩聲て押寄せたり。大平此由を聞いて、當手の勢を以て、大軍に蒐合せん事、居ながら敗を招くに似たりとて、片岡・森・中村の城へ使者を通じ、合力の勢を乞ひて、手勢僅に五百餘騎、城下を半町計り出張して營をなし、前面に馬の馳場を殘して待ち居たり。間も透さず元親が兵、左右に別れて押寄せ、先陣の諸卒我れ一番に手柄を露さんと、迅雷の震ふが如く攻め戰ふ。元來元親が武勇にや臆しけん、大平が兵、身命を捨てゝ働くとも見えざりければ、大平齒嚙をなして、言甲斐なき者共が振廻や

と、自ら敵の村雲だつたる中へ破つて入り、前後に當り左右に受けて、爰を專途と戰ひしかども、寄手はさしもの大勢、殊に名を得し兵共、物の員とも思はゞこそ、切伏せ切伏せ戰ひければ、鷹雉猫鼠の違あつて、大平が兵、殘り少なに討なされ、片岡・森・中村が後詰の勢と、一手にならんと、切拔け〳〵蒐通りける。大平が宗と賴みし三人の者共は、軍初めてより、矢の一筋をも射かけず、大平數度追捲らるれども、是を救はんともせず山陣取つて、雙方の雌雄を見物して居たりしが、元親が堅陣、敵し難くや思ひけん、密に使者を通じ、各本領の地相違なきに於ては、降參すべき由言送りけるに、元親仔細あらじと領掌せしかば、卽ち三人の者共は、旗の手を立替へ、大平が勢の崩れ來るを、弓鐵炮を備へて待かけたり。大平案に相違して、賴む木の下に雨も溜らぬ心地して、彼邊那邊と逃迷ひ、阿州路指して落ちたりける。是より吾河郡元親が手に入り、稜威益盛にして、向ふ處、朽ちたるを拉く如くなれば、元親言葉には出さゞれども心中には、土佐の守護を奪はんと、籌策をぞ廻らしける。

大平阿州へ逍走

元親、吉良駿河守を討つ

吉良讃州を退去の事

元親年々師を起して近鄕を攻取り、旌旗天に翻り、宛も雲龍の機を顯しければ、國中の騷動止む時なく、一郡一城の將たる者は、俄に塀を塗り栖樓を揚げ、四邊に堀切掘らせ、我れ逸ましに用意をしたりけるに、吾河郡の師、事故なく元親勝利を得、大平歿落の後は、其力及ばざる事を歎いて、近鄕の國侍に至る迄、元親に降參せずといふ者なし。爰に土佐郡の內五千貫の城主吉良駿河守一人、未だ降參の儀もあらざれば、元親大に怒つて、近鄕の諸士、何れも當家の武威に服し來り降る處に、駿河守未だ降參の沙汰を聞かず、偏に己が大身を賴んで、我と抗衡はん心なるべし。往年祖父戰死の時も、駿河守力を合せし事、世以て隱なし。其儘指置くべきに非ずとて、舍弟左京進を先陣とし、舊士新參都合三千餘騎の着到にて、永祿六年三月中旬に、岡豊城を進發す。旌旗の春風に翩飜たるは、雲あらざるに龍蛇の動くが如く、劍戟の森々たるは、晴天の電光に彷彿たり。馬強く人壯にして、適れ見事の軍粧やと、諸人耳目を驚

せり。吉良駿河守、長臣郎等を呼集めていひけるは、元親我意に任せて近郷を攻討つ、之に由て多くは渠に降參すと雖も、我れ數代當城を領して、武威を國國に震ひ乍ら、彼が攻むるを恐れて阿り諂はん事、口惜き處なり。敵軍早大勢を率して寄せ來るの由、さあらば速に雌雄を決せんと思ふなり。等閑の師して、初度の一戰に後を取りては叶ふまじ。如何にも城を堅固に構へ、引籠りてや戰はん、打つて出でてや支へんと、衆口を考ふるに、其說區々なりければ、吉良申しけるは、近年諸國の兵亂に依つて、軍用心に任せず。されば居乍ら敵を待ちて、城の四方を圍まれては、悔ゆとも中々甲斐あらじ。地の利に依つて打つて出で、奇兵を以て敵の心を拉ぐに勝くべからず。各粉骨を擢かれよと、谷・大黑・楠村を先魁として、千五百餘騎を引率し、城下を離れ、戸の本といふ處へ出張し、側に大なる林ありけるを、究竟の手段と悅び、木々の梢に、色々の旗二三十流括付け、雜兵を籠置き馬烟を上げさせ、人ある體にぞ計らひける。去程に元親が先陣の兵一千餘騎、雄鬨をぞ上げたりける。敵の方にも、同じく聲を合せければ、山川に響き應りて夥し。矢合の鏑二つ三つ射違ふる程こそ

あれ、我も〳〵と鎗打物を提げ〳〵、駈入らんとせしが、側なる林の中に旌推立て、塵埃を上げて大勢控へたるに、吉良が本陣しどろにして、半進半退、敵を引導の備なれば、左京進是を見て、夫兵法に、虚々實々鬼神不側の術あり。此陣取の分野(ありさま)といひ、又分國の勢を考ふるに、假令伏兵ありとても、物の用に立つ者はあるべからず。慮(おもんぱか)るに敵は小勢、味方は大軍なれば、寄手の機を奪はん爲め、錫飴を以て小兒を釣るが如きの謀に、人に一箸(さき)を越されては、臍を噬むとも甲斐あらじと、左京進一番に鎗を入れければ、光富權之助・濱田善右衞門六百餘騎、吉良が先陣へ突いて入り、魚鱗に進み鶴翼に開き、術を盡し戰ひしかば、吉良が先備、叶はじとや思ひけん、ひたしさりに引入りける。二陣に控へし谷の一黨五百餘騎、味方を扶はんと、横合より蒐出す。左京進屹と馬を止め、いや〳〵長追して、味方の敗れ仕出さんより、後陣を待ちて戰はんと、人馬の息を繼ぐ所に、元親後陣の大勢を率ゐて馳せ來り、一陣に馬を乘出せば、久武・桑名・江村・岐川、八方に別れては一處に屯(あつま)り、屯りては別れ、須臾に變じて突伏せ、推伏せては首を掻く。血は流れて河の如く、屍は積んで岡に似たり。

或は手負を援けて引くもあり、或は引返して無手と組み、首を取るもあり取らるゝもあり。　修羅闘諍の分野(ありさま)、いつ果つべきとも見えざるに、日已に下春に及びければ、相引に颯と引き、互に軍は明日と、元親廿餘町退き陣を取り、手負死人を籌ふれば、三百餘人に過ぎたりけり。　末の世に至つても、戸本の一番鎗左京進と、武功の譽を殘せしなり。　元親床机に腰打掛け、諸將を近付け、今日の師、味方粉骨を碎きて力戰すれば、敵も又身命を捨てゝ戰ふ。　斯くては中々一戰に功をなし難し。　其上味方も、今は人馬勞れて、物の用に立つべからず。　夫れ敵の鋭氣を挫く事、不意に出づるに勝るまじ。　願はくは今夜物馴れたる兵を擇み、一夜擊して見んと思ふなり。　密に用意せよやとて、究竟の兵三百餘人、合符合言葉を定め、枚を含み馬の舌を勒し、其夜の三更に、閑々と打立ちけり。　頃しも三月の末つ方、山端出つる月影も、朧々と闇かりしに、裾野に通ふ春風や、外山の櫻散り懸り、勝色見せて賴しゝ。　燒すさみたる篝火も、處々に影薄く、番所々々の戍卒も、冑を脱いで枕とし、前後も知らず臥したりけり。　時分は能きぞ、素波(すは)入れと、先陣の兵三百餘騎、一度に懷中の松明振立てゝ、

吉良、讃岐に奔る

活と喚いて切つて入る。此聲に驚いて、思ひ設けぬ事なれば、諸方以の外に騷動し、やれ夜討の入りたるはといふ儘に、互に心を置合ひて、鎗よ長刀よと犇く處を、元親自ら大軍を帥ゐ、營外を打圍みて、內外より揉みに揉うで、一人も餘さじと攻めければ、何かは是に怺ふべき、周章騷ぐ其內に、吉良が一人當千と賴みたる谷・大黑を初として、究竟の兵數百人、墓々しき敵にも出合はず、處々に討死せしかば、駿河守も齒嚙をなすに詮方なく、當國の府に怺るべき樣なければ、重代住馴れし城を打捨て、其夜の明方に只一人、讃州へと落行きける。元親城中に入つて、郡民を按撫しければ、大高・板・國澤・吉松・大黑・谷・横山・稻毛を先として、土佐郡の諸士、我も〳〵と元親に降參す。されば左京進今度の働、拔群の至なりとて、卽當城の主として、吉良左京進親貞と改めさせ、其身は岡豐へぞ歸りける。抑左京進を吉良になしたる謂は、元親が丹府の深き處なり。此吉良駿河守が曩祖を尋ぬるに、右兵衞佐賴朝卿の御舍弟に、希義といへるあり。左馬頭義朝歿落の後、永萬元年當國に配流せられて、介良の庄に御坐しける。治承年中賴朝豆州に起つて、義兵を擧ぐる折柄、希義も馳下つて、

力を合せんと欲する處に、小松内府先達つて、蓮池權之頭家次・平田太郎俊遠を以て、希義を討たしむ。希義密に逃れて、夜須七郎行家が許へ落行きけるを、家次・俊遠、後を尾めて追駈け、終に吾河郡年越山にて追付き、何處迄かは逃すべきと、取圍めて切つて懸る。希義も思ひ設けし事なれば、透さず向ふ敵を三人切伏せ、四五人に手を負せ、少し徘む其隙を、前後より射すくめて、敢なく首を討つたりける。夜須七郎は、蓮池・平田が、希義を討つべき企を聞いて、是を救はん爲め一族郎等驅催し、介良の庄に馳せ向ふ所に、野々宮邊にて、希義早討たれ給ふと聞き、悔ゐ怒つてぞ歸りける。其後希義に、幼稚の一子ありけるを、夜須七郎甲斐々々しく養育し、成人の後、其器量凡常ならざれば、賴朝卿へ言上す。即ち鎌倉に召下し御對面あつて、土佐國にて三千貫の地を下されて、吉良八郎とぞ名乘りける。今の駿河守は、其八郎より十八代の末葉なり。されば賴朝卿より斷絶せざる吉良の家、此時に至つて滅亡せん事、無念の仕業なればとて、左京進を其家督になし、從類を扶助せしむる元親が、智慮の程こそ神妙なれ。

長曾我部
香曾我部
和睦

香曾我部和睦の事

斯くて元親、岡豐へ歸城ありし翌日早旦に、香々美郡の城主香曾我部景好の許より、姫倉玄蕃を使として、凱陣の喜を賀し、且は景好老年に及んで、郡務心に任せず、幸に一人の女子を持つ。願はくは元親の御舍弟を乞請けて、箕帚の妾に致度由、懇に申送りければ、元親甚だ悦びて、誠に香曾我部は、鎌倉の權五郎景政が末葉として、氏も種姓も凡俗ならずとて、則舍弟左近大夫を養子に遣し、香曾我部左近大夫親泰とぞ名乘りける。野中・姫倉・小野・國吉・馬場・萩野・五百藏・上村・野田・甫喜山・山川・伊尾喜・豐永の人々、何れも元親に降參して、無二の近臣とぞなりにける。同年の八月に、本山式部少輔病死せしに、子息未だ幼少なりしかば、元親より後見として、智勇相兼ねたる老臣を一人遣し、彼成長の其間、諸士郎從の出仕をば、岡豐へぞ致しける。是れ元親が甥なるの故とかや。

四國軍記卷第二終

四國軍記卷第三

江村鄕軍并平野彌之助合戰意見の事

爰に安喜修理亮或は山城守舍弟五郞といふ人あり。五千貫の領主にて、土佐七人の守護の其一なり。密に當國の樣を考ふるに、元親祖父の敵を討つの名を假つて、年々軍を起し、一郡縣を却し城々を乘取り、旣に從ふ者をば之を免し、從はざる者をば之を攻む。一國彼が爲に惱されて、過半元親に屬す。當郡も岡豐とは纔に五里を隔てたれば、元親攻め來らんは必定なり。居乍ら敵を引請けんは、武略の拙きが致す所、且は國家の嘲哢、一郡の恥辱なり。先んずる時は人を制するといへり。我れ彼に先達つて軍を興し、不日に追伐せん。去乍ら當手の軍兵を以て、彼が大軍に敵し難し。兵法にも、倍する時は戰ふといへり。幸一條殿へは、重緣の事なれば、彼が惡逆を擧げて加

勢を乞受け、共に力を合せて攻め撃つべしと、五日路間たる幡多郡へ、使者を以て訴へけるは、元親年々師を起し、祖父の仇を報ずるといふに事寄せて、郡縣を伐取る間、國中の騒動斜ならず。依之諸士大半彼に降參仕候。今に於ては、元親御掟を用ひず、虎狼の心を蓄へて叛逆の企有之由、風聞無所疑候。兩葉不伐尋斧柯の理に候間、急に御誅伐候べし。若し事延引せば、後難踵を不可廻候。某押寄せ討取り候はんは易き事に候へ共、勢微にして叶はず候。願はくは御加勢を賜はり候はゞ、即時に追討仕候ひなんずと、其理明白に申しければ、國司聞召し、修理亮が申條至極せり。唇竭きて齒寒しといへり。修理亮討負けなば、當城へ寄來らんずる事必定なりとて、三千餘騎の加勢を賜はり、合圖を定めて打立つべしと宣ひければ、使者時の面目不過之と、急ぎ馳返り、上意の趣演べける間、安喜大に悦び、されば手配せよやとて、手勢合せて三千に、御所の御勢三千騎を加へて、都合六千騎、永祿八年八月上旬、江村郷へと打立ちけり。元親聞之、憎き安喜が振廻かな。己が我意を本として、某を叛逆人と號し、讒言を以て御所の勢を乞受け、此處へ押寄するとや、何程の事をか

元親、安喜修理亮と戰ふ

仕出すべき。態と油斷したる體に見せ、敵を重地へおびき入れ、進退共に谷る處を討つて出で、一擧の中に彼を手捕にすべし。夫れ將は能圖〻險難〻知〻其國俗〻といへり。鏡野に伏勢を置き、敵の後を襲ふべしとて、江村孫左衞門に六百餘騎を差副へ、間道よりぞ廻しける。城中尙も手分あるべしと、矢倉々々に射手を上せ、後には矛戟の兵百騎二百騎、一勢々々備を立て、敵兵遲しと待ち居たり。去程に寄手の勢、城の山下を追取廻し、螺を吹き太鼓を打ち、鬨の聲を吐と揚ぐるや否や、安喜が先陣三千餘騎、持楯をかづき連れて、坂中迄攻上る。其時に大手の門を颯と開き、久武・桑名・中內・吉良・香曾我部の人々、坂中迄下立つて、追上し追下し、切先より火焰を出し、爰を專途と戰ひける。されども寄手大軍なれば、荒手を入替へ〳〵攻めたりけり。城兵も亦要害を便にして打出で〳〵、交代奇變の勢を回らす。夜白互に隙をあらせず挑み爭ひ、南北に作る雄鬨、兩陣に應ふる矢叫の音、天に響き地を搖かし、魚鱗に列り虎頭に進み、凌〻前後〻支〻左右〻揉合ひ〳〵、安否を一時に定め、剛膽を萬代に知られんと、子討たるれども親扶けず、主射落さるれども、郎等之を救はんとする隙も

なし。柵逆茂木を引除け〳〵、切岸塀際迄攻寄せて、一の櫓を引崩さんとする處を、元親待構へたる鐵炮を、續け様に打たせけるに、陸續として打圍んだる寄手なれば、將棊倒しをする如く、玉一つにて、二人三人打拉がれ、手負死人累々として、彌が上に重なり伏す。此勢に久武・桑名突いて出でんと勇みしを、元親暫と押止め、爰を切つて出づるならば、敵も流石退れぬ處を知つて、身命を惜まず働くべし。さあらば十分に打勝つとも、味方も多く損すべし。是古より名將の制する所なり。敵寄せば、幾度も弓鐵炮にて打止めん。其上鏡野へ向けし兵の、合圖の時も至らねば、旁以て時刻早し。敵の機を飽迄勞らし、一卷りに追下すべしと、矢の一筋をも射出さず、定(しづま)り切つて控へたり。安喜が先陣平野彌之助、修理亮に向つていふ様は、此城の分野、寛々(ゆる〳〵)と攻め給はゞ、諸方の軍士馳付けて、却て此方の後を襲はれ、城中よりも切つて出で、挾んで攻められなば、味方進退途なうして、敗北せんは必定なり。其上元親、數度の戰場に臨んで、謀神の如し。瑣細の敵に非ず。今此時を失はず、切るとも射るとも乘越え〳〵、一同に攻入り給はゞ、此城を落さん事今日にありと、謀一々圖を

元親、安喜修理亮を破る

放さず申しければ、安喜聞いて、いや／＼人をも殺さず、元親を手捕にせん事、何の難き事かあらん。各攻口を守り、外の援を防がれよと、さも悠々として在りければ、平野涙を流し、再三諫むれども、運の盡きぬる悲しさは、曾て是を聞入れず。彌之助今は詮方なく、我陣所へぞ歸りける。秋の日漸々西に沈みて、三五の月も皎々と、白日の如くなるに、鏡野へ向ひし江村孫左衞門、合圖の刻にもなりぬと、閑々と人馬を揃へ、寄手の陣の中央へ破つて入り、無二無三に切つて廻る。思ひ寄らざる事なれば、陣々一同に騷立つて、我れ撃止めんとせし處に、城中より是を見て、寄手の陣中色めくは、江村が兵、早近付きぬと覺ゆるぞ。味方より聲を合せて討つて出でよと、大手の門を押開き、雄鬨を噇と上げ、驀地暗に切つて下りしかば、寄手、前後の敵に途を失ひ、蒐合せんとする者は一人もなく、右往左往に逃崩れ、八方に散亂す。城兵伏兵一手になり、追懸け／＼慕ひ行く。元親團扇を振擧げ諸軍を勵まし、修理亮を討取らば、第一の軍功に注さんと、大音上げ下知しける。福富隼人（後號㆓飛驒守㆒）・熊谷源助（後號㆓伊豆守㆒）に詞を懸け、是程の大崩れに、荒切して通れ。小切は若武者共にさせよと、福

富が手に掛けて廿餘人討取り、熊谷源助十八人切つて落す。其外分捕高名、記するに遑あらず。都合討取る首數九百餘級なり。斯くて元親諸卒を勞ひて、靜に城中に引取りしは、武勇といひ智謀といひ、類希なる事共なり。

矢流合戰附安喜落城の事

翌くれば八月十六日、元親諸軍を點檢しけるに、相從ふ兵には、桑名丹後守・吉田備中守・江村備後守・久武肥後守・同內藏助・中島大和守・南岡左衞門太夫・福富飛驒守・馬場因幡守・野中三郎左衞門尉・吉田伊賀守・國吉三郎兵衞尉・姫倉豐後守・横山九郎兵衞尉・中內源兵衞尉・十市新右衞門。其外家の子郎等。都合其勢八千餘騎、一手は吉良左京亮・香曾我部左近大夫を大將として、安喜郡の後なる山を廻りて、搦手へ差向け、元親は諸軍を引率して、濱の手へ發向す。修理亮も重ねて兵を率ゐて、矢流山千束橋に打つて出でしを、元親が先陣八百餘騎、平野彌之助が一千餘騎にて控へたる眞中へ、會釋もなく突いて入り、東西南北へ追靡け追返し、互に討合ふ太刀の切先は、

秋の田面の稻妻に異ならず、二時計り戰ひて、兩陣へ颯と引けば、敵味方に手負討死、三百餘人に及べり。元親が二陣田中新右衞門・福富・一宮、互に先を爭ひ、蒐出で〳〵する處に、安喜が兵北村何某と名乘りて、火縅の大鎧、四尺八寸の夷物作の討刀、胄を脫いで鞍にかけ、雙の頰髭撫上げて、羆熊の如く見えたるが、大音聲に名乘りけるは、日頃安喜郡に於ては、一人當千と賴まれし者なり。此太刀は親重代、腕の力は覺えたり。先陣の大將は坐せぬか、北村が力量をも御覽ぜぬかと、傍若無人に見えける處に、一宮飛驒守之を聞き、各御免あれ。此敵の口の惡さよ。某に賜はれと、馬を陣面に躍らせ、大長刀を提げ、兎角の問答をも言はず、北村に渡し合ひて切結ぶ。互に聞ゆる勇士なれば、人まぜもせず只二人、精神を勵まし粉骨を摧き戰うたり。後に控へたる兩陣の兵、小節を握り牙を嚙み、魂も天外に飛ぶ心地して、坐に見物してぞ居たりける。北村は元來大の男なるに、鞍坪に立上り、かさに掛つて續け樣に打つ太刀を、一宮受損じ、耳脇より鼻を掛けて切付けられ、大事の手なれば、目暉れ、馬より下に落ちんとす。北村續いて首を取らんと駈寄する處を、一宮長刀取延べ、橫

様に拂切に擊ちければ、北村が運や盡きたりけん、頰先より喉を掛けて切落され、首は馬蹄に蹴立てられ、胴は鞍壺に猶も乘つたりける。元親遙に是を見て、采牌を振上げて、一宮討たすな、掛れやかゝれと勇むれば、諸軍一同に喚いて懸りける間、敵の兵此勢に辟易し、本陣指して逃懸る。實にや一陣敗れて殘黨全からず。其上此程の戰に手懲して、臆病氣の付きたる安喜が勢、一陣二陣怺り兼ね、肯て一太刀も打合せず、一度に噇と崩れける。平野彌之助盛返し、爰を蓬く敗北せば、籠城するも叶ふまじ、返せ〳〵と只一騎、八面に怒をなし、引入る勢を止めんとせしに、勢ひ懸つたる寄手の兵、田中・福富馬を駈寄せ、兩方より鎗を挍み、敢なく平野を突止めける。安喜大に恐れ、鼠の逃ぐるが如くにて、一驂に城へと敗走す。矢流より城下迄、行程一里の間にて、城兵三百八十騎討死し、路徑に棄てたる馬武具、尺寸の明地もなかりけり。亦は冑を脫ぎ旌を卷いて、元親に降參するも多かりける。矢流の崩とは、此一戰の事ぞかし。斯くて修理亮、漸城中へ逃入り、討殘されたる兵を籌ふるに、三千には過ぎず、其上深手淺手一ヶ所二ヶ所負はぬ者もなく、或は太刀打折り、矢種皆射盡

しければ、重ねて討つて出でんも、兵少うして叶ふまじ。所詮當城の要害に楯籠り、再び國司へ加勢を乞ひ、內外より挾んで戰ひ、此恥辱を雪がんと、門々を鎖堅め、敵寄せば切所に支へて、幾度も防がんに、などか退屈せであるべきぞ。先づ一條殿へ重ねて加勢を乞はんと、戰の始終謀の方便、一々に云含め、敵未だ寄せざる間に、早早急げとて、脇道よりぞ出しける。去程に元親は、矢流の戰に打勝ちて、修理亮城へ逃入りしかば、臆病氣の醒めぬ內に、本城へ攻入らんと、降參の兵を先に立て、安喜郡へぞ押寄せける。元親旌旗の蔭に駒を控へて、城の體を見渡せば、尤も要害堅固にして、四面に湟深く、石壁一片の雲に聳え、左右に馬出の築地を高く築かせて、處々の井樓、數十ヶ所の渡り櫓には、弩牕矛穴繁く切並べて、其蔭に究竟の射手と覺しき者共、前後に矢束解いて弓推張り、虛引(すびき)して待かけたれば、此城輙く攻落さるべしとは見えざりけり。されども寄手は大軍、連日の師に、機を倍したる兵共、入替へ〳〵攻め戰ふ。城中には兼て計りし手段の如く、敵攻むれば、只幾度も詰合ひ開合ひ、散散に射て漂ふ所を、馬武者後より蒐出で〳〵、其機に乘じ變に應じて戰ひける程に、

寄手毎日討たるゝ者數を知らず。元親急度謀を廻らし、諸將に向つていひけるは、此城の有様、力攻にして落つべきとも見えず。徒に切所に支へられて、兵多く損ぜらるゝ計なり。思ふに此所に向城を築き、城中諸方の通路を塞ぐならば、敵兵糧を運ぶに道なく、救を求めんに便あるまじ。其時味方より虛和睦を以て、敵の心を奪ふか、亦は後の山より忍を入れ、火攻を以てする方便もあるべしとて、八方に備を配り、一隊々々に物頭を付け、二重三重に柵を結ひ、晝夜に陣々を巡見して、對城する事卅餘日、風雨に油幕を沾漬して、事の變をぞ窺ひける。修理亮は、敵急に攻入らば、難處に支へて日を送り、二度國司の加勢を待ちて、内外より討取らんと計りしに、使者出でしより卅餘日を過ぐれども、援兵の便もなく、寄手四方を取圍んで、稻麻竹葦の如くなれば、俄の籠城に糧盡きて、纔に三日の兵糧を殘しける。さればとて、打つて出でんも兵少し。守らんとすれば、兵糧破多と事缺きたり。士卒は拔々に逐電し、殘り留る者共も、恨を含み呟きければ、安喜、今は世間此迄なり。我れ愁に軍を起して、諸人の指頭に懸りぬ。今は生きても甲斐なし。今夜自害して、怨を泉下に報ず

安喜修理亮逃走

べしといひければ、兵皆涙に咽んで、只今御自害候とも、誰か節に死したりと申すべき。一先づ當城を落ちさせ給ひて、暫く世のならん樣を御覽候へかしと、再三諫むる間、或夜風烈しく月曇きに、大に篝を燒かせ、此紛に安喜、譜代の者共を引具し、野根の城へと志し、脇道よりぞ落行きける。翌くれば元親、夜前城中に夥しく篝を燒きしかば、討つてや出づると思ひしに、月漸上つて篝も閑りし事、是は城中軍を催さんと待ちしに、味方却て戰を好まず、糧道を裁ちたれば、城中兵糧盡きて篝を燒き、寄手の氣を奪ひ、間道より落ちたりと覺ゆるぞ。虛實を見ん爲、陣々に觸れて鬨聲を上げさせよといひければ、卽時に相觸れて、三方の寄手簎矢簎を搞き、鬨を嚾と上げにける。城中大に驚きて、上を下へと悤劇し、何處ともなく、大將は夜中に落ち給ふといふ沙汰すれば、今は誰が爲にか悈へん。其上我々假ひ防ぎ戰ふ共、大軍に楯合せん事叶ふまじ。いざ降參して一命を繼がんと、使者を以ていひけるは、當城今僅に保禦の備をなすと雖、已に弓折れ矢竭きぬ。修理亮は何國ともなく落失せ候。我々先誤を御宥免あつて、一所懸命の地をだに宛行ひ給はゞ、人質を出し降參すべ

安喜城陷る

し。若し御承引なきに於ては、力なく城門を枕として、討死を極め候べしとぞ申遣しける。元親聞きて、案に違はずと打諾き、早々人質を出されよ。領知は相違あるまじと答へければ、北川・室津・有井・横山・和食・奈半利・北村を始め、各人質を出し、冑を脱ぎ旌を卷き、軍門に降りけり。元親悦喜限なく、則ち香曾我部を城主として、今度高名ありし者共には、所領を與へ感狀をぞ出しける。

西内智謀附狄青が事

安喜修理亮野根城に籠る

斯くて安喜修理亮は、元親を討滅さんと、大軍を發せしに、毎度の軍に利なうして、永々の對陣に兵糧盡き、空城守るに方便なく、重代の城を振捨て、夜半に紛れて間道より忍出で、同郡野根といふ處へ楯籠る。抑此野根の城と申すは、土佐國第一の難所、山岳は天邊に懸り、右を望めば、海水潤く遙にして、眼、雲の波に迷ひ、左を顧みれば、屛岸峩々として、身をそばめて行き、足を峙てゝ歩む。後は野根山とて、大山聳え連なつて、嶺松風冷じく、阿波の海部・宍食へ雙びたる所なり。城中より一度眸を

廻せば、寄手の通路、眼裏に瞭々たり。城主野根七郎は、安喜に睦しかりければ、萬に付けて賴もしく、萬全の計事なれりと悅びけり。元親是を聞きて、四國隨一の名城、假ひ大軍を以て攻むるとも、早速の大功成難かるべし。されば拔收の策を探り要むるに、兵法略事多しと雖も、張良が强楚を傾け、范蠡が吳國を喪せしも、智計の致す所なれば、所詮向城を取つて、寛々と城中の屈伸を考へ見ば、いかなる奇功もあるべしと思ひ、頓て城の山下に陣城を作り、香曾我部親泰に之を守らせ、時々に足輕を出し、矢軍のみにて日を送り、又は忍び〳〵に、斥候を出して虛實を探るに、城中は難所を賴みて、强ちに用心の體もなし。さりとて寄手より切つて入るべき方便もなければ、軍を止めてなす事もなく、明し暮しける間、互の徒然を慰めんとて、五人三人寄合ひ〳〵、碁雙六或は諷酒燕なんどして、今歲も已に夏過ぎ秋立ちて、文月中頃にもなりしかば、城中の者共も、勇氣碎け退屈の心生じて、今は用心も緩り、寄手の陣中も、何となく油斷して、興ある遊を初むるぞや。我々も一興を催して、此程の憂を慰めんとて、若き者共打連れ〳〵、城下に出でて躍をなす。初の程は、無用の事な

りと制せし人も、後には共に老若男女打交り、夜毎に躍を催しけり。かゝる處に寄手の番衆の內に、西田喜兵衞といへし者、今年十八歲、其爲人深智卓量にして、謀人に超えたり。此間帷帳に入つて、敵味方の攻守の術を考ふるに、此城をば千重萬重に取圍んで、五年三年對城するとも、只徒に國弊え兵勞して、卻て味方の大變に及ぶべし。哀れ何なる良謀もがなと、寤寐に飲食を忘れて、古今の奇策を探見するに、兵家品多しと雖も、凡不レ出二三門四種一。其中に於ても、直に敵人の機を指察するに、不意を討つに如かずと料簡し、或時密に合番の者共に申しけるは、斯樣に連月對城しては、いつか功をなす事のあるべき。其寡を將つて衆を攻むるは、不意を討つに如かず。されば此頃味方の陣々に、種々の遊興をなし、徒然を忘るゝを見て、城中にも羨しく思ふにや、城下に躍を催し、每夜男女打交りて群集をなす。是幸の時節なれば、其城兵に紛れて躍の中に行き、密に城へ附入して、首尾よくば火の手を上げん。其時各短兵急に攻入り給へ。必ず大功をなすべきぞといへば、傍輩共之を聞き、假ひ城へ附入りたりとも、あの大勢に取卷れて、何とて功をなすべき。只犬死をす

べきに、無用なりとぞ止めける。西内、いや〳〵一人にても、謀の用ひられまじき者にも非ず。若仕損ずる程ならば、主君の爲め討死する迄ぞといひ捨てゝ、己が陣處に立歸り、物馴れたる兵少々引連れ、躍る者の體になり、やう〳〵城下へ至り見れば、是ぞ城番の者共と覺えて、長き刀を横へ頬蒙して、餘念なく躍り居て、更に尤むる者もなければ、夫より城門の邊に行きて、樣體を窺ひけるに、惣門を押開き、用心の侍一人もなし。是は順番持にしたる故なりとぞ聞えし。終に留主番の者と見えて、斯彼に五人三人蹋り居、或は燈炬の下に敷居を枕として、前後も知らず臥したりしを、起しもたてず一々に刺殺し、手々に續松振立て〳〵、役所々々走り散つて、暫時に火をぞ掛けたりける。早續きたる頃なるに、折しも山風烈うして、城中一遍に燃上る。城下にありし人々大に驚き、是は香曾我部、城中の油斷を窺ひ、山道より大勢を忍び入れ、乘取りたると覺ゆるぞ。此所に長居して、敵に取籠められてはは叶ふまじ。先づ阿波の方へ立越え、重ねて方術を廻らさんと、安喜・野根を始として、我先にと落行きけり。殘止まる軍勢共周章ふためき、行先狹き岩の崖路を、我先にと逃行くに、

其途或は溪深く切れて、荊棘岐を閉ぢ、或は嶮岨の岩廉(いはかど)を穿ち、小き橋を渡して道とせり。西内勝に乘つて、手繁く追掛けたりしかば、是程の小勢なるべしとは思ひ寄らず、取て返さんとするも叶はず、引かんとするも方(みち)なうして、進退斯に谷つて見えしかば、中々踏止まつて腹切るもあり、或は味方を切仆し、强きは弱きを押除け、踏殺され突陷され、同士討に死する者其數を知らず。溝壑は宛ら死人に埋もれて平地になり、流川派(みちまた)堰かれて、追手の爲には卻て大路を行くに異ならず。遙の麓に聲へて、事の心を知らざる寄手の陣には、此烟を見て、すはや城中に燒亡出したるは。何さま鯨波を上げて、四方より揉合せ、一攻攻めて見よやとて、大手搦手の軍勢、佩楯・冠板・楯の端を鳴らして、同音に鬨を咄と作るや否や、前陣後陣をも分たず、只我先にと、曳々聲して攻上りけれども、敵はや一人もなく落失せたり。斯くて西内は分捕高名して、頓て本陣に返り、軍の始終を詳に訟へければ、元親大に感嘆し、汝未だ若輩の身として、斯る奇謀を廻らし、卽時に大功を顯す事、希代の高名、何人か之に如かんと、所領に感狀を添へて賜はりければ、時の面目世の聞え、天晴由々しくぞ見

えにける。之を以て之を思ふに、昔時宋の仁宗の時、儂智高、邕州を持ち、謀叛を發せしに、誰をか討手に遣さるべきと、朝廷評議ありしに、狄青に如く者あらじとて、即ち大將を給はり、孫沔を副將として、數萬の官軍發向す。然るに儂智高聞ゆる大敵にして、平地の合戰、中々叶ひ難く見えければ、狄青、何とぞ謀を以て勝つべしとて、思案を廻らしける。抑震旦の風俗に、古今正月十五日より十八日迄、上元の觀灯とて、家々に灯を立て、樣々の燈籠作物美麗を盡す。戰場と雖も今夜は是を見んとて用心の體もなく、邕州の士民方々遊覽しけるを知り濟して、狄青諸卒に下知して兵糧をつかはせ、自身先手の大將となり、孫沔を次將とし、疾く馳する事數十里、夜半に崑崙關を渡りて押入りける。儂智高猛しと雖も、士卒の散亂を集めんと、周章騷ぐ内に、やがて城へ攻入れば、儂智高叶ふまじと思切つて、自ら鋭卒を先めて戰ひけるに、味方の右將孫節討たれぬれば、孫沔色を失ひ、旣に敗軍せんとせしを、狄青白旄を執り、左右の軍兵を發し、縱橫に開き合せ戰ひける程に、儂智高終に討負け、城を捨てゝ敗走す。猶も逃ぐるを追うて、五十里計行きける内に、首數千餘級、生捕

五百餘人、討棄の者は數を知らず。狄青城へ入り、數萬の金帛を獲て、邕州の民の老少男女七千二百人、智高が爲に劫され俘となりし者を復し、首實檢しけるに、袞龍の衣を着たる屍あり。人皆是を智高なりといひ、此由奏聞あるべしと申しけるを、狄青、いや〳〵若し詐りて、智高が衣裳を着せたる事もあるべし。假ひ智高を失するとも、敢て朝廷を欺いて、功を貪るべからずと申しゝが、果して智高大理へ逃入りけり。智高既に敗れ、廣南悉く平ぎしかば、捷書を朝廷に奉る。仁宗大に喜び給ひて、都監蕭注を遣し、持磨道に入りて、智高が母及び其弟・智が子繼宗・繼封を生擒りしかば、智高勢盡きて、程なく病死したりける間、頓て彼が首を函に入れ、京師に送り、南州無爲に治まりけり。其功を賞し、狄青を樞密使に任じ給ふ。今度西の内が智謀も、偏に狄青に相同じ。孔子曰、好謀而成者也とは、是等をやいふべきとて、諸人甚だ稱嘆せり。

蓮池城軍附土居孫太郎返忠の事

長曾我部元親、武威いよ〳〵盛にして、前んで討つ所は、必ず敵、鋒を枉げて奔走し、攻むる所は、敵、旌を卷き首を偃せずといふ事なし。國中既に五郡を併合して、今は只大膳大夫が領地する處の、高岡郡津野の一城のみ孤立せり。元親是を取らん事は、掌握に在りと雖も、先づ暫く人馬の勞を休め、重ねて時日を擇みて、發向せんとぞ計りける。大膳大夫此由を聞いて、家の子郎等を近付け、元親大軍を率ゐて攻め來るといへり。如何して防ぐべき。汝等宜しく評議せよとぞ申しける。家老の面々承り、仰の如く元親諸郡を攻靡け、其勢廣大にして、中々敵し難し。所詮此事を國司へ御歎あつて然るべしと申しければ、則一條殿へ參候し、委細に言上申しける。國司聞召され、津野が申す處、理至極せり。去ながら當時元親が威勢、我とても制し難し。其上先年安喜が軍を起せし時、加勢を遣せし故、元親深く我を恨むと聞く。此度津野を救はん事、如何あるべきと仰せければ、土居宗算進み出でて、御諚の如く、元親已に五郡を討取り、今は早高岡・幡多二郡を殘せり。此時津野を救はずんば叶ふまじ。某斯くてある上は、元親譬ひ孫呉が術を擅にし、龍虎の威を震ふとも、幡多

郡へは、馬の跡をも入れさせ候はじ。津野が居城高岡より十八町を隔てゝ、蓮池といふ處に古城ありて、前には淀川といふ大河流れ、船渡ならでは往還なし。幸此城に加勢を込置き、元親高岡へ發向せば、後より攻寄せ候はんに、元親如何に猛くとも、前後に敵を得ては、一戰にも及び候まじと、其理明白に申しければ、各此議に一決し、さらば急ぎ蓮池の城を修補せよと、濱面數十町が間を、嚴しく要害に構へて、馬出の築地を高く築かせ、詰々に矢倉を上げ、矢挾間繁く切並べ、三千餘騎を込め置きて、高岡に軍あらば、敵の後を襲はんとぞ待懸けたる。元親、一條殿より、高岡の救の爲め、蓮池の城に勢を入れらるゝと聞き、先づ此城を攻落さでは叶ふまじ。去ながら大河を隔て、船ならでは往來を通じ難く、其上土居宗算、容易の敵に非ず。事火急にせば、却て變を生せん。味方も援兵を以て川岸に城を築き、寛々と謀をなさんものをと、則江村を大將として、河端に土手を築き、塀をかけ櫓を上げ、互に牛角の勢を張つて、三四年が間對陣す。蓮池の城兵は、隔年に入替りしかば、出入の度毎に、元親方より是を討止めんとすれども、敵も用心密しければ、墓々しき事なかりけり。當

年の組番の內、土居孫太郎（後號二肥前守一）とて、今年未だ十九歲なれども、深く兵法に達し、武勇又秀逸なれば、擇み出されて城番を務めける。爰に妙蓮寺とて、城下に寺ありけるに、孫太郎睦しかりければ、或時住僧に向ひ、某が當卦如何樣に候や。立身致すべき心懸にもなり候ひなん。考へて給はり候へといひけるに、住僧頓て蓍策を取出し、掛扐過揲の後、風雷益の卦を得て、孫太郎に申さるゝは、當卦考へ申すに、成程功名成立あるべし。夫れ益の封たる、雷巽の二卦相合し、風雷の勢交相助け、日々に進んで止まざるの心あり。大川を渉り往く所あるに利ありと辭に見え候。されども其中善に遷り過を改むるは、益事の大なる者にて候へば、然るべき主人を求め給へかし。行末榮え給ふべしと答へければ、孫太郎急度心付き、此川は當國一番の大河なり。幸我此所にあつて、兵權又某にあり。何とぞ立身の方便もあるべしと、深く心中に祕して住僧に對し、何となく四方山の物語畢つて我陣に歸り、熟と當時の變を案ずるに、國司の威勢は日々に衰へ、長曾我部の家は日を逐つて繁榮し、終には一國の主とならん器量なり。翫二其積礫一而不レ窺二玉淵一者未レ知二驪龍之所一レ蟠也とか

や。所詮此人に志を通せんと思ひ定めしかども、媒を以て志を露すべき便もなく、兎角默しけるに、幸此所に魚鳥多く集まれば、川逍遙に事寄せ、心中の通を矢書に認め、元親が陣へ射入れけり。江村急ぎ本陣へ達しければ、元親披見し大に悅び、如渡得船とは此事なり。土居我に志を通せば、蓮池の城を乘取らん事掌握にあり。去ながら我久しく對陣なす。戰を好まざる故に、敵若し謀にて、おびき入れんも知り難しと思ひ、自筆に返書を調へ、味方の爲め、何にても大なる功を立て給へ。さあらば味方も合圖を約して攻入らんと書きて、孫太郎が方へ射返しけるを、人は更に知らざりけり。斯て孫太郎は、元親が返書を得てより、何とぞ良謀を以て、元親が兵を引入れんと、晝夜肺肝を摧く處に、或夜颪一陣吹しぼつて、雲の風色冷じく、陣々爰彼に、五人三人打寄り〳〵物語抔して、人々心細き折節、孫太郎が役所に空誤して、猛火燃え出で、矢倉にくわつと燃付き、觀るが中に此火、諸侍の陣屋々々に飛び散りて、餘烟東西に覆ひ、南北に翻満して、炎焰一遍に吹敷きたり。河向には大將元親是を見て、素波土居が火を揚げたるはといふ程こそあれ、四千餘騎の兵、迭に馬筏を組合せ、

轡を龍壯に列ね、馬に鼻嵐を吹かせて、塀際迄着きしか共、城兵は火を消さんとて、怺て騒ぎて、烟の下に迷ひ憧きしかば、我も〳〵と城中に馳せ散つて、鬨聲を上げたりける。　城兵大に驚き、さては城中に謀叛人あるぞ。　誰よ彼よと犇く所を、元親が兵、風上に立渡つて、爰に鬨を上げては、彼に勢を見せ、頃刻に變化して、射伏せ切伏せける間、返合せて戰はんとする者は一人もなく、只火中に燒き焦され、或は逃出でんとして、日來案内を知りたる河の淵をも辨へず飛入り、波濤の底に沈む其有樣、焦熱大焦熱の苦みを免かれては、紅蓮大紅蓮の苦患に逢ふに異ならず。　されども平田・荒川・橋本等の兵三百餘騎、本丸の城戶に支へて、寄せ來る敵を入れじと防ぎしが、機に乘つたる江村が勢に押破られ、一足も去らず討死しければ、殘兵漸二百騎計、高岡指して落ちて行く。　元親急に追詰め〳〵、十八町の繩手にて、一騎も殘さず討取り、直に城下の在家を放火し、一擧に城へ攻入らんとせしに、津野が家の子山內藤右衞門・津野藤藏・同新助、命を惜まず爰を專途と戰ふに依つて、元親の兵疵を蒙り、討死する者數多ありければ、少し會釋して進み兼ねてぞ見えにける。　此紛に津野が兵

蓮池城陷る

城中へ引取り、城戸を閉ぢ出合はず。元親諸勢を下知して、軍は是迄ぞ引取れと喚ばはつて、蓮池迄引返す。其後津野も、行々元親に敵對する事叶ひ難くや思ひけん、志和宗順を以て降參し、元親が二男孫次郎といひしを乞受け、我娘を以て之に妻せ、其身は剃髮して、宗眞とぞ號しける。賀江・佐竹・志和・西原・窪川・山内藤右衞門・津野藤藏・同新助・□□□左衞門・三宮平左衞門を始として、殘らず降參して、本知を安堵したるける。

四國軍記卷第三終

四國軍記卷第四

土居宗算諫言の事

元龜三年も暮過ぎて、天正元年に改まりぬれども、諸國の亂逆未だ止まず、互に虎狼の心を擅にす。中にも三好長慶・尼子勝久・島津義久・毛利輝元・大友宗麟・長曾我部元親等の諸將、大は小を呑み强は弱を制して、津々浦々に至る迄、一日も穩ならず。されば樵老漁夫の儕迄、枕を安きに措く隙もなし。去程に土佐國には、長曾我部元親、已に六郡を居り取り、鷹揚の威を震ひしかば、國中是が爲めに楯を突く者なかりけり。往年安喜・津野兩城の戰に、一條家より聊か援兵を遣されし事、元親深く之を恨むと雖も、國司の御家人に土居宗算とて、武勇智謀人に勝れ、宛も范蠡・伍子胥が忠義を兼ねし者なれば、卒忽に師を發しては、彼が計謀に墮ちん事を恐れ、何とぞ姦計

一條兼定遊佚

を以て宗算をなき者にせんと、寤寐に心志を惱しける。抑幡多郡一條兼定卿の御簾中は、宇都宮の姫君にて、若君迄誕生座しけれども、御心に叶はざる事ありとて、永祿年中に御離別ありて、晝夜只酒宴遊興に耽り、又は山河に漁獵を事とし、其上に力業を好み、異粧を專とし佞人を愛し、心の儘に民を貪り、舊臣を追放されしかば、土居諫言を加ふと雖も、更に承引坐さず。其頃豊後國大友の姫君、容色雙なき美女の由を傳へ聞召し、一向戀侘びさせ給ひ、長尾監物を使として、再三乞受け給ひしか共、宗麟思惟やありけん、再往使命に從はずして申されけるは、當時干戈の時にして、人心の反覆計り難く候。所詮人質を賜はらば、御所望に從ひ申すべき由返答あるに依つて、宇都宮腹の若君を遣さるべき事に事究りぬ。宗算此由を聞きて、大に愁傷して申しけるは、土佐一國は、數代當家の政道にして、郡令城主も下知に背く事なし。然るに昔年西園寺と闘諍の後より、元親我意を欲にして、數郡を伐取り、威を國中に振ふ故、當家はあれどもなきが如し。其上君の御行跡、旁以て亡國の端なるべし。從來元親一國を呑まんとす。さるに由つて譜代舊功の者迄、元親に阿り諂ふ。是れ

輕忽の事に非ず。此度又人質を出して、大友に緣を求め給ふ。武略の足らざる處なり。内には元親間を窺ひ、外には大友虛を搜らん。君闇うして政を治め給はず。されば臣として諫めざるは義に非ず、恩は命を惜まずとかや。御承引なき迄も、是非諫言を申さんには如かじと、一紙の諫文を差上げける。其文に曰、

一、前の御簾中御離別の時、某再三防諫申し上ぐると雖も御承引なく、御公達迄御坐します御中を、差したる事もなきに御離別遊され候事、御短慮の至なり。言行は君子の樞機と申し候へば、能々御愼あるべき御事。

一、今度大友家御緣邊に付いて、若君を人質に遣はさるべき事、甚だ然るべからず候。大友は大身にして、威を九州に輝かし、八紘を掌に入れんと欲し、間もあらば當國へも發向せんか。然るに人質を渡しては、彼が下知に背く事なるべからず。其上長曾我部數郡を伐取り、御下知に從はず。今此節は、別して御身持の大事なる折柄に、何の御遠慮もなく、日夜宴樂を專にし給ふ事、偏に害を御招きなさるゝに似たり。夫れ宴安は鴆毒とあれば、御料簡あるべき御事。

一、常に大太刀・長刀・御衣服に至る迄、異相の儀を御好み遊ばさるゝ事、甚だ不相應の御形氣に御座候。劒術輕業を事とするは、匹夫の勇なり。修身齊家の御學問こそ肝要に奉存候。張子房謀を帷幄の中に運らし、漢祖四百年の皇統を持てり。若し衆恨み民背きなば、何の功をかなすべき。夫れ異物を好み候は、亡國の表とこそ承り候へ。深く御思慮を廻らさるべき御事。

一、當世は一鈎の金をも、兵器の助となし給はゞ然るべきに、近年御遊與の爲め、別殿樓閣御普請美々しく、泉水築山巧を盡され候事、其費莫大に候。古は萬乘の君すら、民の費を厭ひ給ひ、御殿は土階三尺、茅茨剪らず、細椽剝らずとこそ承り候御事。

一、毎日御鷹野川漁の御遊覽、卒苦しみ民勞れ、其費少からず候。昔日晏子、齊景公に語げて、流連荒亡の行を止む。終に晏子、君臣相説ぶの樂を作れり。是景公の賢德あるが故なり。四時の農隙を以てこそ、民をば使ふと申し候へ。頃日の漁獵の御沙汰、全く武を煉る御仕業にも非ず、徒の御遊興と奉存候御事。

一、若年無骨の淫者、或は巧言令色の諛者共御近習仕り、過分の俸祿を賜はり、緣に因つて權威に誇り、數代舊巧の者をば、御前を遠けられ、或は罪なきに御勘氣を蒙り、他國に離散す。是偏に讒諂面諛の輩の、君の御心を迷すが故なり。玄宗、楊貴妃に愛溺し給ひ、楊家の一族權を取つて、終には蒙塵の災を致せり。御身の上に比較すべきに非れども、其色を好んで亡ぶる所以は一致なり。能能御愼あるべき御事。

一、先年某數諫言申上候へども、聊も御承引なく、非法の御政道故、譜代恩顧の輩も、元親に心を寄せ、主を賣つて身を立てんとす。只今思召合さるべし。堯舜の聖朝には、誹謗の木を立て、諫諍の鼓を掛けられ、衆人の謗諫を知召して、御身を檢束し給ふ。匹夫の賤き言をも擧げ給ひてこそ、政の正きとは申すべきに、偶諫言の者あれば、直に御機嫌に背き、諂ひ阿る輩は出頭仕候段、是非に及ばず候御事。

一、常々碩學の名僧、博識の老儒を召されて、御學問の事第一に奉存候。夫文武の

道は車の兩輪の如し。治世には文を以て先とし、亂世には武を以て先とす。君臣を使ふに禮を以てし、刑を行ふには義を以てし、民を養ふには仁を以てし、友に交るには信を以てす。是皆文學を以て本とす。又軍國の要は、衆心を察し旨務を施し、危き者は之を安んじ、懼るゝ者は之を歡ばし、叛く者は之を還し、寃めらるゝ者は之を原ね、訴ふる者は之を察し、卑しき者は之を貴くし、强き者は之を抑へ、敵する者は之を覆し、毀る者は之を復し、反する者は之を廢し、横はる者は之を拉ぎ、滿つる者は之を損じ、歸する者は之を招き、服する者は之を活かし、降る者は之を脫す。是兵法の織文にて、將の要とする所なり。斯樣の事も無學にしては、獮猴の金を弄するが如し。御心得あるべき御事。
右の數條の諫文を捧ぐる事、偏に君を重んじ、私命を輕んずる所なり。能々御思慮を廻らされ、是迄の御行狀を御改め不被遊ば、噬臍の御悔到來可仕と奉存、苟も臣たる道を盡さんため、如此申上訖。
兼定卿一々披露あつて、是れ尋常辯口者のいへる事にして、耳に入りて譁(かまびす)し。我れ

本より此等の事を知らざらんや。古法は今に宜しからず、榮辱浮亂は皆天命なり。老耄の理窟沙汰、片腹痛しとて、更に用ひ給ふ氣色もなかりしかば、宗算が金玉の忠言、空しく灰となつて、亡國の基、うたてかりける事共なり。

土佐一條家殁落の事

爰に元親が弟香曾我部左京亮は、一條家の侍佐竹信濃守・平尾新十郎・土居治部大夫・沖彌藤次抔、日頃音信を通じ、懇欵淺からず。時々會合して、酒茶の興をぞ催しける。或時左京亮が亭に會して、此程の疎遠の條を述べ、四方山の物語に、酒も漸く酣に及んで、左京亮膝立直し、熟當時天下の擧動を觀るに、英雄蜂の如くに起りて、干戈暫も止む時なし。古人の謂らく、操刀必割、執斧必伐の時至れり。一條家日々奢侈を專として、弓矢の術に拙し。夫れ武士は、身を立て家名を擧ぐるを以て志とす。旁此家に在つて何の益かあらんや。唯元親に一味し給はゞ、阿波・讚岐を手に入れ、立身の事眼前にあらんと、憚る處もなく申しければ、一座の面々、皆肺腑にや落ちたりけ

ん、一議にも及ばず同意し、則起請文を書き、神水を呑みてぞ盟ひける。其後元親内縁を以て宗算に睦び、巧言令色無二の媚をなし、より〳〵異國本朝の名物などを贈り、日每に音信を通じける。宗算心に喜ばざれども、元親久しく異心を挿む。事破れなば、國中の騷動も止むまじ。如何にもして彼が叛心を宥めんと、其事となく折を窺ふ處に、例の姦人之を國司へ訴へしかば、さては宗算元親に與し、謀叛を企つると覺えたり。所詮彼めに先を越されては、臍を噬む共叶ふまじと、則宗算を賺つて召寄せられ、是非にも及ばず、敢なく首を刎ねさせらる。兼定の短慮、宗算が不運、言語道斷の事共なり。昔日楚の項羽が短才も、范增が智謀に依つて、威を海内に震へり。然るを漢の陳平が反間の謀に、項羽欺かれて范增を殺しゝより、高祖天下の主とはなり給ふ。彼を思ひ是を見るに、當家滅亡の先表とぞ見えにける。抑三軍の敗は、狐疑より生せり。一條家の諸士互に危み疑ひ、或は虛病を構へ出仕を止め、或は不平の心を懷き、自ら全守の計をなしければ、先に香曾我部に與せし者共時を得て、彼は元親に與したり、此は謀叛人よなどと流言する程に、是を聞傳ふる國中の諸士、騷動

斜ならず、夫上失ニ中正之德一則下傲慢爲ニ叛亂一、君漏ニ紀綱之權一則民遲頽爲ニ媢賊一とかや。元親大に喜び、乃に血塗らずして幡多郡を取つたりと、一條家の屬從國侍卅六人を召集めていへるは、某先祖より國司の御憐愍の筋なれば、主君と仰ぎ奉る處に、當代に至り、某安喜を攻討つ時、御加勢を遣され、其後に又大膳大夫が申條を御承引あつて、蓮池へ御人數を籠めらる。され共某勇武を以て、安々と兩城を攻落す事、偏に天運の祐る處なり。故もなく斯程に某を御惡みなさるゝ段謂なし。當時國司の形勢、たゞ婬樂を好み給ひて、正道に心懸なく、下怨み慍りて民の心背けり。人心歸服せざる時は獨夫なり。熟世情の好惡を察するに、兎角兼定卿を廢し、若君を取立て、某御後見を申さんと思ふなり。一味同心の人々は、一紙に連判あるべしと、大の眼を怒らかし、否といはゞ、一人も餘さず切殺さんずる擧動、誠に王莽・董卓が惡逆、曹操・桓温が姦雄に異ならず。元親が左右後從には、究竟の手柄を顯したる荒武者共、太刀の鍔本をくつろげ、八方に眼を配つて控へたり。滿座の人々、元親が威勢にや惶ぢたりけん、又は當座の難を遁れん爲にやありけん、異議に及ばず、各一味同心の

連判をぞしたりける。元親大に頷諾き、さあらば一條殿を擯出し、若君を取立てんと、則我娘の聟君として、吾川郡大津の城へ入れ參らせ、吉良左京進を傅人とす。されば不善を顯明の中になす者は、人得て之を誅し、不善を幽暗の中になす者は、鬼得て之を戮すとかや。幾程なく長曾我部の一跡滅亡しける。天罰の程こそ怖しけれ。

一條家殁落

安並和泉・爲松若狹戰死の事

去程に一條家の政道正しからざるに依つて、家老と國侍不和にして二つに分れ、皆我が館に引籠る。中にも爲松若狹守・安並和泉守は、一條家の長臣にして、先年安喜・津野の兩度の合戰にも、大將を蒙り、加勢をしたる事なれば、元親其遺恨骨髓に徹してありける故、此弊に乘じて討果すべしと思案を廻らし、國侍の中大波・立石・江口・加久見・橋本・山路・伊豫木・和田・小島・依岡等と、密に此事を相談し、軍令を下しける。安並も爲松も、此事を傳へ聞きて、妻子をば、譜代の侍を添へて、密に豐後國へ遣し、兩人互に後詰せんと約盟し、己が館にぞ楯籠る。斯くて元親、小島出雲守・依岡左京

進を先魁として、三千餘騎を以て、安並が籠りたる尾崎の城へ押寄する。爲松兄弟兼て用意したる事なれば、二百餘騎を率して、小島・依岡が備へたる後より、馬の首を魚鱗に並べて、無二無三に切つて懸る。城中に和泉守之を見て、時分はよきぞと惣門を押開き、逞兵百五十騎、黑岩・長澤を左右に立て、一文字に駈出し、整々たる大勢の中へ破つて入り、四角八面に擊つて廻る。寄手前後の敵に揉立てられ、しどろになつて騷ぎける。されども寄手は大勢なれば、事ともせず、前後を下知して備を立直し、新手を入替へ戰ひければ、黑岩・長澤も、比類なき働して、終に討死してんげり。其外究竟の侍多く討たれ、和泉守も身ら敵に當る事七八箇度、突疵切疵數多所負ひければ、今は是迄なりと引返し、城に火をかけ、腹縱横に掻切つて、焰の中へぞ飛入りける。爲松兄弟は、一方討破つて、鍋島城へ引籠る。寄手息をも休めず押寄せ、三日三夜、火出づる計り攻戰ふ。爲松兄弟、每度城外に突いて出で、手痛く當てゝ戰ふと雖も、寄手は次第に增り、城中は日々に減じければ、今は防ぐべき術も盡き果て、城に火をかけ、兄弟淸く刺違へて燒失せぬ。武士のたしなむ道ながら、兩人の戰死の程、

人々感賞なしにけり。

一條兼定卿臼杵に赴き給ふ事

去程に一條兼定卿は、元親代々の親附を棄てゝ、已に逆心を企てしかば、螃蟹の二手八脚を落せる如く、昨は天人歡喜の園に遊び、今は滅色の日にして、四方に跰(さまよ)ふらんも、斯くやと思ひ知られて、思慮更に決せず、迷ひ出でさせ給ひける。大友は所縁の事なれば、是を賴み、暫く御身をも隱されんとて、豐後の方へと志し、物憂き事もいつしかに、習はせ給はぬ旅の空、秋後の木葉霜槁れて、山嵐暴風に誘はれ、散り亂るゝに異ならず。とある湊より御舟に乘されければ、水夫順風に纜を解きて、蒼海遙に漕出す。住馴れ給ひし生縁の、岸を離れて行く跡は、名殘の浪に立別れ、御身を浮沈の舟に寄せ、波瀾の末に御心を傷ましめ、行末定めぬ海士小舟、楫なき儘に放されて、何れ寄邊の岸もなく、何となるべき夢路の旅、かゝる憂身の哀をば、いつの世にかは忘るべきと、御袂を絞らせ給へば、御供の人々も共に淚を催しける。漸く日數重な

一條兼定臼杵へ赴く

りて、兎ある湊に御舟をぞ着けたりける。こゝは何國ぞと尋ねさせ給ふに、佐伯宮内と答へ奉れば、夫より臼杵へと赴き給ひ、大友を頼み思召すに、宗麟よきに勞はり奉りて、假の屋形を構へ、無二の志をなしければ、せめて用ある者に思召過させ給ひしかども、猶いとゞしき海原近き御住居に、事問ひ參る人もなく、磯山蔭の寂寥として、北風のさわがしきに、昔の御餘波をも思召し、姑蘇台の秋の露深く、荻の葉傳ふ風の音に付きつゝ端なく、朝の嵐、暮天の雲に向ひても、そこはかとなき御思を、千里の外に惱され、岩打つ波の碎けては、御袂も更に干肯ず、惣て見聞に付けて、御心を傷ましめずといふ事なし。さらでだに憂を忘るゝ種とては、折節毎に詩歌の翫に、數句を送り給ふ。時しも何なる者かしたりけん、

一條で作り立てたる紙衾破れ果つれば御所めきもせず

御臺所姫君は、土佐に殘し置かせ給ひしを、宗麟方より、柴田治右衛門を使として元親に啓し、姫君諸共に、豐後へ迎へ參らせけり。

原大隅守力量の事

大友家の侍に、原大隅守といふ者あり。豐州吉野といふ處を知行し、生得尋常の人に勝れ、其力量り難し。或時肥後國戸口といふ處へ、奇代の石火矢五百挺を渡しける。石火矢一挺を人夫數十八して、丹生の城へ運びける。其體甚だ騷しかりければ、宗麟、大隅守を召して、持ちて見よとありければ、大隅畏つて座敷を立ち、石火矢の筒先を片手にて引起し、いと輕々と肩に載せ、廣場を七八反廻りて、元の如くに卸し置きける。宗麟猶も力の程を見んと思ひ、庭前に大なる水鉢の石ありけるを、居處惡き程に、直さるべきやとありければ、大隅其儘袴の裾を高く挾み、兩の手を差伸べて、思ふ儘にぞ直しけるに、水一滴も零れず、面色も更に變らず、誠に鼎を上ぐる力なり。宗麟が家の寶ぞと感ぜられける。又其頃豐後の府内に勸進角力ありけるに、國中はいふに及ばず、近國に名ある力者共、雲霞の如く集まりける。又上方より雷・稻妻・大嵐・辻風といふ强力の者下着しける。何れも身の長七尺に餘り、筋太く骨あれて、殊

に此道の妙を得たれば、此者共に手合する程の者、一人もなかりしかば、相撲は程なく止みてけり。彼四人の者共思ひけるは、我々東國・北國を經回り、今此處に來りしかども、凡そ片腕に足る者なし。九州の力者の程も知れたり、誠や大友の御家人に、勝れたる强力ありと聞く。此次手に立起え、其力の程を見んと、打連れて臼杵へ來りける。折節大隅守は、丹羽島に在宿の聞えありければ、緣を以て申し入れけるは、今度豐州の角力に、上方より下り候者共、御城一覽の爲め、御當地へ罷越候。夫に就き內々大隅守殿、御力量の儀承り及び候、上方への家夙に候間、御玄關迄推參申し度由望み申候。如何御對面あるべきやといひければ、大隅打うなづき、いと安き事なり。いつにても同道せられよとあれば、彼者走り歸りて、此由を言聞かせければ、四人の者大に悅び、たとへば鬼神の變化なりとも、我々怒む程ならば、爭か相撲に負くべきやと、我に劣らぬ族を、已上八人打連れて、大刀を橫たへ、傍若無人の有姿にて、既に門前に來る。大隅守も、天晴相撲一番取りて見んものをと思はれけれども、先づ奴原を些劫してこそとて、廣間へ呼入れ、面々奇特の御尋祝著申したり。少し細

工仕かゝるの間、相待たれよとて、大なる鹿の角を數多取寄せて押折り、つまみ碎きなどして、其内兎角物語共せられける。彼者共も、鹿の角を碎きたるには、少しも目を掛けず。大隅殿には、九州一の力者の由、上方迄風聞仕候。御力量の見物致度由望みければ、大隅守申されけるは、中々聞及ばれたる程の事にも非ず候。去ながら某甲(それがし)が持ちたる力の程は見せ申さん。何をかなと申されければ、其儀ならば相撲の手合を仕らんと望みける。大隅申されけるは、某甲(それがし)今迄相撲取りたる事なし。如何拵へたる物候や、敎へられよとありければ、しか〴〵の由を答へけるに、大隅守聞きて、何程の事かあらん、手にだに當らば、摑み拉がんものをと思ひ、さあらば用意申さんとて、一間なる處に立入り、暫あつて侍共、廻り二尺計もあらん大竹を、五六本庭上へ荷ひ出しければ、上方の者共、是は何の用にかと見居たる所に、早城下に此沙汰あつて、雷と大隅、相撲のありけるは、いざや見物せんとて、我先にと群集す。時に大隅守立出で、某甲は相撲取りたる事是が初なり。土俵とやらんの形を致し候はんと、彼大竹を取つて、末より一筋づつ犇々(ひし〳〵)と摑み拉ぎ、本末を一つに捻り合せ、大

なる輪を作り、此輪より外へ足を踏出したらん者、負たるべしと定め申されければ、雷・辻風を始め、此體を見て大に驚き、我々共都鄙遠境を修行いたし、恐くは相撲道に於て、大力の譽取りたる者共に候へ共、前程よりの御擧動、さながら人間の業とは存せず候。中々手合仕る迄に候はず、御免下され候へと、手を束ねてぞ申しける。大隅大に打笑ひ、庭上より座敷に上りけるが、折節見物の爲に、武宮武藏守とて、大友家の一番の大男、長八尺に餘り、肥脹りたる事、誠に四國鎭西は申すに及ばず、天下にも稀なるべしと沙汰せしが、大隅と座席の辭退あつて、時移りぬれば、大隅兩手を差出し、彼武藏守を掌の內に掬ひ上げ、宛も小兒を乘せたる如くに、上座の方へ直しければ、有合ふ人々誠に一興なりと、酒宴數刻に及び、各退散したりけり。抑大隅守が力量付きたる謂を尋ぬるに、或時生善寺といへる寺へ行きて、日暮れて歸りけるに、一村繁りたる藪の蔭、さゞれ水の流潺々として、月さへいとゞ冥かりしに、とある板橋の向を見れば、其樣怪しき女の、懷に子を抱きてぞ立休らひける。大隅元來不敵なる者なりしかば、馬を乘放ち、只一人、橋板を荒らかに踐鳴らし、旣に間近く

歩み寄りし時、彼女喘咽(しやが)れたる聲音にて、此子を少しの間抱き給ひてんかといひければ、大隅仔細あらじとて、片手には刀の柄を握り、左の手にて嬰子を請取りけるに、重き事盤石の如し。須臾くありて女立歸り、あら嬉しや、此方へ賜はれとて其子を抱き取り、和殿何にても心中の望はなきかといふ。大隅答へて、我れ武門に志あれば、天下に雙なき力をといひければ、其時女米と思しきを物を三粒、是を食せられよと與へける。大隅推戴きて食しける。女又此外に猶もやあると問へば、大隅守、さればこそ我屋敷、平生水渇の苦みありと申さるゝ。女打うなづき、忽然として姿を見失ひければ、月光晝の如く耀(てら)して、林木影明かなり。大隅奇異の思をなし、馬引寄せ打乘りて歸りける。夫より水渇の患なく、力量心の儘なることこそ不思議なれ。

入江左近奉レ弑二兼定卿一事

一條殿豫州へ渡り、御生(みふ)といふ處にて御旗を擧げ給へば、先年散々に落失せたりし譜代の郎等、爰彼より馳集まり、程なく大勢になり給ひ、土佐國へ打入り、元親が附

城三ヶ處攻落し、伊豫の戸島に在陣ある。同國法華津の城主播磨守則延、昔に替り給ふ御消息を勞り參らせ、聊か成功の志を盡しければ、一通の御書を遣さる。其文に曰く、

近年就₂動亂₁被ㇾ盡₂懇意₁段、悅喜不ㇾ淺。以來之干戈於₂方々₁執₂鎮₁者、一城可ₗ附₂與₁者也。

三月八日　　一條兼定

法華津播磨守殿

斯くて元親は、一條殿豫州に着陣あり、處々の兵を催さるゝ由を聞きて、心腹の病を引出さんは此人よと、心安からず思ひければ、一條家の舊臣入江左近といふ者、近頃より蟄居してありけるが、元親と入魂たりしがば、究竟の事よと思ひ、左近を呼寄せ申しけるは、其方豫州に赴き、何とぞ密計を以て一條殿をなき物にせば、一廉領地を宛行ふべし。我が語らひに同意してんやと、打解けてぞ申しける。左近元來情なき者なれば、譜代相傳の厚恩を忘れ、莫大の御賞に預らば、一定仕損ずまじと領掌し、

入江左近一條兼定を弑す

密に豫州戸島に立越えて。累代主從の厚恩を捨て難く、是迄御味方仕らん爲に參りたりと披露せしかば、兼定御對面あり、我れ流浪の身となりしより、譜代の輩一人も助け來らざるに、汝主從の禮儀を思ひ、是迄參る事神妙なりとて、越し方の御物語に、其夜もいたく更行けば、各宿處に歸りけり。入江も傍に退きしかば、兼定卿も御枕を傾け給ふ。隙を窺ひ、入江つゝと差寄り、一刀刺しければ、兼定公驚き、枕刀を拔かんとし給ふ時、二の太刀に、左の御肱を打落す。兼定公刀を膝に挾み、拔打に一太刀打ち給ふを、ひらりと放し、妻戸を潛つて逃出で、濱邊の船共の纜を切捨て、小舟に飛乘り速に漕出す。當番の武士驚き騷ぎ、此よ彼よと、濱邊迄追掛けしかども、繋ぎたる船は悉く纜を切つて流したり。入江が舟は沖にあつて、順風を得たれば詮方なく、呆れ果てゝぞ歸りける。譜代の主君を弑して、己が身を榮えんとする八逆罪、天神地祇も怒り給はであるべきか。義理をも知らぬ入江が心、淺ましかりし振舞なり。

元親國司の古御所一見附蜷川道馮和漢物語の事

翌くれば天正二年の春、國中少し穏なりしかば、長曾我部元親、國司の古御所に立越え、此彼を徘徊せしに、悲いかな昨日迄は、大厦高臺の殿閣も、一場の夢となつて、軒端まばらに棟傾き、翠簾はちぎれ落ち、紅欄も朽折れて、在りにし時の影もなく、庭には落葉ふり積り、泉水も水銹びて、泥這ふ龜の栖となり、砌の石に聚りて晴日に甲を曝し、松杉枝暝うして、群鴉の塒となりにけり。唯有二紫苔一偏稱レ意、年々因レ雨上二金鋪一と、杜牧之が過二勤政樓一詩も思ひ合せて、坐に哀を催しける。爰に園の傍に、世に稀なる紫藤の名花ありしが、國司殊に御寵愛の餘り、遊亭を建てられ、いつも花の頃は朝に詠めつ、又黄昏の色にめで、日々に御遊ありしが、今年三月の末なれども、一蘂の房もなく、只冬枯の梢の如し。元親不審く思ひ佇む折節、蜷川新右衛門が末葉道馮といふ者傍に侍り進み出でて、國司御沈落の刻、此花に餘波を惜ませ給ひ、門前より御馬を歸され、鞭にて藤の蘂を撫上げさせ給ひて、

植ゑ置きし庭の藤が枝心あらば今年計りは咲くな匂ふな

と詠ぜさせ給ひつる由承り及び候。如何様主の別れを悲しみ候やらんと申しければ、元親聞いて、夫は上代の例なるべし。今の世に至つて、左様の事のあるべきやと、嘲笑つて居たりしかば、道馮重ねて申しけるは、草木心なしとは申せども、天地生意の間より出で、物各天理を具せり。故に四時を違へず、花實の節を忘れず。されば菅神の古、心つくしに遷されさせ給ひしに、御自愛の梅は飛び、櫻は別を慕ひて枯果てしと聞召して、

梅は飛び櫻は枯るゝ世の中に何とて松のつれなかるらん

と詠じ給ひしかば、其夜配所の庭に松生ひぬ。今の世迄も、飛梅生松と、末社に崇め申すは是なり。されば元朝の薩天錫傳へ聞きて、千里飛梅一夜松とぞ作りける。又藤原爲相卿、武州金澤にて庭の紅楓を見給ひ、

如何にして此一本のしぐれけん山に先だつ庭のもみぢば

と詠じ給ひしより、此木青葉にて、玄冬迄も侍りし故に、後世是を青葉の楓とぞ申し

ける。又上野の峯雄といふ人、花に別を嘆いて、馴れし櫻の木蔭にて、

深草の野邊の櫻し心あらば此春計り墨染に咲け

斯樣に打詠めしかば、花言はぬ色なれども、墨染に咲きたる例もあり。又唐土に、田眞・田慶・田廣とて、三人の兄弟あり。其父愛せし紫の珊瑚樹ありしを、孝心追念の餘り、三つに分たんと諍ひし時、彼木其儘枯れてけり。其後三人鼎の如くに此を愛しぬれば、二度枝葉活然たり。玄然法師西域に赴きし時、靈巖寺の松を撫でて、我れ西に去らば西に長ぜよ。歸らば則東に向へと契ひしに、程なく此松東に向つて榮えし故、寺僧、師の歸らん事を知れりとかや。されば一條殿も、今年計りと詠み置かせ給へば、又來る春は花咲き候はんと、和漢の古事を交せ引きて語りければ、元親實にもと感じつゝ、幽賞時を移し、日已に虞泉に舂けば、岡豐の城にぞ歸りける。

四國軍記卷第四終

四國軍記卷第五

元親土佐國政の事

長曾我部元親は、心腹の患と思ひし兼定公を、奸謀を以て弑し奉り、土佐一國事故なく伐從へ、內政殿を大津の城に押込め、領地を參らせねば、あるかなきかの御有樣にて、參り仕ふる者もなかりけり。斯に小島出雲守・依岡左京進來つて申しけるは、今度拔々落失せたる一條家の餘類、猶近鄉に引籠り候段承り、卽時に馳參じ、在々所々を放火仕り、殘黨一人もなく討取る由を注進す。元親打諾き、いしくも仕る者かなと、小島に領地二百丁、依岡三百丁、褒美として遣しける。其外今度の戰に功ある者には、輕重に隨ひ所領を分ち與へ、自ら土佐守と改め、萬世不朽の基をぞ祝しける。然るに元親、腹々に子數多ありける。第一男彌三郎信親、天正十四年十二月十二日、

豐後國戸次川にて島津と戰つて討死す。信親に女子一人あつて、後に盛親が妻となれり。第二男五郎次郎、讃州香川の家の養子となつて病死す。第三男津野孫次郎、慶長年中土州に於て、盛親が爲めに切腹す。四男右衞門太郎盛親、後に惣領として家督を繼ぐ。第五男右近大夫、加藤肥後守預り伏見に在り、後切腹す。第六は女子なり。一條内政殿の簾中となる。第七の女は、吉良左京進が妻。第八の女は、吉松十右衞門が妻。第九の女は、佐竹藏人が妻。第十の女は、元親存生の時幼少にて病死せり。或時元親、家老の面々を呼集めて申しけるは、我れ幸運に依り、國中を掌に握ると雖も、多年の兵亂に由つて、國政廢れ法度猥にして、民百姓も業を失ふ。今古法に新政を相加へ、衆人を保んずるの政道に改めんと思ふなり。凡そ古今の變化を捜つて、借國家の興亡を考ふるに、上禮なく下義なき時は、忠賞行はれず。故に其國亡ぶ。下義あり上禮ある時は、忠賞相行はる。故に其國興る。下忠義を存すと雖も、上禮を知らざる時は、其國變じ易し。上能く禮賞を知る時は、下忠義を存せずといふ事なく、其國化し易し。是を以て良將の士を致すは、能く忠否を察し、能く賞罰を

元親政道の式目を示す

正す。賞とは至忠至義、罰とは不義不忠なり。賢を進め佞を退くるの謂、法令なくんばあるべからずとて、數箇條政道の式目を出されける。

一、神社佛閣於レ令二破損一者、兼而訴二其所之代官或領主一、可レ令レ加二修理一。幷祭禮等不レ可レ濫二於古法一事。

一、三史五經七書等者、當二熟覽一之書也。常就レ師以可二習學一事。

一、弓馬之法、劍戟之術、鐵炮取手等藝、是武士之家業也。自二幼稚時一隨レ師而可レ習二得之一。但考二面々之器用一、以可レ熟二達一藝一。欲二多藝一則術不レ精事。

一、雖レ爲二亂舞・笛鼓・蹴鞠・茶會等技藝一、略可二相嗜一。至二他國一及二赤面一者、頗可レ爲二恥辱一事。

一、諸士衣服飲食家作等、隨分可レ用二儉約一事。

一、至二于民百姓一加二於憐愍一而可レ令二撫育一者也。猥劫レ民者宜レ罰レ之。古語曰、得レ衆則得レ邦、失レ衆則失レ邦。專可レ用二清廉一事。

一、國人之家財田畠等、可レ任二于父之遺言讓狀一事。

一、家中之面々不可召使他國者事。

一、於隣國不可結徒黨。並不可爲婚姻事。

一、家中大身之面々、物頭役人等婚姻、訴評定人可受此方之指圖事。

一、國中道橋堤等於有破壞之處者、兼加修理而不可令至往還之累也。附五刑之中除死罪之外者、爲其科代而可令築之事。

一、海邊之城主常可拵置於兵船也。縱海邊雖遠、一城之主者限分可持兵船事。

一、自大手之門内、乘輿騎馬堅禁之事。

一、於府内昵近侍之外、長草履木履停止之。但出家醫師者制外也。并六十歲已上十歲未滿之者及女者許之。雜人之族者可用足半(あしなか)事。

一、不擇貴賤於有政務器用之者、可申來者也。夫國有善人則其國殷、家有諫子則其家齊、是先哲之金言也。

右條々可堅相守者也。仍如件。

天正二年五月日　　土佐守

一國既に平均し、憂かりし年も暮過ぎて、新玉の年立返り、三月も半になりぬれば、元親、幡多郡伊裏野の松原に出でて、浦の風景を眺望しけるに、滿目洒然として、松竹翠を交へ、鷗鶴の遊び樂む分野、眞に十洲三島の別世界かと思はれ、暫く馬を駐めて、當浦の者はなきか、尋ぬべき事ありと呼ばはりければ、齡八旬に餘る漁翁、とある茅舍の中よりよろぼひ出で、元親が前に跪く。元親老人に向つて、古元弘の亂に、一の宮此所に逆旅ひ給ふ舊跡は、何ぞと尋ねければ、翁答へて、さん候、あれに見えたる一村の、少し木高き松林の中に、新殿造り住ませ給ふと承及び候。此處は舊りにしより、我等如きの獵師の屋にて候へば、藻鹽の煙消えがてに、灘の鹽燒く暇なき身に、都上﨟を見奉る事もなければ憚れ參らせ、近付き侍る者も候はず。宮御心細く思召され、此邊に武士はなきかと御尋ありしに、是より南二里を隔て、大平と申す守護在すと申せば、宮一首の御歌を送らせ給ふ。

土佐の浦に世を浮草の流れ來て寄邊なき身を哀れともとへ

大平返歌に、

哀れともいかで如何も思ほへん土佐の入江の藻隱れに居て

斯樣に歌の贈答など遊ばされしと承り傳へ候と語りければ、元親聞いて、誠に芻蕘の者として、斯る古事聞置きけるこそ殊勝なれとて、卽引出物取らせければ、老翁大に悅び、雪の頭に戴きて、鳩の杖に縋り、磯山傳ひ濱邊の方へぞ歸りける。

元親屬を信長に請ふ事

去程に元親は、密に世の變化を想ふに、今七雄互に爭ふ時にして、天下に主なく、畿內も三好の嫡子絕えて、一族等漸く城を守るのみなり。さるに由つて天下を併呑するの志、尾州・參州・甲州の間に鼎峙して、鷸蚌の勢をなすと雖も、只信長のみ天下の主たらん事近かるべし。我是に一味して、四國を伐取り、尙中國に跨らんと、急度工夫を回らし、能き內緣もがなと思ふ折節、泉州堺の町人宍食屋の何某といふ者あり。轉貨の事に付いて每年土佐へ下り、元親が屋敷へも心易く出入しけるを呼出し、扨も尾州の織田信長は、當世の英傑にして、行々天下の主ともなるべし。我れ其威風

を慕ふと雖も、遠國の事なれば其便を得ず。汝尾州に赴き、能き内縁もあらば、我深意を達しなんやといひければ、宍食屋承り、是に過ぎたる安き御事や候べき。幸ひ信長の御屋形へも心易く出入仕り、折々御目見仕候と申しければ、元親大に悅び、心中の趣を書面にあらはし、疾々急げとありしかば、宍食屋畏り、追付け御返事を取つて歸り候はんと、土佐國を罷出して、海陸日數積れば尾州に着きぬ。此時信長は、京都の政道を調へ、本國に歸座ましませば、宍食屋直に城中へ參り、元親が心底委細に言上し、幷に一封の書を出しけり。信長披見あつて、遠國の武士も我が家風を慕ふかと、御悅斜ならず、卽ち元親が望に任せ、御名乘の字を賜はり、左文字の刀を添へて、元親に參らせよと課せければ、宍食屋尤も面目施して、土佐の國へと馳下る。往返卅餘日を經て、元親が亭に來り、彼返書に刀を添へて出しければ、元親悅喜限りなく、長男彌三郞を、是より信親とぞ名乘らせける。元親兼て阿波・讃岐を伐取り、四國に橫行せんと思ひければ、備前の浮田直家へ使者を以て、向後は善隣の好をなし申度候。某近日阿波・讃岐へ出陣致候。三好・香河なんど加勢を乞ひ候共、必御許容

元親、信長に屬す

なき樣に賴入候と、慇懃に言送りければ、直家も、元親が威勢欺き難くや思はれけん、一議に及ばず、此後土佐守に對して、疎意あるまじき由を應答へらる。使者歸りて、直家疎意なき旨を申しければ、元親さては心安しと悅び、其外諸國の豪家へ緣を求めて音信を通じ、疎遠あるまじき由を約す。是偏に親きは、疎きを隔つるの謀とぞ覺えける。然る處に同年七月十五日に、舍弟吉良左京進卒去しければ、元親愁傷斜ならず、我が永祿四年に軍し、今年既に十餘年に及ぶ迄、甲兵の間に相伴ひて、度々の戰功勝げて計ふべからず。不日に近國に徘徊して、共に謀を合せて大行をなさんと思ひしに、天早く我弟を奪へり。嗟呼惜むべし〳〵と、悲嘆の床に臥沈み、徒惘然たる計りなれば、暫く取出の沙汰も止めてけり。其後左京進嫡子新十郎といひけるを、元服させ、吉良左京進親實と改め、我娘を之に妻す。其弟吉良播磨守、豐後戶次川の合戰に、信親と同じく討死せり。

島彌九郎橫死并元親阿州發向附豐岡八幡奇瑞の事

土佐守元親が末弟に、島彌九郎といふ者あり。武勇兄に劣らず、度々の軍功他に異なりしが、永祿十年の頃より沈痾に染み、身心共に惱亂す。醫療樣々なりと雖も、遍身自由ならずして、軍務心に任せねば、暫く都に上り、閑に治術を求めんと、旅行の粧引繕ひ、翌年の春三月、浦戸の濱より艤し、順風に帆を揚げて、波路遙に漕出す。空海朦朧として、款乃の聲靜に、交加(ゆきか)ふ船の跡遠く、霞に包む島々や、漁村を照す櫻花、見捨てゝ歸る天津鴈、詠むる末は雲の浪、烟の波漫々として、吟望更に果もなし。實にや一葉船中載二病身一と、白樂天が作りしも、今身の上に知られたり。夕陽西に傾けば、煙寺の鐘も程近く、とある湊に着きにけり。是をば海部奈佐の湊とぞ申しける。折節磯山嵐吹きつれて、春雨頻に降りければ、船人碇を下し篷を覆ひ、晴を待つて、數日の逗留をぞしたりける。さらでだに旅泊の憂き習とて、岩打つ波に夢を驚かし、楚竹燒くなる漁火や、海士の呼聲幽にて、孤燈篷裏聽二蕭瑟一、祇向二竹枝一添二涙痕一と打吟じて、感情を催しける處に、忽然として爽に鎧ひたる武者百騎計り馳來り、手手に繼松振立て〳〵、是(こゝ)よ彼(かしこ)よなんどいひて、我先にと彌九郎が船に乘移る。船中

島彌九郎討たる

思の外の事なれば、是は狼藉なり何者ぞと、周章騷ぐ處を、後走の者共、追々船に飛乘り飛乘り、彌九郎を始として卅餘人、一人も殘さず討取り、吐と笑うて歸りける。抑是は如何なる故ぞと尋ぬるに、元親土佐の國を伐取らば、阿波・讃岐へも攻來るべしと、誰いふともなく、海部の城に沙汰せしかば、此船元親が弟島彌九郎なりと聞きて、海部三郎を始め、さては當國檢見の爲にぞ來らん。一人も生けて返し、國の要害を見通されては、後悔すとも甲斐あらじと、雄男の若者共、後の災をも顧みず、犇々と押寄せ、敢なく是を討ちしとかや。土佐國には、此事を曾て知らざりしが、今度諸國へ遣せし使者歸り來つて、追々に訴へしかば、元親大に怒つて、諸將を集めいひけるは、我れ國中を伐隨へ、常に阿讃を呑まんと欲す。然れども多年の軍に、民百姓も業を捨てゝ逃隱る。さるに依つて軍用乏しければ、暫く猶豫する處に、我が弟奈佐の湊にして、切害せらるゝこそ奇怪なれ。不日に大軍を率ゐて阿州を攻取り、弟の寃を雪めん。去ながら敵國へ、初めて軍立する事なれば、不覺の擧動しては、天下の嘲哢なるべし。夫れ古より、所謂善く戰ふ者は、勝ち易きに勝つ者なり。我兵を野根・甲

元親・海部宗壽を破る

浦の兩處に屯して、山手より敵の不意を窺はせ、本道に大軍を備へて、龍虎の威を逞くし、敵に方便なからしめんと、手下の兵を算ふるに、吉良左京進・吉田備中守・同次郎左衞門尉・桑名彌次兵衞・同藏人助・同丹後守・江村備後守・同孫左衞門尉・同掃部頭・桑名左近・同太郎左衞門尉・南岡左衞門太夫・姫倉豐前守・福富飛驒守・横山三郎左衞門尉・同九郎兵衞・吉田伊賀守・山川五郎左衞門尉・十市備後守・久武肥後守・山本左近・香曾我部左近大夫、是等を宗徒の兵として、都合其勢七千餘騎、出陣の支度調ひ、阿波國へ立越え、海部の邊の民屋を放火す。其頃海部入道宗壽は、三好の一族河内國に在つて、畠山紀伊守と合戰し、已に危に莅む由を聞きて、渠を祐けん爲め、攝津國に在陣せし程に、城中無人にして、防ぐべき術盡きぬれば、一戰に討負け、鈴峯に取登つて、嚴しく保禦の備をなすと雖も、元親大軍を率して、透間をあらせず攻上る。其上初より、野根・甲浦へ向けし土佐勢、後の山より攻入りしかば、前後の敵に途を失ひ、又城中へ引入らんとせしを、元親道を遮つて、氣息をも繼がせず、攻懸け〳〵、敵の首數百餘級を討取りけり。爰に一つの不思議あり、東灘目・油木・日和佐・桑野・猿泊

の城々に、白幡虛空に飜翻し、白鷺數多群り噪ぐ。是を見て海部が領する七ヶ所の城主大に恐れ降參し、或は城を明けて落失せけり。昔日秦氏廿代に及んで、豐永・兼光は豐永の城に住しけるを、阿波國より敵來つて、豐永の城を圍む。其時八幡の寶殿より、鋒一本白鷺二羽飛び來りて鋒を振ひ、陣の上を翔りければ、敵是に恐れて敗軍し、討たるゝ者數千騎なりとかや。今北野の河波塚とは、豐永・兼光が討取つたる敵の首を築込めたりし塚なり。又鋒內といへるは、其時の鋒、舞落ちたる所なり。去ぬる享祿年中に、一條家の代官として、元國坂折山に陣を取り、旣に豐岡の南の淵に押寄せしが、吉例なれば、此處より攻寄すべしとて、元國一陣に進んで、家々殘らず放火しける。此時も白羽の鏑矢二筋、雷霆の如く鳴り來つて、敵陣に落入りたれば、敵震ひ恐れ周章騷ぎて、一戰にも及ばず敗軍す。其矢今八幡の寶殿にあり。于時元國が兵に、福留某といふ者、大勢の中へ突いて入り、敵を切る事卅七騎、此太刀八幡大菩薩の靈劔なりとて、長曾我部代々の守の太刀となせり。斯る瑞應を以て、海部が領分七ヶ城、及に血ぬらずして元親が手に屬す。不思議なりける事共なり。

東條和睦附城々一味の事

抑阿波九郡といふは、三好・麻植・名東・名西・勝浦・那賀・板野・阿波・美馬なり。去程に阿波南方牛波の城には、（富岡城ともあり）新開遠江守入道道喜といふ人、古代よりの領主なりしが、元親海部七城を乘取りしより、程近ければ忍の者を遣し、道喜が擧動を聞くに、元來氣象人に雄れたる剛の者なりしかども、近年領國靜謐なるに由つて、弓箭の術も廢れて、全く亂舞遊興を事とし、何の要害もなきと告げ來る。元親悅び、大軍を率して押寄するに、城兵臆して一戰にも及ばず、是彼に蟄居て、墓々しく防ぎ戰ふ者もなく、寄手犇々と取巻き、火矢を以て矢倉を燒落し、埋草を以て堀を埋め、鬨を作り懸け〳〵攻入りしかば、城中の兵若干討たれて、殘る者共我先にと落失せたり。道喜力盡きて冑を脱ぎ、矢留を乞うて降參す。元親牛波の城を乘取り、尙々大軍を起して、國中を攻取らんと、暫く汗馬の勞を休め、日を定めて打立たんと議せしが、木津の城主東條關兵衞は、文武兼備の兵、殊更其身謙遜にして士を懷け、出るを廢て

東條、元親に一味す

直きを愛す。之に依つて國中多くは是に睦みければ、元親何卒此者を味方にせば、一國悉く平均すべしと思ひ、木津の城へ使者を以て、毎度和睦を乞ひしかども、東條も元親が心底計り難くや思ひけん、曾て承引せざりけり。久武申しけるは、再三和睦を仰遣さるれども、東條狐擬して歸附せず。古人の所謂親隔疎の謀を以て、御養子の娘子を、闕兵衞に妻合せ給はゞ、彼定めて味方に降るべしと諫めければ、元親げにもと心付き、東條へ此事、媒を以ていひ入れけり。闕兵衞聞いて、元親左程迄心底を顯し給ふ處に、我れ從はざるは、臆するに似たりとて、許諾したりければ、元親急ぎ嫁娶の儀式取繕ひ送られたり。東條是より元親に一味し、南方の城主郡主へ悉く內通して、大略味方に引入れける。中にも阿波の山分・仁宇の何某は、大身の侍なれば、闕兵衞媒にて元親に緣を結び、各歸服して無二の志を顯しける。白地の城主大西上野、淡州福浦の城主友成・茂木・尾瀨・勝浦の茂見も、元親の憤激にや褄褲しけん、皆元親に降らん事を乞ふ。東條是を取次ぎて、領地先代の如く宛行ふ。各安堵の思をぞなしにける。

元親、清重城を攻む

清重落城の事

清重の城主森下野守は、元親近郷を攻取り、東條・仁字も土佐方に屬したると聞えければ、定めて元親、此へ攻め來るべし、油斷すべきに非ずと、處々に搔楯緊しくかゝせ、鹿垣逆茂木繁く結ひ、要害を堅むる内に、案に違はず土佐守八千餘騎、大手搦手に別れて押寄せ、逆茂木を引破り〳〵、城際迄攻掛けたり。城主下野守、元來勇敢にして心剛なる事、元親をも欺く程の者なれば、自身鎗を提げ、追手の門に支へて士卒を勵し、突と叫びては駈出で〳〵戰ひしかば、寄手二三度迄追捲られ、進み兼ねて控へたるが、城門を犇々と打つて、敵近付けば、處々の櫓より、玉箭雨の降る如く射出しけるに、寄手左右なく近付き得ず。斯る處に搦手の軍、味方利を得て、一の城戸口迄攻入りたる由、光富權助・江村孫左衞門追々注進しければ、元親大に悅び、搦手の軍強く、寄手勝に乘らば、城兵當手の軍を棄てゝ、搦手をぞ救はん。倘々敵の心を油斷させてこそ、一擧の功もなるべけれ。當手の軍、唯攻飽んだる體を見せて、夜に入

りて手段こそあるべけれど、是彼に鬨聲を上げて、日の暮るゝをぞ待ちにける。城中には、搦手の軍急にして、寄手込入らんとすれば、是を入立てじと、蒐合々々しけるに、城兵無勢にして入替る兵もなく、戰ひ勞れて見えにける。下野守、大手の勢に下知して、搦手を扶はしむ、兎角する内に其日昏れければ、元親眞先に進んで、時分はよきぞと、塀際迄乘懸けゝれども、門を確と閉ぢて、出合ふ敵一人もなければ、哀れ詮なき所に行懸りぬと、暫く疑議して控へしが、元親怒つて、事々し、其門打破れ。何程の事のあるべきぞと下知すれば、勇雄の兵共、手々に大鉞玄翁の柄を押取り直し、えいや〳〵と打ちければ、關木も扉の板も、栫と共に碎けて除きにけり。之を防がんとする兵、四方へ散りて颯と引き、一の木戸難なく破れしかば、當手の軍勢五千餘騎、城の中へ亂れ入る。城主下野守少しも騷がず、究竟の兵を左右に相供し、雷神の如く突いて出で、揉合ひ蒐合ひ勇を震うて戰ひける。搦手の寄手之を聞き、大手は早乘入りたるぞと、面々搔楯逆茂木を乘越え〳〵、塀櫓の板を切隕し、叫き喚んで攻入り、八方に散つて火をかくる。城中大に崩れて、太刀武具を捨て、湟崖とも

いはず、仆れ込んで逃失する。下野守大音上げ、命は天に在り。我に倖しき兵共は、續けや續けといふ儘に、向敵に走り懸り〳〵、火を散らして戰ひけるが、兵士皆討死しければ、我身も終に烟の下に、腹搔切つてぞ伏したりける。元親處々の火を消させ、燒跡に陣を取つて、分捕高名を點檢し、又味方の手負討死を算ふるに、若干討れければ、一先づ本國へ引入るべしと評議せしに、桑名進み出でて申す樣、此勢に乘つて、岩倉の城を攻取り給へかし。其故は、三好正安は、阿波半國を領ずる身なり。御勢引入れ給はゞ、其儘正安要害を守り、城を築き人數を畜へん。然らば重ねて打つて出でんも、容易にはなり難からん。只正安一城にならば、威勢盡きて降參するか、又は他國へ逃去るべし。譬ひ一軍に及ぶとも、何程の事か候べき。某は手勢計を引具し、此所を守り、敵の通路を絕つべし。大軍は、本道に向つて攻入り給ふべしと勸めければ、元親其議に從ひ、暫し士卒の氣を養つて、打立つべしと計りける。

岩倉の城歸忠の事

此る所に三好山城守は、河内國高屋の城にあつて、岩倉の城には、横田内膳正・鹽田若狹守・同左馬助入道一閑等を殘して守らしむ。此時一閑は、三谷の城に居たりけるが、殘る輩野心を挾んで、土佐方に降參し、脇の城へ桑名彌次兵衞を引入れ、是を手引として元親に阿りける。然る處に西林村の三橋丹後守・同常陸介兄弟、岩倉城に來つて内談しけるは、我々斯く土佐方に從ふと雖も、何の忠節もなくては、心を隔てらるべし。いざや一手柄して、元親の感賞に預らんといふ。何れも尤もと同意しければ、十二月廿六日、三好家の老臣森飛驒守へ使を立て、岩倉は三好累代の臣なり。空く土佐方に降らん事、誠に口惜く候。承れば土州勢本國へ引取る由、此時に乘つて御人數を出されば、力を合せ追打にせんと、寔しやかに申送りける。森飛驒守・三好越後守・矢野駿河守・川村左馬亮、各尤も然るべしとて、俄に軍勢を支度し、翌日早天彼地へ駈向ふ方便とは知らざりける、軍慮の程こそ無慙なれ。脇の城には武田上野介、土佐方に組しければ、弓鐵炮を放ち懸くる。寄手には岩倉の城中より、手合あるべしと待ちけれども、却て味方裏崩して、前後に敵を受けたれば、寄手の軍勢、重

地に引入れられて、駒の駈引も自在ならぬ山道なるに、案の外なる謀計に落され、咄と崩れて、谷岸ともいはず雪頽れ落ちて、五體を碎きて死するもあり、岨道を引かんとすれば、嵂嶇たる難所、外に行くべき道もなく、人擧つて進み得ず。或は蕀枳の中を押分け通らんとするも、溪切れて、見るに肝魂も消え果て、前後左右にふためきける處に、桑名數百騎の鋭卒を從へ、城中より伐つて出づる。寄手彌途を失ひ、惘然として佇む處に、矢野駿河守・三好越後守、立處に鐵炮に中つて倒れければ、加藤主水走り寄りて首を捕る。川村左馬は、宇山孫市が爲に討たれ、森飛驒守は、美間助七首を捕る。其外戸井新右衞門・鴨島六之進・久次米與右衞門・川島兵衞進・麻植志摩守・內原菊太夫・飯尾久左衞門等、究竟の勇士忽ちに、さしたる働もなうして討たれける。此勢に辟易して、近邊の城主靑野麻穗を先として、皆々軍門に降りしかば、早速の降參を賞し、先知相違なく、各在城案堵せり。元親諸士を勞つて曰、一先づ本國へ引入り、重ねて出陣すべし。當城を改補して番兵を込置き、三好が有樣をも聞くべしと、破れたるを繕ひ要害を固め、桑名彌次兵衞を守將として、三千餘騎を殘し置き、近日

土州へ引入らんと相觸れし處に、三好正安出陣する由聞えければ、暫く逗留して事の樣を窺ふに、曾て虛說なりしかば、又三千餘騎を加へて、岩倉城を守らせ、元親は土佐國へぞ引取りける。

四國軍記卷第五終

四國軍記巻第六

三好正安岩倉城を攻む

三好出陣并軍評定の事

同翌年の春、三好正安、其勢七千餘騎を率して打出で、岩倉城の近邊、生田・比留間の在家を放火し、岩倉より牛道川下を渉して引取りける。故を如何といふに、元親岩倉城に人數を籠置きければ、敵の剛臆要害の堅固をも、試みん爲とぞ聞えし。岩倉の主將桑名彌次兵衛、元來心早き大將なれば、此由を聞いて、是を其儘引取らせなば、一つは本國への聞えといひ、又は敵兵の嘲哢も口惜しかるべし。所詮敵軍の膽を落すに如くべからずと、大西上野を軍大將として、鐵炮の上手を擇りて三百餘人、間道を廻り、敵の引いて歸る柳原の内に伏置き、敵の大將を擇打にせんと、鳴を潜めて待掛けたり。斯くとは知らで三好が兵、色々の旌差物を春風に翻し、何心なく引入り

元親、三好正安合戰

けるを、待構へたる鐵炮、一度に噇と打掛けしかば、二行に列ねたる兵、人馬共に打倒され、是はいかにと先驅後衞うろたへ回るを、桑名が伏兵一度に噇と叫んで突出す。日頃勇を勵まし功を顯したる兵も、時に取つて敗悶する習なるに、況や雜兵に於てをや。一支も支へず、我先にと、勝瑞指して逃げたりければ、追討に首二三百擊取り、卽時に城中へ引入りける。江村大に悅び、早馬を以て元親へ注進す。元親聞いて、我も豫め大軍を起し、雌雄を決せんと計りしなり。此時を移さず不日に押寄せ、三好に腹切らせんものをと、卽ち岩倉の城迄出張し、追々軍兵を催促しけるに、國中の兵は申すに及ばず、新參古參の降人馳集り、城中に居集まつて、平野に陣を取り、夜每に大篝處々に焼かせ、本篝棄燎數ヶ處に焼續け、張番夜廻り隙なくして、恰も回天の威勢をあらはしける。去程に三好正安は、計らざる兵多く討たせ、元親を深く恨みて、何とぞ良策を以て此憤を散ぜんと、晝夜心を摧く處に、却て元親大軍を發し、岩倉の城迄出張すと聞いて、或夜兵を率し、元親が野陣を刧すと雖も、陣中法度嚴しく備を設けたれば、夜討の兵さして仕出したる事もなく、味方少々討たせ

て、おめ〳〵と引取りける。其後は寄手の方にも土手を築き、猪垣を二重三重に結廻し、嚴しく陣場を堅めけるにぞ、互に軍を止め、對陣して居たりけり。或時元親、家老組頭の者共を呼びて申しけるは、我れ當國の城々を手に入れし事、偏に面々の粉骨に由つてなり。今は勝瑞一城になると雖も、三好元來大軍にして謀に長ぜり。斯く永々對陣をし、雨に沐し風に梳りて、いつを期すべき軍ぞや。面々所存の趣もあらば、申されよとあれば、予時中內進み出でて申す樣、御諚の如く何の仕出したる事もなく、永々對陣仕りては詮なく、軍用の費のみに候はん。さればとて勝瑞へ取かけんも、要害堅固なれば、早速の功もあるまじ。殊更今は甚暑至つて、士卒苦み勞れ候へば、一先づ御勢を本國へ引入れられ候て、府中の山寄に陣屋を作り、物馴れたる兵を籠置き、年々耕作を妨げなば、敵の下々疲れ苦み、自然に謀叛人も降參人もあるべし。其時打つて出でなば、一擧に勝劣を決し候はんと申しければ、元親頭を垂れて沈思す。予時桑名申す樣、唯今意見、其理明白なりと雖も、事寛悠にして、俗夫の心を惑し候。仕寄りたる軍を、無手に引取らんも、餘りに本意なく候か。夫れ

古より、謀は敵に依つて轉化すと候へば、何とぞ良計を以て敵を於引出し、討取る方便こそ願はしく候へ。入らざる壘事に候へ共、昔楚國より絞を攻めけるに、師決せず、對陣する事久し。楚の大將莫敖、謀を以て、敵陣近く柴薪を取らせければ、或日絞人、楚の薪取る者を討取る事卅餘人、莫敖是を聞いて、謀成りぬと喜び、究竟の兵を山下に伏せ置き、例の如く樵人を出しければ、絞人是を討たんと、大勢城を出でけるを、伏兵を以て前後より之を討ち、終に城を乘取りたり。斯樣に永々對陣して、徒に軍用を費すに似候へ共、早當國も過半御手に屬したれば、强ちに運送に、事缺く事も候はず。壘番兵を殘して守を置くとも、元より正安が相手に足らざれば、卽時に追落され、却て敵の有とならん。されば引入る事は安くして、仕寄らん事はなり難し。古人も謂り、不﹅爲﹅見﹅義者無﹅勇とかや。よく〳〵御工夫を廻らさるべしと、憚なく申しければ、元親熟之を聞き、申さるゝ處一々我心に叶へり。如何にして急に師を發すべきぞ。所存の旨試に申されよ。桑名承り、兎も角も殿の御爲なれば、心中の通り殘さず愚意を申上げん。先づ三好笑岸、河内國に在つて半國を領す。養子

は羽柴筑前守姪子と承る。事延び〳〵の沙汰に及ばゝ、當國は三好が本國なれば、笑岸、筑前守に加勢を乞ひ、却て味方を攻められなば、由々しき御大事にて候はん。某存候は、三好が押の城一宮・夷山の虎口に押の兵を殘し、大軍は大道より打つて出で、勝瑞より三里此方の中留川を前に當てゝ御在陣あらば、三好定めて押の城々に、人數を分ち來るべし。さあらば寄手は小勢にて、殊に足長に出づるは天の賜なり。速に討取らんと、自身討て出づべし。是所謂三軍不レ奪レ氣將軍可レ奪レ心といへるなり。先づ敵に利する處を見せて、却て味方には、初より物馴れたる忍の者を敵中に入置き、敵の有樣を聞いて、城々の勢を次第に繰寄せ、臨機應變して、蒐出で〳〵戰はゞ、敵如何に猛く共、やはか怺へ候べき。兵法にも、不レ可レ勝在レ己、可レ勝在レ敵といへり。今度の進退、大將の御心にありと、始終の謀略、一々圖に中りしかば、元親掌を打つて大に悅び、日を擇みて中留川迄出張すべし。然らば桑名先魁として、軍慮心に任すべしとぞ定めける。此事敵中に隱なく、正安家の子長臣を召して、元親中留川へ出張すると聞く。軍の手段如何あらんと評定す。滿座の輩承り、長曾我部、

中留川へ討つて出でば、道筋數多に分れて、味方の砦多く候へば、後を襲れん事を恐れ、一宮・夷山其外押の城々に、人數を籠めて用心すべし。さあらば出陣の勢は、一萬騎に過ぐべからず。殊に長途に勞れ、武者・呉子が所謂以近待遠、以佚待勞、以飽待饑といへり。是ぞ元親が屍を送る所なり。天の與ふるを取らざれば、其咎を得るとかや。味方の猛卒を引連れ、敵より先に中留川を打渡り、韓信が越を破りしに習ひて、卽時に元親が馘つて土產にせんものをと、事もなげにいひければ、其時末座より廣瀨某といふ者進み出で、何れもの御詮議尤に候へ共、抑此元親、尋常の敵にあらず。夫古より川を隔てし戰に、半渡るを討たれて、敗せし事其例多し。只幾度も當城の要害に支へ、敵の來るを待つて戰ふべし。打つて出でば敗を取らん。御思案あれとぞ申しける。其時竹田內膳といふ者進み出で、貴邊孫呉が言を引いて、川を渡す事を忌むと雖も、倭漢其例懸隔せり。されば治承に足利忠綱、宇治川を渡して賴政に勝ち、壽永には佐々木高綱、同じく宇治川を渡して木曾を敗り、承久には信綱、供御の瀨を渡して京勢を追退け、延元には北畠顯家、利根川を渡して鎌倉勢に勝

つ。夫守則不足、攻則有餘といへり。今敵味方牛角の軍勢にして、味方は譜代恩顧の輩、敵は處々の假集り勢、又は力足らずして、是非なき降人を引具したりとも、是等の者共は、譬ひ何萬騎ありとも、何程の事かあらん。當時天下の戰にさへ、三好家の軍立に、三千騎の外は人數入らぬものを。況や元親が此迄の出張は、偏に運の究とこそは存ずれと、言を放つていひければ、正安再三の思慮もなく、尤と打諾く。是を三好が運の末とは、後にぞ思ひ知られける。

中留川合戰附三好讚州へ退去の事

于時天正五年八月上旬、元親中留川へ出陣すべしとて、先手分をぞしたりける。行軍の道筋に、敵の砦ありける。中にも一宮・夷山といふ處に城あり。一宮の城主成助、味方に志を寄するといへども、當時人の心、反覆常ならざりしかば、押の人數を殘すべしとて、三千餘騎を止め置き、香曾我部親泰を、先陣の大將として四千餘騎、南口より押寄せたり。二陣は信親五千餘騎、十餘町引下つて、上部・中島より發向す。

其次に元親、旗本の兵六千餘騎、都合其勢一萬五千餘騎、冑の緒を縮め、旌旗風に閃いて、轅門の前後四維齊しく群集せり。元親諸軍に令を下して曰、凡そ今度の軍、河に寄るの陣なれば、猥に川を渡すべからず。地理の要害に依つて營し、某が下知を待つて軍を初むべし。敵若し兵を引きて、川を渡し來つて戰はん時は、之を水中に迎ふる事勿れ。敵敢て濟さゞるものなり。是則ち兵家の忌む處なり。其半渡す時を見て之を討たば、敵行列定まらず、首尾接らずして、敵敗せん事必せり。漢王、曹咎を汜水に破り、公孫瓚、黄巾賊を東光に敗りしも、皆此術を用ひたり。面々能く心得て、誤る事勿れとありしかば、各命を受けて、靜に退出したりける。其後元親密に國繪圖を以て地理を考へ、熟と思案を廻らし、中内源兵衞を呼んで申しけるは、汝は五百餘騎を引いて、中留川の川上に屯し、土俵を以て水上を堰切るべし。さあらば敵、馬の雌雄自在なるに由つて、川中にて戰ふべし。味方は礒際に支へ、半進半退の軍を張つて、敵を道引くべし。戰理に當らん時、相圖に烽を擧ぐべし。其時に積水を切て落し、流に引添つて走下るべし。正安を手捕にせん事、此一戰にあり。相

構へて誤る事勿れと、仔細に下知をなしければ、中内領掌し、五百餘騎を率ゐて出でにける。翌くれば元親が先魁四千餘騎、中留川に出張して、馬の蒐場を殘し、隊伍堂堂たる陣整、旌旗の風に翻る有様、鎗刄の皎々と、朝日に照り輝く氣色、晴天の星に異ならず。元親は諸軍の命を主つて、遙に引下り、桑木原に陣を据ゑ、暫く諸方の手段をぞ窺ひける。斯くて三好正安、一萬餘騎を三手に分け、勝興寺表に陣を張る。先陣は川端に出向ふ。折節河水大に涸れて、馬の足を漬す程なれば、先陣願ふ處の幸なりと、我先に河を渡さんと色めきしを、三好が侍大將矢野隼人、駒を川岸に磬へて申しけるは、是程の淺瀬を、敵渡さで控へたるは、定めて深き謀あるべし。暫く備を立て、事の様を見て、後に渡さんは心安かるべしと制しければ、兵皆川端に立塞り、弓鐵炮嚴しく打たせて、互に時刻を窺ひける。久武肥後守、親泰に向つて、味方川を渡さゞるを見て、敵の心狐擬を生ず。此時節を放さず、先陣の勢を以て一軍あれと諫めければ、親泰聞きて、我もさは思へども、元親下知なき内に、合戰無用との約なれば、此旨を守ると答へらる。肥後守又申しけるは、大將外にあつては、君の命も用

ひざる處あり。今此圖を放さば、人に先を越され、後悔すとも甲斐あらじと、再三諫めけれ共、親泰兎角猶豫して見えける處に、後軍の大勢押來り、一同に旗の手を進め、鬨を哄と擧げ、川中へ打つて入りしかば、三好が兵、我劣らじと馬を駈寄せ〳〵、川水を蹴立て水烟を飛して、斬伏せ突伏せ散々に戰ひたり。土佐の先勢耐り兼ね、堤の上へ引退く。三好是に機を得て、眞一文字に川下を颯と押渡り、兩軍互に入亂れ、追靡け追歸し、爰を專途と戰ひける。去程に中内は、川上に控へてありけるが、合圖の煙を屹と見て、すは時こそ至れと、積置きし土俵を切つて落し、流に添うて下りしかば、逆浪忽ち川岸を浸し、飛滂渦卷き來つて、雲の崩るゝが如くなり。河中にありし三好が兵、水を恐れて敗走し、或は浪に打たれ、或は淵に乘込んで、死する者數を知らず。是を見て久武肥後守・同内藏助・桑名彌次兵衛尉・同太郎左衛門尉・依岡左京亮・同丹後守・同藏人助・中島大和守・吉田備中守・同伊賀守・江村備後守・同孫左衛門・山川五郎左衛門・吉良左京亮・細川源左衛門・姫倉豊前守・十市新右衛門・横山九郎兵衛・野中三郎左衛門・馬場因幡守・南岡左衛門太夫・福留飛驒守、此等を先として、一陣二

陣返し合せ、玉箭雨の如く、長鎗劒戟日に閃き、暴風の尾花を亂すに異ならず。元親は川上へ廻りて颯と打入れ、馬に鼻嵐を吹かせて、向の岸に駈上り、揉みに揉んで戰ひしかば、敵兵大に敗軍す。されども名を惜み義を重んずる兵共、取つて返し〳〵て、討死しける者共には、矢野伯耆守・子息備後守・赤澤入道宗傳・同鹿之丞・西條益太輔・馬詰三四郎・岡甚之丞・七條孫次郎・坂東右近・大寺松太夫・近藤內藏介・野中玄蕃・香美馬之丞・光富新左衞門・堀江藤太夫・佐藤久右衞門・角田角右衞門・飯尾善之丞・智惠島源次兵衞・桑島入道來心・甘利奧右衞門・白鳥左近・高畠右衞門・飯田牛右衞門・同十太夫・田村盤右衞門・鎌田久馬右衞門・鈴木新兵衞・古川龜右衞門・粟飯原平之丞・石川六之進・楡淵左近・湯淺豐後・新居川源右衞門・宇名瀨龜之進・芥川兵庫・四宮外記・由木善左衞門・古津竹右衞門・中莊主膳・延野兵衞進等を先として、一騎も殘らず討たれけり。正安は纔に七八十騎の兵に助け出され、這々勝瑞指して逃入りける。都て此一戰に、土佐方へ討取る首數、都合二千三百餘とぞ聞えし。其外手負或は水に溺れて、屍を失ふ者員を知らず。元親續いて勝瑞へ押寄せ、城の四方を鐵桶の如く打圍み

正安敗走

て、十日計息をも繼がせず攻めたりけり。然る處に同月十七日より、降雨流るゝ瀧の如く、水烟綿漫として、三日三夜の間、日月の光もなく漠々濛々として、里村の民屋は浸されて浮萍の如く、阿波國中一面に、見渡す程の洪水なり。寄手の乘馬鞍坪を漬しければ、諸軍船筏を用意し、或は四壁の桑の木に、棚をかきてぞ居たりける。元親父子は、萩原寺の屋根に上り、城中の樣を直下すに、洪水床を浸し、土手塀小間も崩れ落ちて、諸士水中に在つて倦勞す。元親處々の賈船を奪ひて、一時に城に攻入らんと議しける處に、次の日より雨晴れて、天氣晴朗なりしかば、水は次第に干落ちけり。城中此程の洪水に、兵疲れ勢悴け、戰はんずる景色もなかりし故、正安矢止を乞ひて、一命をだに助かりなば、城を明渡すべしと詫びければ、元親即ち領掌し、正安をば、讃州虎丸へぞ送りける。從僕妻子樣々に潜行零落して、何爾斯彼に身を蔵す。盛衰刹那に變じて、窮達須臾に地を替へたり。數代の榮耀忽ちに、夢の如くになりにけり。阿波國中悉く元親が手に入りしかば、夷山の城主武像新右衞門も、城を明けて退きぬ。一宮成助は、逆心の色露顯ありしかば、賺し寄せて夷山の城中に

て成敗し、諸士の見懲にぞしたりける。

元親豫州發向の事

土佐守元親は、阿讃二州の軍、勇謀を以て事故なく討勝ち、城々に物頭を据ゑ、軍兵を籠置きたれば、諸方の通路自在にして、兵糧軍器不足なく、士卒は數度の軍に馴れて、左右前後の陣を合せて一陣とする時は、長蛇となり、一陣を分つて四陣とする時は、四門となる。進退法あり啓閉路あり、旗幟明にして金鼓誤らず。規矩準繩毫釐も喪ふことなく、三軍の衆を犯すこと一人を使ふが若く、調練宛も妙を得たり。元親讃州出陣の時より、兼て軍慮を回らし、一手の勢を豫州路に差向けて、時々に足輕を出し、在々を放火し、郡縣を劫すと雖も、宇和・喜多二郡の者共事ともせず、鐵炮にて打拉ぎける程に、土佐勢每度に手負ひ死を致す者多くして、寄手守り兼ねたる處に、元親讃州の軍大利を得、國中悉く平均せしかば、近日大軍を率ゐて攻入るべき由相聞ゆ。河野通直大に怒つて、抑當國の事は、神代の昔伊豫の王子に、二名の島を賜は

りしより、末洙繼體して、河野氏此國を守護する事、一千餘歲なり。今長曾我部我意に任せて、宇和郡に攻來る條謂なし。坐ら渠が攻を受けん事、言甲斐なし。所詮味方時を延べず討つて出で、互の勝負を決すべし。用意せよと犇きける。斯くて元親は、兼て思慮深き者なれば、急度工夫を廻らしけるは、彼河野通直は、其身武勇もなく、又軍の功もなし。然りと雖も中國十ヶ國の太守大江元就が孫聟なれば、手痛く攻むる時は、大軍の加勢來るべし。唯河野が幡下に屬する西伊豫の中、宇和・喜多二郡の西園寺・宇都宮・御莊・河原淵・北川、彼等は大身の武士なれば、左右なく軍の利あるまじ。初度の軍に手間取つては、士卒の銳氣を挫くべし。先づ大野・曾根・床崎・魚成・萩森・多田・山田・熊崎・法華津・板島・中野・深田・土井・河原囮一覺・菅田隼人正猶之等が城廓を攻めよと、先陣久武內藏助・後の濱田善右衞門・桑名太郎右衞門・同彌次兵衞・十市備後守・宿毛右衞門太夫、都合其勢五千餘騎、河原囮源八兵衞が楯籠りたる河籠の城へと押寄せたり。時に城兵八百餘騎、河籠の森迄駈出で、追ひつ返しつ二時計り攻戰ふ。劍戟の光鐙銜の音、天地に響き夥し。雌雄未だ半なりける處に、土佐

の遊軍千餘騎、横合に打つて入りしかば、城兵前後を包まれて、討たるゝ者四百餘騎、一場に屍をぞ晒しける。河原囦叶はじとこゝを打捨て、這々城中に引入り、木戸口に支へて防ぎ戰ひ、弓鐵炮を雨の降る如く射放ちて、寄せ來る敵を追拂ひ〳〵、兎角して日を經る處に、大森・西川・竹森・薄木四ヶ所の城へ籠置きたりし兵共、城を捨てゝ駈け來り、城中又大勢になりしかば、此に氣を得て防ぎ戰ふと雖も、寄手は猶事ともせず、熊手鳶觜を、櫓搔楯に引かけ〳〵、切れども射れども用ひず、乘越え〳〵攻めたりける。元より先度の戰に、臆病神付きたる城兵、騷ぎ立つて一人二人落失せつゝ、千騎に餘る兵、今は僅二百騎には足らざりけり。河原囦詮方なく助命を詫びて、土佐の勢にぞ加はりける。是を聞いて同國多田攝津守も、元親に降りけり。

元親大津の城を攻落す事

喜多郡曾根の某、同郡床崎の某と、割境の爭論に依つて確執に及びしが、曾根、元親に降參して加勢を乞受け、床崎を討從へ、所領悉く押領す。國中の恐怖斜ならず、雷

霆を戴き虎の尾を蹈む心地して、敵對叶はずと思ふ輩は、元親に降參し罔りける程に、土佐勢彌廣大になりしかば、山田・熊崎・法華津の城を圍まんと評議せし處に、本國より飛脚到來す。其故を尋ぬるに、河野通直七千餘騎を率し、大津の城迄出張し、大手の大將來島右衞門太夫通康一族・村上掃部頭武慶・同因島新藏人助吉充・生口・木谷を初として其勢三千餘騎、兵船百餘艘に取乘つて、順風に帆を上げ、大津・宇和路を乘過ぎて、土州奥屋の沖に舟を掛け、浦々を放火し、男女童を擇まず悉く殺戮し、米穀家財を掠取つて、狼藉非分の働す。故に郡民分散し、一國是が爲に騒動す。事延引に及ばゝ、敵兵彌重なつて、早速退治の功成難からんと、大息繼いで訟へける。元親聞いて、我れ敵國に入つて師利ありと雖も、敵又我本國を侵す。兩虎相爭ふ時、一狗費に乘るの謂か。先づ當國の師を止めて歸陣すべし。去ながら是程になしたる軍を、無下に引取らんも殘念なりと、久武内藏助を呼んで、我れ此國に働入つて、討つ處は必ず降り、向ふ處は敵冑を脱ぎ、旗を卷かずといふ事なし。されども河野、大津の城に出張して、我が歸る道を塞ぎ本國を劫す。是れ容易の事に非ず。卽時に

軍を歸し、大津の城を攻取つて根城とし、本國の騷動を鎭めて再び發向せん。されば國有危難則思良將とかや。汝は數度の軍に熟れて、武勇人に勝れ謀いみじければ、只今殘し置く處なり。五千餘騎の軍士を率ゐて、國中に攻入り、宜しく大功をなすべし。軍中の計策、吾に問ふ事なかれ。心に任せて攻むべきは攻め、衞るべきは營を堅めよ。事成就せば、豫州一國の首領たるべしと、懇に申しければ、久武頭を傾け涙を流し、身不肖に候へ共、殿の大恩を蒙る上、今此時に臨んで大任を奉る事、肝腦地に塗るとも、忘れ難き仰なり。一命を君に奉り、士卒を撫育し、機に由つて軍を出し、敵を討亡し、御厚恩に報ずべしと答へければ、元親大に喜び、さらば少しも急ぐべしと、其夜に備を推配り、本國へ打入る風情して、大津の城へと向ひける。頓て通直此由を聞きて、日頃は元親土佐へ引入らば、追討にせんと議せしかども、いかなる臆病神が付きたりけん、當手の勢を以て、元親が大軍に當らん事、一つは謀の拙きに似たり。重ねて中國へ加勢を乞ひ、大軍を以て攻入るべし。先づ〳〵爰を引拂へと、即時に歸城したりける。斯くて元親は、假に土州へ引入る體をなし、其不意に出

元親大津城を降す

でんと、夜を日に繼いで大津の城へ押寄せ、鬨を喚とぞ上げたりける。城主菅田隼人大に驚き、防がんとするも兵少く、殊に元親と聞いて、士卒皆機を失ひ、戰はんといふ者一人もあらざれば、直之詮方なく、人質を出して降參し、城を明けて渡すべき由を詑びたりしかば、此上は强ひて疑ふべきに非ず。先規の如く當城の守護たるべし。去ながら敵國近ければ、小勢にて叶ふまじと、岐川玄蕃・執行加賀守を物頭として、三千餘騎を籠置きて、元親は土佐の國へぞ引入りける。

安並三左衞門感狀を得る事

爰に安並三左衞門は、元來一條家の功臣たりしが、今元親の幕下に屬し、一騎當千と賴まれ、武勇の譽、其名世に高かりけり。今度中留川の合戰にも、諸手に勝れし働にて、敵陣を數度駈破り、頗る手柄を顯し、其後勝瑞を攻むる刻、一番に駈入つて敵を切崩し、高名比類なかりし所に、痛手を蒙り、漸々足代迄引取り、暫く逗留して療治を加へ居たりし所へ、元親より慇懃の使を以て良藥を送り、且又一封の感狀をぞ遣

しける。

急度申遣候。無事に足代迄參着之由大慶に候。少(ちと)手疵痛み申由、民部方より申來り、無心許候。則片山孫左衛門差遣候。彼申次第に可有養生候。誠に今度者、兩城の仕寄等、別而被盡粉骨候事、一入賴母敷思候。其上勝瑞一戰の高名、無其隱候。彌大高坂修理進申樣體に聞屆候。併每々手柄共猶以感入候。當分爲褒美於永濱、中島甚左衛門跡目令加扶持候間、可有知行候。隨分可被致養生候。中途にては可爲無養生候間、少しにても快氣候はゞ、土佐へ可被越候。片孫左は、其方歸陣迄居候へと言付候間、可被得其意候。道標血縛氣付二包遣候。細細可被致服用候。土佐へは種崎にて、左京を養生に言付候。何事も片孫左に申付候以上。

十月三日　　元親　判

安並三左衛門殿

四國軍記卷第六終

四國軍記卷第七

三瀧落城の事

斯くて豫州に在陣せし久武內藏助は、元親本國へ引入りしより、豫州一國の軍務を司つて、去冬の戰に、西伊豫大半攻傾け、回天の氣を逞うすると雖も、未だ降參する者もなく、催促に應ずる兵もなかりしかば、左右事寄せて、未だ一軍もせでありけるが、翌くれば天正五年の春、和氣周流して、士卒戈を執るに自在なり。何迄斯くてあるべきぞ。近日喜多郡へ出張し、三瀧の城を攻むべしと評定する處へ、土佐守より飛脚到來して、大津の城一戰にも及ばず降參せしに因つて、三千餘騎を籠置き、それより土州に歸陣し、國中平均に及ぶの條、不日に豫州再發すべし。早々手近き城を攻取るべし。且又兵糧一萬石を遣すの由をぞ申送りける。久武大に悅び、さあらば

時を移さず攻懸れと、五千餘騎の兵、前後の軍令嚴くして、天正五年五月廿日、三瀧の城へと押寄せたり。元より險き路なれば、寄手の足立惡く、切處々々に支へられて、左右なう攻入り難き折節、城主北川左衞門太夫、狩獵に馴れたる足輕を、惣門の木戶口に備へ、鐵炮數百挺雨霰の如く打たせけるに、寄手若干討たれて進み兼ねたる處を、久武內藏助少しも疑議せず、眞先に駈くれば、桑名太郞左衞門・同彌次兵衞・依岡左京進、意氣をくれず、鏣を雙べて攻上る。爰に光富權之助十六歲、卯花の爪取りたる鎧に、赤き袴の側高く挾み、我に從はん者は、續け〳〵と呼ばはり、木戶口に推寄すると等しく、持楯拉楯(かいだて)を被きつれ、此手の兵二百餘騎、爭ひ勇んで攻入つたり。城中も、爰を破られては叶はじと、寄手塀逆茂木を乘越ゆれば、矢尻を揃へて射て隕し、攻入らば追拂ふ。互に打出で打入り相戰ふ。敵味方に作る矢叫の聲、山彥に應へて夥し。先陣疲れば、後陣の新手を入替へ〳〵、兩陣互に射れども切れども顧みず。今日を限りと攻戰ふ。光富餘りに深入して、只一人大勢の敵に取圍まれ、薄手深手十七ヶ所負ひければ、全身は血になつて、旣に討たるべく見えし處に、光富が後

見谷川石右衛門蒐來つて、目前の敵を押拂ひ、權之助を肩に引かけ、本陣へ引返す。城兵、能き敵と見つる者を、餘すな洩すなと、嚏と叫んで突出す。味方は是を討たせじと、向ひ合せて入り亂れ、二時計り攻戰ふ。矢に中り傷を蒙り、壓に打れ骨を碎く者、幾千人といふ數を知らず。血は流れて、時ならぬ紅葉の秋かと疑はれ、屍谷を埋んでは、谿崩れて平地になるかとあやまたる。城主北川左衛門・依岡左京進と、互に鋒を合せて戰ひけるが、依岡是を大將と見てければ、精神を勵まし、無二無三に突掛る。北川叶はじとや思ひけん、馬引返して逃げて行く。依岡猶も遁さじと、忿激して追懸けたり。是に氣を呑まれて、城兵我先にと逃入りしかば、依岡門前に支へて、追詰め〲討取りしかども、城門を閉ぢければ力なく、しづ〲と本陣に引きける行粧(よそほひ)、勇々しくぞ見えにける。其後は墓々しき師もなく、數日を經る處に、元親大軍を率して來り、戰の始終具に聞きて、誠に此北川は、大身といひ武勇の侍なり。何とぞ味方に屬せば、末々の小城は、戰はずとも降るべしと、使者を以て和睦の事をいひ送る。折節城中にも兵糧盡きて、防ぐべき方便もなかりしかば、重ねて思慮もある

べしと、城門を開いて、土佐の勢にぞ加はりける。去に由つて甲の森の城主長山伯耆守も降參す。是は北川が家老たるに由つてなり。

久武內藏助討死の事

斯くて翌日は、土居源三郎義淸が居城、岡本の城を打圍む。此城の形勢、嶺平にして麓嶮しく、山の腰疊々として、向上れば峩々と聳え、鳥ならでは翔り難きに、塀を塗り櫓を搔雙べ、劍戟日に耀き、弓鐵炮不足なく、兵皆一擁して冑の緖を縮め、旌旗風に閃きて、前後四維に磬へたり。大手の道筋には、大木大石を積重ね、敵攻上らば、微塵になさんと構へたり。元親城の體を能々見て、此城を力攻にせん事、縱ひ千日萬日攻るとも、容易く落つべきとも覺えず。卻て味方を多く損ぜん。所詮此方も向城を取つて、緩々と遠卷し、敵の兵糧の盡くるを待つてや攻入らん。又は高山なれば、水門の樋を切つて、水渴の法をやせんと、衆議區々なりければ、內藏助心中に思ふ樣、我れ當國の先鋒を承つて、未ださせる高名もなく、人並々の働しては、世上の人口に

かゝらん事、無念の至なり。尤要害堅固の地なれば、等閑の軍しては、卻て味方の破を仕出すべし。一命だに捨てば、などか一方を攻破らであるべきやと、竹内虎之助・同彌藤次とて、力量剛にして謀事多く、間忍は顯に、猋んでは則倏として九霄の霞印に翔り、退いては則忽として三寸の草影に隱る。嶮岨を渡り、城中に入りて敵を拉ぐ事、宛も隱形の術を得たる忍の達人ありけるを呼寄せ、件の意趣を語つて、偏に賴むといひければ、兩人聞いて、仰の如く此城を本道より攻入らん事は、孫吳が妙を得たりとも叶ふまじ。我々先達つて當郡の地理を考へ見るに、此城に續きたる後の山は、雲に聳え谷深うして、屛風を立てたるが如く、岩峻くして、眞に蜀の摩天嶺ともいひつべし。去ながら我々、一命を棄てゝ忍び入らば、三日の內には城中へ入るべし。さもあらば相圖の火の手を上げん。其時一番に攻入り給へと約諾し、足輕の中より、究竟の兵八十人擇出し、腰に干飯を付けさせ、熊手細引忍の具共持たせて、山を超え谷を渡り、後の祕門より忍び入る。城兵早く是を聞付け、押取り込めて討たんとせしかども、勝り切つたる逞卒、淩雲の機を含み、一擧に併呑の功を顯さんと、勇

める者共なれば、城兵散々に切立てられて敗走し、二の丸へと引退く。間忍(しのび)の兵、所々に駈散つて、本丸を始め數ヶ所の役所々々に火を懸けて、八方に雄鬨をぞ上げにける。內藏助、兼て相圖の事なれば、すは城中に火の手の見ゆるは、必定味方の者共が忍び入りたるぞ。時を移すな攻上れと、喊聲を噇と上げ、一騎打の細道を、我先にと攻上る。城中元より軍に馴れたる兵なれば、敵を思ふ圖に引寄せ、大木大石を投懸け〳〵防ぎしかば、先陣の兵進み兼ねて控へたるに、久武怒つて、いつの時をか期すべきぞ。續けや者共と、鹿垣柵引除け〳〵、馬を眞先に進めしかば、惣軍是に勇められ、後に付きて攻上る。其時東の櫓より、弓鐵炮數十挺つるべて放ちけるに、內藏助を始め、佐竹太郎兵衞・山內外記なんど、先に進みし兵五十騎計、眞逆に打落され、敢なく命を殞したり。惣軍是に手懲して、本陣に引返す。忍び入りし兵共、火の內烟の中ともいはず、力を盡し戰ふと雖も、大勢が中に懸隔てられ、所々にして討たれければ、城兵も百餘人討たれにけり。されども終に此城落ちず。寄手の勢も圍を解かず。徒に睨み合ひて、數旬を送りけるが、城中何とか思ひけん、夜に紛れて、

久武內藏助戰死

行方知らず落行きけり。此響に應じて近邊の城々、大半明けて退きけるに、御莊越前守・里城・絲城・猿超・新城以上五ヶ處に要害を構へ楯籠る。元親二萬餘騎、國人降兵の兵馳加はつて三萬餘騎、案內者を眞先に押立て、一々に蹊潰さんと用意せり。此由先達つて敵城に聞えしかば、多からぬ味方を、五ヶ所に分けては叶ふまじ。城々の兵、只一處に屯して軍せよと、都合其勢一萬三千餘騎、里城に縮り居て、土手を築き櫓を昇擧げ、矢挾間所々に切開き、弓推張り索引し、矢束解いて中刺に鼻油ひき、鎧捉んで投懸け〳〵、寄來る敵を待ち居たり。案の如く暫くあれば、元親大軍を率し、堂堂奮發と押寄せ、一攻手繁く攻めて、城中の勢氣を窺ひ見るに、少しも疼む氣色更になし。玆に因つて暫く攻口を甘げ、敵城十餘町を阻でて、向城を築き陣を取る。城中も數月守つて栖籠ると雖も、終に糧盡きて降參を乞ひしかば、元親是を幸と圍を解いて、宇和郡に攻かゝり、或は稻薙或は苗代かへし、又は苅田の働して、國郡を破り民を害す。是に惱んで、諸城味方に加はる武士共多し。就中黑瀨の城主西園寺、興居島の城主宇都宮遠江守も、時々元親に內通して、一味の心ありしかば、此度人質

を送り、疎意なき由を詫びたりける。元親處々の掟を改め、一先づ本國へぞ歸りける。

元親讃州雲遍寺詣幷論ニ鑵蓋ニ事

去程に元親は、處々の合戰、所存の如く打勝つて、喜び思ふ事斜ならず。頓て篠原の城に、東條關之兵衛を籠置き、古老新參の輩、戰功を以て勸賞を宛行ふ。

一、牛波の城は、香曾我部左近大夫親泰入城して、國中の物頭とす。幷海部の城を根城とす。（一說に、海部鞆は田中一之助領す。）

一、一宮の城は、江村備後守入城して、與力組頭、此處にて知行す。

一、一宮南の城は、谷善兵衛入城す。

一、岩倉の城は、長曾我部掃部頭入城し、與力組頭、此處にて知行す。

一、吉田の城は、北村閑齋入城す。（一說、吉田彌左衛門康俊、入城すとあり。）

一、宍食の城は、野中三郎左衛門入城す。

一、東條・仁宇其外降參の輩、領地先代の如く宛行ひしかば、皆々喜悅の色を含みて

退出す。

斯くて元親、今年の內は暫く人馬を休め、明けなば讃州を切取るべし。幸ひ讃州雲遍寺の住僧は我舊友なれば、隱に立越え國風をも尋ね問はんと、郎等少々召連れ、雲遍寺へぞ詣でける。抑此雲遍寺と申すは、讃州一の靈地にて、巨鼇山千手院とぞ申しける。向上れば、峨嵋雲間に聳えて、絶頂白を戴き、青黛半根に露れて、孤峰嬋娟たり。山腹に攀登れば、白雲跡を埋み、鳥の聲幽なり。落葉雨となれども、笠の沾ふ事もなく、深樹昏を謬れども、日未だ西に傾かず。一峯の月高く低れて、萬事咸く無心なり。幽溪の水は潔く清んで、浮世の外に塵もなし。無我の境に逍遙するかと、不意に駒を駐めて、山是一由旬、山頭雲鋪銀、山林藏日月、山樹帶秋春、山面烟如黛、山腰雲爲紳、山家離世事、山水隔紅塵と、古語など口號みて、鞍馬に一鞭を加ふれば、仙人と羽化する赤壁の遊も思ひやられ、程なく寺邊に赴きしかば、元親馬より下りて、自ら梵扉を敲いて姓名を通じけり。內より一人童子出で來つて、元親を請じける。暫くあつて住僧出合ひ、今來古往の事を談じける。元親申されけるは、今天

下大に亂れて、兵賊蜂の如くに起る。我居ながら土阿の二國を治めて、猶當國を征伐せんと志す。貴僧は廣く書を歷覽して、治亂興亡大將の心持をも辨じ給ふべし。御示あれとありければ、住僧答へて、仰の如く、貴客は天性潤達の人なれば、行々四國九州をも手裏にし給ふべし。されば古來天下の勢、治極まる時は亂を生じ、亂極まる時は治生ず。寒盡くれば暖至り、暖盡くれば寒至つて、四時の相變ずるが如し。今四海大に亂れて、一日も易き事なし。此時に於て國を治め民を安んずるの器にあらずんば、大行なるべからず。夫大將たるの道に、五才十過あり。五才とは智仁信勇忠なり。智は不レ可レ亂、仁は能愛レ人、信は不レ失レ期、勇は不レ可レ犯、忠は不レ貳レ心。此五才あつて大將と稱すべし。十過とは、勇あつて死を輕んずる者、急あつて心速なる者、貪りて利を好む者、仁ありて殺すに忍びざる者、智あつて怯れざる者、計あつて心緩き者、剛毅にして自ら用ふる者、懶懦にして人に任する者、此十過あれば、大將とするに足らず。故に善く兵を用ふる者は、五才を具し十過を去つて、攻むるに破らずといふ事なく、謀るに成らずといふ事なし。是を以て天下に敵なかるべし。

元親又問ふ。凡そ當世の武士、國々に將として威を逞うす。如何なるをか英雄といふべき。僧の曰、今の大將たる者、我れ豫め聞けり、或は計あつて勇なく、又は勇あつて計なく、己が能を持んで人を用ひず、或は外温恭にして內慢り、高位に矜りて貧賤を惡み、性驕傲にして下問を恥ぢ、又は己が能を揚げて人の善を掩ひ、我が過を藏して人の非を彰す。是皆將の弊なり。何ぞ大事を計るに足らん。元親重ねて曰、願はくは某が、身を治め國を齊ふるの心持を示し給へ。僧の曰、御邊の器、誠に三軍に秀でたれば、行末賴もしく候なり。我今其大略を伸べん。宜く古の兵法に順ひ、之を用ふるに文を以てし、之を齊ふるに武を以てし、之を守るに靜を以てし、之を發するに動を以てす。兵の未だ出でざるは山岳の如く、出づる時は江河の如し。變化する事天地の如く、號令を出す事雷霆の如し。賞罰を行ふは四時の如く、策を運らすは鬼神の如く、柔にして能く剛に、危くして安く、機變測るべからず。勝つ事を千里に決し、仁を以て之を容れ、禮を以て之を立ち、勇を以て之を裁し、信を以て之をなす。此くの如くなる時は、大將たるの道、古人の尊む所にして、天の上より地の下迄、知らず

といふ所なかるべしと語るれば、元親敬んで再拜し、貴僧の言下に、我が胸中初めて夢の覺むるが如し。我れ當國を伐取らんと思へども、年内は寒氣甚くして、軍を動かし難し。明春暖なるに至りて軍を起し、勝負心の如くんば、必ず一字を建立して、今日の報を謝し申さん。然るに我れ當國の地理を詳にせず。願はくは敎へ給へとあれば、僧の曰、抑讃州十一郡といふは、大内・寒川・三木・山田・香河・河野・鵜足・那賀・多度・三野・神田なり。當山より直下せば、國中一瞬に見えたりとて、一間なる障子を排き、一々に指し敎へて、此大國を蓋はせんと、御邊の胸中に貯へ給ふ鑵の蓋こそ、活大なれとありければ、元親打笑つて、仰の如く我等鑵の蓋は、如何なる名人も及び難し。纔に三千貫の蓋より、土佐一國に覆ひ、今又阿州に漫れり。二三年の内には、四國殘なく蓋ひ合はすべしと答へける間、住僧手を拍ち大笑して、さて／＼寛活なる人かな。追付け志を遂げ給はんと、數刻の熟談了りつゝ、重ねて又こそ參らめと、暇乞うてぞ歸られける。

藤目の城軍の事

去程に元親は、一張の弓の勢、月々に奮うて、近國の敵劒の影に驚き、冑を脱ぎ手を拱きて、來り降る內にも、罪の重きは所領を殁收し、罪の輕きをば咎を赦して、在府させしめて、別恩を以て情を懸け好を深くし、折々交の久しからん事を契りしかば、阿州一國の諸侍、悉く元親に思付きて、靡かぬ草木もなかりけり。翌くれば天正六年、藤目の城を攻取らんと、國中の用心形の如く相構へ、土阿の軍勢一萬餘騎を率ゐて、江村孫左衞門・中內藤左衞門・桑名彌次兵衞を先手とし、三月中旬岡豐城を打立ちけり。青野重行此樣を傳へ聞きて、諸國今戈戟を荷ふと雖も、元親尙虎狼の心を擅にして近國を侵す。さらばとて無下に討手を待たんよりは、中途に懸向うてや戰はん。然れども多からぬ味方を以て、大軍と平場の師、十に八九は利なかるべし。所詮當城の要害に楯籠つて、一鬪してこそ生涯を決せめとて、矢倉・搔楯・柵・逆茂木、嚴しく一齊に用意して、堅甲利兵七百餘騎、冑の星を耀かし、鎧一縮して列居たり。斥

元親藤目の城を攻む

候の兵驅來つて、土州勢間近く押寄せたる由告げければ、重行矢倉に蒐上つて、元親が陣を見渡すに、東西南北旌旗飛揚せる其蔭に、大幟一流打立てゝ、左右の輔翼前接後拒、甲冑を映かし手分を定め、嚴重に陣をぞ張つたりける。上より遙に見越せば、後馳に鞭を揚げて到着せる兵、猶雲霞の如し。七縱八横に備へて、鳥雲の陣を堅め、逞兵機尖なり。敵に味方を較ぶれば、懸合する迄もなき小勢なりけれども、重行元より勇氣世に雄れたる者にて、此大勢にも怖れず、相從ふ兵、孰れも究竟の者共なれば、敵假ひ多勢なりとも、打破らん事は、只一軍の中にあらんずるものを。續けや者共と互に義氣を勵まし、一の木戸を颯と押開いて五百餘騎、轡を魚鱗に列ね、先づ西北の敵を一當當てゝ打通り、取つて返して又東西に向ひ、雄鬨一聲嚾と作つて、短兵戟鋒相接へ、推合ひ〳〵攻戰ふ。元親が兵、抑挫の勢を逞うすと雖も、彼れ必死の勇鋭盛にして、前後に敵ありとも思はず、縱横自在に蒐破り蒐通りけるに、敢て要り止めんとする者もなく、徒に四方より取圍み、八方に分れて、遠矢に是を射竦めんとすれば、城兵之を察して、卽時に城へ引取りける。元親如何せんと思慮を凝らし、藤目

の城に並びたる松茸尾といふ山へ、足輕數百人を登せて、嚴しく鐵炮を打たせけれども、城中も兼て備を設け、土手を築き塀を塗つて防ぎしかば、寄手詮方なく、徒に數日をぞ過しける。斯りける處に、江村が兵數十人、如何しけん城中に忍び入つて、所所の役所陣小屋に火を掛けたり。此烟を見て、四方の寄手一度に雄鬨を作つて、柵逆茂木を引破り、城中に込入りけるを、城兵は、謀叛人あつて引入したるぞと心得て、更に一支も支へずして、右往左往に散亂する處を、元親が兵追詰め〳〵、一騎も餘さじとぞ搦んだりける。重行是を見て、百五十騎の兵を前後左右に從へ、敵の群立ちたる正中へ駈入り、四角八面に當りける。されども寄手大軍なれば、手勢爰彼所にて討たれける程に、重行も勢盡きて、いざ一先づ落行き、重ねて會稽の恥を雪ぐべしとて一方打破り、北を指して引いて行くを、廻の外に磬へたる元親が旗本の勢、我先に討止めんと駈出でんとしけるを、元親推止め、窮寇は追ふ事勿れといへる事、是兵家の要なり。落ちば落ち次第にせよと、城中所々の火を消させ、城廓堅固に修理を加へ、濱田善右衞門を守將として、三百餘騎を籠置き、我身は土佐へ打入りける。

藤目城陷る

元親再攻二藤目城一事并青野重行生害の事

青野重行再び藤目の城に據る

數旬程經て後、重行國中の所緣を催促し、其勢三千餘騎を率して、濱田が籠りし藤目城へ押寄せ、短兵急に攻入りしかば、城中力を盡して防戰すと雖も、重行案内は知つつ、荒手を入替へ〳〵攻めければ、大軍敵するに力なく、濱田、城を棄てゝ、土佐の國へと引退きける。重行、心中の憤を解散し、城中に入りて諸軍の疲を勞ひ、定めて元親、再び攻め來るべし。彌要害を固めよと、夜を日に繼いで壕壘を深うし、所々に搔楯かゝせ、鹿垣逆茂木繁く結廻し、兵糧馬芻糖藁塩噌の類迄、悉く取積んで、嚴しく城を守りける。斯くて元親は、藤目の城を取返されし事、我過の致す所なり。不日に是を攻落し、重行に腹切らせでは、國中を攻撃つ事叶ふまじと、重ねて大軍を催し、元親先づ松茸尾へ取上つて、旌の陰に駒を控へ、城中を目の下に直下して、諸軍の働を見聞す。今度の先陣光富權之助・江村十郎、追手口に攻寄せ、矢頃近くなりける處に、兼て城中には、一國に名を得し鐵炮の上手、矢繼速の精兵、多く楯籠りしかば、射

出す箭霰雨の如く、迸しる鐵炮、流星に等しく、楯も甲も怺へずして、先魁の兵坐に控へ、進み兼ねたる處を、究竟の兵抜連れ、切先を揃へて切つて出でしかば、さしもの土佐勢防ぎ兼ね、ひたしさりになつて控へける。元親血眼になつて大に睨げ、あれ體の小敵、たとへば宍を、寸々に裁つて取るとも限あり。蓬くも見ゆる者共かなと、自身馬上に鎗を提げ、山を下りに逸足を出しゝかば、之を見て前後しどろに控へたる兵二千餘騎、東西より一遍に手先を組雙べ、左右の正兵颯と立渡つて、奇變に應じて是を討留めんとす。城兵七百餘騎、又相掛りに掛つて、弓手に側め馬手に背けて、打つては馳通り、突いては追拂ひ、四武の衝陣堅きを摧き、揉違へ入亂れ、呼き叫んで戰ひける。原上忽に色を易へ、野草荐に變じて、紅葉の蔭を行く水の、紅深きに異ならず。敵味方に、討たるゝ者數を知らず。城兵遂に打負けぬと見る處に、城中より、救の兵と打見えて五百騎計、馬の鼻を雙べて突出す。戰ひ勞れたる寄手、新手の馬武者に駈立てられ、少し猶豫して見えける間に、城兵漸々に引取りける。元親熟防戰の有形を見て、此城の體、中々容易には落つべからず。面々城際迄仕寄り、日の

昏るゝを待つて、諸手一度に攻入るべし。旗本より合圖の貝を吹くべきぞ。是を聞いて切るとも射るとも、無二無三に攻入らば、難なく乘入らん事、此一戰にあるべきと、夜軍の言を定め、陣々に觸れしかば、三軍皆武具を脫がず、兵糧を調へ馬に秣ひ、合圖の時をぞ待つたりける。中にも濱田善右衞門は、同じく攻口に控へけるが、去一戰に打負け、城を乘取られし事、國中の嘲哢と、無念晴れ難く、手の者共を呼集めて、汝等も知る如く、我れ此城を守る處に、不意に大軍に圍まれ、一戰に打負けし事、偏に恥辱の至なり。さあれば今度の戰に、人並々の師しては、世上の人口雪め難し。所詮人より先に切つて入らん。隨分力を盡して給はれと、手勢纔に二百餘騎、犇々と武具を固め、思ふ敵に出合ふならば、一足も去らず討死して、泉下に武名を清めんと、やたけ心の一筋に、引きは返さじ者共と獨言して、大手の城戶へ向ひける。押寄すると齊しく、鹿垣一重二重引破つて、會釋もなく切つて入る。諸方の寄手是を見て、あれ討たすなといふ儘に、聲を合せて攻掛る。濱田元より、必死を期したる事なれば、後陣の勢をも待合せず、早一の木戶迄攻入つたり。城兵是を破られじと、追出

し追込まれ、互に死を塵芥に比して戰ひしかば、濱田が二百餘騎、殘少なに討なさる。されども濱田、退く氣色あらざれば、城兵是を中に取巻き、湯水になれと攻めたりける。濱田餘りに手繁く駈立て〳〵戰ひける程に、乘つたる馬の三途手頸胸階盡しに至る迄、數ヶ所切られて、馬は小膝を折り、犬居にどうと仆れ、主は鐙を越して下立ちければ、敵の軍兵是を見て、我れ討取らんと、爭ひ勇み駈寄せたり。濱田元來力人に超え、心飽迄健に、討物取つて達者なりしかば、向ふ者の眞向半頭二つに打破り、返す太刀に、回る敵を切据ゑ、時の間に十八人討取つたり。されども敵四方より射ける矢、簑毛の如く射立てられ、濱田、心は剛なりと雖も、其身金鐵ならざれば、終に其處にて討死せり。元親は三軍を勵まして、短兵急に掛込み〳〵、二の丸を乘取りしかば、敵味方に、討たるゝ者數を知らず。重行も、數度の蒐合に重手負ひ、今は是迄ぞと、甲の丸に火を懸け、男女五十餘人、一度に自殺してこそ失せにけれ。元親が陣にも、先魁の大將光富權之助・江村十郎討死せり。其外手負を扶け討死を算へて、一兩日は、野陣を取りてぞ居たりける。

青野重行自殺

香川民部大輔和睦を乞ふ事

斯る所に香川郡の何某、香川民部大輔頼信より、江村備後守に就いて、全く元親に疎意なき由を訟へ、降參首尾よく相調へしかは、元親が息男五郎次郎を乞受けて、香川の家督を相續す。抑香川が、土佐守に睦を乞ひし所謂を尋ぬるに、讃岐國は、元來足利家より、細川頼春に賜はり、相繼いで管領頼之已來、代々の所領とす。細川家滅びて後は、家人香西・香川・長尾・羽床、四角に峙ちて、國を爭ふ事年久し。其頃長尾・羽床相共に約盟して、摺臼山の城主香川民部大輔頼信を攻め惱ます。香川數防戰すと雖も、敵は多勢味方は小勢なれば、力孤にして叶はず、城を明けて落去りぬ。長尾・羽床摺臼山に打納つて、香川が所領を配分しければ、頼信憤安からず、備州三原に押渡り、小早川隆景を賴み、本領安堵の歎、切なりけり。隆景聞いて、我れ仁義を以て先とする處に、香川來りて我を賴むは、是れ辭し難き武士の道なり。夫れ兵に奇正の法あり。我是を用ひて、卽時に敵を拉がん。時日を移して叶ふまじと、井上伯耆守春忠・

浦兵部丞宗勝に、五千餘騎を付けて、讃州摺臼山に向けらるゝ。隨逐の武士には、梨羽中務大輔・小田小次郎・飯田讃岐守・乃美四郎兵衛・南三河守・末近助兵衛・虫上彌左衛門・井上豐後守・弘中藤兵衛・有地民部大夫・小泉左衛門太夫・木梨備後守・椋梨左兵衛。海上の警固には、村上掃部頭・同三郎兵衛・同源三郎・末永常陸介・生口三郎・木谷孫四郎、兵船三百餘艘に取乘り、都合其勢五千二百餘騎、天正三年五月十日、備州三原を漕出し、讃州摺臼山に推寄せたり。敵斯るべきとは思ひ寄らず、俄に軍勢の催促も叶はず、僅二百餘騎の兵にて、大敵を坐ら城へ引受けんも、自滅を招くに似たり。此程霖雨降續いて、洪水岸を浸したれば、是こそ味方の幸時なれ。敵は川の案内を知るまじ。山を下りて川岸に備を設け、敵渡さば半渡を討つて、深みに追はめんと、卽時に川端に出張す。寄手も、さうなく渡すべき樣やなかりけん、暫く矢軍して時を移しけるが、寄手の先陣五百餘騎、堪へ兼ねて一度に馬を駈入れ、白浪を蹴立てゝ渡しける。城兵こゝぞ待ちし所と、弓鐵炮を連打（つるべうち）に放ちければ、玉箭雨の如くにして、先蒐の兵士矢庭に討たれ、川水に屍を流す。後陣の兵是を見て、少しも恐るゝ氣

香川頼信元親に降る

色なく、川は淺きぞ渡せとて、五千餘騎の軍勢、喚き叫んで向の岸に上りしかば、二百餘騎の城兵、川端を引退き、持楯をかづき連れて、防ぎ戰ふと雖も、悉く討たれて、殘兵散々に敗走す。寄手追討に、一騎も殘さず討取り、摺臼山に蒐上れば、早長尾・羽床も落失せて、敵一人もなかりけり。茲に因つて香川を舊城に移し、二百餘騎を附置きて、六月一日小早川勢は、三原にぞ歸りける。香川蟄懐を散ずと雖も、累代の舊臣は、專途の戰に討死し、力足らずして元親に敵し難く、幸ひ一女を持ちたる故、土佐守が子息を乞請けて、骨肉同胞の交をなせりとかや。

四國軍記卷第七終

四國軍記卷第八

財田佐兵衞討死附横山源三郎軍中に於て敵討の事

斯くて元親は、藤目の城を乘取り、暫く野陣を取つて、人馬の勞を養ひしかば、再び土佐へ引入るべき處に、財田の城は、要害も堅固ならぬ小城なり、事の次に攻落し、重ねて出張の扶にもすべし。且は又國中の者共に、我能の程を見せて、魂を拉ぐべしと、其より直に打立ちて、財田の城へと押寄せたり。城主佐兵衞斯くと聞きて、是れ我が兼て期したる處なり。いざ手分をして敵を待たんと、表に丁楯突並べ、足輕の射手數百人前に進ませ、寄來る敵の馬の太腹射て鮍落させ、漂ふ處を蒐立てんと、馬武者後に控へて、今や寄すると待居たり。案の如く土佐勢寄すると齊しく、手々に持楯かづき連れ、城中櫓に取付きて、引崩さんとする處を、城中より差詰め引詰め、

散々に射させける。何とは知らず矢面に立ちたる馬武者廿騎計り、はら〳〵と射落され、箆白になつて控へたり。此を軍の初として敵攻入れば、城兵鎗薙刀の鋒を揃へて追出す。追出せば逐入り、少時戰ふと見えし處に、城主佐兵衞、斯くては何を期すべき闘ぞやと、楯の端の動く所を、得たりや賢しと、電光の手地に激するが如く、一同に喚いて切つて出でければ、寄手是に怺へずして、我先にと引いたりけり。元親目を怒らし、威長高になつて、正なき者共の働かな。尋常に討死して、高名を子孫に傳へず、命をば何の爲にか惜むぞと大に恥しめ、團を上げて招かれければ、承り候とて、桑名彌次兵衞・田中新左衞門・横山源兵衞已下數十騎取つて返し、面も振らず戰ふ。是に勵されて、後より續く味方の大勢、鯨波を合せ、追つ返しつ半時計り攻め戰ふ。汗馬縱横に辟易し、黑煙虛空に棚引き、千變萬化して、荒手を入替へ攻入りしかば、終に城兵戰屈して、多くは討たれ或は落失せ、殘少なになりければ、引返して城に入らんとするに、寄手の大勢道を横切つて是を打止めんと、敵の圍愈重なりしかば、財田士卒を一所に合せ、一方を打破らんと、自ら眞先に進んで、彼に當り是に

戰ひ、切拔け〳〵しける處に、横山八兵衞言葉を掛け、財田殿、蓬くも見ゆるものかな。返し給へと鎗提げ、後ざまに突落し、首を取つて差上ぐる。財田が郎等是を見て、主の敵退さじと、たゝみ掛けて打つ太刀に、横山が右の腕を打落され、怯む處を首打落し、主の首を提げて、焰の中へ投入れ、閑々と落行きける。斯る處に横山が一子源三郎、今年十八歲、逃る敵の面白さに、陣中を駈廻り、能き敵と見ては推雙べて組止め〳〵、首十二三小者に持たせ、父に逢はんと、彼方此方と尋ね回りけるに、味方の者共是を見て、貴邊の父を討つたる者、あれ〳〵あれへ退くはと、指して敎へければ、源三郎兎角の事もなく、馬一騣に駈寄せ、親の敵退すまじ。返せ戻せと呼ばはれ共、彼者聞かぬ體にて、二町計落行きしを、程なく追詰め、何國迄洩すべきと、丁と打つをひらりと拔け、やさしく見ゆる若者かなと、受けつ開いつ切先より火焰を出し、精神を勵して戰ひしが、横山が念力の鋒先鋭にして、難なく敵を打課せ、首を取つて本陣に駈返り、元親に對面して、父横山が討死の消息を言上し、淚に昏れてぞ居たりける。元親聞いて、眞に若輩の分として、卽時に親の敵を討つ事神妙なり。其

上文横山、財田佐兵衞を討取る事、今度の働他に異なりと、所領に感狀を添へて賜はりける。其後元親土佐へ引取り、年々軍兵を差遣して、作毛を薙ぎ民屋を放火し、又は彼の峯叟の洞に、篩を燒き狼烟を上げて、近郷を劫しゝかば、觀音寺・石田・砥川・羽床・長尾・北條・香西を始として、我も〱と降參す。元親大に悅びて、國吉甚左衞門を、讃州一國の守將と定め、長尾の城にぞ籠置きける。

興居島合戰の事

去程に元親は、大軍を率して、豫州宇和・喜多兩郡を大半攻傾け、剩へ宇都宮・西園寺も、彼に組すと聞えしかば、國中の恐怖、たゞ雷霆を戴いて大江を過ぎ、薪を負ひて燎原に徊ふ如く、いかゞせんと安き心もなかりけり。河野通直大に驚き、累代恩下に屬す宇都宮・西園寺、敵となる事謂なし。早く誅伐の旗を向くべしとて、來島右衞門太夫・平岡將監・村上掃部・同河內守、都合其勢五千餘騎、兵船四百餘艘に取乘つて、天正七年九月中旬、追手搦手合圖を定めて、興居島に推寄せたり。宇都宮遠江守元

綱は、頼み切つたる菅田隼人を大津の城に籠置き、殘兵千騎には過ぎざりけれども、犇々と要害を固め、必死の心を一致にして楯籠り、究竟の射手、鐵炮練磨の足輕共、正（めあて）を究め放つ玉箭、人に中らざれば馬に當り、楯も鎧も微塵になつて、手負討死其數を知らず。斯る處に寄手の援兵として、河野通直が舅備後國甲立五龍山の城主宍戸備前守隆家二千餘騎、先陣として進めば、二陣に安藝國沼田の城主小早川左衛門佐隆景五千餘騎、其外平賀木工頭・小泉左衛門太夫・有地民部大輔・上原右衛門太夫・粟原左衛門・梨羽中務・檜崎三河守・杉原播磨守・長大藏・和智又九郎・同弟湯谷又八・浦兵部丞・井上又右衛門なんどいふ一騎當千の勇士、前後を爭ひ攻上る。海上には數千の兵大船を浮め、水軍の備を配り、日々夜々に攻戰ふ。菅田隼人此由を聞いて、宇都宮が急難を救ふべしと、先づ奇兵を出して、敵陣の後に進ませ、元親より救の兵來らば、本道に出張して後詰せんと相待ちたり。元親急度思慮を回しけるは、河野は、大江陸奥守元就が孫聟なり。彼と師せば山陽道の兵悉く馳集りて、由々しき大事ぞ出來るべき。唯々方便を以て、河野が進退屈する謀には如かずと、胸憶に深く挾んで愼

む處に、菅田より頻に援兵を乞ふ。されども此度援兵を出さば、後大なる患あらん。少きを忍ばざる時は、大謀を亂るといへり。宇都宮一人に、一國の望は失はれじと、元親虚病して出でざりければ、菅田隼人も詮方なく、坐に時日を移しけり。斯くとは知らで與居島には、兼て土佐勢の後詰を賴み、今日よ明日よと守りしに、思の外に土州の援兵來らざりしかば、今は城中の勢を以て、爭か大敵を押拂はん。縱ひ一旦軍に利を得るとも、重ねて山陰・山陽・九國の軍勢馳來る程ならば、終に此城を攻落され、一家悉く滅亡せん事、果して時を延ぶべからず、如何せん、旁是を議せよとありければ、于時岡松佐渡守・東條修理亮進み出でて、當家元來關西親王に隨逐し、筑紫九國に住まつて、軍功を勵すと雖も、菊池武光勢勞れて後、官軍處々に身を峙つ折節に、河野當國に打入るの刻、宇都宮の兩黨相伴ひて、此與居島に住居すること二百餘年なり。是れ河野氏の恩顧にして、通直に對し恨むべき事一塵もなし。況や武士としては、恩を蒙り怨をなす事、是に過ぎたる不義あるべきや。我れ聞く長曾我部は、土佐國に於て、吉良・大比良・本山三人の者の爲に討死して、子孫浪々の身となりし

を、一條家より憐み給ひて、元國成長して後、本領を取返し賜はりしかば、是より家を繼ぎて、元親今阿波・讃岐・當國の諸城を屠り傾くる事、偏に一條家の大恩に非ずや。斯る厚恩を感ぜず、却て謀叛を企て一條家を侵す。八逆罪、天何ぞ渠が家運を守り給はん。有威而無道者必衰、一旦勢盛なりとも、果して滅亡近かるべし。渠に與せしは、當座の害を遁れん爲ぞかし。怨なき河野に敵して、軍し給はん事、千が一つも、爭か勝利のあるべきや。早く舊惡を詫び給ひて、降參あるべしとぞ諫めける。滿座の兵士、皆耳を欹てゝ聞きけるが、東條・岡松が諫言に勇氣を碎かれ、一言を吐く者もなし。宇都宮も當然の道理に責められ、急ぎ矢止を請ひ、東條を軍使として、通直に詫言せしかば、降人を殺すべきに非ず、急ぎ城を明けて渡すべしと、下知頻なれば、同日降禮をなして、備後の山中へぞ落行きける。士卒は乾池の魚の、流水に躍るが如く、危き命を遁れて、皆散々にぞなり行きける。

豫州大津城殁落附菅田猶之義死の事

于ㄑ玆伊豫國黑瀨城主西園寺左衛門太夫公廣は、一旦土佐守元親に降參すと雖も、此頃河野軍を發して、興居島の城を攻落し、宇都宮を流刑すと聞いて、其罪科を訴斷せん事を怖れ、小早川左衛門佐・宍戸安藝守に對して申しけるは、某土佐守に降參の事は、元親當國に攻め來つて、金山・高森・深田・土井・岡本數ヶ所の要害を攻め動かし、頗る難儀に及ぶの條、河野殿へ援兵を乞ひしかども、出陣遲滯あるにより、宗徒の郎等降人となつて出で、公廣獨り大軍と戰ふと雖も、味方少數にして、剩へ同國曾根豐前守通武、敵に加はり攻め來るの條、武略の爲め、一旦の降訴をなす。全く某思ひ匠む處の降人に非ず。唯今首を伸べて歎訴を企つる上は、御許容なくんば、劔下に刎首の罪科に行はるべしと、手を束ねて拜伏す。隆景・隆家感聞し、御邊舊惡を棄て、早く其罪を難訴せらるゝ事、武門の義訟なり。敵重ねて攻め來るならば、大軍を催して、却て土佐一國を屠り取るべき事、時を延ぶべからず。河野殿へは宜しく兩人申入るべしと許諾せり。去程に宇都宮が郎等菅田隼人猶之は、大津の城に楯籠り、土佐國へ頻に援兵を乞ひしかば、岐川玄蕃頭二千餘騎の兵を率して、大津の城に加勢す。

小早川此由を聞いて、事遲滯に及ばゝ惡かりなん。急々に追拂ふべしとて、同年霜月、一萬餘騎の軍勢、四方八面を討圍んで、石火矢數挺を放ちけるに、大手の矢倉は悉く崩れ落ちたり。されども寄手左右なく攻入らんともせず、城外を百重千重に取卷きて、遠攻にぞしたりける。菅田が今度の籠城は、專ら土佐の援兵を賴みし事なれば、始終の軍如何あらんと、士卒軍慮を傾くる處に、敵方には吉川駿河守元春、出雲・伯耆・因幡・美作の勢三萬餘騎、追々馳加はつて、整々たる旗を龍粧に進ませて推寄する。其競ひ、誠に泰山の崩るゝが如し。寄手は是に勇氣を倍し、城卒は是に銳を折く。執行加賀守・津野藤藏、玄蕃頭に對して申しけるは、我々を始めて土佐勢、加勢として新に楯籠ると雖も、未だ一戰をもせず、寄手は日々に加はつて、勇氣百倍せり。徒に日を送りて、敵の辱を受けんより、我々討つて出で、敵の剛臆をも試みんと、同月廿八日、城門を活と推開き、其勢二千餘騎、迚も遁れぬ命ぞ。一場に死を必せよと呼ばはつて、大河の裂るが如く、漲り募つて討つて出づる。小早川が先驅兵部丞宗勝屹と見て、物々し、其敵追込めよ若者共と訇れば、承り候とて、箭狹間とぢ

の車と見えて、鎌長刀を車の上に飾り、多くの兵打乘つて、敵逃る時は是を以て行先を塞ぎ、弓鐵炮を放ち、又守る時は、四面に此車を備へ置けば、いかなる大敵も破る事なし。呂望が祕せし戰車ともいひつべし。宗勝、件の車十餘乘を、城門の橋に推掛けて路を塞ぐ。其時城兵馬を乘捨て、歩立になつて車楯を推返し、拔連れて切つて出づる。寄手は究竟の馬武者を擇んで、駈立て〳〵戰ひける。城兵叶はじとや思ひけん、少し猶豫して見えければ、執行加賀守・津野藤藏、蓬し者共返せ〳〵と門外に躍り出で、鎗を提げ飛んで掛る。此勇鋭に引立てられ、城兵又鋒を雙べて切つて出で、追つつ返しつ、卷つつ卷られつ、半時計ぞ戰うたり。寄手例の車を眞先に推寄せ、車の上より差詰め引詰め、散々に射たりければ、城兵なすべき樣なく、坐に控へて進み得ず。寄手は元より大軍なり。先陣疲るれば、後陣の荒手を入替へ〳〵、已に大手の木戸に乘入り、一時に攻落さんと勇み進む處に、小早川城中へ使者を以て、當城の雌雄此一擧にあつて、然も城を攻落すべき事掌にあり。然る時は一城の兵を、殘らず殺戮せんも本意なし、凡そ正兵は、過なきを攻めず、感ある敵を討たず。

元親年來菅田に入魂あつて、援兵を屬けらるゝ事、仁あり義あり。又今日土佐勢突戰して志を立つる事、武の道、其義に中る處なり。早く城を出でて引取らるべし。路次の程は、夫馱を以て送り歸すべしと、悃に申し遣しける。岐川玄蕃は、土佐守が妹婿なれば、此度の加勢に、死を一擧と究めたりしかども、隆景が今の一言に勇武を碎かれ、涙を鎧の袖に掛けて、仁なるかな義なるかな。吾多年武門に身を寄せて、斯る金言をなどか感ぜらんと、急ぎ甲冑を脫ぎ捨て、使者と打連れて小早川の營中に入り、平伏して蹲る。左衞門佐猶も感激して、功なるかな御邊が心底、千英萬雄是へ是へと請じ、自ら一獻を斟んで饗し、太刀一腰小袖二つ岐川に與へ、自今以後、豫州へ元親發向無用なり。正兵の弓を執つて、過なき國を攻めず。當國の事は、河野氏七十餘代持ち來つて、奧州幕下たるを憐み、婚緣を結んで、禍福共に相輔く。若承引なきに於ては、卽時に土州浦津へ海賊を進らせ、年々放火して、元親を山中へ退け、鹿猿と同栖たるべし。此事能々元親に語らるべしと制しければ、玄蕃頭謂ふに詞なく、城中へ使を入れ、土佐勢悉く城を退出すべし。弓は弦を弛し、鐵炮は火を消し、

小早川隆景大津城を陷る

菅田猶之自殺

幡を卷き鎧を脱いで、御陣を通るべしと制す。玆に因つて土州勢引拂ひ、玄蕃も暇乞して引取りける程に、城兵は甲の丸に取籠つて、今は勇氣を陷し、唯何をか期せん、首を伸べて刀を受けよと耳口しかは、猶之氣を呑んで、由なき者を賴みて、戰場の名折を仕出す。今我れ獨り腹切つて、諸卒の命を助くべしと、大手の櫓に馳上り、大音上げて呼ばはりけるは、猶之今日弓折れ矢種盡きたり。衆命を助け給はゞ、軍門に出でて腹切らんと呼ばはりければ、寄手是を大將に通ず。小早川聞いて、窮鼠返咬の謀をやなさん。去ながら斯程迄手に入れし敵、何程の事かあるべき。望の如く衆命を助くべしと答へしかば、猶之悅び、今は斯くよと、女童士卒迄悉く城を出し、其身は城外遙に出でて、敷皮しかせ座を組みて、檢使に一禮を述べ、夫れ古より、主苦む時は臣辱めらる。主辱めらるゝ時は臣死すといへり。勇士の最後は是ぞとて、腹十文字に搔切つて、逆にぞ伏したりける。其樣勇々しくこそは見えにける。

元親豫州再び發向の事

此時元親は、岡豐に在城しけるが、宇都宮、城を明けて流刑せられ、大津の城へも大軍にて攻め來り、城中は小勢にして守り難く、援兵を乞ひしかば、岐川玄蕃頭を大將として、二十餘騎を加勢すと雖も、小早川に手痛く攻められ、已に城中危に臨んで、敵の謀に欺かれて和睦し、軍を止めて土州へ歸り、猶之は切腹して、合戰即時に治まりしかば、河野方武威大に耀かせり。之に由つて先年元親に降參せし城々も、狐疑を抱いて相背く。其聞えありければ、捨置くべきにあらざれども、年内は寒氣酷うして、烈風肌を通し、士卒弓を引き刀を握る事自在ならねば、兎角猶豫し、明くれば天正八年春三月、軍評諚あつて、再び敵國に赴く事は、軍十分の勝利を得ずしては、天下の人口塞ぎ難しとて、阿波・讃岐の勢を催促し、都合五萬餘騎の猛卒、旌旗日を蔽ひ、鎗戈霜を凝らし、人强く馬壯にして、威風凜々たり。先陣已に二日路出張せし處に、三瀧の城主北川左衞門太夫、元親に恨ある由にて、河野へ降參すと聞えしかば、急ぎ早馬を拍つて、本陣へ此由を告ぐ。元親聞いて、北川は別して無二の味方たるにより、我婿となし、義氣他事なかりしが、今何故色を立てたるぞ。渠れ若し我に叛

かば、殘る城々とても賴なし。一旦賺して見ばやと思ひければ、使者を以て、其方元親に恨あつて謀叛せらるゝ由、其聞あり。如何なる遺恨に依るにや、其故を聞いて、望の如く申付くべし。我れ豫州を未だ併呑せず。舊年宇都宮主從歿落してより、城多く元親を叛くと聞く。實否を糺明せん爲め出張する處なり。よし少の恨ありとも、婿舅の間、宥免あるべしと、懇にいひ送りければ、北川聞いて、我れ緣者たるの好を思ひ、數度の軍に粉骨を盡し、大半味方の有となるは、恐らくは某が力に依れり。然るに故なく腹切らせん結構と承る。其上某が領內宗川・黃番の二城を攻取れ、北川へ案內に及ばずとて、押して軍勢を向けて、町中三の丸迄推入り、惡口狼藉に及ぶ事、是何の謂ぞや。又去年永山伯耆を訴訟の爲め、岡豐へ遣す處に、某が非分の道理に落着する事、無念の至極なり。所詮斯くの如く、表裏無慙の人に組せん事は、武士の本意とする所に非ずと、眼を瞋げ申しける。使者爲方なく馳せ歸りて訴へければ、元親聞いて、惡き北川が雜言かな、時を改めず攻潰せと、後の久武內藏助を先鋒として五千餘騎、桑名太郎左衛門を右備として三千餘騎、宿毛・光富を左備として六

元親三瀧城を攻む

千餘騎、大軍後に續いて、三瀧が城へと押寄せたり。城中も兼て期したる事なれば、少しも臆せず突出し、雄氣天を突き黒烟を立て、こゝを専途と戰ひしかども、寄手は目に餘る大勢なりければ、斬れども射れども事ともせず、荒手を入替へ〳〵、頃刻に變じて戰ひしかば、其日の黄昏に、難なく本丸を乘取り、夜未だ明けざるに、二の丸を鐵桶の如く打圍みて、熊手なんどを塀小間に引懸け〳〵攻入りしが、打出す鐵炮に支へられて、少し色めき立ちたるを、城卒拔連れて切つて出で、東西に追靡け、南北に追卷られ、前後不覺に戰ひしに、互に手負ひ死を致す者、幾許といふ數を知らず。元來怺へ兼ねたる城卒、大軍に蒐隔てられ、所々に五十騎卅騎、火を散らして戰ひける。

三瀧城陷る

斯りし處に久武・桑名が一軍、自餘の戰には目も懸けず、大將を打止めんと、二の丸の門内迄攻入りしかば、北川今は是迄と、廣間の庭に踊り出でける處を、依岡透さず推雙べてむずと組む。北川心利いたる者なれば、差添を拔いて一刀刺しけれども、鎧よければ裏かゝず。力勝りの依岡、北川を推伏せ、敢なく首をぞ取つてけり。甲の森は、北川が郎等永山伯耆楯籠りしを、不日に攻干し、永山は自殺しぬ。則北川

が領分を、長曾我部四郎兵衛にぞ宛行ひける。扨二三日軍馬を養つて、黑瀨へ押寄せんと議する處へ、曾根の何某、手勢五百餘騎を引いて馳來る。其外威風を望みて、走り加はる兵二三千に及びければ、元親大に悅んで、曾根一番に馳來らるゝ條神妙なりとて、則ち曾根を先陣の大將として、黑瀨の城へ押寄せたり。城主西園寺は、兼て軍慮を回らせし事なれば、土佐勢攻飽んで、先陣已に敗北す。城卒二千餘騎、敵に足を留めさせじと、一度に突いて出でけるが、西川豐前四百餘騎、味方の引くに誘はれて、坐に控へてありけるを、城兵嚴しく追ひければ、態とおびき出さんと、三町計引退き、時分はよきぞと、一度に噇と取つて返し、西川が手の下に、敵兵二人切つて落す。是に勵されて、亂れ立ちたる味方の兵取つて返し、勇を震つて戰ひしかば、城兵若干討たれて、一度に城へ逃入りける。豐前守、僅の勢を以て、敵を追込みしかば味方是に氣を得て、大軍備を立直す。斯る處に北本善四郎といふ者、首二つ提げ、實檢に入れんとぞ訴へける。桑名聞いて、汝未だ若輩の身として、甲斐々々しき働、感心の至なり。迚もの事に、軍の樣を聞かんといへば、善四郎答へて、今朝の亂に、大

軍に戰つて、餘り息限れ候故、あたりなる細谷川にて水を飮みけるに、敵兵三人來つて、味方か敵かと問ふに、味方ぞと答へて、敵の面へ水を掛け、怯む處を一人卽時に切伏せ、二人の敵、逃げんとするを追かけ、一人を討止め候内に、今一人は逃延び候と申す。桑名聞いて、誠に早速のきゝたる働かなと稱美して、宜しく御披露申すべしと首を預かり、善四郎をば、先づ陣處にぞ歸しける。

高森合戰の事

元親、黑瀨の城、初度の戰快からず、方便を改め攻入らんと、評議區々なる處に、高森の城より内通の者ありて、城に火を掛くべし。煙を合圖に攻入り給へといひしかば、元親悅喜斜ならず。此の如くならば、一戰の内に功をなさん事疑なしと、黑瀨の城に守を置きて、元親は軍馬を率ゐて推寄せける。高森の道筋には、岡本・深田・金山・土居四ヶ所に敵ありければ、油斷して、敵に後を遮られては叶ふまじと、四ヶ所の押に二千騎の勢を配り、深田の城を十餘町打過ぎて、高森の城に雙びたる、善家とい

ふ山に取上つて、先備を立て、攻支度をぞしたりける。城中には、敵に內通の者あつて、元親合圖を待つて攻掛ると、返忠の者ありしかば、城主大に喜び、敵の謀に付きて術を廻らさんと、城中謀叛せし者を六人犇々と搦め捕り、嚴しく拷問するに、城中に火を掛け、相圖をなさんと白狀しければ、先づ六人の首を刎ね、城の後に乾ける萱を山の如く積みて、其夜の二更に火を掛けたれば、寄手是を見て、すは城中に合圖の火を上げたるはと、雲に聳ゆる高森城の、たとへば蜀の劍門、天險の如くなる山道を、一軍一度に、切岸の塀近く攻寄する。時に處々の矢倉より、鐵炮夥しく打出し、彼六人の首を城外へ抛出し、此等の者を賴みたるかと、一度に嚾と笑ひければ、寄手大に暇了れ、引かんとすれば敵城道にあり、進んで戰はんも、城中備あれば、急にも攻め難し。又四ヶ所の城より切つて出でなば、味方一人も生殘る者あらじ。如何にも備を亂さず、後陣より繰引に引けやとて、大軍次第々々に引取りける。此時四ヶ處の城より切つて出でば、元親當國の府に足は止めじものを。城々にも謀叛人やあらんと、狐疑して一人も出でざりければ、元親手配を定めて引取るべしと、一番に桑名三

千餘騎、二番光富千五百餘騎、三番宿毛千五百餘騎、後殿は十市備後守、八百餘騎にて打つたりける。此時金山・土居・岡本・深田・高森五ヶ所の城より、五千餘騎の兵を出し、飛ぶが如くに追懸けたり。十市踏止まつて戰ひしかども、城兵威利にして、備後守が兵、足を亂して敗走す。先陣に山を越えたる味方の勢、後陣に軍ありとて、宿毛が組にありける豐永式部・立石右京進・横山忠兵衞・同磯之進・廣田久太夫・野村孫左衞門取つて返し、山路の細道を小楯に取つて、追ひ來る敵を待かけたり。去程に敵の勢、逃る勢に追縋うて、備を亂して追ひ來る。立石右京進、待構へたる鐵炮を放ちけるに、一方の大將深田太兵衞を、馬より下に討落す。是に機を得て、宿毛が兵五十餘騎、拔連れて切つて出で、四方八面を薙いで回りしかば、城兵一戰にも及ばず、我先にと引返す。元親是を聞いて、宿毛右衞門太夫なくんば、十市が勢は、一人も生殘る者はあるまじとて、感狀を出して褒美す。別して立石右京進、敵の大將を討取る事、第一番の高名とて、乘替の馬一匹、鞍を添へて、溝口內藏丞を以て遣しける。元親、豫州の戰はかゞしからねば、何とぞ術を以て、城々を討取るべし。河野と軍

せば、中國の加勢事むづかしく思ふと雖も、元來通春は、武勇の道を知らざる者なり。我れ三國に跨つて威勢盛に、當國過半手に入りし上は、肝を冷して中々師を起すまじ。其中に城々を攻取り、河野一人にならば、自然に威衰へて敵對叶ふまじと思ひ、先に降參せし石川・曾根・河籠・森・大森・西川・竹森・薄木・御莊を先として、城々へ軍勢を催促し、深田の城を攻めんと、大回り二里に大柵をふり、壕塹を營み、處々に井樓を構へ、逞しく擧動ひければ、敵叶ふまじとや思ひけん、面縛して罪を謝す。いよいよ大軍を以て、城々を攻落すべしと流言しけるに、諸城の兵肝を消す。寄手は次第に猛になり、城々は月を追つて啅噪す。敵對せん事叶ふまじ。其上元親、何れの城を攻めんも知り難ければ、譬ひ加勢を乞ひたればとて、援兵なるべからず。一處懸命の領地さへ相違なくば、人質を出して降參せんといひしかば、元親悦び、一々相違あるまじきの書券を出しける。先づ降參の人々には、多田・山田・熊崎・黑瀨・白木・土居・金山・岡本・高森・島・岩井、此等を先として、卅一の城々、元親に隨順して、年々土佐へ參候す。元親大悅し、則ち後の久武内藏助を、豫州の總代官と定め、元親

は、土州へぞ凱陣したりける。

四國軍記卷第八終

四國軍記卷第九

宇野鐵入齋別所軍談の事

粤に宇野鐵入齋といへる者あり。元播州別所の氏族にして、近き頃迄、小地を領してありけるが、長治歿落の後、知邊あつて土佐に來つて住居せり。武勇才智共に世に恥かしからぬ程の者なりければ、兼て元親の耳にも入りし故、或時元親召寄せて、三木の城合戰の始終を問はれける。鐵入齋承り、某數ならねども、其軍列にあつて、本末詳に見得仕りたる事に候へば、委細に申上ぐべしとて席を進め、逐一にぞ談じける。抑別所小三郎長治と申すは、村上源氏具平親王廿六代の孫、赤松入道圓心の末葉なり。播磨國東八郡を領じ、三木に在城す。武將の譽高く、其門葉繁昌せり。永祿年中、同姓の侍大將山城守賀相(よしすけ)・舍弟孫右衞門尉重棟兩人、政事明に執行へり。

三好修理大夫反逆して、大樹義輝公を弑し奉り、御舍弟義昭公、南部より牢浪して、濃州岐阜に往き、織田信長を御賴み、三好一族を追討の刻、別所方へ合力なすべきの由、御敎書をなさる。故に一家會合して、孫右衞門を選み出し、軍勢三百騎を率し上洛して、京都白川の戰に粉骨を竭し敵を追拂ひ、三好敗北して、義昭公御本意を遂げらるゝの後、一番に孫右衞門召出され、御感を蒙り、一家の名望なりしかば、功に誇るの心生じ、一族の侍を屑とせず。剩へ舍兄山城守をも侮る故に、兄弟不和になり、賀相方・重棟方と二つに分れ、法を背く者多く、別所亡家の端となり、今度秀吉と度々の合戰に味方利を失ひ、一家右往左往に殁落せしも是故なり。信長西征の企あるに依つて、先づ別所を近付け、魁を賴み度由を申送られ、凱旋の後、播州一國の事はいふに及ばず、其外功に依るべしとの契約なり。長治則ち一味して、時日を移さず、近邊の城主の人質を取り、信長へ使者を以て、國中皆味方に屬せり。此上は大將一人給はるべし。長治西國への先登仕るべしと申遣しける。信長意思(おもへ)らく、羽柴筑前守は、心がさあつて、勇にも謀にも達したる者なれば、今度西國退治の大將たるべしと

仰付けらる。秀吉謹んで承り、天正六年寅の三月四日、西國征伐の爲め都を立ち、同月七日播州加須屋が館を本陣として、行列の次第嚴重に華麗なり。一番に大旗、二に鐵炮、三に弓、四に長柄の鎗、五に切具足二行に列し、前後の騎馬之に隨ふ。次に兵皷、次に軍監、次に乘替の馬、次に秀吉手廻の兵先手の如し。次に螺、次に小符、次に手明の步卒、次に使番廿八人、次に斥候の役人卅六人、次に惣軍勢七千五百騎、引下りて家老一頭行列、前の如くにして着陣す。美々しき粧ひ希代の見物なり。翌日より國中諸侍の出仕、門前に市をなす。然るに山城守・三宅治忠兩人軍評定の爲め、秀吉の館に行きけるに、秀吉對面して曰、某信長の代官として下向す。長治西國の案內者たるべしと宣ふに付、各の軍立の次第、不日に敵を擒にする謀計もやあると問はれければ、三宅が曰、西國發向の先手、別所家に仰付けらるゝ事、有難き次第なり。今度の御合戰は、一國一城の小競合とは各別なり。輝元は大身にして、智謀ある名將なれば、萬死一生の合戰、五度も十度もなくては叶ふまじ。御手間とられ候はんと存ず。夫に就き先手陣の張り樣、別所の家代々定め置く所は、敵國に入りて

より備押し、路の程卅里の外は押さず。卯の刻より以前、未の刻の首(はじめ)に押さずして陣取を定む。而して物見を放遣し、夜懸の用心に伏兵を置く。日暮に至つて備押し候へば、陣屋定まらず、晩食調はず、士卒困勞して、其陣堅固ならず。卅里は上道五里なり。扨陣を取圍むる事は、春は味方東に陣を張る時、敵西に陣を取れば、味方鋒矢の形三角に陣を張るなり。西より東を金尅木と尅する故に、味方三角形に陣を張る事、離三火なり。火尅金と西を尅す。同じく味方西に陣取り、敵東に陣を張る時、尤金尅木と尅すと雖も、春旺分たるに依つて其恐あり。味方必ず半月の陣を張る。半月の形は金なり。重金尅木二金一木を尅す。味方南に陣を取る時、敵北に陣を張れば、北より南を水尅火と尅す。此時は味方衡軛の陣を張る。敵南に陣を取らば、水尅火論ずるに及ばず、敵若し衡軛の陣を張れば、味方は方圓圓形魚鱗の陣を張るなり。圓形は木、衡軛は土、木尅土と尅す。魚鱗方圓は水陣なり。是亦北方に旺ず。味方彎月の陣も宜し。金の陣なり。衡軛より土生金と生ず。四季共に之に順ふ。此外陣形樣々の事あり。鎗を合せ、手詰の勝負の時は各別なり。此の如く陣取りて、

貝に一聲立てゝ、其聲を兵鼓請けて、押太皷を打つて備を押出す。春夏は味方の左の手先より軍を初め、敵の右の手前へ懸る。秋冬は味方の右の手先より軍を初め、敵の左の手先へ懸る。此時翼龍破軍の行といふ事あり。又備をまるめやう専なり。半渡の事、火戰の事、惣じて荒野深草の地に陣を張る時は、敵火を放つ事あり、又不慮の火もあり。用心を堅城として、油斷を大敵とす。川端に陣を張る時は、雨降り洪水出でんと、前かどより覺悟し、山野の林古屋敷には、必ず伏兵ありと心得、風の順逆知るべき事肝要なり。其上遠候・中候・陣中の候とて三段あり、遠候は敵國發向の時、三日先立つて輕歩の遊士を遠候に放遣し、敵國へ入るべき地形・切所・嶮易、幷に敵出向はんと欲する敵の虛實空隙を、能々窺ひ見せしむ。是を遠物見といへり。惣じて常に諸國へ遊士間諜を放ち遣し、敵の虛實を見せて、國の政を知るべき事肝要なり。是興軍最初の謀なり。中候は、發向の刻、一日先立つて輕騎を三人放ち遣し、道路の嶮易、山林・川澤・木草の便宜しきを能々見せしむ。陣中の候とは、斥候番の者、三人宛三番にして、其内老功の武者一人、若壯利才の武者二人、合せて三人宛

なり。此の如きの事憚入り候へ共、備の次第、御尋に依つて演說すとぞ申しける。秀吉聞いて、述べらるゝ所の軍法、世間通用の事なり。然れども左樣に延々の手立は、對揚の人數にては然るべくもあらん。彼は大勢、此方は小勢なり。賢人の前に、小人久しく居れば、其恥を顯すといへり。斯樣の軍には不意に攻かゝりて、五度も三度も强き働を知らせ、敵に臆病神を付けねば、急に勝利を得難しとあれば、時に治忠重ねて曰く、强き働き計にては、落着の勝はなり難かるべし。譬へば齒は强く舌は柔なり。强き齒はかけ落つれども、柔なる舌は落ちず。柔なる者は、强を碎く理なり。大敵に逢うては、柔剛弱强の四のものを專ら用ふるを、名將とはいへと申しければ、秀吉少し無興にて、舌齒の譬も時に依るべし。所詮各は先手の役にて候へば、働き等の事、隨分精に入れられ候へ。勝利を得る下知は、大將役に、此方より指圖申すべしと、にくていに申さるゝ故、兩人閉口して三木城に歸り、別所の一族家老の面々參會して是を評定す。山城守申されけるは、今度秀吉當國へ下向して、近國に威を振ひ、別所の家臣に向ひ、遠慮もなく我意を振舞ふのみならず、我が下人の如

く挨拶し、國人に首を上げさせぬ様にする心底を察するに、信長の謀計なるべし。近年東國の沙汰を聞くに、關東に四大將あり。北條氏康・武田信玄・織田信長・上杉輝虎なり。其内信長の武勇かたぎは表裏第一なり。表裏に善惡の二あり。武士の敵を計る謀略は各別、信長は僞を專とし、家風下々迄輕薄多し。今思案するに、秀吉の當國へ下向の內談は、先づ長治に中國の先手をさせ、西國靜謐に於ては、初の約を變じ、往々長治退治し、播州は秀吉に宛行ふべき信長の心底、鏡に映す如く知れながら、其謀に落ちん事、誠に武略なきに似たり。此方より色を立てんと申されければ、長治、さればこそ最前より、信長兄弟の思をなすべしと、頻に賴まるゝに付、同心して大將を給はれと返事しぬ。定めて信長、子息の信忠か、又は信雄にてやあらんと思ひしに、秀吉を差下す條、信長淺智の故なり。凡そ大將を立つるには、其人を選ぶ事第一なり。縱ひ當分威勢ありとも、氏もなき人を大將にしては、諸人輕んずる者なり。然るに何ぞ、昨日信長取立てゝ、稍侍のまねをする秀吉が命を受け、長治、彼が馬前の塵を拂はゞ、天下の物笑たるべし。此上は初の約を變じて、信長と手切をな

し、其驗に、先づ秀吉と合戰すべしとあれば、舍弟小八郎十七歲進み出でて、軍は不意に發するに利あり。長僉議して敵に悟られ、逆寄に寄せられては、悔ゆとも甲斐なかるべし。某に人數四五百人給はり候へ。今明の中夜討にして、三方に火を放ち、一方に支へ候べし。火を遁れんと馳出づる東國勢を、追立て切倒し、本陣に切入り、秀吉を討取るべしと、高聲にいひければ、別所甚太夫暫く思案して、御謀其理なきにはあらざれども、今信長大國多く討取り、天下に旗を立つる程の人なれば、秀吉如き侍五人三人失つても、事缺くとは思はれじ。唯城を堅固に守り、懸合の合戰に敵を惱まし、其中に毛利家の加勢を受け、敵の費に乘つて、一當あつる程ならば、秀吉をば討破るべし。引けば後に續いて攻上り、京都に於て一戰を遂げ、一日なりとも天下に旗を揚げば、縱ひ屍を曝すとも、武門の規模なるべし。其上累祖赤松圓心、苔繩の城より打出で、右の手立にて大功を顯せり。元弘の吉例に任せられ候へといへば、山城守尤もと同じ。さらば籠城の支度あるべし。先づ一應敵を欺かんと、信長へ使を以て申しけるは、去る七日秀吉當國下着。中國の先手は、長治案內を仕るべ

し。然るに輝元は武勇にして、大國の主なれば、一旦の合戰には勝負を決し難し。之に依つて駈引自由の爲め、又は軍勢打入れて、安堵の爲め居城の普請を仕ると、理をいひ遣し、其往來の間に要害を固め、近邊の城主侍大將へ回文を遣す。先づ志方には櫛橋左京亮、神吉には民部少輔、淡河には淡河彈正正、高砂には梶原平三兵衞、野口には長井四郎左衞門、端谷には衣笠豐前守等、最前より人質を出す故、異議なく一味して、面々の居城を守り、殘る小城をば悉く引拂ひ、上月・中村・高橋・服部・後藤・長谷川・神澤・大村・光枝・上原・魚住・賀古・加須屋・來野・垂井・飯尾・藤田以下、各人質を出す。其勢七千五百餘騎、三木の城にぞ楯籠る。秀吉之を聞き、心得ざる別所が逆心かな。信長他に異に思召され、當國の人質等預け置き、今度西國征伐の案內者に賴み給ふ上は、何の恨かあるべき。若氣の致す所か、さなくば山城守所爲なるべしと、孫右衞門を呼寄せ、如何に重棟、今度の反逆の趣、小寺・明石も同意かとあれば、重棟承り、彼等は初より無二の御味方と申す。秀吉、貴方は如何にと尋ねらる。重棟謹んで、斯樣の企、某には八幡大菩薩も照覽あれ、夢にも知らせ申さず、面目もなき事

共と、涙を流して申しける。秀吉、然らば貴方狀を遣し、長治を賺し見給へ。今度長治西國案內に依つて、秀吉下向せり。信長にも、長治に於ては、骨肉の思をなし給ふ。何の恨の逆心ぞや。若し意に叶はざる意志あらば、秀吉迄承るべしとなり。重棟右の趣を述遣すと雖も、返答にも及ばず。重ねて兩三度迄申しければ、長治返事に、多年輝元に賴まるゝ上は、信長何と申さるゝとも、輝元への契約變じ難し。此上は當城を枕とし、一家討死すべき事、侍の本意とあれば、秀吉、其主意なれば是非もなし。我れ當國の者共を、四方より敵に受け、爰にて一戰を遂げ、約を變ずる長治が首を見ずんば、播州の內一足も引くまじと、急ぎ軍勢を手分し、三月廿九日、三木の城へ押寄する。

秀吉、別所長治を攻む

此城、前には大河流れ、後には高山峨々として、岩峙ち道狹し。其上近邊は皆敵城にて、敵三木へ寄するならば、十方より討つべしと待かけたり。秀吉先づ谷々を放火して、足輕軍少々始め、敵の競を見、いや〳〵卒爾に軍し敵に氣を付けば、重ねての軍なり難しと、人數を上げて引取りけり。日旣に夕陽に傾けば、羽柴小一郎秀長に申付け、秀吉は采拜押取り、信長流の軍引、人數を左右に立てられける。三木

方の若者共、跡を慕はんと四五百人、城戸を開いて出でんとする時、別所左近と光枝小太郎と先を爭ひ、喧嘩に及びければ、山城守馳付け、陣中の大病は、火事と喧嘩なり。事の前に能侍を失つては、味方には損をして、敵の物笑になる事ぞと、深く是をぞ制しける。

野口合戰の事

斯くて秀吉、播州の案內者を召寄せ、國中の繪圖をさせ、山川の嶮易を、軍兵迄に能く知らせ、扨家老の面々に申さるゝは、當國の敵共、小勢を以て居城を守るは、我れ三木城を攻めん時、四方より後詰して、追拂はんとの謀なり。其に摺違うて、先づ弱き方より討取らば、小城共は攻めずとも落つべし。さあらば三木を攻むるに安かるべしとて、四月三日早朝より、長井四郎左衞門が楯籠る野口の城に押寄せける。城にも兼て待受けし事なれば、城際迄敵を引付け、塀櫓の狹間を活と開き、中國名譽の鐵炮の上手、强弓の精兵を汰へ、散々に打出し射出しける間、先手の軍兵進み兼ねた

る處を、長井下知して、大筒をつるべて打立てければ、寄手の大勢、將棊倒しに伏しける間、一陣半町計引退く。此城四方沼田にて、駈引自由なり難し。秀吉近邊の草木青麥等を刈取り、沼も堀も平地に埋み上げ、駈入り〳〵三日の間、透間なく攻めけれども、城中弱る氣色もなく、京勢已に戰ひ疲れたるを、秀吉大音聲にて、中國の武士と始めての合戰に、弱氣を見せて、美濃・尾張の名折ばしすな。我を越えよと、馬廻三百騎拔連れて蒐入りたり。大將に越されじと、軍を亂して攻めける程に、外面の塀四五十間引破り、已に乘取る處に、長井四郎左衞門和降をぞ乞ひける。軍兵聞きも敢ず、降參は以前の事、是程落去して、一命を助かる事あるまじといへば、秀吉、さはせぬ者ぞ。軍は六七分の勝を十分とす。敗軍の者に、少しも手を指すべからずとて、城を請取られけり。

神吉の城攻むる事

去程に長治は、毛利右馬頭輝元へ使者を以て、播州軍立の樣、委細に注進して加勢を

秀吉、神吉城を攻む

乞ふ。之に依つて小早川左衞門佐隆景・吉川駿河守元春兩大將に、三萬騎差添へ、備州・作州の境に陣を張る。信長の嫡子秋田城介信忠三萬餘騎にて、播州表に出で、在所々に陣を取り、毛利の軍勢の近付くをぞ待たれける。中國の兩將、評議に數日を送る處に、別所の與黨の籠れる神吉の城を蹴散らして、毛利勢に氣を失はせよと、四方八面尺地もなく打圍み、螺鐘を鳴らし攻鼓を打立て、隙間なく鯨波を上げ、堀際迄攻寄せ、已に飛入らんとする處に、城中より究竟の射手を揃へ、鐵炮を入違へ、打立て射立てければ、四方の堀に飛入りける若武者三百餘人討たれにける。後に續く上方勢、堀際少し寛る處に、寄手の諸將足輕に下知して、方々より竹木を切寄せ、能き程に束ね、各押立て〳〵、大手の城戸口に攻寄する。其頃迄は、中國に竹把といふ事なし。不思議なる手立なりと、案に相違ぞしたりける。斯る處に大手の矢倉を開かせ、年頃廿八九の男、卯花縅の鎧着て、冑をば脫いで童に持たせ、皆紅の扉開いて大音上げ、當城の大將神吉民部少輔といふ者なり。別所小三郎に賴まれ、今日天下の大將信忠の眼前にて、華やかに討死せん事、武士の望む所なりと、冑を取つて着、忍

の緒を縮めながら櫓より下りて、逞兵二百餘騎前後左右に隨へ、面も振らず大勢の中へ切つて入り、懸けつ返しつ攻め戰ひ、木戸際に付きたる千餘騎の敵を、十町計り追捲り、味方を見れば、五十騎計に討なされ、閑々と引く處を、秀吉麾押取り、此處ぞ若者共、敵に添うて附入にせよと下知すれば、民部門外にて馬より飛下り、神吉重代の菊一文字則宗二尺九寸ありけるを打振つて、込入る敵に走り懸つて切つて廻れば、此勢に辟易して逃げ散るを、神吉民部と名乘かけ〳〵て追掛くるを、京勢の中に取籠め、已に討たるべく見えし處に、城中より百騎計驅出で、向ふ敵を追拂ひ、民部を引包みて門の內へ引入りける。敵勢續いて呼き叫び攻入りける間、遂に外構一重打破らる。此に二の丸の橋板をはね外し、行桁計の橋際に、六尺餘の男、昔冑を猪首に着、黑革縅の腹卷に、四尺餘の大長刀を提げて、高聲に名乘りけるは、鎌倉權五郎景政が末葉、梶原十右衞門入道道庵といふ者なり。三木の城より一騎當千に選ばれ、加勢に來れり。近國の者共は、手並の程を知りぬれ共、東國武士は、今日始めての見參なり。寄せて手並を見よとて、行桁を走り渡れば、東國勢我れ討取らんと、五

神吉城陷る

六騎打連れ、道庵に打つて懸る。道庵から〳〵と打笑ひ、いで物見せんと長刀取延べ、八方隙さず、敵三人堀の中へ切はめ、一人には深手を負はせ、殘る一人を引組んで、首掻落し左手に提げ、又行桁を閑に渡り、本陣に入りければ、敵も味方も、一度にどつと感じける。其後三木の加勢の內、小寺主馬助・柏原治部右衛門・中村臺岐・長谷川權太夫・藤田藤二、道庵を手本に、行桁を走渡り〳〵戰ひける。橋上の戰半なりける處に、城主民部が同姓の家子に、神吉藤太夫といひし者、一命を助け給はゞ、民部を討つて出すべき由を申送りければ、信忠仔細あるまじと宣ふ故、何とかたばかりけん、手もなく民部が首を討つて、信忠へ奉る。此藤太夫が爲には、甥なり主君なり。前代未聞の事共なり。民部討たれにければ、士卒皆四方八面に退散す。道庵是を見て、戰は半なるに、蓬き味方の有様なりとて、手の者卅人左右に隨へ打つて出で、敵に爰彼にて寄合ひ〳〵戰ひけるが、今は早主從三人になりければ、雜兵の手に懸らじと、己が役所に走せ歸り、櫓に火を放ち腹掻破り、烟の中へ飛入り、名を後代に殘しける。抑此道庵は、十三の歲、親の敵備前國の住人荻原與市といふ大力の剛の者

を、組打にせしより以來、度々の高名數を知らず。誠に無雙の勇士なり。去程に信忠卿、神吉にて討取りし首共實檢終り、則ち三木へ押寄せ、其邊巡見あるに、卽時に落城なり難しと思ひ給ふにより、二三里が間に、向城二三ヶ所附けさせ、此表の仕置秀吉に下知して上洛ある。秀吉は、平山の峯に居城を拵へて、三木の城をぞ守りける。

平山合戰の事

三木の城には、軍評定あるべしとて、天正七己卯年二月五日の早天に、諸大將各相詰めらる。上座には小三郎兄弟三人・同姓山城守、其外一族侍大將の面々、一禮正しく二行に座す。誠に巍々たる粧なり。于時長治いへるは、近年野口・神吉の兩城攻落されし事、全く士卒の科にあらず、偏に長治が謀の拙き故なり。敗軍の將は再び謀らずといへり。此上は各の意見を請くべしとあれば、未だ言を出す者なきに、末座より久米五郎久勝・志水彌四郎直近といへる大力の荒武者二人進み出で、軍の手立承るべしといひければ、山城守申しけるは、明日の合戰、辰の刻に城中を押出し、長

屋表に惣人數を伏置き、若者五六百に足輕少々相添へ、室田・保隅・岡村を足輕大將とし、前なる川を打渡し、敵を引出すべし。秀吉元來思慮なき破武者と聞く。其上野口・神吉の兩城を討取り、氣に乘りたる東國勢、我勝に駈出さん。其時味方いかにも弱々とあしらひ、各川を此方へ引取るべし。然らば東國勢、足を亂して進むべし。平場の足立よき所迄引付け、伏を起し、胴勢一度に立上り鬨を作り、四方より駈寄せ、引包んで討取るべしとありければ、久米・志水言を同じて、城州の手立然るべからず。昔より今に、川を隔てたる合戰に、渡したる方は必ず勝ち、渡されたる方は負くる例多しといへば、山城守重ねて、それは仔細ある事なり。一涯に渡されて負くるとは、無思慮人のいふ事なりとあれば、兩人又申すは、渡して能ければこそ、古の名將、皆川を渡して勝利を得たり。其上別所一族、數を盡して出でらるゝ合戰に、何の手立か入るべき。手立は小勢の時こそ入る事なれ。願はくは明日の合戰二手に分け、先づ一手は城州を大將として、秀吉が先手に懸り、一手は小太郎殿を、軍初の大將として、我等共加はり、東の山の麓より、秀吉本陣へ懸り切崩し、勝負を決すべし。味方

打負け引くならば、某兩人敵陣に紛れ入り、秀吉と引組んで討果すべし。縦ひ負くるとも、大將に損は掛けまじとぞ申しける。明くれば二月六日、先手の大將山城守、侍大將別所左近・小野權左衞門・櫛橋彌五三、足輕大將室田內匠・保偶越中・岡村因幡、其外高橋源左衞門・廣岡藤九郎・矢田太郎左衞門、以上侍七十二人、其勢二千五百餘騎、卯の上刻に押出す。後陣は別所小八郎治定を大將として、侍大將には別所甚太夫・同三太夫・光枝小太郎・同道碩、足輕大將には、久米五郎・志水彌四郎、其外服部五郎左衞門・後藤又左衞門・加須屋玄蕃・垂井武藏守・有田兵庫・端山左馬助・永井・魚住以下六十三人、武勇の者を選りて七百餘騎、勇み勇んで推出し、前なる川を打渡し、鶴翼に陣を取り、閑り返つて備へたり。秀吉山上より見下し、人數繰出すべしと、使番を以て觸れらるれば、常に軍法定りたる故に少しも動せず、ひた〳〵と馬を乘出す。先手千餘騎已に敵に打向つて、足輕の鐵炮軍を初めけるや否や、兩方互に入亂れ、鎬を削り、切先より火焰を出し、千日を一時と戰ひける。軍半なる所に、三木勢の後陣少し押出す。新手を入替ふるかと見ればさはなくて、東の山に駈上り、秀吉の本陣

へ切つて懸る。秀吉士卒を下知して、今日の軍、味方勝利を得たるぞと、敵間半町計になつて、いざや懸れと采配を振り立てらるれば、軍兵一度に鬨を上げてぞ駈出す。此に羽柴小一郎秀長、後號二美濃守一又號二大和大納言一秀吉弟也、何の間に先立ちけん、平山の腰のひろみに駈出で、一番に鎗を合せ、兩軍互に渡し合せて奮戰す。已に雙方戰ひ疲れ、東西へ別るれば半討たれて、殘兵皆緋絨の鎧着たるに異ならず。先陣引けば、後陣又突懸り、火花を散らして戰ひける。時の運や弱かりけん、三木勢多く討たれて、已に敗軍と見えける處に、久米と志水と眼を急度(きつと)見合せ、討取りたる首を切先に貫き、大將は何くに在します、高名の印見せ申さんと、多くの兵を押分け〳〵通り過ぎ、已に秀吉に間近くなれば、兩人首を抛捨て走り懸る處を、近習の侍透さず引組んで、十四五人落重なり、起しも立てず首を討つ、危ふかりし事共なり。三木勢彌色めき立ちて、右往左往に敗北す。東國勢追懸け〳〵打止めける。大將小八郎は、味方を心安く引かせん爲め、取て返し〳〵しければ、馬廻の侍百五十騎返し合せ、馬上に鐵炮を持ち、敵を七八間に引受け、一度につるべて打ちけるに、東國勢百五六十人、馬上より打落され、

騒ぐ處を拔連れて切つて入り、卷り立てゝ戰ひけるが、方々にして討たれ、主從十四五騎になつて引きけるを、東國勢、大將と見えし、黑し返せと追懸くる。小八郎十文字の鑓提げ馳入る處を、本郷采女といふ小姓、鎧の袖に取付き、猛虎机上の肉を顧みずといへば、小八郎、人を殺す刀は、人を活する劍といひ捨てゝ、馳込みける。樋口太郞寄合せ組まんとするを、樋口が郞等中に隔り、小八郎に打つて懸る。鎌鎗にてかけ倒すに、鎗の横手、敵の綿嚙に懸り引合ふ隙を、樋口引組んで、上を下へと返しけるが、終に小八郎を押伏せ、首を掻きてぞ差上げける。十四五騎の侍、大將討たれたるを聞いて、向ふ敵を切拂ひ、爰彼より馳集り、小八郎死骸の前にて、一所に腹をぞ切つたりける。山城守は、味方敗軍と見るより、兵百騎計りを從へ、高き所に馬を据ゑ、靜まり返つて控へける。東國勢、小勢なりと侮つて、一文字に突いて懸る。山城が勢の內、上月宮內・高橋彌五左衞門・神澤又市・上原越中・同孫之允眞先に進み出で、百餘騎の兵後に續いて、面も振らず散々に戰ひ、五百餘騎の敵を追卷り、颯と引取り跡を見れば、櫛田傳藏・飯尾長吉・藤田惣六、手の者廿人計引殘つて、近付く敵を待懸

る。廣瀨左衞門佐、馬が首を引返し申しけるは、一定此若者共、敵に籠まれ討死すべし。連れて歸らんといへば、山城守、斯樣の後（しつぱらひ）に、はづれたる者は捨つる者ぞ。構はず引けと下知をなし、各引取れば、三人も後に付きてぞ退きにける。遙に引遲れたる武者二人、畔を傳ひて落行きけるを、敵七八騎追懸けたり。已に其間五六間と見えし時、二人の武者馬より飛下りて、道の左右に立雙び、追ひ來る敵の馬を、長刀に乘せ跳返す處を、一人の武者鎗にて突伏せ、敵三騎手の下に討取り、高聲に名乘りけるは、別所譜代の侍飯尾吉右衞門・依岡の某といふ者なり。近う寄つて過すなと罵りける。是を見て東國勢、弓鐵炮を以て遠矢に射殺さんとしけるを、秀吉遙に見て、あたら武者助けよ。當國平均の後、尋ね出して召仕ふべしとて制せらる。斯くて二人馬引寄せ打乘り、閑に城へぞ引入りける。其日三木勢侍卅五人、上下七百八十餘人討死す。秀吉勝鬨三度上げ、本城へぞ引かれける。

丹生山夜討附淡河彈正奇策の事

攝州守護荒木攝津守村重、信長を恨むる仔細あり、謀叛を企つるに由つて、播州より京都への往來自由ならず。 秀吉則ち荒木が伊丹の館に行き、詞を盡して說すと雖も、村重曾て承知せず。 之に依つて上洛して、信長へ軍勢を請ふ。 高槻・茨木兩城を、調義を以て味方に與し、播州より都への道のつまり〳〵に、城を拵へ構ふ。三木の城に此事を聞き、攝州に謀叛人あるは、一定敵を追拂ふべき瑞相なりとて、荒木が端城兵庫・鼻熊に内通し、丹生山に一城を取立てゝ、淡河の城を傳送として、毛利家より三木城へ兵糧を運び入る。 彼丹生の山は、攝州第一の切所、山の高さ廿丈、四方岩石を疊み上げ、石徑露滑なり。 近邊の野武士共二千計催し集め栖籠る。 秀吉之を聞き、いかにも壯健にして、夜討に馴れたる兵三百人選り、風雨の夜を待ちて忍び入り、男女の差別なく撫切に切つて廻れば、城中以の外周章てゝ、谷崖ともいはず、落入る者數を知らず、一時計りに城を乘取り、勝鬨をあげてぞ引取りける。 爰に淡河彈正は、一族郎等を集め申しけるは、丹生山の城、秀吉の謀にて即時に追落す。 此上は當城へ押寄すべし。 大敵を請けて戰ふには、地の利を用ふる事肝要なり。 歎いて敵を防

がん用意せんとて、郎黨野武士五六十八・足輕人夫三百人、普請道具を待たせ、日々に城を出で、敵の寄せ來るべき道を掘切り、或は馬ざくり車菱を蒔かせ、逆茂木大綱を張らせける。斯る處に彈正、普請の爲に城を出で、頗る油斷の由を、秀吉に訴ふる者あり。秀吉大に悅び、舍弟小一郎秀長五百餘騎、二手に分れて押寄せ、已に駈入らんとしけれども、堀切鐵菱に支へられ、少し漂ふ處を、淡河一族五十八人、素肌にて切つて懸る。彈正駈塞がり、各は物に狂ふか、數千人の敵の中へ、僅に四五十人切つて入り、何の功をかなすべき。我一つの手立ありとて、近邊の在鄕へ人を走らし、陰馬一匹引きて來らん者には、錢三百文宛與ふべしと觸れければ、時の間に陰馬五六十疋來る。諸侍彼馬の口を引き、道の廣みへ押出す。小一郎之を見て、あれ程の小勢にて掛け來るは、死狂と覺えたり。馬强らん人々、十方より馬を入れ、おて倒せよとて、究竟の駈武者馬上に鎗を提げ打入る處に、彼陰馬五六十匹たゝき立て、鬨を上げ、一度に敵陣へ追込みければ、數千の乘馬、陰馬を見てはね廻り左右に立ち、躍り狂ひければ、十方黑烟立つて上を下へと返しける間、馬上に一人も耐り得ず、皆跳落さ

れ踏倒され、散亂したる處を、彈正思ふ圖に敵を騷がせ、時分はよきぞ切崩せと、一族若黨五十八人、聲を上げて打つて入る。三百餘騎散々に切立てられて引退く。此戰の馬烟、東西に見えければ、城の留守に居たりし彈正が弟新三郎、馬引寄せ打乘つて駈出す。相從ふ兵百五十騎、我先にと蒐付くる。新三郎敵の崩れ引くを見て、續けや者共と、諸鐙を合せて追掛くれば、甥の江見又四郎、從弟の柏原大膳・宇野兵庫・高田與市、追續いて秀長の本陣へ、面も振らず切つて入る。引立ちたる勢なれば、返し合せず引き行くを、猶も追詰めんとするを、彈正下知して、さのみ長追なせそと、打連れて靜に城中へ引入らんとしけるに、江見又四郎進み出で、今日の合戰不慮に發り候を、不思議の御手立にて大軍を追靡け、大利を得たる事、遠近に隱れあるまじ。然れば秀吉之を怒り、明日必ず大軍にて推寄すべし。味方猛く思ふとも、此小勢にては對し難し。落人の如くになりて、三木の城へ引入らば、何の花香もあるまじ。此勢に引取らば、恐らくは淡河一家の侍に、肩を雙ぶる人あるまじ。各いかにとといへば、彈正思案して、此理尤至極せり。懸るも引くも時による習ぞとて、城を燒拂ひ、

一族郎等引具して、三木の城へぞつぼみける。彈正が今度の働、長治を初め上下の武士、各感賞なしにける。

大村合戰の事

中國の加勢、吉川駿河守・小早川左衞門佐を兩大將とし、侍大將には、乃美兵部・兒玉内藏、三木城を見續くべき爲め、兵船二百餘艘、明石の魚住に押寄する。其外紀州雜賀の武士共、海邊に要害を構へ、舟を引付け居たりける。秀吉之を見て、三木と魚住の間を取切つて、敵の通路を留めよと、君が峯を初め方々に、三十餘の附城を拵へ、其間に役所を構へ、堀切・逆茂木・土手・亂株に至る迄、丈夫に出來せしかば、其往來は絕えにけり。毛利家の諸將之を見て、秀吉僅六七千の人數にて、六七里の間打圍んで陣を張る、誠に希代の名將なり。我々三木の後詰として出張し、徒に日を送る事、世間の人にも如何なり。三木と相圖を定め、一戰を遂ぐべしと、忍びの者を三木の城に入れ、來十日の丑の刻に、敵陣に押寄せ合戰を初むべし。合圖に狼烟を上げん

時、城中より押出し、兩方より揉合せ、手痛く軍して安否を定むべしといひ遣す。三木の反詞に、御手立一々其意を得候。然れども兵糧乏しき故、城中堅固に抱へ難し。九日の宵、城より案內者を參らすべし。人夫を以て、兵糧を城中へ運び入るゝ手立を賴み入候と、申含めて返しけり。已に其日になりければ、城より案內者百餘人、弓に手矢を取添へ、忍びて魚住へ出しける。斯くて中國勢、生石中務を大將として、谷大膳が籠りたる平田の附城へ、明くれば十日の丑の刻に押寄せ、鬨を噇とぞ上げにける。夜中の事なれば、城中以の外に周章して、十方を失ふ處に、大膳手廻の侍を引具し、大手の城戶を開かせ、大勢の中へ破て入り、散々に切崩し、颯と引けば、兵過半討死す。中國勢彌大膳を目がけ、取籠めて討たんとす。大膳元より剛力武勇の者なれば、大長刀を打振つて、前後左右を切拂へば、敢て近づく者もなし。斯る處に馬上に素鎗を提げ、大膳に突いてかゝる。大膳長刀にて鎗を叩き落す。叶はじと逃ぐるを追掛け、唐竹破に切付くる。長刀鞍の後輪に强く當つて、鐔本より打折れしかば、太刀引拔いて散々に切散らし、敵數十人切伏せけれども、蠑勢前後より突掛つて、遂

に大膳を討留めける。此戰の間に、三木方の武士手島市之助・大橋平之丞・渡邊藤左衞門奉行して、七八千の人夫を以て、三木城へ兵糧を運ばせける。平田の後を通り、漸く夜明方に大村に着きぬ。時に平田の城、以の外色めき立ち、相圖の狼烟を上げたり。之を見て兵糧にも構はず、手島・渡部・大橋、横合に平田の城へ押寄せ、塀柵を切崩す。三木勢も狼烟を見て駈出し、平田の城に切つて入る。大膳が手の者共、口々にいひけるは、柵の木一本にても、敵に取らるゝ物ならば、味方の恥辱たるべしと、命を限りに戰ひける。中國勢は、是程の小城一つを攻落さずして引くならば、家の瑕瑾たるべしと、入替へ〳〵攻め戰ふ。秀吉已に打立たんと、馬を乘出せば、兵一千餘騎、取敢ず相隨ふ。秀吉の曰く、是程に相圖を定むる合戰なれば、敵一手には働くまじと、方々心を配り窺ふ處に、大膳討死仕候。後詰の勢遲々に於ては、唯今當城落去疑なしと注進す。秀吉聞きも敢ず、駿馬に鞭を加へて、相隨ふ兵、我先にと駈出す。中國勢、後先より揉合せんとしけるを、秀吉先づ三木と大村の中を隔てよと、笠坂の上より打て掛りけるに、此に別所山城守、大村の前に、三千餘騎にて閑り返つて控へ

秀吉、吉川小早川兩勢を破る

たり。秀吉大音上げて、平場の軍に大敵を受け、尋常の如く戰はゞ、味方勝利を失ふべし。命を捨てゝ戰ふべしと、取所になりたる味方の勢を、鋒矢の陣に押直し、いなり掛に突掛る。三木勢之を見て、鶴翼に颯と別れ、中に取込め討たんとす。東國勢駈破り、後へ駈拔け取つて返し、八方に鬨を上げ、先陣後陣入亂れ、或は十騎廿騎、爰彼に戰ひ、或は一騎二騎引組んで、刺違へ突伏せて首を取る。東國中國分目の合戰、今日を限と見えにける。秀吉采幣を振立て、此ぞ勝負を決する所なり。切崩せ者共、剛臆は秀吉が能く電覽するぞ。退く心あるべからず。高名して勳功の賞に預れと、身を揉んで下知あれば、三木勢遂に切立てられて引退く。東國勢此を見て、餘すな洩らすな討取れとて、聲を上げてぞ追掛けたり。三木勢も後日の恥をや思ひけん、別所甚太夫・同三太夫・同左近・光枝小太郎・同道碩・櫛橋彌五三・高橋平左衞門・三宅與五郎・小野權左衞門・砥堀孫太夫、侍大將十人、手の者九十六人、一度に取つて返し、散散に戰ひしが、一人も殘らず討死せり。爰に淡河彈正は、今日の軍に手痛く當つて、主從五騎に打なされ、何れも深手數多負ひければ、細道にかゝり落行きけるを、敵廿

騎計、跡を慕うて追掛けたり。彈正いひけるは、我々此體にては、當の敵に打合ふ事もなるまじ。いざや敵をたばかりて、冥途の供をさせんと、五人芝居に座して刀を拔き、刺違ふまねして伏しにける。敵十四五騎馬より飛下り、我先に首を取らんと走り掛るを、近々と寄せて、拔置きたる太刀を取り、伏しながら切拂へば、五人何れも諸膝ながれて、尻居に𣦸と座りける。其時五人かつぱと起き、仰天したる者共を、四方へばつと追散らし、面白し心よしと高聲に打笑ひ、五人の首を打落し、面々の膝の下にひつしき、腹搔切つてぞ伏しにける。天晴大剛の者共かな。如何なる武士ぞ、名を知らばやと尋ぬるに、母衣掛けたる武者一人あり。之を見れば母衣の裏絹に、村上源氏具平親王廿三代の孫、淡河彈正定範と書付けゝる。扨は先日淡河の城にての働、今の討死、誠に無雙の勇士なりと、各是を感じける。秀吉敵の引返し〳〵戰ふ體を見、馬廻二三百一所に打寄せ、馬印を立置き、其身は四方を乘廻し、扨馬印に殘らず引けと下知をなし、大軍を一所に集め、勝鬨を上げ、靜に本陣へ引取らる。其日三木方の大將分七十三人、侍雜兵都合八百四人討死す。痛手負ふ者は數を知らず。

此合戰に打負けて、三木方彌氣を失ひ、重ねて戰ふべき便ぞなかりける。

三木城兵糧攻の事

秀吉、大村の合戰に大利を得、其より三木の城へ仕寄り、漸々に附寄せ、南は八幡山、西は平田、北は長屋、東は大塚迄打圍み、向城と敵城の間、僅に五六町計なり。塀の高さ一丈餘二重に塗上げ、其間に石を入れ、掻楯を突き並べ、栖樓を高く上げ、逆茂木を引き柵を振り、城門の面には大綱を張り、亂杭を打ち大石を並べ、後には軍勢の陣屋を作り雙べ、辻々に木戸を立て番を据ゑ、人の通りを改め、夜は處々に大篝を焼かせ、夜廻隙なく廻りける。又秀吉、近習の侍を六番に分けて、三百人宛、役所に名氏を書付け、組頭の判形を取り、少しも油斷なく相勤むべしと定めらる。案の如く早十餘日、食を斷ちし事なれば、初の程は糟糠を食ひ、雞犬を殺せしが、次第に食乏しく、鼠を掘り、諸將の乘馬を殺し食ふに至りければ、軍勢も力弱く、堀下塀の陰に伏倒るゝ計なり。秀吉城中の烟の立ち樣、雲氣の位を能く察し、城中の弱りを見定め、

天正八年正月六日、宮の上の要害を、馬廻の侍迄にて乘取り、其日又仕寄を城際三町に逼らせ、同十一日、南の構に人數を付け、山下を放火し、秀吉・秀長兩大將にて、彥之進が鷹尾の城、山城守が新城に攻入れば、城兵衰へ果てたる有樣にて、鎧は重くして着すべき力なければ、素肌に諸肩脫ぎ、若侍三百計り、切先を揃へて切つて出づる。其勢天晴けなげに見ゆれども、勇むは心計りにて、手足働かざれば、思ふ儘に戰はず。爰彼にて切伏せらる。哀なりし有樣なり。老武者は、雜兵の手に懸らん事を恥ぢ、大手の木戶を開き、各一面に座して、三十八人一度に腹をぞ切つたりける。秀吉首共一々に實檢して、詰の城へぞ押寄せらる。

長治・友之自害并辭世の歌の事

三木城十四代の守護、別所小三郞長治、舍弟彥之進友之に向つていはるゝは、城中已に糧盡きて、士卒兵を取るに力なし。此城の危き事腐索の如し。誠に楚の項羽が山を拔きし力も、終には呂馬童に首を授け、新田義貞の、世に獨步せし勇將、流矢の爲

に命を殞す。皆是天運遁るゝ所なし。然れば衰兵を以て愁の軍して、屍を雜兵の馬蹄にかけんより、城中にて自害し、怨を泉下に報せんと思ふなり。然れども事を敵に告げて、是迄義を守つて、我に組せし士卒の命を助くべし。其方一封の書を認められ、秀吉の方へ送るべし。其趣は、我々兄弟山城守自殺すべし。殘兵奴婢悉く助命せらるべきとの儀なり。則彥之進書札を調へ、近習の侍宇野右衞門佐に持たせ、淺野彌兵衞方へ遣しける。淺野之を請取り使者を伴ひ、秀吉の本陣に行き、使者をば遠侍所に殘し、彌兵衞一封の書簡を差上ぐる。之を披けば、其詞に曰、

唯今申入意趣者、去々年以來敵戰之事、雖レ非レ無二其故一、今更不レ能レ達二素意一。併時節到來運已極、何噬レ臍哉。長治・賀相・友之等、來十七日申刻欲二切腹一。殘兵雜人以下、無レ科悉被レ刎レ首者不仁之至也。若以二憐愍一於レ被レ助レ命、則我々之喜悅何事加レ之哉。此旨宜レ預二披露一者也。

天正八年正月十五日　別所小三郎長治

淺野彌兵衞殿

秀吉暫く目を閉ぢ頭を低れ、思案の體に見えけるが、則彌兵衞に命じ、急ぎ樽肴用意せよとて、柳樽廿荷色々の肴十荷人夫に持たせ、返簡を相添へ、使者に渡して歸しける。　返書の詞に曰、

書札令披見候。誠自籠城之始至于今毎度合戰、無謂一而不當利。雖失勝利更不可謂怯。已知運命之所以極。來十七日申刻、長治・友之・賀相被遂自殺、殘兵雜人等被助命度之旨、實良將愛士之道、感其仁心落涙候畢。右三人於切腹則殘卒奴婢助命之事、有相違間敷者也。猶從淺野彌兵衞方委細可申述也。謹言。

正月十五日　　羽柴筑前守秀吉

別所小三郎殿　御報

明くれば十六日の早朝に、諸士殘らず召寄せ、長治座を起つて近く寄りていへるは、去天正六年三月上旬より當年迄、堅固に城を持固めし事、武勇に達し義を守れる面面、名を重んずる故なり。　然れども運命極まつて、城中糧盡きぬる上は、力及ばざる次第なり。　然れば軍の勝負を見果つる迄もなく、明十七日申刻、長治兄弟山城守自

害を遂ぐべき間、殘る士卒雜人の命を助けられ候へと、秀吉方へいひ遣す處、相違あるまじきとの返簡、殊に秀吉情ありて、美酒佳肴を送られたりと、士卒に悉く配分すれば、誠に同流一篁の醪是なりと、各涕を流して頂戴す。扨長治は名殘の酒讌を張り、今生の樂を極めける。十七日には長治夙に起き、身を洗ひ髮を梳り香を燒き、簾中に入りぬれば、山城守の北の方、長治を見参らせ、世は早是迄に候かと、守刀を拔きて、二人の男子一人の女子を刺殺し、自ら其刀を口に啣へて、俯にぞ伏されける。長治も三歲の男子を一刀に刺通し、北の方友之の内室諸共に刺殺し、蔀遣戸を打碎き大庭に積ませ、七人の屍を一所に火葬し、兄弟打連れ、三間の客殿に出で、乳夫の三宅治忠を召して、山城守へ、兼日定めし生害、只今なりと申送りければ、賀相いへるは、我々三人自殺し、士卒の命を助けん事心得ず。只城に火をかけ、一所に切つて出で討死すべしとて、已に櫓に火をさす處を、從者怒つて、一人の不所存にて、多くの人を殺さんやと、終に賀相を討つてぞ出しける。長治・友之此由を聞屆け、心閑に切腹す。治忠兩人を介錯し、其刀を取直し、腹搔切つて伏しにける。

別所長治友之自殺

辭世の和歌

今はたゝ恨もあらじ諸人の命にかはる我が身とおもへば　長　治生年廿三

同　友　之生年廿一

命をも惜まざりけりあづさ弓末の代までの名を思ふ身は

同　治　忠

君なくば憂身の命何かせん殘りてかひのある世なりとも

翌日十八日、城門を開いて助命せらる。三人の首は京都へ上せける。其より秀吉三木城に移り、地を清め堀を浚へ、今度退散の人民を呼返しぬれば、俄に人家數千軒、繁昌の地となりぬる由、鐵入齋委細に始終を語れば、元親熟と打聞きて、凡そ合戰の勝負は、運に依るとはいひながら、當時秀吉の軍法、皆機に臨んで變に應ず。其鋒先に向ふ者あるべからずと感歎し、鐵入齋に酒を進め、笑談深更に及びぬれば、鐵入齋も御暇給はり席を立ち、元親も常の寢所に入りにけり。

四國軍記卷第九終

四國軍記卷第十

依岡京都より歸る事附光秀反逆の事

長曾我部元親は、四國の軍段々勝利を得、悉く平均せしかば、此旨を織田信長公へ訴へ、愈疎意なく親みをなさん爲め、依岡左京進を上京せしめし處に、不慮に信長父子、惟任光秀が爲に弑せられ、光秀又秀吉に討たれぬ。依岡其反逆の始終を委細に尋ね問ひ、一卷に書き記し、急ぎ土州に歸りて元親へ言上す。元親大きに驚き、先達つて其風聞あれども、正說不審く思ひしなり。先づ軍の日記を見るべしとて之を披けば、其記に曰、

羽柴筑前守秀吉、備中より飛檄を馳せて、信長へ言つて曰く、高松の城無雙の要害故、急に落去し難きを察し、城邊三里の間に堤を築き、河水谷水を沃へ入れしかば、堤水

秀吉、信長に援兵を乞ふ

漫々滔々として、水漸く城に及ぶ。亡滅殆ど近きにあり。然る處に毛利右馬頭輝元、功臣吉川・小早川・宍戸・志呂・堅田・益田・粟屋等を大將として、十萬餘の兵を牽して、高松の城を來り救ふ。早く援兵を賜はるべし。然らば高松を圍ましめ、秀吉、輝元が兵を擊破らば、功頃刻にあらんと注進す。信長公此旨を聞召し、其儀ならば、自身出馬なくては叶ふまじ。去ながら大軍を催すの間、日限遲滯に及ぶべし。先づ前驅の兵を遣すべしとて、觸れられける人々には、筒井順慶・池田紀伊守信輝・同三左衞門輝政・長岡兵部大輔藤孝・同與一郎忠興・同頓九郎・惟任日向守光秀・中川瀨兵衞清秀・堀久太郎・高山右近・安部仁右衞門・鹽川伯耆守・同吉太夫、右十三頭急ぎ用意を致し、來月朔日二日に居住を立つて、中國へ發向し、萬づ秀吉が指圖を受くべきなり。信長公・信忠卿は、五七日中に京都迄御出馬あつて、諸軍勢を集め、來月八日に京都を出陣し、中國へ下向あるべき者なりとぞ書かれける。惟任が郎等共、此觸狀を見て、大に憤つて申しけるは、已に當家は一方の大將として、京極・朽木を始め、宗徒の人人十八人、組下にある處なり。然るに此觸狀に、端書の謂もなく、日向守を牛に載せ

らるゝ事、無法の儀に非ずや。其上秀吉が指圖を受くべしなどとある事、旁以て無念の至なり。今度大名御馳走の役も、故なうして召上げらるゝ條、萬に付け生涯の恥辱とこそ存候へと、各齒噛してぞ恚(ふつく)みける。光秀、家來共の欝憤の樣を聞きて、實(げに)實(げに)汝等が申す通り、先年日本國を征伐せらるべき大將を定めらるゝに、北陸道をば柴田修理亮、東山道は瀧川左近將監、東海道は徳川殿、南海道は佐久間右衞門、山陽道は羽柴筑前守、山陰道幷筑紫をば、某と丹羽五郎左衞門に仰付けらる。之に因つて丹羽をば惟住、明智を惟任と改めらる。然るに某但馬國征伐の事、度々願ひしかども、終に御許容之なくして、山陽・山陰へ羽柴進發する條更に心得ず。夫のみならず先日より以來、恨を含む事多しと雖も、古語にも雖二君不レ爲レ君不レ可三臣以不レ爲レ臣といへり。必ず左樣に恨み申すべきに非ずとて、即觸狀に判形を印し、先々へぞ送りける。然る處に青山與三を上使として、惟任日向守に、出雲・石見を賜はるとの儀なり。光秀謹んで上意の趣承りしに、青山申しけるは、兩國御拜領、誠に以て目出度存候。去ながら丹波・近江は召上げらるゝの由、いひ捨てゝぞ歸りける。爰に於て

光秀、家の子郎等共を近付け、是は如何なる上意ぞや。出雲・石見は未だ敵國にして、勝負計り難し。其中に舊領丹波・近江を召上げらるゝに於ては、妻子眷屬、暫も身を置くべき處なし。殊に毛利輝元は、安藝・備後・備中・周防・長門・豐前・筑前・因幡・伯耆・出雲・石見・隱岐已上十二ヶ國、先祖より持來る大敵なれば、容易く攻破り難し。いかがせんといひければ、人々承り、仰の如く丹波・近江をば召上げられ、雲石の二州は、敵の有にして治め難し。さあらば何國に於て身を入るべき。沖にも出でず、磯へも寄らず、所々に屍を曝さん事、口惜き次第なり。昨日の觸狀の體、先日大名御馳走の儀も、敢なく取放されぬ。今日の上意の趣、何彼に付けて欝念之に過ぎず存ずるなり。佐久間右衛門・林佐渡守・荒木攝津守、其外の輩滅亡せし如く、當家も亡さるべき御所存の程、鏡にかけて相見え候。前車の覆るを見て、後車何ぞ恐れざらんや。彼方より其色立之なき以前に、謀叛の儀、是非に思召立たせ給ふべしと、恐れる眼に涙を浮めてぞ申しける。其者共には、明智左馬助・同治右衛門・同十郎左衛門・妻木主計頭・藤田傳五・四王天但馬守・並河掃部・村上和泉守・奥田左衛門・三宅藤兵衛・今峯頼母・

溝尾庄兵衞・進士作左衞門、以上十三人とぞ聞えける。日向守は、默然として座せられけるが、此時人々に向つて申しけるは、只今各の忠言は、千顆萬顆の珠より重く、一入再入の紅より、尙深しとこそ覺え候へ。抑我等事は、身こそ賤しと雖も、源家累代の嫡流、土岐伯耆守賴淸が後胤として、數代濃州明智に在住せしが、弘治の頃より永祿九年の冬迄は、越前にありしを、信長頻に招かれしに付、則岐阜に赴き、夫より武功を勵み、只今兩國を知行せり。元龜二年には、各が働に依つて、西近江を討從へぬ。天正三年に丹波の國を治むべき由に付きて、彼國へ發向し粉骨を盡し、數ヶ年の間屈戰して、終に丹州を手に入れき。織田家に來つて十七年になりぬれども、强ひて信長の譜代恩顧といふには非ず。尤も君恩とはいひ乍ら、又さのみ君恩と謂ふにも非ざるべし。只武勇の鋒先を以て、軍功ある故なり。誠に晝夜安堵に住まずして今日に至りぬ。且又織田殿、新府より古府に御動座ありける時、稻葉一哲に宣ひけるは、汝今度伊奈郡の刻、一忠節も之なき事如何なりと御尋ありければ、一哲齋赤面の體にて申しけるは、某甲羽翼の臣齋藤內藏助・那波和泉守と申す者共、少しの儀に

付、去々年の夏缺落仕り、惟任日向守が許へ罷越し候を、漸那波一人召返し候。斯樣の混亂により、家中しまり兼ね、至剛の志も無になり候とぞ答へける。其に付信長公、先月五日某甲を召して、今度汝が軍用を見るに、半役にして、丹波勢五千餘騎召連れ、人馬の裝束も一際奇麗を盡せり。尤忠勤なさる事なれども、大和・河內・丹後、其外遠國の輩、人數三分が一引具したり。汝諸士に抽んずる條謂れざる儀なり。將又稻葉一哲齋が郎等齋藤內藏助を、計略を以て汝が手前に呼取り、高知を與へ抱ゆるの由聞く處なり。さやうにては、稻葉如きの小身の族は、能者持つべきやうなし。重々不屆千萬の男にあらずやと、自身握拳を以て、三つ四つ面を打たせらるゝ。斯る無禮の仰を蒙りしか共、一旦主從の禮儀を思ひ退出す。又去十八日登城の節も、無禮の儀を仰せられて、御前なる小扈從四五人立懸り、扇を以て某甲が頭を打ちける其中に、森蘭丸も座席を立ちて、鐵の要の扇を持ちて、したゝかに打ちければ、頂上破れて血流れ落ちけるを、信長公御覽じ、罷立てよとあれば、卽ち退出申す。次の間に、緣者なりける長岡兵部大輔藤孝在合ひけるが、御廣間の傍へ招きて申されけ

るは、叢蘭欲レ茂秋風破レ之、王者欲レ明讒臣闇レ之といへり。唯今森蘭丸が讒たらくを見るに、內々人の語るに思ひ合せ候ひき。彼者の亡父森三左衞門尉は、西近江宇佐山にて討死す。今貴方其地を領じ給へば、光秀之なきならば、父が落命の地申立てて管領せばやと、心中に深く思ひける由、承及び候と告げたりしも、大行不レ顧二細謹一といふ事あれば、思ひ沈めて歸りけるに、殊に今斯る難題を仰懸けらるに付きては、當家の滅亡時節到來、是非に及ばざる次第なり。さあらば當月下旬には、信長・信忠諸共に、上洛あるべしと聞くなれば、思ひ知らせ申すべし。然らば急ぎ坂本・龜山に立越え、殘る舊功の輩にも言聞かせ、謀を廻らすべし。必ず旁隱密たるべしとて、翌日安土を發足の刻、日來數寄の道とて、

　心知らぬ人は何ともいはゞいへ身をも惜まじ名をも惜まじ

斯樣に詠じて、坂本の城へ赴きける。憤心の程こそ至極なれ。去程に日向守は、居城坂本へ歸着し、則明智長閑齋・三宅式部・奥田宮內・山本山入・伊勢與三郎・諏訪飛驒守・齋藤內藏助・村越三十郎を召寄せつゝ、光秀密に申しけるは、今度某甲に、雲石の

兩國宛行なはるゝ旨上意なれば、彌大身になりたるやうには聞えあれども、更に實儀にあらず。內々丹波・近江は召上げらるべき由に之ある間、浮沈爰に究りたりと思ふなりとて、安土にて難儀に逢ひし事、其外面目を失ひし事共、委しく語りければ、面々承り、兎角の答も申さず、落涙のみに見えける中に、諏訪飛驒守盛長・伊勢與三郎貞仲、此等の輩進み出でて申しけるは、君見ずや松永久秀・荒木村重・林光豐・伊賀範俊・闕盛信・雲林院祐基・佐久間信盛、此外逸見・畠山以下數を知らず、何れも武勇智謀を備へたる人々なりしかども、或は誅戮せられ、又は追放せられて身を苦しめ、一門家來の者迄も牢浪の體、歷然の事に候。然れば我々共の身の上に迫り來れりと覺え候間、今は何の御思慮にも及ばず、一筋に御謀叛を企てられ、臣等が憤を散じ、且は御積欝をも晴らし給ふべきなりと、詞を放つて申しける。其時左馬助・藤田傳五など申しけるは、只今兩人の諫言は、吾等に於て大悅之に過ぎず候なり。此事安土にて、某甲も申上げて候。さあれば一致の思はく、誠に以て舊友、二世かけての契ならんとて、淚を流し喜びける。光秀斜ならず悅び、面々忠貞の程、言葉にも盡し難し。

然らば左馬助・治右衞門・但馬・掃部以下丹州の輩は、急ぎ歸國せしめ、荒木山城守・隱岐五郎兵衞に竊に言聞かせ、其外の者共には、雲石の拜領地へ向ふべき支度し、來る晦日に龜山に馳參るべき由相觸れよと、前後の計略言含め、廿四日の終夜、丹波の國へぞ歸りける。去程に信長公、諸將に下知し給ひけるは、中國へ向ふに付、各用意の御暇下さるゝの間、來る六月五日六日頃に、京都に參上せしむべしとぞ觸れられける。偖信長公は、湯淺甚助・森蘭丸・金森義入齋など、近習の人々二百騎計にて上洛あり、本能寺に着御なる。城之介殿は、齋藤新五・毛利新助・菅谷九右衞門・福富平左衞門・團平八を先として、三百餘騎を引率し、岐阜より上洛ありて、二條の城に入り給ふ。信忠卿の御舍弟織田源三郎勝長は、津田又重郎・同勘七以下の一族達を相催し、尾州犬山の居城を立ちて同じく京着し、妙覺寺に寄宿せられ、諸將の參向をぞ待たれける。斯くて惟任日向守光秀は、同廿七日三千騎を帥ゐて坂本を進發し、白川越に掛り、帝都には入らずして、西の京を過ぎて、嵯峨の釋迦堂に至り、爰にて暫く馬を留め、諸軍勢に向ひ申しけるは、我れ聊か寄願の事あるにより、愛宕山に詣で通夜せ

しめ、明日丹州に行くべきなり。汝等は是より唐櫃越を歴え、又は大江山に懸り、龜山に參着すべし。前日より彼の道筋を、里人に賂を與へ、竹木を拂ひ路次を廣く作らせたるぞ。道狹き處あらば、能きやうに沙汰すべしとぞ下知せられける。奥田・宮內・村上和泉守委細に承り、士卒を召連れ兩道より、龜山にぞ越えにける。
偖夫より光秀は、愛宕山に攀上れば、森々たる雄峯、涼々たる淸風、心も澄みて潔し。神前に至り、數の丹誠事終りければ、則ち西の坊に一宿し、內々京都より、彼道の達人を召寄せ、百韻の連歌をぞ催しける。

時は今天が下しる五月哉　光秀
水上まさる庭の夏山　行祐
花落つる池の流れを堰とめて　紹巴
風は霞の吹送る暮れ　宥源
春も猶かねの響や寒ぬらん　昌叱
片しく袖は有明の霜　心前

うら枯になりぬる草の枕して　　兼如
聞馴にたる野邊の松虫　　行澄

以下之を略す。光秀元より土岐の苗裔なれば、名字を時節に準へ、又今度本望を達せば、自ら天下を知るの心を含めり。擧句の體も爾の如し。誠に大事を心中に思ひ立たれし刻、斯る秀逸の句をせられける、勇才の程、後にぞ思ひ合せける。折節の短夜、早明方になりければ、日向守各に暇乞し、廿八日の早旦に、丹波國龜山にぞ赴きける。旣に龜山に至りけるに、子息十兵衛光慶は、先日より甚しき瘧疾を相煩ふに付きて、比田帶刀・松田太郎左衛門・御牧三左衛門・柴田源左衛門・池田織部・尾石與三・中澤豐後守を近付けて申しけるは、面々が忠貞某甲能く知る處なれば、萬事を包まずいひ談ずる者なりとて、安土にての品々、具に語りしかば、何れも承り、誠に短慮の御所存も候はゞ、我々共所々に露命を失はん事、疑なく候處に、今迄御堪忍の段、重々の君恩にこそと喜びける。然る所に光秀安土を進發せしより、岐阜・安土・京都に入置きける間者の者共、龜山に參じて申しけるは、偖も信長御父子、近習計を召連

れられ、廿九日の辰の刻上洛坐して、信長公は本能寺、信忠卿は二條の城に御着座の旨をぞ告げたりける。斯くて晦日には、光秀持國の兵共、我れ劣らじと馳參じければ、近江勢と諸共に、龜山の城下に居餘りて、近邊の里々迄、宿らぬ處もなく、着到の面を算ふれば、都合一萬七百餘騎とぞ記しける。翌くれば六月朔日、中國へ發足する勢揃と號して、申の刻に至り、日向守能條畑に打出で、水色の旗を押立て、軍勢の手組あつて三手に分つ。一手は明智左馬助・四王天但馬守・村上和泉守・妻木主計・三宅式部、一手は明智治右衞門・藤田傳五・並河掃部助・伊勢與三郎・松田太郎左衞門なり。光秀は明智十郎左衞門・荒木山城守・諏訪飛驒守・奧田宮內・御牧三左衞門を先として、酉の下刻計り、保津宿より山中に懸り、水尾の陵を餘處になし、兼て作らせ置きたる尾傳の道を凌ぎ、嵯峨野の邊に打つて出で、衣笠山の麓なる地藏院迄着陣す。左馬助は本道を經て、大江坂を過ぎ、桂の里に打越ゆる。治右衞門は王子村より、唐櫃越の嶮難を經て、松尾の山田村を通り、本陣近くぞ寄せ合せける。諸軍勢此有樣を見て、中國への出陣は、播磨路にこそ赴くべき處に、只今の上洛は、不審多き事な

りとて、武頭の前に來りて、其樣を尋ねしかば、是迄も偷計略を押密し、態と僞りて、織田殿の仰には、路次の程回りなれども、當手武者押の次第、京都に於て御見物あるべきに付、一先上洛すると聞及びしなりといひければ、諸軍實にもと思ひつゝ、何心なく終夜駒を早めて、都近くぞ馳せたりける。途ある所にて、光秀諸軍に下知しけるは、各兵糧を使ひ武具を固めよ。敵は本能寺と二條の城にあり、攻討つべしと沙汰しければ、偖こそ野心の思立と、諸軍爰にて知つたりける。斯くて面々小荷駄を招き、兵糧支度の體、穩便ならずと雖も、曾て外へは知らざりける、智謀の程こそ淺からね。

光秀本能寺へ押寄す

去程に翌くれば二日の曙に、明智左馬助光春を侍大將として、其勢三千五百餘騎、本能寺の館を百重千重に取巻きけり。又明智治右衞門光忠大將として、軍兵四千餘騎、二條の城、同じく妙覺寺を取圍みたり。總大將日向守光秀は、諸軍の命を司りて、二千餘騎を隨へ、三條堀川に控へたり。斯くて本能寺方には、是を夢にも知らざりけるにや、夜既に明けにけりとて、漸く總門の扉を啓ける頃ほひなりしに、敵門外近く進み來り、鐵炮を打かけ、門の開くるを幸と、一度に突と攻めて入る。此節

御內の兵僅九十餘人ありける其中にも、森蘭丸長康、門前に夥しく人馬の音しければ、鶴丸付きたる緇梅の帷子を着し太刀提げ、奥の方より表の椽行へ立出でて、抑上の是に御座ある處なるに、何者なれば斯る狼藉を致すぞと、高聲に呼ばはりける。寄手には三宅孫重郎・四王天又兵衞・藁地甚九郎と、聲々に呼ばはつて、眞先に突いて入り、三宅と藁地は、御內の馬屋矢代庄助・伴太郎左衞門と相戰ひ、四王天は、彼長康を目がけ切つて懸る。蘭丸是を見て、偖は野心の輩にこそあれとて、打物の鞘を放し、火を散らして戰ひしが、終に叶はで討たれにけり。其時寄手の大勢、四方より火矢を射込み、隙間もなく攻入りける。寺內には湯淺甚助・金森義入を始めて、思ひ寄らざる事なれば、物具を固むる隙もなく、素肌に取太刀して、込入る敵に渡し合ひ、思思に討死す。湯淺甚助助俊は、進士六郎太夫貞則と引組み、刺違へてぞ臥しにける。信長公は、中の亭迄出でさせ給ひ、敵は誰とか聞きつると御尋ありしかば、飯川宮松・小川愛平(よしひら)承り、惟任日向守反逆の旨を言上しければ、織田殿聞召し、偖は兵術叶ふまじきぞ。急ぎ殿に火をかけよ。淸く自害すべきなり。但し女は苦しかるまじけれ

信長討たる

ば、何とぞ退き候へとの御意により、女房達上下廿餘人は、泉水の中へ飛浸り、裳を濕らして、甲斐なき命を助かりける。今日如何なる日ぞや。天正十年壬午六月二日卯の中刻に及びて、君を始め奉り、當所にて命を失ひける輩には、金森義入・湯淺甚助・森蘭丸・小川愛平・飯川宮松・柏原鍋丸・久久利龜松・小倉松壽丸・高橋虎松・薄田與五郎・伊藤彥作・高木孫太郎・大塚又市・筒井作右衞門・中根市之丞・中尾源太郎・伊丹甚兵衞・落合小八・青柳勘太郎・平尾平助已下、或は討たれ又は自害して、名のみ計りぞ殘りける。偖又明智治右衞門已下は、二條の要害、同妙覺寺並に京都の所司代村井長門入道春長が堀川の館などを遠卷して、尺地を餘さず、本能寺を隔てしが、信長公を討亡し、勝閧嚔と擧げけるを聞いて、信長公の四男織田源三郎勝長・其叔父津田又十郎長利・村井春長軒幷勝龍寺の城代猪子兵助等は、秋田城之助信忠卿の御座す二條の城へ馳入りけり。斯くて寄手の軍勢、城の四面を取圍んで、嚴しく是を攻めしかども、本能寺歿落を見てより、迚も遁れぬ命の程を察して、楯籠る兵五百餘人、弓鐵炮を揃へ防ぎ戰ふに由つて、中々一旦には、攻落すべきやうもなきに、剩へ寄手の大

將明智治右衞門、鐵炮に當つて深手を負ひ、半死半生の體なれば、彌攻倦んでぞ見えにける。總大將光秀此由を聞いて、四王天但馬守政孝を呼んで、內々大津・山科・宇治・伏見・淀・唐橋・八瀨・鞍馬・鷹峯其外の處迄後攻の用心に、兵餘多遣すと雖も、今日中に此城を落さずして夜に入る程ならば、由々しき大事なるべし。其方何とぞ計略を回らし、敵を一時に拉ぐやうに計るべしといひければ、政孝承り、誠に忠は、命を惜まずとこそ申傳へて候へ。譬ひ惡鬼神が籠りたる鐵城なりとも、身を拋つ程ならば、一方などか打破らでは候べきとて、三百餘騎の手の者共を招いて、今日の合戰、俄に出で來るにてもなし。內々命を捨つべき覺悟定めし事ぞ。此城を落さずんば、何を以て口を開かん、命を捨てゝ攻落し、恩賞に預かれ者共と諸軍を勇め、追手を指して向ひける。是を見て今峯賴母・尾石與三・藤田藤八・中澤造酒之助等も、但馬守に押續き、我劣らじと攻寄せたり。其時城兵東の門を押啓き、拔連れて打つて出で、敵味方互に鋒長刀を入亂し、挑み戰ふ中にも、寄手の輩四王天を始め、思切つたる勇士共、死を一擧に究め、無二無三に攻戰ひしかば、城中の兵猛しとはいひ乍ら、次第しさり

と思ひ、比田帶刀・三宅式部に私く。兩人驚きて、急ぎ光秀の前へ伺候し、樣子を見合せ申しけるは、御所存の儀、如何樣の御覺悟にや候らん。古より今に至る迄、無道の君を弑せし事、和漢共に其例多し。異國の殷の湯は、夏の桀王を討ち、周の武王は殷の紂王を亡す。吾朝には蘇我馬子の大臣は、崇峻天皇を弑し、北條權太夫義時は、賴家卿を害せしむ。さあれば强ちに、御意に懸けらるべきにあらず。總じて武士の道は、不義の敵を討捕るを以て、至剛智謀の勇士とこそ、申傳へて候へ。此上は御身を全うして、一日なりとも都に御旗を立てられ、天下安全の御仕置を仰出され候はば、今生の威光末世の名聞、冥途の訴にもなるべき儀に候と申上げける所へ、古老元臣の者共追々に來りて、一向諫言數度に及びしかば、光秀當然の理に服し、其儀ならば一先づ政務を執行ふべしとぞ定めける。夫より諸緣ある國々へ、使節を以て按撫し、一味同心を賴むべき由言送りけれども、謀叛人と稱する輩に組せん事、本意に非ずとて、從ふ者もなかりける。光秀が運の末こそうたてけれ。去程に日向守、今度の軍功の輩に、恩賞なくては叶ふまじと、信長公の貯へ置き給ひし金銀財寶を取寄

せ、家來の者に分與し、其外洛中洛外の地下人等にも金銀を下行し、所司代として、三宅式部秀朝を据ゑ置き、町中の地子錢も、永代免除せしむる由沙汰せられしかば、京都の者共大に喜び、其恩澤に誇りけり。既に日向守帝都に旗を擧げ、勝龍寺の城に三宅藤兵衞、淀の城番頭大炊介、伏見に池田織部、宇治に奥田庄太夫を差置き、洛中洛外の仕置等、嚴重に執行ひ、制法頗る廉直なりしかば、畿内近國より馳上り、附從ひける輩、一日に五十騎卅騎、或は百騎二百騎打連れて、雲霞の如く來り集まりける間、日向守大に悅び、面々に對面して、則ち諸手の軍例をぞ定めける。斯くて六月十日、久我宰相吉通卿に付きて、禁中に奏聞致しけるは、光秀不肖の身乍ら、一度京都の執權として、利世安民の志の外他事なく候。されば事新しく候得共、何に寄らず天意に隨ひ奉るべき旨を奏し上げて、卽參内をぞ免されける。然る處に羽柴筑前守秀吉は、中國の軍和順に付、夜を日に繼いで馳せ上り、神戸三七殿と會合し、信長敢なく逆臣の爲に討たれさせ給ふ上は、片時も早く弔合戰の用意あるべきとて、攝州尼崎迄着陣あるの旨、上方へも聞えしかば、光秀聞きて、永々と敵を帝都に引受け

ては叶ふまじ。則領分の境山崎へ出張して、向ひ合せて雌雄を決すべしと、諸軍勢の手分あり。一番の中備は、明智光近を大將として、其勢二千七百餘騎、右備は藤田行政を始として、究竟の兵二千餘騎、山の手へ向ひける。光秀旗本五千餘騎、都合其勢一萬八千二百餘騎なり。又攝州より攻上る輩には、中川瀨兵衞・高山右近・安部仁右衞門・鹽川伯耆守等千五百餘騎を一隊とす。堀久太郎千五百餘騎、池田信輝入道父子三千餘騎、丹羽長秀三千餘騎、神戸三七信孝四千餘騎、蜂谷出羽守千騎、其次羽柴筑前守一萬三千餘騎、都合二萬七千餘騎、其外秀吉の一族を始め、譜代の郎等已下、一勢々々引きも切らず、山崎指して馳向ふ。其時秀吉、足輕大將の堀尾茂助を呼んで申されけるは、明日の軍、手合の始なれば、等閑の軍して、若しも勝利を得ざる時は、後の呼當手の敗れ、旁以て專一の處なり。熟軍慮を廻らすに、山崎の上なる天王山を取しく程ならば、勝利あるべしと思ふなり。然れば汝鐵炮の者を召連れ、急ぎ彼地へ馳上り、敵を直下(みおろ)し合戰すべし。光秀元來武功の者なり。先づ天王山を取らんとすべし。遲き時は敵の有とならん。先んずる時は人を制するに利あり。急げ

急げと下知せられける。去程に明智光秀、十二日夜半計り、松田太郞左衞門に下知しけるは、汝案内者なれば、急ぎ天王山に登り、山崎を見下して備を立て、敵寄せ來らば、弓鐵炮を打懸けよ。必ず混亂すべし。初度の手合に、敵の魂を拉がば、味方の勝利疑あるべからずといへば、松田承り、卽武者大將並河掃部介に相斷り、弓鐵炮三百挺、手勢合せて七百餘騎、其夜も未だ明けざるに、天王山へ攀上り、峠へは今一町もあらんと思しき處に、南方より堀尾茂助、鐵炮の者二三十人召連れ、早く峠に駈上り、頻に鐵炮打下す。松田が軍勢、是に少しも怯まばこそ、一散に駈上り、敵間已に刄を打違ふる程になりける處に、迸る鐵炮蝗の飛ぶが如く、松田を目がけ放ちければ、太郞左衞門が運や究まりけん、胸板にはつしと中れば、眞逆に打倒れ、響と共に死んだりける。其手の兵共色を失ひ、しどろになつて引退く。敵方には追々鐵炮重なり、堀久太郞秀政も競ひ上り、堀尾に力を添へ、一度に噇と鬨聲を揚げ、驀地闇に切つて下りしかば、松田が兵、大將は討たれつ、臆病氣の付きたる都勢、一支も支へず崩れ亂れて、散々にぞ落行きける。其頃京都の町人共、日向守の厚恩を悅び、十三日の早

朝、今日の軍祝はんとて、二三百人打連れて、酒肴色々の菓子共引繕ひ、光秀の陣に來りけるが、天王山の戰、敗北の體を見て、足手纏になつては如何とや思ひけん、引返して歸りけるを、南方の敵勢は、明智が備へ裏崩しける樣に見なしつゝ、總軍勢勇み進んで、明智が陣に攻懸る。山の手へは堀久太郎を始め、淺野左京・生駒雅樂助・大谷刑部・木村隼人抔、透間もなく切つて懸りしかば、明智方には、松田討たれしより氣を墮し、勇む心もなかりしに、威ひ懸りし南方勢、一陣二陣突いて入りしかば、悉く敗亂しける故、並河易家一足も引かず討死す。されば丹波武士並に山本山入・諏訪飛驒守などは、公方家の士なりしが、將軍滅亡の後は明智に順ひ、僅の年月なりしかども、光秀が情の程や深かりけん、斯樣になり果てぬる事、爲君一日恩妾誤百年身とは、斯る事をや謂つべし。其外究竟の者共五百餘人、枕を雙べて討たれける。此折しも南風頻に吹いて、寄手の馬烟夥しく、京都の上に覆ひける、軍の凶こそ不思議なれ。愈敵味方入亂れて挑み戰ふ。鐵炮矢叫の聲、百千萬の雷の震ふが如く、大山も崩れ蒼海も埋れ、坤軸も折れて地に沈むかと覺えたり。魚鱗に進み鶴翼に備へ、

前後に當り左右に支へ、義を重んじ命を輕んずる敵味方の兵共、安否を一時に定め、剛臆を累代に殘すべき合戰なれば、親討たるれども扶けず、子は乘越えて前なる敵に懸り、主射落さるれども引起さず、引組んで勝負をするもあり、又は刺違へて共に死するもあり、何れ剛臆は見えざりけれども、寄手聊利に乘つて、上方勢を數度追卷る。京勢も爰を破られては、一足も引入るべき所なしと、敗軍を勇め、七八度迄取つて返し戰ひしかば、光秀が宗徒の兵、爰彼にて討死す。御牧兼顯は本陣に使を以て、今日の軍是迄とこそ存じ候へ。我等兄弟討死仕る隙に、何方へも御引取あるべく候といひ遣し、討殘されたる手勢二百餘騎にて、勝誇りたる南方勢の中央へ切つて入り、暫支へ戰ひしが、一人も殘らず討死す。總じて當場討死の兵は、明智が一族を先として、股肱の舊臣千二百五十餘騎、雜兵合せて三千餘人、馬蹄に屍を晒しけるこそ無慙なれ。大將光秀は、尙是迄も、本陣帷幕の內にあつて床机に腰をかけ、軍の下知したりしが、御牧が使節を以て訴へければ、今は某甲（それがし）一戰して、萬卒の報恩に謝せんものをと、馬引寄せ乘らんとせしを、比田帶刀押止め、こはいかに、味方諸手の軍敗

北して、頼切つたる者共も殘らず討死し、寄手は勝誇つて廻天の氣を表す。爭か戈先を諍ふべき。將たる者、此戰場にて御命を失ひ給はん事、末代迄御短慮の樣に相聞えんは、口惜く覺え候。先々勝龍寺の城に引入り給ひ、其上にて軍慮を廻らし、重ねて軍勢を催すものか、又は一場に屍を晒す死軍をせんものか、如何樣にも御存分に任せられ候へと、理を盡して申しける處へ、進士貞連・溝尾茂朝、太刀打折り甲の前立も切落され、鎧に立つ矢簑毛の如くなるを折かけ、緋になりたる有樣にて馳せ參じ、帶刀と同じく諫めけるに由つて、光秀其儀ならば、兎も角も面々計るべしとて、比田を先手として、漸殘る兵七百餘騎を相具し、其日の昏に勝龍寺の城に赴きける。斯くて南方の寄手は、思ひの儘に勝利を得、勇み勇んで進みければ、秀吉の曰く、總じて軍は、十分に勝過ぎざるを、軍法の祕傳なればとて、馬廻なる黃色の母衣武者を以て、先手の勢に下知して、山崎近邊に陣を取り、用心稠しく見えにける。去程に日向守、勝龍寺の城に引入りしかば、軍評定取々なる處に、城代三宅藤兵衞申しけるは、當城は分內狹くして、要害も堅固ならず。さしもの名將、此小城に御座候はん事、

武略の拙きに似候へば、急ぎ坂本に御歸城あつて、御計策候はゞ、然るべく奉存候。御跡の儀は、並河八助・中澤豐後守も、只今山の手の陣より遁れ來り、丹波武者三百計相見え候間、此勢と引合せ、某當城を相守り、敵寄せ來りなば、潔く一戰を遂げ、見苦しく之なき樣に計らひ申すべきといひければ、光秀現にとや思はれけん、村越三十郎・堀與次郎・進士作左衞門を先打とし、溝尾庄兵衞・比田帶刀を後陣として五百餘騎、十三日亥の刻に、勝龍寺を出で川端を上り、北淀より深草を過りけるに、郎等士卒も終日の戰に、人馬共に勞れければ、或は疲れ伏し、又は落失せて、今は僅に卅餘騎にぞなりにける。翌くれば十四日丑の刻計りに、小栗栖の里を通りける處に、此邊の溢れ者悉く蜂起して、落人の通るに、物具剝げと罵る聲して、鎗を以て小笹交りの竹垣越に、ひた突に突きたりける。日向守は、馬上六騎目に通りけるを、百姓の作右衞門といふ者の竹鎗に、脇の下をしたゝかに突かれ乍ら、こは如何なる者ぞ。狼藉なりといはれて、一揆原鎗を捨て逃去りぬ。斯くて三町計り行過ぎたれども、鎗疵痛手なれば、苦痛堪へ難くして、光秀道の傍に馬を乘寄せ、溝尾庄兵衞に申されけ

るは、只今手負ひたれば、坂本迄は行くべき事叶ひ難きに依つて、我は爰にて自害せんと思ふなり。是は某甲が辭世なれば、汝に與へんとて、鐙の引合より、一紙を取出さる。溝尾謹んで拜見するに、

逆順無二門　大道徹心源　五十五年夢　覺來歸一元

明窓玄智禪定門

とぞ書かれける。是を讀みける間に、光秀指添を打立て、腹一文字に搔切つたり。茂朝これはと驚き、是非なく介錯したりしが、只茫然たる處へ、進士作左衞門は、半町計も往き延びたりしが、光秀見え給はざりしかば引返し、此有樣を見るより、目も昏れ心も消えて、貞連こそ御先は仕るべき者なるに、少も後れ參らすべきに非ずとて、光秀の自害ありし右手差を取つて、己が心元に突立てゝこそ伏しにけれ。比田帶刀も後れ馳に來り、日向守殿は早御自害か。我れ此年月龍鱗に付身を立て、世上に名を知られし事、莫大の君恩なり。今其恩を報ぜずしては、何をか期すべき。暫く待たせ給へ。死出三途の御供申さんといふ儘に、自ら首を搔落し、光秀の死骸に

抱付きてぞ死んだりける。溝尾庄兵衛は、面々が最後の體を見るに、實に君臣の道、斯くこそはあるべけれ。我も爰にて自害せばやと思ひしかども、敵に首を取られん事、後代の恥辱なれば、比田・進士兩人の輩が、面の皮を削りつゝ、傍なる藪の中へ提入れて、扨光秀の御頸を、妙心寺に納めんと思ひ、旌棹を拔捨て御首を包みて、狼谷といふ處迄來りけるに、行先は敵の大勢滿ち〳〵、通るべき様なしと聞きて、敵に御首を取られれば、是迄の志も詮なしと思ひ、北の山際に御首を埋み立退きしが、今は浮世に思置く事なし。自害して主恩に報じ、又は先達ちし面々にも、黄泉の道にて追付かんと、草履取に與七郎といふ者只一人、是迄も甲斐々々しく附隨ひけるに申しけるは、汝下郎とはいひ乍ら、主の專途を捨て難く、今の時迄附順へる忠勤の志、世世生々忘れ難し。我は爰にて自害せんと思ふなり。汝は急ぎ古郷に立歸り、妻子眷屬に此有様を語り聞かせよ。疾々とありしかば、與七郎涙を流し、是非御供仕り、冥途迄も附隨ひ奉るべしと、再三望みしか共、溝尾堅く免さねば、詮方もなく從の品品を請取りて、古郷へぞ立歸る。溝尾今は心易しと、靜に稱名唱へ、腹十文字に搔切

り、野徑の露とぞ消えにける。其折しも敵數多襲ひ來り、落人やあらんと尋ねしかば、與七郎主の死骸を隱し兼ね、其身計りは漸く岩根を傳ひ山林を凌ぎ、故鄕指して落行きけり。斯る處に敵の兵、爰や彼と尋ね來り、死骸のありければ、是こそ光秀の近臣なれ。いかさま日向守、此邊にてこそ自害ありつらめと、其邊を探し求めける故、光秀の首を取出し、筑前守が方へ渡しけるこそ本意なけれ。其外光秀の一族郎等、處々に楯籠りしを、筑前守悉く攻落し、殘黨一人も殘らず、十餘日の程に、屍を泥土に晒しけり。是より秀吉の威勢彌盛にして、自ら天下をも知るべきの權威ありとぞ記しける。元親、軍記の趣を熟と披見し、誠に信長公、武勇には天下無雙の人なりしが、文道に冥くして、無念の死を遂げ給ふ事よ。尙々帝都の虛實を窺ひ、重ねて評定あるべしと、皆御暇給はりて、宿所へこそは歸りける。

四國軍記卷第十終

四國軍記卷第十一

秀吉公攻二土州一事附木津落城の事

天正十三年春三月、秀吉公内大臣に任じ、正二位に敍し給ひ、漢高三尺の劒を輝し、武門の統領として、愈隨はざるを討ち、降る者には本領を案堵させ、理世安民の政をぞ行ひ給ひける。斯くて大和大納言秀長・羽柴中納言秀次を副將として、大軍を率し紀州に赴き、根來を攻めんと催し給へば、僧徒之を聞いて大に驚き、急ぎ岸和田・千石堀・積善寺濱に城を築き、防ぎ戰ふと雖も力足らずして、根來及熊野の僧侶、悉く降り來りける間、則ち攝州に凱旋あつて、其後高野山へ誡書を遣し、禁戒を背く者あらば、滿山を擊滅すべしとありしかば、僧徒大に恐れて、嚴命を守りける。同年五月に、諸國へ使者を下し、分國を改補し給ふ。先づ土佐國長曾我部方へ使節を立て、

秀吉、元親を攻む

伊豫・讃岐兩國を召收められ、其餘は先規の如くならんとの事なりしかば、元親承り、上意相背くに似候へ共、某年々戰功を以て、四國を平均すと雖も、猥に郡主を改めず、降る者には本領をいろひ申さず候故、手下の舊臣に宛行ふべき分地もなく候。然りと雖も御意默し難きの間、豫州一國を差上申すべしと返答す。秀吉聞召し、安からぬ事かな。其儀ならば打潰せと、御舍弟秀長を大將として、畿內の兵三萬餘騎、紀の路より兵船を雙べて、淡路の須本へ押渡る。又一方には秀次を大將として、江州・丹州の軍勢三萬餘騎、攝州尼崎より、淡路の岩屋に押出す。備前・美作より羽柴秀家、播州より蜂須賀父子、又黑田官兵衞、（異に仙石權兵衞とも、）讃州屋島へ押渡り、敵城悉く追拂ひ、牟禮・高松に陣を取る。中國より毛利輝元・小早川隆景・吉川元春三萬餘騎にて、伊豫の新間に着陣す。斯くて秀長は、淡路の福良に船を揃へ、鳴戸の沖を渡さんとするに、折節五月の半なれば、霖雨夥しく降繼いで、宛も盆を傾るが如く、波濤風にたゝんで、大山の崩れ懸るに似たれば、數日滯留せし處に、少し雨晴れ風憩ぎければ、水主楫取力を得て、艨艟に艤し、文鷁に旌旗を粧り、榜人棹の歌を發すれば、金皷流喝の聲風

波に交つて、山海之が爲に震動す。前後の軍船數百艘、一度に櫓械を立雙べ、土佐泊へと漕出す。抑此鳴門と申すは、三國無雙の難處なり。差潮引潮に逆ひて、渦の卷くこと車輪の廻るに等し。濤高うして、響百千の雷の震ふが如くなるに、風俄に起りければ、飛湧相磯り、洪波滾々として、泡を飛ばし沫を噀す。舟を搖り上る時は、高山にも登るかと思はれ、打下す時には、金輪際にも陷る心地して、或は渦に卷かれ、或は潮風に揉れて、さしも猛き武夫も、櫓軸を枕として、舟底に平臥す。大將秀長・秀次大に怒つて、昔源平相爭ふの時、義經風波を厭はず、小船を押切つて敵の不意を討ちし事、兒童の口號にもする處なり。況や纔の波に支へられて、漂へる事やある。一騎に押切つて渡るべしと、諸將を勵しければ、水主楫取懼ぢ恐れ、船子に力を合せて勇めけるに、漸く風も閑りて、舟は難なく阿州土佐泊の湊に着岸す。大軍陸地に上れば、人々駿馬に鞭つて、前驅後從隊伍を亂さず、斥候遠近に馳散つて、閑々と步ませ行く。大將令を下して曰、此所に附城を構へ、味方の根城とすべし。諸軍は木津の城を攻落すべしとて、土佐口の押には、羽柴八郎・伊藤掃部・中村彌平次・一柳市

助・赤松次郎・蜂須賀・黑田・明石・筒井・尾藤・戸田、此等を宗徒の兵として、諸軍勢木津の城へと押出す。其間纔に卅餘町を隔てたれども、入海あつて、左右なく渡すべきやうもなかりければ、先陣より軍使を以て後陣に訴ふ。秀長活氣の勇者なれば、只押渡して一擧に攻めよと下知せらる。先陣已に馬を乘入れて、眞一文字に渡さんとすれば、木津の城主東條關兵衞、（異に、桑名孫左衞門守り雨の夜立退くと云々、）兼て期したる事なれば、足輕二百餘騎を川端へ出して、鐵炮を打たせけるに、馬武者二三十騎、犇々と川中にして討たれけれども、元より京勢大軍なれば事ともせず、一時に噇と渡しつゝ、逆茂木鹿垣引除け〳〵、難なく惣構の砦を打破りしかば、城兵は本城に引取り、要害を守つて控へたり。翌日未明に、仙石權兵衞竹束を多く眞先へ進め、切岸の邊迄押寄せけり。是を見て前野庄右衞門・中川藤兵衞・高山右近、續いて城に攻入らんとすれども、元來此城の要害堅固にして、四方に岩石峙ちつゝ、寄手の足溜なきに、弓鐵炮を打かけ、大石を以て打拉ぎしかば、寄手左右なく進み得ず、睨み合うてぞ居たりける。中にも仙石、手下の兵を招いて申しけるは、當城の有樣を見るに、水の手は、北の山口より

木津城陷る

汲むと覺えたり。其日道路甚だ嶮岨なれば、此處に伏兵を置き、城の虛實を試みんと、其夜密に北の山口をぞ守りける。去程に東條は、數日攻口を守つて、要害を固むと雖も、城中水の手を取切られたれば、水に渇して勢屈し、貳師將軍が術を得ざれば、井を鑿れども岸高くして、水湧く事はなかりける。まして元親の援兵も來らざれば、當手の小勢を以て大軍を引請け、勝利を得難しと思ひ、或夜雨降り風烈しきを、願ふ處の幸時なりと、一方を討破つて、土州を指してぞ引入りける。

秀長獻二羽書於京都一幷四國平均の事

牛波城陷る

斯くて京勢木津の城を乘取り、阿州牛波城へ押寄せ、竹把を拵へ井樓を組上げ、短兵急に攻めしかば、城主香曾我部親泰、(異に、親泰は一の宮城を守るとあり)屢防戰すと雖も叶ひ難く、城を捨てゝ土佐の國へぞ引入りける。爰に元親が元臣江村孫左衛門は、一の宮の城にありけるが、京勢木津・牛波を追落し、勢遠近を震動すと聞きて、定めて秀長當城へ攻め來るべし。不覺の軍しては叶ふまじと、五千餘騎の兵を押配り、嚴しく防禦の備を

なす。然るに秀長・秀次は、大軍を大手に分け、江村が籠りたる一の宮の城、同じく谷忠兵衞が四千餘騎にて籠りたる脇の城へ取かけ、持楯・龜甲・竹把を多く用意して、揉みに揉うで攻め戰ふ。土佐守父子四萬餘騎を引率して、白地迄出張し、援兵を以て奇角の勢をなしければ、秀長、さすが侮り惡うや思はれけん、坐に日數を移されける。斯る處に都より飛脚到來して、元親は等閑の敵にあらず。軍の手段心許なく思召すの間、近日秀吉御進發あるべしとの事なりしかば、秀長・秀次、尾藤甚右衞門を召寄せ、汝は早々上洛して、軍の樣子陣取の體を委細に言上し、御進發を止め奉れと、則ち一封の書を進らる。其文に曰、

謹而致二言上一候。抑四國征伐之事被二仰付一、則渡海仕畢。阿讃賦二人數一不レ移二時日一、敵之城或在々所々迄任二存分一條、天下之面目何事加レ之哉。然殘黨未レ散之處、急度御動座可レ有之由承、奉レ驚候。秀長弓矢之力不レ足故、御進發之儀、併似二御威光薄一乎。日限雖二相延一可レ遂二本意一事在二掌握一。希御動座被レ止、秀長勵二忠勤一者、於二戰場一一世之大慶不レ可レ過レ之。此旨宜可レ預二御披露一候。誠恐誠惶謹言。

秀長

七月三日

細川中務丞殿

尾藤急ぎ上洛して、四國過半討從へたる由言上しければ、秀吉公聞召し、其儀ならば進發に及ばずとて、則ち四國御働座を止められ、北國征伐の御陣觸をぞなされける。去程に毛利輝元、豫州金子が城を十餘日に攻落し、男女撫切にしたる由、小早川より注進す。秀長・秀次此の由を聞召し、當手の軍、事遲滯に及んでは、京都の聞え、旁以て武略の拙き處なりと、仙石權兵衞・高山右近・前野庄右衞門・中川藤兵衞・蜂須賀・黑田・赤松に催促あつて、兩軍の兵七萬餘騎、犇々と攻寄せ、火出づる程ぞ戰ひける。江村・谷、身命を捨てゝ戰ふと雖も、寄手は目に餘る程の大勢、新手を入代へ〳〵攻入りしかば、惣構を破られ、究竟の城兵三百餘騎討たれて、今一支も怺へんとは見えざりけり。元親、諸方の味方利なうして、士卒恐れ懼きしかば、熟思ひけるは、當時秀吉君命を挾んで、四方を攻むるに勝たずといふ事なし。其上日本國の勢を引受けては、始終の軍叶ふまじ。所詮和睦を乞ひて、諸軍の命を扶けんものをと、秀長へ

軍使を立て、抑今度御出馬の事は、秀吉公より豫讃の二國を召上げられんの由、仰下さるゝに付、豫州一國差上申すべしと、返答仕るに由つてなり。全く京勢に敵對申す覺悟に非ず。然りと雖も武士の風、大軍を見て一戰にも及ばず、降参せんは言甲斐なし。一旦の誤を御許容あらば幡下に屬し、永く忠勤を抽んずべし。若し免除なくんば、一場に屍を晒さん耳なりと申送りければ、秀長聞召し、其方御事、秀吉御憎しみもあらざれども、今天下新に治まつて、諸國へ令を下さるゝ故、叛を討ち、從はざるを制す。向後御旗本に屬し、父子共に大坂へ上り近仕せられれば、本領安堵の事、秀長・秀次宜く披露申すべしと、御返答ありければ、元親大に喜び、三男津野孫次郎を人質に出し、甲冑を脱ぎ捨て軍門に降つて、無二の心底を露しければ、兩方の軍勢、共に萬歳を祝しける。斯くて秀長・秀次、諸方の制法仰付けられ、同七月下旬、阿州より艤し、大坂に凱陣ある。其後秀吉、今度四國平均の悦として、戰功の者共に、恩賞を宛行ひ給ふ。

元親、秀吉に和を乞ふ

土佐一國　　長曾我部元親

阿波國　　　　　　　　　蜂須賀彥右衞門

内一萬石　赤松拜領

讚岐國　　　　　　　　仙石權兵衞

内二萬石　三好正安拜領

伊豫國　卅五萬石　　小早川隆景異に、戸田民部。福島左衞門太夫拜領云々

二萬三千石　安國寺

一萬四千石　來島助兵衞

三千石　得居太郎左衞門

阿波・讃岐・伊豫の諸士、年來元親が爲に刧されて、是非なく降參せし輩は、殘らず追放せられ、何れも數代住馴れし城を放たれ、思はぬ波に漂ひ、父母妻子を引連れ〱、心々に落行きける。哀なりし事共なり。

元親大坂出仕の事

斯くて土佐守元親は、家老の面々を召寄せて評議しけるは、我已に降參の上は、近日大坂に上り、秀吉公へ恩惠を謝せんと思ふなり。用意の事申付くべしとありければ、各承り、當時數年の亂國にして、人心の反覆常ならず。一先づ上方の虛實をも聞合せられ、來春御上洛然るべしと申しければ、元親聞いて、汝等が申す所至極せり。我れ日去ながら秀吉公天下に武將となり、一言を以て信とす。反覆の小人に非ず。我れ日來賓を以て人に交はる。何ぞ懼あらん。其上大勢を召連れんも如何なれば、日頃兵の覺え取りたる者共、彼是已上五十餘人を相具し、同年十月廿日、浦戶の濱より舟出して、程なく攝泉の境、天王寺屋宗及といへる者の所に寄宿す。暫あつて大和大納言殿より、藤堂與右衞門高虎御使として來り、元親に對し、早々着岸せらるゝ段、秀吉公聞召され、御感に思召すの間、大坂へ出仕あるべしとの上意なりければ、元親承り、有難き仕合に存候。唯今到着仕り、未だ荷物等も船中に御座候。明日參候仕るべしとて、藤堂をぞ歸しける。翌早旦に元親、供の行列引繕ひ、大坂へ赴きけり。抑大坂と申すは、西は滄海洋々として天を浸し、湊には蛛手に大河を構へ、大江の洪流

漲り湧いて、數千の艇舸其間に浮べ、鐘鼓の聲棹の歌、馮夷魍魎を驚かす。其市町は良材巧を盡し、瓦屋堊を塗る。見世店は天下の珍寶を積重ねたる事、鳥の如くに集め、鱗の如くに萃る。鬻ぐ者は嬴を兼し、求むる者は匱しからず、美服して鼎に喰ふ、風姿誠に繁榮富饒の地なり。東に大和川を帶び、北に淀川を抱く。其中間は亭々たる城廓、山の如く雲の如し。天府の地勢目を驚かす。其より客屋に入つて衣服を改め、午の上刻に登城す。樓門に望めば、警固の武士左右に列し、非常を制す。元親、藤堂を案內として過行きけるに、元親が從者會釋もなく通りしかば、警固の者共之を戒む。是より奥へは、小性一人草履取の外は無用と押止む。元親が郎等之を聞き、主人の供するをば、何條誰人か止むべきと、遠國育のむくつけ男、高聲に犇きければ、高虎立歸り、長曾我部殿の供人なるが、苦しかるまじきぞ。入れよといひければ、武士轅門を解いて通しける。斯くて元親、長廊廣廡を經て左右を望めば、珠閣雲の如くに連り、臺中の武臣職を重んじ、互に宿直し守る。重門襲り固うして、衞尉八屯夜を警め晝を巡る。誠に漢朝の西京に入るかと疑はる。高虎、元親を一間の所に請ず。

元親、秀吉に對面

元親進獻する所、小袖七重・馬代白銀千兩・一文字の太刀一腰なり。七間の臺に伺候す。暫あつて秀吉公出御し給ひ、床の上面に座し給ふ。其次に羽柴秀長、疊四帖を隔てゝ座せらる。其次は八郎直家・細川兵部入道、其次は長谷川・浮田・前田・安國寺、其外近習の諸士、威儀を正して列座せり。于時秀吉公宣はく、元親早々上着の段、誠に神妙の至なり。御料理下さるべしとて、七五三の饗膳、金銀の器に、山海の珍味美を盡し、次に土器獻酬の禮畢つて、御腰物を下さる。二尺五寸備前兼光なり。元親敬んで押戴く。秀吉公、黄金の間にて茶を參らせん。是へ／＼と宣へば、元親も御跡に扈從しける柱楹・天井・壁・障子に至る迄、黄金を以て熨付けたり。受塵・釘隱・谷・水指に至る迄、皆黄金なり。粧棚は梨子地の蒔繪美盡したり。庭には廣く綠砂を布き、佳木灌草蔚然として、鄧林に入るが如し。珠玉を以て柱を彩り、金を以て瓦を裹む。燦然として崑崙山に上るが如し。御茶の會終つて、天守を見せんと仰ありければ、元親三重迄攀上る。九層高く聳えて天に近く、空を翔る翅も、仰ぎ見るに逮ばず。欄檻に倚つて、頫して聞く時は、雷霆の聲地下にあり。封畿千里眼下に瞰す。其より下りて一

間なる處を見れば、床緣柱黄金を以て鏤めたり。上壇には猩々緋を重ね布き、具足櫃・太刀刀掛あり。其次を望めば、唐織錦の茵、蒲團山の如くに積上げたり。侍御給仕の人々を見れば、窈窕たる童女華美を輝し、颯纚に立廻り、態を修めて要紹(たをやか)なり。斯くて元親天守を下りければ、御引出物として、黄金百枚を拜領す。暫くあつて蓬萊の島臺を、小性二人して持ち出づる。默して是を見れば、誠に物の上手が、心を籠めて作りけん、芳野の山の初櫻、立田の川の秋の暮、四季の形の色異に、浮立つ計に見えにける。金銀の土器を据ゑたるは、不老門の日月も、此くやらんとぞ疑はる。秀吉公御機嫌甚だ美はしく、夫々盃とありしかば、美濃守殿取上げ給ひ、元親に賜はりける。于レ時秀吉公高虎を召して、長曾我部には、天質勇猛にして壯き男なれば、馬を贈るべし。祕藏の鬼葦毛（後に元親號二内記黒一）を引寄せよと仰ありしかば、高虎畏つて、御厩の別當に申渡す。別當則ち梨子地蒔繪の鞍鐙、厚房の鞦かけて庭上に引出す。元親座を起ち、手綱を取つて推戴き、武士の專一とすべきは馬なり。天に翔行せんは、龍にしく物なく、地を趨行せんには、馬に越す物なし。易に引レ重致レ遠以利二天下一と

いへり。是兵具の本、國の大用なり。武名論にも、馬は飛行自在の珍寶なりとて、古人は馬に乘らざれば、武士とはいはずとかや。熟名馬に乘じて譽あるを思ふに、楚の項羽は、烏騅に乘つて戰功を立て、暴秦を亡す。我朝の厩戸太子は、甲斐の驪に召され、蜻州の逆浪を鎭めて、永く王法を興し給ふ。契丹の耶律氏は、善馬に乘じて嶮を凌ぎ、敗軍の難を逃れて、再び主國を興しぬ。其外平の知盛源の義經、近くは謙信の保生月毛、各良馬の德をなせり。武士たらん者、誰か是を重んじ好まざらんや。天晴元親此御馬に跨つて、如何なる嶮岨岩石の地なりとも、先登して忠勤を勵むべしと、數盃の興を催しければ、秀吉公御喜悅斜ならず。此度其方屬從の輩迄、上方の風俗覺束なく思ひしに、一分の覺悟として、早々上着する事、我先達つて是を聞けり。無二の心底之に過ぐべからず。此上は津野孫次郎を伴ひ、明日は出船して、國人にも安堵させよと、御暇下されければ、元親有難き御諚かな。古き諺にも、良禽は木を相して住み、賢人は主を選んで佐くといへり。斯樣の君に身を委ねてこそ、武士の本意ともなるべけれ。明日は京都へ參着仕り、秀次公へ御目見仕るべしと申しけれ

ば、秀吉公聞召し、京都へは美濃守此由申通すべし。早々歸國すべしと、重ねて仰出されける間、元親忝しと御暇申受け、其日舟泊迄歸りける。高虎を以て、岸和田にありける孫次郎を呼取り、元親に相渡し給ひければ、元親大に喜び、此上は片時も早く歸國せんと、悅の棹歌を發し、聲を帆に上げて漕出す。依岡は一艘の早船に波を潜らせ、飛ぶが如く土州に至り、太守御歸國の樣を觸れしかば、上下安堵の思をなし、我も我もと御迎船、善盡し美盡して、浦戸の濱に相待ちける。程なく元親・孫次郎着岸あり。諸士民屋に至る迄、千秋萬歲の悅の歌、洋々として巷に滿ち、目出度かりし事共なり。

元親・信親西國發向幷軍評定の事

天正十四年十一月、豐後太守大友より、石田治部少輔へ、脚力を以て注進しけるは、島津修理大夫義久、薩摩・大隅・日向三州に跨つて逆威を震ひ、近國に橫行して城々を伐取り、去九月上旬、當國に至つて領地を侵す。之に依つて五百餘騎の遣兵を遣し、

即時に敵を討取る。島津大に怒つて、一萬餘騎を率ゐて、大塔村に陣を取る。味方八千餘騎にて、十月廿六日鎗を合せ、敵味方に討死三百餘騎に及び候。故に島津兵を引入れ候。急ぎ御加勢を得ば、島津が本國へ押寄せ、根を切つて葉を絶たん計、今日にありとぞ告げたりける。三成委細言上しければ、秀吉公聞召し、誠に義久、曩祖賴朝より已來四百餘廻、彼地にあつて武威を逞うし國郡を肆にす。急ぎ誅戮せずんば叶ふまじと、仙石・長曾我部を召して、汝等早々豐後に馳下つて、大友と力を合せ、島津を退治すべし。明日伏見を立つて、本國に三日逗留し、諸方牒じ合せて、合戰越度なく凱旋すべしと仰ありしかば、兩人畏つて、翌日伏見を打立ちけり。斯くて長曾我部信親は、本國に歸り、元親に對面し、島津が討手として、仙石と兩人、發向の由を語りければ、元親聞いて、汝若輩の身にて、大敵の討手に拔き出さるゝ事、誠に武門の大慶、義久は流石武勇の強敵なり。仙石は軍慮未練にして、取しめたる軍する者に非ず。兵法にも、內慎二主將一者必勝、外慎二強敵一者必危といへり。我れ在國して心元なし。伴ひ打立ち後見して得させんと、子を思ふ親心、霜雪に鎧を晒し、十一月廿

元親信親島津征討の爲め出發

二日、土佐の國を出船し、豐後を指して押出す。去程に義久は、大塔合戰の後、國元へ引入りしが、同十一月十五日、一萬餘騎にて出張し、梨尾山に陣を据ゑ、同月廿一日、利光が城を攻落す。斯る處に十二月四日、仙石・長曾我部、一度に臼杵に着きければ、島津之を聞き、鶴が城を引拂ひ、戶次川を越え、岡山に陣を取つて、緊しく守禦を構へけり。同八日、仙石・長曾我部二萬餘騎を率ゐて、土分郡戶次川の庄山崎といふ處に陣を取る。大友一萬餘騎、利光村に出張して、奇角の勢をなしにける。于時兩將評議あつて、先づ義久が陣へ書を遣し、秀吉の命を受けて、此度大友を救ふなり。早く軍門に降るべし。さなきに於ては、利兵を出さんと欲するの意を述ぶ。島津披見して大に罵つて、書を地に投げ哢笑つて、我れ何が故に猿面郎に降らんや。二將首を伸べて、我刀を待てとぞ返答したりける。其折節中務大輔家久、二萬餘騎を引いて馳來りしかば、義久大に喜び、戶次川の堤に添へたる小藪の中に、鳥銃を伏置き、敵川を渡さば、半途にて是を討止めんとぞ計りける。寄手の先鋒仙石權兵衞、敵は岡山に塞を下す。川を涉して討つべしと、案內者を呼んで問ひければ、彼者申す樣、

此川は九州一の大河にて候。此山崎の繼に、薗田といふ瀨あり。又是より三町程川上に、竹中の小瀨といふ處ありと、巨細に敎へければ、仙石大に悅び、長曾我部・大友・三好を招寄せ、川を渡さん事如何と議しければ、元親進み出で、此川を渡さん事、尤無用なり。堤に添うて小藪七八町もあるべし。敵是に鐵炮を伏せ、半途にして討崩すべし。然る時は味方の先陣、一人も生くる者あるまじ。一陣敗る時は、軍利心よからず、唯川を隔てゝ對陣し、敵を籌策に勞せしめてこそ、謀をなすべけれとあれば、仙石聞いて、いや〳〵遙々と敵國に來り、敵の顏をも見ずして對陣せば、敵を恐るゝの辱に合はん。縱ひ敵の伏兵ありとも、何程の事かあるべき。信親には後陣に控へ給ひて、我が軍するを見給へと、言を放つていひければ、三好正安も之に同じ、古より川を渡して正利を得たる事、其數勝げて計ふべからず。迚も合戰せで叶はざる事なれば、延々ならんより、御渡しあらば、上方の聞えといひ、又先立つ時は人を制するに利あり。旁以て潔しといひければ、元親又曰く、凡用兵之法、全國爲上、破國次之、全軍爲上、破軍次之。故百戰百勝非善之善者、不戰而屈人之兵、善之善也。其

上深く敵國に入りて、地の利然るべからず。詮なき師して、人數を損じ給ふなと、達つて諫めけれども、仙石・三好更に聞入れず、明日辰の上刻に、矢合を始むべしとぞ觸れたりける。

戸次川合戰并信親討死の事

翌くれば十二月十二日、まだ早雲も明けざるに、仙石・三好、田宮の何某を銃兵として、本陣を打立ちけり。大友・長曾我部も、同じく人數を押出す。先陣已に川に打入り、白浪を蹴立てゝ渉りける處に、是ぞ敵の合圖ぞと見えて、處々に大貝を吹鳴らしければ、島津が伏兵千餘人、川端に打出で、鐵炮を連打に放ちける。元親が計りしに違はず、田宮・三好を始として、先魁の兵一人も殘らず、人馬共に打倒され、血になつてぞ漂ひける。後陣の味方是を見て、急に馬を乘戻さんとしけるを、二度目の鐵炮に、又百餘騎打たれ、我先にと退潰せしかば、仙石が旗本大に騷動して色めき立つ。是を見て島津義久三千餘騎、得たりや賢しと、竹中の瀬を渉しければ、同く中務家久

八千餘騎、續いて川へぞ乘入れける。流石の大河、人馬に水堰かれて、河下の步行武者は、膝の上をも濡さずして、易々と向の岸に上りける。仙石・大友川端を引退き、踏止めんとすれども、亂立つたる大勢なれば、掛れ〳〵と下知すれども、半進半退、軍令更になかりけり。島津一駿に川を駈上り、雄関山川を動搖し、劒光閃いて般雷を聞き、激電眼を刺すが如く、會釋もなく突いて入り、縱横自在に切つて廻る。騷ぎ立ちたる上方勢、七斷八續我先にと逃去りしかば、矢庭に討たるゝ者二百餘騎、這々臼杵の城へと引きたりける。島津是を餘さじと、速に追掛けたり。去程に元親父子、先陣敗北と聞きしかども、引取らば、共崩して味方を損ぜんと少しも動かず、備を固め控へける處に、新納武藏守五千餘騎、驀地暗に打つて懸る。元親鎗を提げて突出し、散々に打破り、利光の村中へ追込み、二百餘騎討取りしかども、後陣の大勢駈加はり、一順一逆長蛇の如く、元親を中に取卷きしかば、死力を振つて戰ふと雖も、援け來る味方もなければ、敵の圍重ならぬ先に引取れと、信親を先手とし、元親後殿を堅め、南を望んで退きける。武藏守强敵の堅陣に軍して、手勢若干討たれ、無念晴れ

ずや思ひけん、亂れ散つたる兵士を集め、上方勢侮りにくきぞ。十死一生の軍せよと呼ばはり、元親が跡を慕うて追掛けたり。斯くて元親、先陣は遙に行過ぎぬ。敵間近く追掛けしかば、山崎の端に踏止まり鎗を合せ、半時計り攻め戰ふ處に、又島津が大軍、潮の湧くが如く駈來つて、新納と力を合せ、八方より攻討ちしかば、元親勇を震つて力戰し、數度敵を追靡けしか共、大軍に蒐隔てられ、味方多く討死して、今は早主從廿餘騎に打なされ、除冑になつて、人馬共に皆朱に染めなしたるが、或は草摺を切落され、鎧の袖吹返籠手の外れ、矢三筋四筋、射立てられぬ者もなかりけり。爰に池太郎兵衞・八木三郎右衞門踏止り〳〵、鑓を合せて高名す。安並玄蕃は、追掛る敵を二騎切て落し、一騎は馬上より組んで落ちて首を取る。此時深手を負ひけるを、桑名彌次兵衞是を見て、諸鐙を合せて馳せ來り、馬より飛下り玄蕃を引立て、我馬に打乘せ、追掛る敵を追拂ひ〳〵、元親にぞ追付いたり。元親が乘つたる馬に、立つ處の箭數を知らず、立竦んで死んだりければ、元親、運命是迄ぞ、一足も引かんとして、敵の鏃に懸るな。一場に討死せよと、殘兵を一所に集め、旌旗の影に備を固め、

堅々として控へける。斯る處に元親が祕藏せし、內記黑といふ名馬、何國ともなく馳け來る。元親大に喜び、天未だ家運を捨て給はぬぞと、則ち馬に打乘り、臼杵を指して引入りける。抑此馬は、先年秀吉公より賜はりたる名馬なり。昔後漢の劉備、急難を逃れて逃去りける。路に絕谷あり、敵は急に追掛くる。劉備乘つたる馬に告げて曰、我命危き事急なり。汝我を助けよと、一鞭を加へ給へば、一踊に三丈の檀溪を飛越え、其難を逃れしも、是には如かじと覺えける。去程に信親は、廿餘町引退きしが、後陣に軍あつて、味方殘らず討たれ、元親の死生を知らずと聞きしかば、中津留河原に踏止り、敵來らば一戰して、父の賊を報ぜんと、備を取て返しければ、久武・中內進み出で、味方形の如く敗軍し、敵は勝に乘つて大勢なり。一戰の功なり難し。早々軍を歸し給へと、再三諫言しければ、信親が曰、今日の軍、先陣鎗合にも及ばず敗北する事、諸將不覺の至なり。今此を、一戰をも遂げず引かん事、當手の恥辱なるべしと、少とも動かず旌旗を揃へ、馬を踊らせ威風を顯はし控へけり。石谷兵部・吉良播磨・本山將監・細川源左衛門を始とし、御諚尤も勇々しく存候。一地に屍を晒し、

名譽を後世に留めんものをと、龍粧に備を配り、定り切つて待ち居たり。斯くて武藏守は、逃る敵に追縋うて、中津留川に來りしが、向を見れば、敵二三千騎、陸續として控へたり。新納、能き敵と見つるぞ、一人も殘さず討取れと呼ばはりけり。元來武藏守は、數度の軍に大敵を切靡け、全身に疵を蒙たる事七十餘ヶ處、大剛の兵、誠に萬夫不當の勇士なれば、一陣に馬を進めて、信親が控へたる中央に破つて入る。斯る處に島津が今日の殿、伊勢兵部丞一千餘騎、佐古の口より横合に掛りしかば、信親之を見、急に兵を分けて防ぎける。細川源左衞門、武藏守と鎗を合す。互に聞ゆる勇士なれば、龍虎の威を震ひ、精神を勵し挑み戰ひしが、新納左の腕をしたゝかに突かれ、已に危く見えしが、郎等二人馳け來つて、武藏守を救うて細川と戰ひける。斯くて横合に懸りし兵部が兵、信親が兵を突崩し、洪水の提を覆すが如く、眞黑になつて馳せ來り、一陣二陣一手に合ひ、信親が旗本に切つて懸る。信親今は是迄と、二尺七寸大左文字の刀を打振つて、群る中へ切つて入れば、吉良・本山・岡・石谷・細川を始として、我れ劣らじと面も振らず突いて入り、左右に當り前後に支へ、千變萬化、獅子

信親戰死

の嚙をなして戰ひたり。兩陣に作る鬨は、千雷を合せたるが如く、劒戟の閃く光は、電母の激する如くなり。親討たるれども子は顧みず、主討たるれば尸を乘越え、一步も敵へは進めども、退く事はなかりけり。信親も多くの敵に相當り、小手の板草摺も切落され、血潮に染り、のつたる太刀を推直し、眼に流れ入る血、搔拭うて立つたる處を、透さず左右より切つて懸れば、前後に薙据ゑ追拂ふ。鈴木內膳走り寄つて渡し合ふ。信親莞爾と打笑つて、暫く奮ひ戰ひしが、前よりの働に、深手數多負ひし身なれば、精力も疲れけん、運命や盡きたりけん、信親終に內膳が爲に討たれにけり。信親が有樣、元亨の金澤も、是には過ぎじと見えにける。其外の勇士、一人當千の兵なれども、大軍に押隔てられ、處々にして討死せり。去程に元親は、討殘されたる兵廿一騎を率ゐ、臼杵を望んで退きしが、爰の嶺波の洞に隱れ居たる溢者千餘人、落人の通るぞ、物具剝げと、行先を塞ぎ、弓鐵炮を構へて待かけたり。元親長途に馬疲れ人困みて敵し難し。一方を伐破つて通らんも叶ふまじければ、甲斐なき者の手に懸らんより、潔く腹切らんと、馬より下りんとしけるを、桑名彌次兵衞押止め、是こそ

言甲斐なき御諚かな。某一人を、千萬騎とも思召候へと、馬を駈寄せ大音上げ、長曾我部土佐守、臼杵の城へ通る處に、大道を塞ぐは何者ぞ。路を開けと呼ばはつたり。于時一揆の大將よと思しくて、尋常の人とは替りたるが、一荒荒れて鬚黑なる壯士の、眞黑に鎧ひ大長刀を搔込み、何條誰にてもあらばあれ、武具を脫いで渡さずんば、全く爰をば通さじと、長刀を取延べ討つて懸る。桑名わざと馬よりひらりと飛下り、刀を廻して戰ふと見えしが、つゝと入りて眞逆に踏倒し、頓て首を搔落し、いで奴原に手並を見せんと飛んで懸れば、慾心恣情の一揆共、大將を討たれ、蛛の子を散らすが如く、跡をも見ずして逃げたりける。元親是を見、剛なりや桑名、只今の擧動、鬼神不側の處なりと稱美をなし、駒を早めて行く處に、追々味方の兵馳せ來り、信親討死の由を告げしかば、元親大に驚き、此上は臼杵にあつても益なしと、伊豫の日振へぞ退きにける。仙石・大友は、臼杵の城へ籠らんとせしに、島津家久が追打に、士卒大牢討たれ、又は道々の一揆に刧されて、弓冑鎧を捨てゝ、大友は龍王の城へ蒐籠り、仙石は小倉の城へぞ駈入りける。

元親愁歎の事

翌くれば十二月十三日、島津修理大夫義久、守岡に陣を据ゑ、昨日處々の討死を算ふるに、敵味方に二千百廿餘人とぞ記しける。誠に一戰に大敵を追落す事、偏に諸將の力に依つてなり。彌軍兵を催促し、豐後の國を伐取らんと評定す。去程に新納武藏守は、敵の大將信親を始め、宗徒の武士多く討取りしかば、頗る手柄を顯すと雖も、元來土佐守とは朋友の交深し。元親が在處を尋ねて、音信をも通ぜんと思ひしかども、分明ならぬ故、信親が死骸を始め、名ある侍をば、山崎の邊に塚を築雙べ、僧徒を招いて新に卒都婆を建て、實名を書し弔ひける。其人々には、

長曾我部彌三郎信親　吉良播磨守　本山將監　廣岡左京
細川源左衛門　依岡左京　本井彈正　桑名太郎左衛門
片岡民部　森式部　池左近右衛門　受領上野
近澤加兵衛　吉松佐右衛門　佐田勘解由　秋森九兵衛

國見善左衞門　窪駿河　竹田右衞門　雞冠木次郎兵衞
正木民部　秋田將監　野中三郎左衞門　姫倉左兵衞
中內又兵衞　吉田三郎左衞門　谷彥十郎　吉田右近
馬場太郎太夫　大黑主計　大高坂權頭　三宮平右衞門
室津內膳　小野宗十郎　久甫內庄右衞門　小川市內
五百藏新五　甫喜山新兵衞　熊谷源介　江村藤兵衞
豐永三右衞門

以上四十一人とぞ聞えける。武藏守が志こそ優しけれ。程經て元親、日振の城にある由聞えしかば、新納使者を以て申しけるは、扨て去十二日の合戰に、御子息信親殿に出會ひ、一戰に及び候處、味方勝利を得て、彌三郎殿を討取り申段、軍の習とは申し乍ら、近頃本意なき儀に候。之に依つて信親の御菩提の爲め、山崎に石碑を刻み、僧を供養し候。是聊御邊と舊友の好を思ふ故なりとて、則ち信親の甲冑刀を贈りければ、元親聞いて、誠に武藏守殿の御芳志、骨髓に徹し候。信親討死の事は、武士の

道といひ、且は天下の御用に立つて相果候事、萬代の美名、某に於て滿足之に過ぎずと、使者には引出物など取繕ひてぞ返しける。誠に武藏守が志は、昔時熊谷が、敦盛の尸を、門脇殿へ贈りしに異ならず。去にても恩愛不朽の習とて、さしもに勇猛なる元親も、信親の物具を見しより、流涕袖を浸し、我已に五十に及び、寒天に鎧を晒し、此度戰場に赴きし事、信親安穩に凱旋せん事を思ひしに、勝負は兵家の習とは雖も、未だ廿二歲の若者を先立てゝ、老が身の、殘る記念を見る事こそ物憂けれ。今は中々浮世の中に望なし。如何なる山林にも身を寄せんと、思ひ切つたる風情なりければ、久武・桑名御袂に縋り、是は思ひ寄らざる御所存かな。今度若殿の御討死の事は、定めて深き御心底のあるべし。先陣の軍慮拙うして、立足もなく敗北せしを、御一人節に臨んで踏止り、大軍を追捲り、甲斐々々しき御働、御手の者迄比類なき戰死、雄英拔群の御手柄、九州に隱なし。若此の如きの血戰もなく、おめ〳〵と引き給はば、上方の人口、之を塞ぐに詞なかるべし。實に若殿の御擧動、天晴御家の美譽、武門の後榮なるべし。此等の事を御思惟あらば、御喜こそあるべきに、御遁世などと

は、勿體なき御事と、理を盡し諫言しければ、元親此上は兎も角も、汝等に任すべし。一先づ本國へ引かんとて、土佐國へぞ歸りける。

四國軍記卷第十一終

四國軍記　卷第十二

秀吉九州進發附島津和睦の事

秀吉、島津征伐

明くれば天正十五年、豐後の國より追々飛脚到來して、舊冬十二月十二日の軍に、仙石謀を仕損じ、一戰に敗北す。之に依つて長曾我部信親討死し、島津彌威強大なりと、委細に言上しければ、秀吉公聞召し、さらば大軍を以て退治すべしとて、正月十一日、九州御進發の御掟を仰付けられ、畿內五ヶ國、江州・濃州・尾州・勢州・南海道、都合十七ヶ國廿餘萬騎の大軍を起し、三月朔日洛陽を打立ちて、長艫巨艦を西海に泛べ、帆影青天に掛り、櫓聲白浪を發して、九州に着岸せり。島津が所領、豐後・日向の境、高城・豐後の府內、悉く攻落されしかば、島津大軍に敵して叶ふまじ。因險而壁、見利而動といへり。本國に引入り、截所を守つて戰はんと、悉く引取りたり。秀吉公は、

豐前の馬嶽に陣を召され、諸將に下知して、從はざる城々を攻させらるゝに、戰はずして來り降る。爰に豐筑の境岩石といふ處に、一つの塞あり。元より嶮山絕谷にして、尤も要害の地なり。熊井越中守、精兵猛卒三千を勝つて守り居たり。丹波少將秀勝を大將として、蒲生氏鄕・前田利長を副將とし五千餘騎、四月七日岩石を取圍み、氏鄕は大手に向ひ、利長は城の背を襲うて、早二三の城門を破りければ、敵本城に引籠る。寄手の先鋒坂源次、白き吹貫に、假名にて一番と墨黑に書きたるを、城門の眞中に推立て、攻上りけるに、城中より放つ鐵炮吹貫に中つて、秋風に破れたる芭蕉の如し。源次事ともせず、斯る所にてこそ勇怯は見ゆれ。退いては奈ぞ武夫とせんやと、軍兵を勵まし攻近付きければ、陣々より是を見て、寺島半左衞門・太田喜藤次・松平久兵衞・岡左內・同半七・西村左馬允・岡田大助、鷹の雀を見て、拳に耐らぬ風情して、我先にと攻入りしかば、兩將の大軍、大手搦手より亂れ入り、塀を越え垣を破つて、逃る敵の首を斬る。或は搦取る事數を知らず。城已に落ちければ、兩將に討取る首四百餘級を、秀吉公に獻じける。秀吉公、增田を以て、氏鄕・利長に感狀を賜ひ、今度

島津義久降る

先鋒したる者共に、御褒美を下されける。是より壹岐・對馬・平壺・五島・筑紫・龍藏寺・麻生・高橋・宗像・原田・立花・長野等、我も〳〵と來服しければ、同五月に、島津義久が居城鹿兒島に押寄せ給ふ。大軍山野に充滿し、旌旗を望めば、宛も雲靄かとまがひ、兵戈を見れば、草木かと疑はれ、只管魂を消し膽を削る計なり。爰に義久が元臣伊住院右衞門太夫、大和大納言秀長に就いて、義久違命の失禮甚だ大なりと雖も、仁惠を以て一命を繼がれば、軍門に降つて永く臣從せん。若し憐愍せられずんば、一族郎徒城を枕に討死して、怨を泉下に報ぜしめんとぞ申しけり。秀長急ぎ秀吉公に訴へ給へば、秀吉公按撫して曰、我れ本軍を起せしは、島津を從へんと欲してなり。今已に和睦を乞ふ。攻むるに及ばずとて、侵せる地を返さしめ、舊領は故の如く、相違あらじと宣ひしかば、義久悅喜限なく、剃髮黑衣單身にして來り謁し、寛宥の恩を拜す。秀吉公暫く在陣あつて、猶殘徒を伐し給ふに、西國の壘々、皆冑を脫ぎ弦を弛して降參し、九州悉く平均しければ、國郡を功臣に割き與へ給ふ。中にも長曾我部元親へは、彌三郎戰死御憐傷の御書を添へらる。其文の略に曰、

舊冬仙石權兵衞於㆓豐州㆒軍慮未練之働、其方數雖㆑制㆑之、不㆑應㆓其言㆒。味方敗北、言語道斷也。就㆑夫彌三郎信親戰死、忠節無㆓比類㆒處勿論也。依㆑之大隅國被㆓宛行㆒者也。

五月　日　　御朱印

長曾我部宮內少輔殿

其外の諸將へも、戰功に依つて感狀を賜はり、仙石權兵衞は、讃州を召上げられ、改易せられける。其後御座船を催され、上下喜の凱歌を唱へ、海路の風景を眺望あつて、七月上旬大坂に歸陣あれば、皆萬歲を謳ひける。

秀吉、聚樂を營む

行㆓幸聚樂城㆒附元親任㆓侍從㆒事

去程に秀吉公、西國の軍、事故なく平均し、大坂に凱陣ありしかば、諸方の武士招かざるに降り來り、列國の大守、我れ劣らじと參勤して、車馬門前に市をなす。兼て又西洛に、一城を築かせ給ふ。天正十三年より同十六年に至つて、百工心を碎き、丹青手を盡して成就せり。四方の堀は底深く、綠水常に滿々たり。石壁高うして削なせ

るが如く、五重の天守雲に聳え、金の鯱鉾日に映ず。樓門の堅は、鐵の柱銅の扉金銀の金物を、透間もなく打ちたれば、燐々として、宛も宿星の天に麗るに異ならず。武者所・記錄所・太鼓の櫓・鳴鐘の丸・人貯・遠侍・車宿・馬桁・多門・穴門・武庫・寶藏・百間の御廐に至る迄、さながら輝く計なり。宿直の武夫は內を守り、門々の見付には大幕を引はへて、交戟の衞士、日夜非常を監制す。本丸の其中は、金殿玉廊に、風琴風箏を掛並べ、紫闥紅欄對屋車寄、皆七寶を鏤めたり。珊瑚の帳・瑪瑙の階・鳳の附梟は雲に翔り、虹の宗梁は空を照す。後殿には、綾羅錦綉の褥を積み、花氈豹毛の倚を並べ、窈窕たる美女態を盡し妍を極め、脂粉を粧ひ蘭麝に薰ふ。誠に天下の壯觀なり。東面の廣庭には假山を築き、風流の御茶亭、松琴律呂を調へ、春雨靑苔を穿つ。五葉紅梅藤山吹、色々の名花の品、數を盡して植ゑられたり。南には遣水の上に涼臺を高く構へ、浮藻に魚の戲れて、菖蒲・河骨・杜若・岸の卯の花、時知らぬ雪の垣根の下風に、花橘の香ぞ遠き。西は遙に秋の野や、黃菊紫蘭の籬の露、荻・萩・桔梗・糸薄、立田を映す紅葉の岡、更科思ふ月見の亭、北は冬氣の山里を學び、炭竈の煙横折れて、汀に眠

る鴛鴦の渡殿には反橋を掛け、九山八海の名石を据ゑられたり。御園の外には、廣廣と吉野の花の種蒔ゑて、笠懸の扇の馬場を通されける。偕又二三の廓には、諸國の大名高家の第宅軒を並べ、華麗を盡して結構す。門々には、先づ一番に日暮の門、金龍銀龍扇ぎ流れ、唐木の蒔繪螺鈿門、玳瑁七賢黑龍の門、其美を數ふるに詞なし。朝には旭に輝き、夕には月に映ず。上林金谷の苑囿、寂光喜見の都城も、是にはいかで及ぶべき。人間窮なきの樂を聚められしとて、則ち聚樂とぞ名付けらる。是偏に秀吉公、天氣に叶ひ給ふに依つてなれば、愈帝德を仰ぎ奉り、行幸を催し、千萬金の費を厭はず、吉日良辰を擇みて奏聞あり。同年卯月十四日、聚樂城へ行幸をなし奉り給ふ。先駈後從の月卿雲客、花の袖を翻し、行粧殊に嚴重なり。土佐守元親は、數度の軍功他に異なりしかば、此度羽柴の氏を賜はり、四品侍從に任ぜられ、供奉の列にぞ連りける。其外の諸士數を知らず、馬上の裝束花奢(はなやか)に、芳野初瀨の花盛り、今日前に顯然たり。五畿七道の老若男女、行幸を拜し奉らんと、肩を並べ踵を繼ぎて群をなす。實に天神も感應ましまし〳〵けん、風伯塵を拂ひ、雨師道を淸め、天晴升る日影

聚樂に行幸あらせ給ふ

も朗なりしかば、伶人管絃を奏し、前驅已に過ぎ畢つて、玉の鳳輦搖ぎ出でさせ給ひければ、諸人頭を地に付け、目をそばめてぞ拜しける。漸く玉輦、聚樂城に移らせ給ひ、御配膳事濟み、蓬萊の島に、鶴龜の齡、松竹の操、千代萬歳を祝しける。龍顏常よりも麗うして、獻酬度々に回りて、御土器は、雪か花かの散まがひたるに、淑貌皎日に輝き、叡心淸んで麗閑(みやびやか)なり。西表の珠簾を撥げさせ給へば、庭の遣水に魚の跳るなど、時に合ひて己が樣々なり。木々の梢も茂り合ひ、青楓の葉隱れに、咲殘りたる遲櫻、春を忘れぬ鶯の、鳴く音も更に懷き。池の汀の杜若、岸の酴醾開亂(やまぶきさきみだ)れ、太液の蘋、未央の柳、柳は風に糸繰りて、蘋は浪の紋をなす。無數の名花の牡丹の壇、詠め盡せる暇なし。今日の日も早短き程に昏れ懸り、音羽の山の峯よりも、木の間を分る月影の、簾櫳を照し花影を映じて、欄に上す計りの夜の景、主上殊に叡感あつて、此良夜を如何とや、彼漢皇の甘泉殿の春の遊び、唐帝の驪山宮の月の宴、思召し出されて、夜遊の管絃を催さる。

一番五常樂　二番郢曲　三番太平樂

何れも龍吟魚躍の調、松風も音を和し、天人も降り舞ふかと怪まる。曲終り宴止んで、夜已に闌に及びければ、主上夜の殿に入らせ給ひ、更行く儘に、母屋の夜の御座の儲懇なり。鷄人曉を唱へければ、雲上人、假の皇居に伺候して、今日九獻の禮あるべしとて、獻盃稍初まれば、山海の珍物、和漢の美味を揃へて鞉きらめかし、獻々に捧物の數をぞ盡されける。

捧物

一、御手本千字文　一、牧溪繪三幅一對　一、沈香百斤

其外仙院・後宮・竹苑・槐門・九棘・諸司・諸寮・官人に至る迄、秀吉公より御領地の御折帋、恩賜山の如くに積みて、夫々に引與へられければ、人々寶の山に入りたる心地して、其澤に夸り其善を稱せざるはなかりけり。斯くて十六日の曙の雲打濕り、濛々として小雨そゝぎ、山子嶌音づれて、軒の玉水、琴筑の聲を添ふるかといみじく、和歌の御會折にふれ、物寂に披講の吟も澄み上れり。十七日は、伶人の舞、

萬歲樂　延喜樂　陵王　納蘇利　採桑老　古鳥蘇　還城樂　拔頭

伶人萬歳樂を舞ひ納めしかば、御座を改め御土器を奉り、七獻の後、北政所より、金吾侍從を御使者として捧物あり。大政所よりも、同じく獻上せられける。十八日還幸の御催ありければ、殿下御殘多げに見え給ふ。行幸の例に任せ、沓を引き、馬上に轡を動かし、いと融々として、鳳輦已に聚樂城を出でさせ給へば、伶人還城樂を奏し、殿下も又供奉せられ、程なく禁中へ還幸ならせ給ひける。近代は打續き、兵亂隙なかりし故、王法も衰へ、優々たる事もなかりしに、秀吉公の武勇により、天下一統に靜謐して、上下皆安堵の樂をぞなしにける。

左京進・掃部助屈死の事

去程に羽柴土佐侍從元親は、京都の昵勤御暇を賜はり、本國に在城しけるが、或時一族舊臣を集め、我れ已に汗馬の間に往來して、耳順の年に向たり。餘命計り難し。總領彌三郎信親は戰死すと雖も、彼が女子一人あり。是に家督を讓りて、右衞門太郎(後號ニ盛親一)と妻合せ、長曾我部の家を繼がせんと思ふなり。汝等が心底如何とある。此

右衞門太郎は、元親末子なれども、思慮淺き人なれば、滿座一言の返答もなく、口を閉ぢてありける處に、元親が甥に左京進親實、座中を急度見廻し、席を出でて申しけるは、仰の如く、信親娘を右衞門太郎に妻合せ、家督を渡されんは、總領の筋目立つ樣には候へ共、褒貶據なく存候。幸御四男津野孫次郎は、秀吉公も御存知の事なれば、孫次郎へ御家督渡されん事、廉直の御仕置とこそ存候へと、憚る所なく申しける。元親暫く頸を傾け、我は右に左に、百年の後迄、家榮えんこそあらまほしけれと答へられけるに、長曾我部掃部助進み出で、只今親實が申上ぐるこそ、御後榮の金言と存知候へと申せば、元親大に面色を損じ、汝等先づ退け、重ねて評議すべしと、奥の間に入りしかば、各目と目を見合せて、言もなく退出す。其後誰がいふともなく、爰彼にて、親實・掃部御家督の事を支へ申され、亡國の陰謀ありと流言せしかば、邪氣虛に乘ずる習、潛竊第一の僻者共傍にあつて、人の弱めに依つて、吹毛を揚げ疵を彈し、讒言を構へける。尤にや浸潤の潛、膚受の愬は、得て耳を錯らずといふ事なく、三回相告ぐれば、曾母も容を動かすとかや。況や人臣嫌疑の境なれば、元親大に怒つて、

横山修理・中島吉左衛門を呼んで、汝等左京進・掃部助が陰謀を知つたるか。事延引しては叶ふまじ。急ぎ掃部助に腹切らせよといひければ、兩人畏つて承り、君命に隨ひ親疎を顧みざるは、從來臣たる習にて候へば、罷向はんは、最易き程に候へ共、讒人妄に事を構へたる處を、何分にも御糺明を遂げられずしては、若し御後悔も候はんや。强ひて只今成敗を加へずと雖も、我々敎訓を以て、專ら無爲を執行ひ候はんと申しければ、元親兼ては、人の膽脈を按して眞僞を知る事、楊修が曾て及ばざる者なりしが、甚だ面色を變じ、汝等も掃部に徒黨し、國を奪はんとするかと、大に詈りしかば、此上はとて、兩人直に掃部助が宿所に入りて、爾々の仰を申渡せば、掃部打笑ひて、さもあるべしと、兼て覺悟せし處なり。忠は私を顧みず、勇は命を惜まずとかや。武士たる者、思ふ程の事をいはずして果すべきか。方々隨分忠を盡して、國の爲に報じ給へといひ捨て、内に入り身繕し、兩人を廣間に請じ、椽先に立出で、腹十文字に搔切つてぞ臥しにける。于時天正十六年十月四日の早旦なり。元親又桑名彌次兵衛・宿毛甚右衛門に命じて、左京進を討つべしとありければ、兩人諫めん

とするも、今朝横山・中島が忠言空しければ、互に面を見合せて退出す。左京進は名にし合ふ勇士なり。殊に掃部助腹切りしを聞きて、用心なき事はあるまじ。卒爾の擧動悪かりなんと、手勢六七百人物具固め、左京進屋形へぞ押寄せける。爰に一宮の神主飛驒守は、左京進と甚だ入魂なりければ、此事を聞付け、馬引寄せ打乘りて、取る物も取敢ず、親實が方へぞ急ぎける。斯る處へ大坪與兵衞、元親が命を受けて、飛驒守が討手に向ひける。道にて礑と行合ひたり。大坪心に思ひけるは、一宮は聞ゆる剛の者なり。太刀打の勝負して、若し仕損じては悪かりなんと、駒を近々と乘寄せ、疎遠の禮を述べて、行き違ひざまに、大坪刀を拔打に切付けたり。一宮元來したたか者なる勇士なれば、切られ乍ら、透さず大坪が耳を懸けて、肩先迄切落す處を、大坪が郎等落重なつて、終に一宮を突止めける。扨桑名・宿毛が兵、左京進の屋形を、十重廿重に取圍んで、未だ内へも入らず、先づ使者を以て、元親の命により、兩人檢使に向ひ候。御腹召され候へといひ入れければ、親實使者を廣間に請じ、對面して申しけるは、御見使の趣承知申候。又見申せば、大勢兵を相具せられ候事、偏に御用

心と相見え候。親實全く異心無之候。日頃の御馴染に、暇乞をも致すべく候。是へ入り給へと、人を添へて請じければ、兩人異儀なく內に入りて著座す。左京進、桑名に向つて申しけるは、抑某に自殺を賜ふは、土佐守の御心底如何に候やと尋ねられければ、兩人答へて、內々御家督の儀に付御意見、元親御憤有之、故に掃部助も、今朝切腹仰付けられ候と申す。親實聞いて、誠に土佐守殿は、外國へも相聞えし英雄なるが、家運の末には、方寸の間も曇り果て給ふ。右衛門太郎は、中々當家を相續すべき器量にあらず。我れ是を知るが故に、達つて諫言すと雖も容れられず、却て讒者の爲に此身を墮す。實に狡兎死良狗烹、敵國破謀臣亡といふ古人の言、今身の上になりけるよと、羽山安之丞を召して介錯させ、潔く腹搔切つて死んだりける。惜むべきかな此人は、元親の甥ながら婿にして、國人も崇敬し、其身、武勇才智も人に超え、善き國郡の守なりしに、佞言の爲に屈死せる。是偏に長曾我部の、家運の末とぞ覺えける。

土佐國南蠻船漂着の事

慶長元年九月八日、土佐侍從元親が領分、長家の森種崎の麓、葛木濱浦戸の沖十八里に、夥しき大船寄り來る由を訴へければ、元親如何なる賊船やらんと、足輕二三百人に、物頭の士少々濱際へ出しければ、程なく船は岸近く着きける。此船は南蠻より、延須蠻(えんすばん)へ商賣の爲に通ふ船なるが、惡風に放たれて、檣折れ檝摧け水に渇し、五百餘人餓死し、殘る者には、黑坊二百五十八・しんによろ十餘人・商人卅人計これある由、國主御憐みに、水を賜はり候へと望みしかば、元親聞いて、望に任すべしとて、水の外樽肴十五荷・白米五十俵を遣し、番船卅餘艘を以て、彼船を取卷き、翌十日飛船を以て、此旨を言上す。斯くて上方には、華夷日を逐つて靜謐に歸し、天下の和風、慶雲の氣に乘じて、遠國迄吉左右を告ぐること隙なき處に、土佐國より飛脚到來して、増田右衞門を以て注進しければ、秀吉公聞召され、汝急ぎ馳下つて、相改めよとありしかば、増田軍船に乘つて土州に着岸し、彼船を見るに、長さ卅間横廿二間、八帆の柱

三拘餘、激風の爲に吹折られける。増田船中を改むべしとありければ、通辭の者申しけるは、船中を精しく沙汰し給はゞ、數日の費あるべしとて、出船の刻書入れし積日記を出しければ、増田之を見るに、若干の荷物なり。其日は元親が館に歸り、蠻船の荷物大坂へ上すべし。舟の用意あるべしと、舟奉行に相觸れ、土佐の浦々より七十餘艘、其外は阿波・讃岐を催促して八十餘艘、都合百五十艘の舟を用意しければ、同じき九月廿日より、目錄を以て是を受取り、十餘日に悉く艤し、十月三日、長盛浦戸を出船しければ、百五十艘の船、殘らず纜解いて押出す。折節順風心に任せ、同月六日に大坂に着岸す。其目錄、

一、繻子むれう　五萬反　　一、唐木綿　廿六萬反
一、金襴純子　五萬反　　一、白糸　十六萬斤
一、いんす　千五百内ひか三百　　一、麝香箱　一つ
一、生きたる麝香　十疋　　一、生きたる猿　十五疋猿、輔車黒く、尾長く、鼠の尾に似たり、形小し
一、鸚鵡　二羽

土佐國南蠻船漂着の事

慶長元年九月八日、土佐侍從元親が領分、長家の森種崎の麓、葛木濱浦戸の沖十八里に、夥しき大船寄り來る由を訴へければ、元親如何なる賊船やらんと、足輕二三百人に、物頭の士少々濱際へ出しければ、程なく船は岸近く着きける。此船は南蠻より、延須(えんす)蠻(ばん)へ商賣の爲に通ふ船なるが、惡風に放たれて、檣折れ檝摧け水に渇し、五百餘人餓死し、殘る者には、黑坊二百五十人・しんによろ十餘人・商人卅人計これある由、國主御憐みに、水を賜はり候へと望みしかば、元親聞いて、望に任すべしとて、水の外樽肴十五荷・白米五十俵を遣し、番船卅餘艘を以て、彼船を取卷き、翌十日飛船を以て、此旨を言上す。斯くて上方には、華夷日を逐つて靜謐に歸し、天下の和風、慶雲の氣に乘じて、遠國迄吉左右を告ぐること隙なき處に、土佐國より飛脚到來して、增田右衞門を以て注進しければ、秀吉公聞召され、汝急ぎ馳下つて、相改めよとありしかば、增田軍船に乘つて土州に着岸し、彼船を見るに、長さ卅間橫廿二間、八帆の柱

三抱餘、激風の爲に吹折られける。増田船中を改むべしとありければ、通辭の者申しけるは、船中を精しく沙汰し給はゞ、數日の費あるべしとて、出船の刻書入れし積日記を出しければ、増田之を見るに、若干の荷物なり。其日は元親が館に歸り、蠻船の荷物大坂へ上すべし。舟の用意あるべしと、舟奉行に相觸れ、土佐の浦々より七十餘艘、其外は阿波・讃岐を催促して八十餘艘、都合百五十艘の舟を用意しければ、同じき九月廿日より、目錄を以て是を受取り、十餘日に悉く艤し、十月三日、長盛浦戸を出船しければ、百五十艘の船、殘らず纜解いて押出す。折節順風心に任せ、同月六日に大坂に着岸す。其目錄、

一、繻子むれう　五萬反　　一、唐木綿　廿六萬反
一、金襴純子　五萬反　　一、白糸　十六萬斤
一、いんす　千五百内ひか三百　　一、麝香箱　一つ
一、生きたる麝香　十疋　　一、生きたる猿　十五疋猿、輔車黑く、尾長く、鼠の尾に似たり、形小し
一、鸚鵡　二羽

太閤是を一々御覽あつて、則鸚鵡一羽・麝香一箱・金襴純子二萬反、禁中へ捧げ給ひ、其外攝家淸花百官の末々、又は諸大名の面々も、品を分ちて悉く拜領せり。元親には、早々注進神妙に思召され、銀子五千枚、增田長盛も同じく五千枚拜領す。扨黑船は、破損の修理あるべしとて、十月より明くる正月に至つて出來す。之に因つて歸國の御暇賜はり、太閤より白米千石・豚三百疋・雞三千羽・饂飩粉五百石・酒樽百荷・種種の肴五十荷下されければ、有難しと悅びて、同年の三月、土佐の湊を出船し、己が邦へぞ歸りける。

太閤、元親が亭に御成附盛親御目見の事

秀吉、元親の亭に臨む

斯くて太閤伏見の城に移らせ給ひ、秀頼公大坂に入城あれば、諸國の大名、皆大坂に參勤す。中にも長曾我部元親は、御惠他に異なれば、慶長元年の秋、御成を願ひ、其用意を結構す。同冬太閤彼亭に御成あつて種々御遊興、御機嫌甚だ宜しく、君臣合體の御樂、目出度かりし事共なり。君よりの拜領物山の如く、元親が獻上の品々も、

右衞門太郎善盡し美盡せり。諸大名より元親への進物夥しく、更に耳目を驚せり。右衞門太郎盛親も、御目見仰付けられ、御腰物拜領し、長曾我部の家門繁昌、君が御代萬々歲と、上下祝し悅びける。

四國軍記卷第十二終

秀吉、元親の亭に臨む

太閤是を一々御覽あつて、則鸚鵡一羽・麝香一箱・金襴純子二萬反、禁中へ捧げ給ひ、其外攝家淸花百官の末々、又は諸大名の面々も、品を分ちて悉く拜領せり。元親には、早々注進神妙に思召され、銀子五千枚、增田長盛も同じく五千枚拜領す。扨黑船は、破損の修理あるべしとて、十月より明くる正月に至つて出來す。之に因つて歸國の御暇賜はり、太閤より白米千石・豚三百疋・雞三千羽・餛飩粉五百石・酒樽百荷・種種の肴五十荷下されければ、有難しと悅びて、同年の三月、土佐の湊を出船し、己が邦へぞ歸りける。

太閤、元親が亭に御成附盛親御目見の事

斯くて太閤伏見の城に移らせ給ひ、秀頼公大坂に入城あれば、諸國の大名、皆大坂に參勤す。中にも長曾我部元親は、御惠他に異なれば、慶長元年の秋、御成を願ひ、其用意を結構す。同冬太閤彼亭に御成あつて種々御遊興、御機嫌甚だ宜しく、君臣合體の御樂、目出度かりし事共なり。君よりの拜領物山の如く、元親が獻上の品々も、

善盡し美盡せり。諸大名より元親への進物夥しく、更に耳目を驚せり。右衛門太郎盛親も、御目見仰付けられ、御腰物拜領し、長曾我部の家門繁昌、君が御代萬々歳と、上下祝し悅びける。

四國軍記卷第十二終

大正三年九月十二日印刷
大正三年九月十五日發行

國史叢書 土佐物語二 四國軍記 全

定價金一圓

不許複製

編者 黑川眞道

發行者 國史研究會
右代表者 小瀧淳
東京市本鄉區駒込林町二二四番地

印刷者 楢山定吉
東京市神田區三崎町三丁目一番地

印刷所 友文社
東京市神田區三崎町三丁目一番地

發行所 國史研究會
東京市本鄉區駒込林町二百廿四番地
振替貯金口座東京二七〇二四番